

---

# 太陽の姫

月峰夕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

太陽の姫

### 【Nコード】

N2917L

### 【作者名】

月峰夕

### 【あらすじ】

闘いの日々から二年…平穏な学校生活を送るスバル達のクラスに、謎の少年が転校してきて…

この小説は、主人公が女の子になっています。苦手な人はお帰り下さいませ

## はじまり（前書き）

はじめまして、月峰夕です。

かなり稚拙な文章で、個人的趣味の入った作品です。

原作などのイメージを大事にしたい、という方はおやめ下さい。  
それでも読んで下さる、という方はどうぞ。

## はじまり

地球。そこは命に溢れた場所。

そしてその命を温かく見守るのが太陽と、月。

命は太陽の光が無ければ生きていけず、かといって太陽の光があり続けても生きていけず。適度な光が交互に在るからこそ、生きて生ける。当たり前前にそこにあり、どちらかが輝けば、どちらかが陰となり、その姿をくらませる。

当たり前前に世界の一部としてそこにあり、当然すぎて見ようともしないそれは、新たなる闘いの合図だった…平穏な日々から、再び闘争への日々は最後に何をもたらすのだろう…

## はじまり(後書き)

流星のロックマンは、ゲーム+アニメの人なので間違いがあったら遠慮なくどうぞ。

第一章 寝坊？（前書き）

初っ端から…

## 第一章 寝坊？

ジリリリリリリ…

先ほどから目覚ましのアラーム音が、ずっと部屋に響いている。なのに、アラームをセットした人物が起きる気配はない。

だが、代わりのようにアラームのそばに佇んでいるものがいた。腕を組み、真っ赤な瞳を今だベッドに潜ったままの人物に据えている、緑色の身体に青い鎧を纏った、電波体。

イライラしたように顔をしかめているその電波体は、アラームをセットした人物のウィザードで、AM星人のウォーロック。

そんな彼がイラついているのは、当然のことながら起きる気配を見せない、パートナー。

「…おい」

たった一言なのだが、えらくドスのきいた低めの、怒りを含んだ声。

「…おい、起きろ」

もう一回低めの、だが音量は抑えずにウォーロックは口を開く。

だがしかし、…相も変わらずアラーム音にも、ウォーロックの声にも、全く反応を見せないで布団に潜ったままだ。

「……………」

あまりにもうるさいこの状況下で、未だベッドの中に潜ったままの人物に、もともと長くはないウォーロックの堪忍袋の緒が、ぶちんと音を立てて、切れた。

「…さつさと…いい加減…起きやがれ…！！！」

家にいる人たちには迷惑がかかるだろうが、近所迷惑にならないくらいでウォーロックは叫んだ。

もぞり。

やっとのことで、ベッドに潜っていたパートナー、星河スバルが起

き上がった。

「やーっと起きたか」

やれやれ、とウォーロックは息をつき、ふとその顔を見た瞬間、違和感を感じた。

真っ白なパジャマ姿で、布団の胸にかかっていた部分だけをどけて、スバルは枕に寄りかかっていた。

無口は相変わらずで、寝起きの眠そうな顔もいつもと同じ。ただ、ぼーっとしている時間が長い。

「…スバル？」

なに、と目だけで、こちらに問いかけてくるスバルはふいに、ケホケホとむせた。

「スバル、具合でも悪いのか？」

ウォーロックが問いかけると、何でもないとでも言うように首を振って、ベッドから降りたが、階段を降りようとして、一番下まで落ちた。

「スバル!？」

ウォーロックが近寄ると、スバルはふらふらと危なっかしい足で立ち上がった。

「何でもない…ちょっとめまいがしたただだよ」

「何でもなくないだろ!! おふくろ呼んでくつから、ベッドに戻ってろ!!」

ウォーロックは叫ぶやいなや、姿を消した。そんなに間をあげずに、スバルの母・あかねが部屋に入ってきた。

スバルの額に手を当てる。

「熱があるわね。今日は学校、お休みしなさい」

問答無用とばかりに、すぐにスバルをベッドに寝かせて、あかねはちょうど迎えにきたルナに、病欠を伝えたのだった。



## 第一章 寝坊？（後書き）

初っ端から主人公病欠ですが、物語のきっかけの一つとしてみて下さい。

夢(前書き)

…かなりgood good感が否めない…

## 夢

ベッドに横になった後、体温計で熱を計ると『38.5』と表示された。

「けほっ……」

もぞ、と額に乗せられたタオルが落ちないように、寝返りを打ったスバルはぼんやりと、天井を見上げた。

僅かに首を傾げて、窓枠に腰掛けているウォーロックを見る。

「…ねえ、ウォーロック、暇なら下でテレビとかみてていいよ…けほっ……」

『お前の見張りだ。それよか、ちゃんと寝てるばか』

見張り、とは少しつつこみたいことのような気がしたが、熱のせいとか、先ほど飲んだ解熱剤のせいとか、頭はうまく動かず、瞼を閉じるとすぐに眠気は訪れる。

窓枠に腰掛けていたウォーロックが、やれやれ、と息をついた時には、スバルは夢の中だった。

ところ代わり、コダマ中学校一年B組。

スバルの通うクラスであり、白金ルナ、ジャックの通うクラスでもあった。牛島ゴン太と最小院キザマ口は、隣のAクラスに通っている。

そんなB組の一角、廊下側の一番前に座っているジャックのところに、ルナはいた。

「ほー…スバルが休み、ねえ…」

物珍しげにジャックは呟いた。ルナはそんなに珍しいかしら？と、首を傾げる。

「珍しいだろ。あいつ、あんな見た目で頑丈じゃねーか」

あんな、というのはスバルの見た目である。

一見、女性という性別通りに、華奢で頼りのない少女だが、それで

も内心は芯が通ったしっかりもので、落ち込んで学校に来ない時期があったものの、一度決めればそれを貫き通す強さも持ち合わせている。

が、言い方、というものがあるだろう。

「…あのねえ、言っておくけど星河くんは、女の子よ？言い方ってものがあるんじゃないかしら？」

「いや、事実だろ？」

ルナの言葉をあっさり一刀両断で、切り捨てた。それより、とジャックは話を変えた。

「今日、転校生が来るんじゃないかなかったのか？」

「ええ、そうだけど。珍しいわね。…興味あるの？」

ルナが少し意地悪に問いかければ、ジャックはあっさり頷いた。そりゃそうだろ、と前置きして。

「同じクラスになるわけだろ？仲悪くするよか、楽しくやった方が得じゃないのか？」

それもそうね、とルナは頷いて、口を開く。

「じゃ…あなたに教えてあげてもいいわよ。転校生のこと」  
ルナはまずは…と記憶をたぐった。

そして、再びスバルの部屋。ウォーロックは窓の外を眺め、目をすがめた。

『なんか奇妙な電波が…微量とはいえ流れてるな…少し調べるか』  
ちら、とスバルを見るが、相変わらず眠っているようだ。少しぐらい、席を外そうが大丈夫だろう。

ひゅん、と音を立て、ウォーロックの姿が消えた。

それから程なくして、すやすやと、時折せき込みながら、眠っているスバルの身体が淡い燐光に包み込まれた。

「…誰かが、呼んでいる。」

名前を呼ばれた気がして、躊躇うように、けれどゆっくりと瞳をあ

けたスバルの目の前に、真っ白な世界が広がっていた。

「うわあっ!？」

足場はなく、あるのは上下左右の感覚が麻痺する、真っ白な世界。あたふたと辺りを見回し、焦るスバルの耳朵を、くすくす、と小さく笑う声が叩いた。

振り返ると、そこにはスバルよりはやや年嵩の少年がいた。鮮やかな銀の髪に、緋色の瞳。肌の色は真っ白だ。

スバルが見ていることに気づいて、笑うのをやめた。

「ああ、ごめんね。気に障ったかな？」

「別に…そんなんじゃないんだけど…ここはどこ？」

スバルは再び辺りを見回し、少年はああ、ここ?と呟いて。

「ここは君の夢の中だよ。まあ、僕の影響を受けてるから、こんなことになっちゃってるんだけども」

こんなこと?とスバルがつぶやくと、少年は真っ白で、殺風景ですよ。といった。そして、ふと。

「…凄く今更なんだけど、君誰？」

「あははは。ほんとに今更だね。…でも答えたげるよ」

スバルの質問に気を悪くした風もなく、楽しそうに笑ってから、答えてくれた。

「僕は『ルーンの代わり身』。ルーンでいいよ」

よろしくね、と差し出された手を、なんだかスバルは握り返す気になれなかった。所在なさに目をそらすスバルに、少年…ルーンは鋭いなあ、と小さく呟いて、辺りを見回した。

「そろそろかな？」

「…?そろそろって…」

スバルにっこり笑いかけて、ルーンは頷く。

「そろそろバイバイってこと。じゃあね、スバル」

そう言っつて、名乗っていないスバルの名前を呼び、ルーンの姿が薄れていった。

## 夢（後書き）

ルナの情報と、転校生は次話、ということだ…

次の日の騒動01（前書き）

かなり時間が飛んじやいましたよ…

## 次の日の騒動01

翌日：というよりスバルが起きたら、次の日になっていた。ついでとばかりにいつもの起床時間より、かなり早く起きてしまった。

スバルにしてみれば、先ほどまで不思議な夢を見ていた気もするが、片鱗も覚えていない。

忘れた夢を思い出すのも、なんだか面倒すぎる。

「……………やることないや……………」

が、昨日自分は身体を洗ってない。なら、時間つぶしにもなることは一つ。

「シャワー浴びてこようつと」

そう思い立ち、スバルは着替えとタオルを持って、風呂場に向かった。

……………今思い返せば、これがいささか悪かったような気がする。

スバルは『今日は展望台に寄ろうかな』、と考えながら、汗で濡れたパジャマと下着を籠にいれ、から、と風呂場の扉を開けた。

瞬間、そこだけ時間が止まった。……………というより、スバルだけ時間が止まっていた。

「あ。スバルくんおはよー。熱下がったんだ？」

風呂場の腰掛けに腰をかけ、身体を洗っている先客がいた。しかも、確か昨日まではこの家にいなかったはずの人物。

「……………えと、ミソラ：ちゃん？」

国民的人気アイドル歌手、響ミソラがそこにいた。呆然と突っ立つたままのスバルにじれたのか、急に立ち上がるとスバルの腕を引いて、腰掛けに座らせた。

そしてばしゃり、と事態の飲み込めていないスバルの身体に、シャ



ワーのお湯をかけると。

「身体洗ってあげるから、大人しくしててね」

そう言っただけ泡立たせたスポンジを、なめらかな肌に滑らせた。

「み、ミソラちゃん、自分で洗えるから…」

「いいからいいから」

混乱しつつ、やんわりと断ろうとするスバルの言葉に、返事を返してそのままスバルの身体を洗い終える。

「スバルくんって肌すべすべだね。胸も柔らかいし」

「……さいですか…」

ぐったりしつつも、ミソラの言葉にスバルはそう返し、髪の毛を洗われるのにもはや、抵抗する気力は皆無だった。というより、抵抗して体力は使いたくないし、疲れたくない。まだ朝なのに。

「はい終わり」

そんなこんなの中に、風呂から上がり、スバルの部屋に場所を移し、制服を着て、ミソラがスバルの髪を乾かすついでにいじっていたのだが、ようやく終わったらしい。

はい、と満面の笑みを浮かべた、ミソラに鏡を手渡された。

「……」

それに写るスバルの髪は緩くウェーブがかかり、いつも学校に行くときは使っている、小さな星飾りが揺れる髪留めで結んであった。しばし鏡を無言で眺めるスバルと、楽しそうに笑うミソラのもとに、あかねの朝ご飯の言葉が届いたのだった。

次の日の騒動01（後書き）

更にもう一騒動起きるので、お楽しみに（笑）

次の日の騒動02（前書き）

喋り方変かもしれない…

## 次の日の騒動02

朝ご飯がてら、父・大吾に詳しいことを聞き、更に脱力した状態で学校に向かおうとしたスバルを待っていたのは、ルナ達だった。

「おはよう、星河くん。具合はどう？」

「おはよう、委員長。大丈夫だよ」

「がちゃ、とスバルの後に続いて、もう一人の、中学生が出てきた。当然、ここでも騒動は起きる。」

スバルの後に続き、ミソラが出てきたのだ。

「なっ…何で星河くんの家からミソラちゃんが出てくるのよーっ！っ！？」

「がし、とルナはスバルの肩を掴み、前後に揺すった。

スバルは無表情に言葉を返した。

「僕も今知ったんだけど…ミソラちゃんも同居するんだって。中学校に通うには遠いから」

無表情さが、かんに障ったようでルナの怒りは更に上がった。

「一緒って…あなたねえ！！」

「ルナちゃん、スバルくん昨日ずっと寝てた訳だし、そこまでにしてあげてよ」

ミソラがスバルに助け舟を出す。それに、と言葉を付け足す。

「学校、遅刻しちゃうよ」

ようやく怒りのボルテージが、下がったらしいルナは手を離し、後ろにいたひとりを手招いた。

「星河くん、あなた昨日休んだでしょう。一応、紹介しておくわね」ルナの隣に見覚えのある黄緑色の、髪をした少年。

「久しぶり、スバルくん」

「っ、ツカサくん！？」

スバルが驚いたようにいうとツカサは、にこりと微笑んだ。

スバルは啞然と、ツカサを見ていたが、それを遮るように、ルナの説明が横からはいる。

「昨日、AとBにそれぞれ転校生が来たのよ。Aにミソラちゃん、Bにツカサくんと後一人男の子がね」

あなた休んでいたものね、と付け足された。

「そ、そうなんだ…」

「そーゆーことだよ」

頷いたスバルの耳に、また聞き慣れた声が届く。ふわ、とツカサの横に、電波体が現れた。

「お前…!!」

「ジェミニか!？」

スバルとウォーロックがばっ、と構えると、ジェミニはかつたるそうに口を開いた。

「俺は今ツカサのウイザードだ。お前らと戦うつもりはないね」

「そうなんだ…」

「ホントかよ…」

スバルは納得して頷いたが、ウォーロックは疑わしげな表情だ。

「まあ、君のようなバカにいつても無駄ってものだね」

多分、結構いい笑顔で言っつてそうなセリフである。

「んだとコラ!？」

「何だやるのかい」

ばっ、と戦闘の構えをとったウォーロックとジェミニを、眺めていた一同の元に届いたものがあつた。

キーンコーンカーンコーン

「うわあっ!?!遅刻する!!」

スバルの叫び声に、他の一同も焦つた。

スバルはハンターV.Gを掲げた。

「トランスコード シューティングスター・ロックマン!!」

それに続いて、ミソラ、ゴン太、ジャック、ツカサも、電波変換する。

スバルはシューティングスター・ロックマン。ミソラはハーブ・ノート。ゴン太はオックス・ファイア。ジャックはジャック・コーヴァス。そしてツカサが、ジェミニ・スパーク。スバルとミソラとジャックはウエーブロードに飛び乗り、ゴン太がキザマロ、ジェミニ・スパークBがルナを抱え上げて、ウエーブロードに飛び乗った。電波変換しているので、数分でつくど分かっていても、一同は気が急いでいるので、無言で急ぐが、ウィザードのFMとAM星人達は賑やかだった。以下、その会話。

『もうちよつと急げ!!』

『うるさいわね!! 充分急いでるわよ!!』

『ホントせつかちだな!!』

『というより、喋ってる暇があったらもう少し急ごうとか思わないのか?』

『それもそうだろうけど、お前ら相変わらずだな、ウォーロック、ハーブ』

『余計な世話だコーヴァス!!』

『これと一緒にしないでちょうだい!!』

『んだと!?!』

『何よ!! やろうつての!?!』

『はいはいそろそろつくよー』

ウォーロックとハーブが喧嘩になりそうだったのと、学校に着きそうだったので、スバルが止めに入ったのだった。

もう一人の転校生と少年（前書き）

すっげえ good good ...

## もう一人の転校生と少年

チャイムが鳴る前に校舎に飛び込み、物陰で電波変換をとりて教室に飛び込んだ瞬間、チャイムが鳴った。

「…ま、」

「間に合った…」

「ぜはぜはと肩で息を継ぎながら言ったスバルの後に続いて、ほんの少し息を切らせたジャックが盛大にため息をついた。ミソラはゴソ太、キザマロと一緒に隣の教室に駆け込んだ。」

ツカサとルナは息一つ乱していない。…どうやらヒカルに無理をさせた模様である。その後すぐ先生が来た。

朝のHRが終わり、ぐったりしている一同は、息をゆっくり吐いた。

「遅かったですね、双葉くん、白金くん、ジャックくんと…」

スバルだけ名前を呼ばれず、とりあえず一同が振り返る。

スバルの後ろには銀髪に、鮮やかな赤い瞳の少年が立っていた。

「あ、星河君、うちのクラスに昨日もう一人転校生来た、って言うたでしょ？」

ルナに言われて、ここまで来るまでの会話を少し思い出して、スバルは頷いた。

「彼はケーブ・ラントくん。ラントくん、こっちは星河スバルくん。くんなんてよんでるけど、女の子よ」

「はじめまして、ラントくん」

銀髪の少年…ケーブに手を差し出されて、スバルはその手を握り返した。

「ケーブでかまいませんよ、こちらスバルと呼ばせていただきますので」



「そう?」

「はい」

にぱっ、とスバルが笑うと、つられたようにケーブも笑った。不意にするり、とケーブの指先が、スバルの長い髪を掬い上げ、そこに口付けた。

「え」

ジャックと、スバルの声が重なった。女子のクラスメート、そしてなぜかツカサとルナからも、ぴし、と音がした。

「とても綺麗な髪……それに、いい香り」

まっすぐに瞳を覗き込まれて、スバルは固まる。

ちなみにウィザードたちは、とても楽しそうに見守っている。

「え、えと……」

ぞわっ、と背筋が冷えた。

後ろを振り返らずとも分かる。ルナの殺気だ。…だが、それに加え女子の殺気と、あと、誰だろう?

誰の殺気かわからないが、ただ、もの凄い怖い。こう、一人分にもう一人分を上乗せしたような。そこまで考えて、ツカサのだと思っ

たりあえず、救いを求めるようにジャックを見たが、肝心のジャックは少しずつ避難するように後ろに下がったようで、既に避難圈にまで逃げている。

助けて、と目で訴えるが無理無理無理無理、と首を勢いよく横に振られた。

サテラポリスでも腕のたつ方なのに、この状況は無理だったようだ。

更にウィザードたちに助けを求めようとしたが、既に消えていた。

『ウォーロック、覚えてろ……』とばかりにくそう、と内心でぼやき、

スバルは柔らかく微笑んでいるケープと、殺気を耐えながら、どうしようと考えていると、腕をつかまれる。

え、と不思議に思う暇もなく。

「……………わ……………」

ぐい、とスバルは思い切り腕を引き寄せられて、たたらを踏んで立ち上がり振り返ると、眉を吊り上げたツカサ……いや、この雰囲気は。

「……………双葉くん？」

ルナが問いかけると、『切れ長の瞳』のツカサが口を開く。

「ケープ、あんまりふざけた真似するなよ。行くぞスバル」

ぐい、と腕を引っばられて、スバルはついていかざるを得ない。

「ちょ……………いた……………痛い……………!!」

そのままぐいぐい腕を引かれて、そのまま教室を出て、階段のほうまで引きずられてゆく。

「痛……………い……………!!」

廊下にいた一同も、教室にいる一同も、何々、と楽しそうに、けれど女子は腹立たしげに二人を見送る。

さすがに傍に寄るのを、躊躇うくらいの殺気には気づいたようである。

階段の人氣が途絶えたところで、スバルは名前を呼んだ。

「痛……………い……………つ……………て……………言……………つ……………て……………る……………だ……………ろ……………、……………ヒ……………カ……………ル……………!!」

「……………」

「う……………ん……………と……………か……………す……………ん……………と……………か……………、……………せ……………め……………て……………な……………ん……………か……………言……………え……………!!……………て……………か……………、……………痛……………い……………!!」

スバルがぎゃんぎゃん文句を重ねていると。

「……………ご……………め……………ん……………」

しゅん、としたような柔らかい声と『少しだけつりがちの瞳』のツカサに、スバルは瞬きを繰り返して。

「あ、ツカサ君に戻った」

「はちばち、とツカサは瞬きをした後。」

「…ていうか、スバルくんなんで分かるの…」

「雰囲気。ていうか、痛かったよツカサくん」

「…ごめん。…スバルくん、ヒカルときは遠慮ないんだね」

「ツカサ君に遠慮してるわけじゃないんだけど…」

そこで話がずれていることに気づいた。とりあえず、スバルは階段に腰掛けながら、気になったことを訊ねた。

「ツカサくんがヒカルと入れ替わるなんて、どうしたの？」

「…できれば聞かないでくれる？」

ツカサはもの凄く落ち込んだ雰囲気のまま、ごん、と壁に寄りかかった。

「…なんか怖いからやめとくね？」

「…ありがとう」

スバルはすつくと立ち上がると、ツカサにいった。

「そろそろ授業だし、もどろ？」

「……うん」

スバルの言葉に頷いて、ツカサも少しよろめいて、その後について教室に戻った。

一つだけ、決意しながら。

## もう一人の転校生と少年（後書き）

ものすごいこじつけぶりです。

わかっています、わかっていますがこじしないと話が進まないんです。

海辺の放課後（前書き）

やっとバトル…

## 海辺の放課後

「すばるくん、帰る」

「星河くん、帰るわよ」

ひよい、とミソラとルナが、B組に顔を覗かせた。ルナは先生の用事で職員室に行っていたのだ。

ちよと戸口近くにいたジャックが、残念だったな、と前置きして「スバルならツカサと一緒に帰ってたぜ？」

しばらく、ミソラとルナは固まった後。

「……な、なによそれえ　　っ!？」

揃って叫び、後に『二人の叫び声が、校舎内によく響いた』と語られた。

学校から少し離れた場所で電波変換し、スバルとツカサはドリームアイランドの公園に向かっていた。

「……つくしゅ!!!」

不意にスバルがくしゃみをしたので、隣を併走していたジェミニ・スパークW…ツカサが問いかけた。

「どうしたの、スバルくん？」

「…や、誰かがうわさしてるみたいで…」

「案外ミソラとクルクル女じゃないか？」

そしてやや遅れてついてくるジェミニ・スパークB…ヒカルがそういう。

「……そうかもしんない」

ぐすつ、と鼻をすすったスバルは、帰ったらミソラちゃんに怒られるかなあ、と思い、次の日の朝は委員長に叱られるなあ、と、もはや決定事項に少しだけ意識が遠くなった。

それを知ってか知らずが、ツカサが肩をたたいた。

「スバルくん、着いたよ。降りよう」

「うん」

とっ、と電波変換をとり、スバルとツカサは公園の隅に降り立った。胸元のリボンを揺らし、スバルは辺りを見回した。

「わあ、きれー」

花壇のある場所に階段を下りて向かえば、ふわり、と花の芳香が鼻腔をくすぐる。

それから少し歩いて、ちょっとだけ高くなった花畑への階段を上げば、すぐに真っ青な海と、空が視界いっぱいに開けた。

そして、鮮やかな白い花が咲き、緑との鮮やかなコントラストを誇っていた。

「今の時期は、ちょうど満開だからね。せっかくだから、スバルくんを誘いたかったんだ」

一人じゃちょっとここ、寂しいし、とツカサは付け足す。

「…そうだね」

ツカサの横顔を見て、スバルはそっと頷いた。

今までずっと一人で展望台にいたスバルは、誰にも関わろうとしなかった。ブラザーバンドを結ぶことを、嫌っていた。

それは同じように、ずっと一人で公園にいたツカサも同様だ。

親しくなることで、その人を失ったときの苦しみも、裏切られたときの悲しさも、感じなくてすむように、誰とも近くなろうとしなかった。

けれど、人との絆…ブラザーバンドを得てから、一人でいることの寂しさを知った。

だから、ツカサも同じなのだろう。

まっすぐに海に視線を投げたスバルの髪を、柔らかく潮風が撫でてゆく。

「それにね、スバルくんに言いたいことがあったんだ」

気持ちを着けるように、ツカサはやわらかく微笑んで、スバルにそういった。

「聞いてもらえるかな？」

「いいけど……」

ツカサは身体ごとスバルに向き直る。スバルも居心地が悪いので、同じようにツカサに向き直った。緊張したような空気が、あたりに流れた。

『なんだあ？』

…が、空気の読めないウォーロックがそれをぶち壊してしまった。ジエミニがなんともいえない空気をまとった後。

『…ツカサ、折角だ。馬鹿とドリームアイランドのマラソン競争してくる』

『うおい、だれが馬鹿だ！？』

『お前だお前。バトルはさすがにまずい。マラソンならいくら走っても文句は言われないだろう？』

『望むところだ！…！』

がし、とジエミニはウォーロックを捕まえ、ウェーブロードに消えていった。

消えていくまでの口げんかが、物凄く喧しかったが。

「……………」

「……………」

スバルはバトルじゃないからいいかな、と見送り、ツカサは、内心で『ありがとう、ジエミニ』と両手を合わせて、本題。



再び向き合って、ツカサは口を開いた。すう、と、気持ちを落ち着かせるかのように、一度深く息を吸い込んでから。

彼女に、星河スバルに、告げたかった言葉を、気持ちを、告げた。

「……ずっと、君のことが好きでした。…スバルくん、僕と付き合ってもらえませんか？」

ついに言った、とばかりにツカサは顔を赤くし、スバルはしばし、その言葉を理解するまで時間がかった。

「……え…？」

ぱちぱち、と瞬きを繰り返して、意味をもう一度頭の中で繰り返してスバルはかあ、と陶磁器のように真っ白な頬を紅に染めた。きつと多分おそらく絶対、ここにウォーロックがいたら電波変換して、逃亡していたかもしれない、と思うくらいには、スバルの頭の一部は冷静だったが、それ以外は混乱の極みだった。

「ええええと、その、あの…」

あたふたとあちらこちらを見るスバルに、ツカサは重ねて告げる。

「嫌だったらいいんだ。僕が勝手に好きになっただけだから」

そういつて微笑むツカサの表情に、急速に混乱が落ち着いてゆく。スバルはふるふると、首を横にふった。

きゅ、とツカサの服裾をつかんで、スバルはまた首を横にふった。

違う……

「違う、んだ。そういう、意味じゃ……なくて……」

消え入りそうな声で、スバルはかなり小さな声で、言った。

「……同じだったから、凄く……びっくりしただけ……で……」

それきりスバルは黙ってしまふ。ツカサはスバルを見下ろしながら、言葉を繰り返して。

「……同じ……って……じゃあ、OK……って受け取っていいかな？」

こくん、とスバルは俯いたまま、ただ頷く。

ツカサは目を細めて、スバルの手を服裾から離させて、その手を握りしめて海を見た。

スバルも火照った頬が冷えないかな、と思いながら何とか顔を上げて、ツカサと同じように海を見た。

会話はなく、ただ、海と空を見ているだけの、静かな時間。手のぬくもりを感じながら、快い雰囲気。

しかし、それは数分も持つことなく砕かれた。

「あー!! ツカサおにいちゃん!!」

ん?と、ツカサとスバルが振り返ると、そこには小柄な、茶髪の男の子が立っていた。

「トウマくん」

少年……トウマの声に気づいたらしいほかの小さい子供たちも、集まってきた。

「ツカサおにいちゃん!!」

「ツカにいだ!!」

すぐさまツカサの傍に子供たちが集う。スバルがびっくりして固まっていると、さっきトウマが傍によってきた。

「こ、こんにちは」

とりあえず挨拶をしたスバルの傍にも、子供たちが集まってきた。

「お姉ちゃん誰？」

「わー、綺麗なブローチ」

「ツカサおにいちゃんのおともだち？」

一度に話すので、頭の中が混乱する。そんなスバルの内心を察したツカサが。

「皆落ち着いて、そんな一度に喋るから、スバルくんが混乱してるよ」

ツカサの言葉に、とりあえず、喋るのだけはやめてくれた。

「この人は、クラスメイトの星河スバルくんだよ」

「ツカサ兄ちゃんの彼女？」

「おててつないでるもんね」

…何故子供はそっちの方向に持ってゆくのだろう。

…手？

スバルは不思議に思いながら、いまだ繋いだままの手を思い出した。離そうかと思つて焦ったが、ツカサはにっこり笑つて頷くので、振りほどけなかった。

…しかし、確かに先ほど、ツカサの彼女になつたばかりではあるが、慣れないうちに言われると混乱する。

「ラブラブ」

「でもさっき告白したばかりだからね」

「あ、皆こんなとこにいたの？」

たまた、とスバルとツカサと同じ年ぐらいの少女が、階段を駆け上がってきて、上がりきつたところどまった。

腰よりも長い藍色の髪に、他校の制服。

「ツカサくん、いたんだ……」

「ユイちゃん、ただいま」

知り合いかな、と思いつつ、スバルは小さい子に手を引かれ、ツカサの手を離して視線を合わせた。

「どうしたの？」

「スバルおねえちゃん、一緒にあそぼ！！」

「うん、いいよ」

スバルは立ち上がり、ツカサを向いて口を開く。

「ツカサくん、ちょっと下に行つて……！！」

ぱっ、とスバルは海のほうを振り返る。ツカサも同時に、海を振り返った。

「ツカサ君、どうしたの？」

ユイの問い換えには答えず、自然とスバルとツカサは、身構える。

「……」

ザバアツと、水しぶきを上げて、目の前に降り立ったものがあつた。子供たちが悲鳴を上げ、後ろに隠れる。

『見つけた………』

青い体に目はぎよろり、としていて、口は目元まで裂けて鋭い牙が覗き、腕はとても長く、手のひらも大きく地をずるずるとこすつている。

べちゃり、と音を立てて近寄ってくるその怪物は、形容しがたい異臭を放つていた。大量の魚が腐つて、磯のにおいと混じつたような腐敗臭とでも言うべきか。

そして、その怪物が立っていた場所の草花は残らず枯れていた。

『一緒に来てもらおう………姫よ……』

そういつて腕を、スバルに伸ばした。

ざり、とスバルとツカサは一步だけ後ろに下がった。

「なんだろう、こいつ……」

「わからない。あいつがしゃべってる言葉は理解できるけど」

ツカサはちら、と子供たちを見て、化け物に視線を戻し、口を開いた。

「ねえ、君。何が狙いの？」

『知れたことよ……その、姫を頂きに来た……』

ツカサはとぼけたように笑いながら、口を開く。

「姫って誰のことかな？ここにお姫様なんていないけど」

『とぼけるな！！そこにいるだろう！！』

そういつて再び、スバルを指した。少し離れた場所に立っていて、後ろには、誰もいないスバルを。

『姫をつれて帰る。それが役目だ』

そういつて、べちゃり、ともう一步こちらに近寄ってくる。スバルとツカサは構えたまま、緊張をほぐすように軽口を叩き合った。

「正体は分からないけど……」

「スバルくんを狙ってるみたいだね」

ツカサは『スバルくんってほんと、いろんな人に慕われるね』とからかうと、スバルはこれでもかと言っくくらい、顔をしかめた。

「……やだなあ。あんなのに狙われる覚え……」

そのまま何かに気づいて、スバルは閉口する。ツカサは苦笑しつつ、口を開いた。

「あるんだね」

「……スターフォースとか、オーパーツとか、ムーメタルとか？」

それは確かに、狙われる要因ではあるう。手にすれば、凄まじい力を使用者に与えるのだから。

「でも、姫、って呼ばれる理由になるようなもの、持ってないよね？」

「そういえばそうかも」

そう言いつつ、スバルは子供たちを背後にかばうように少し歩き、左を横に伸ばした。途端、スバルのハンターV.Gを、天から降って

きた光が貫いた。

それと同時に、ツカサのハンターV.Gにも同じ現象が起きた。

「トランスコード シューティングスター・ロックマン!!」

スバルの声が響くと、スバルの体を光が取り巻いた。

パアン、と限界まで膨らんで破裂した光の中から出てきたのは、青のボディに青いヘルメットをかぶった、胸に流星のマークをつけた少女。

「トランスコード ジェミニ・スパーク!!」

ツカサも同じように叫び光の中に消え、その光が晴れたときには、白のボディと、黒のボディの、それぞれ巨大な腕を持った少年が二人現れた。

「遅いよロック!!」

『うつせえ!!』

スバルが文句を言うと、怒鳴り返された。しかしめげずに、スバルは文句を言った。

「もうちよつと早く来てよ!!」

『マラソンに熱中しすぎて、ゴミ集積場の一番奥まで行ってたんだよ!!そつから妙な気配感じて、ウィルス倒しながら、ダッシュで戻ってきただけでもありがたいと思え!!』

…なるほど、一番奥まで行ってたのか。それは結構遠い上にウィルスは仕方ない。

「スバルくん、喧嘩してる場合じゃないよ。今は目の前の敵に集中しなきゃ」

「…ごめん」

別にいいよ、とツカサが言うと、ヒカルは顔をしかめて誰にも聞こ

えない程度に、呟いた。

「ま、いつものこった」

それを知らないから口を開いたスバルは、ツカサとヒカルに一つ頼んだ。

「ツカサくん、ヒカル。子供たちと、えっとユイさん？を安全な場所までお願い」

「分かった」

「すぐ戻ってくつから」

快く二人は了解し、子供たちとユイをそれぞれ抱えあげて、ウエーブロードに飛び乗った。

さて、とスバルが怪物に向き直ると、怪物はにたり、と裂けた口を吊り上げた。

『……姫だけが残るとは、愚かだな』

「だから、姫って何のこと？訳わかんないんだけど」

そっぴいなながら、スバルはバトルカードを使った。

「バトルカード、ヘビーキャノン！！」

銃口を怪物の心臓あたりにすえて、エネルギー弾を放った。

それはまっすぐに、怪物の心臓を打ち抜いた。なのに。

『……それで攻撃か？』

「……っ！？」

スバルが目を見張ると、怪物はただにたり、と笑って、スバルが打ち抜いた場所を撫でた。

そこには大きな穴が開いているのにも関わらず、元から心臓なんてものはない、とでもいう風に、怪物は動いていた。

そして、驚愕して動きが鈍った一瞬で、怪物は間合いをつめていた。

「はや……っ……！」

『スバル……！』

ウォーロックが叫ぶと同時に、ぎよろり、とした目でスバルを見ながら、スバルの懐に入った怪物は腹部を無造作に捕らえると、海のほうへ投げた。スバルはとっさに周波数を変え、物体には触れられないようにする。

とても高い崖の上から投げられたのだ。水とはいえその水面は硬いだろうし、落ちては多少なりともダメージになりかねない。

ザバン、とスバルは海の中に落ち、姿勢を変える。

こぶん、と小さく息を吐き出すと、予想通り、怪物が降ってきた。スバルを抱き寄せて、また、言葉を繰り返した。

『姫』と。

姫姫連呼されても、わけが分からないスバルは、残留電波でサンダーベルセルクになろうとしたが、激痛が身体を走り抜けて、スバルはそのまま気を失った。



海辺の放課後（後書き）

たぶん、次回まで続くかなあ  
…

## もっぴひとつの影

「もう大丈夫だからね」

そういつてツカサは抱えていた子供たちを、そっと降ろした。ヒカルも同じように、子供たちを降ろす。

「行くぞツカサ」

「うん」

ユイが何かいいたげに、目を伏せていたが、ツカサにはそれどころではなく、早くスバルのところに向かわないと、と気が急いでいた。ツカサは頷き返して、すぐさまドリームアイランドの公園に向かった。

途中、ちゃんと暁に連絡を入れて。

スバルたちはまだ知らないが、ツカサもスバルたち同様、サテラポリスのメンバーの一人である。ただ、タイミングがあわないだけなのだ。

「暁さん！！聞こえますか！？」

『どうした、ツカサくん？』

さくっ、と聞こえてきた音のあとに、『いい加減になさい！！』ガーンと、続いた。

シドウがうまい棒を通信中食べたので、ちょうどお茶を持ってきたクインティアにお盆で殴られた。

…とは、ツカサたちは分からなかったが、そんな緊張感のないことをやっている場合ではない。

とりあえず、本題に入る。

「ドリームアイランド、公園に電波ウィルス、電波人間とはまた別のなんか訳わかんない奴が現れた！！」

「今、スバルくんが応戦してるんです！僕らはちょうど居合わせた人たちを避難させ終えたので、今から加勢に向かいます！！」  
ヒカル、ツカサの順に口を開き、シドウが息を呑む声が聞こえた。

『何でそんな事態に…』

クインティアの声に、ヒカルが叫ぶようにして返答を返した。

「知るかよ！！急に現れたんだ！！」

「とりあえずの目的は、スバルくんの持つ何かなことは、確かなんです」

『スバルくんの持つもの？』

「それ以上は、分かりませんし、もうすぐつきます」

ヒカルが今のところ分かっていることを的確に告げる。

『…分かった。すぐに俺も向かう！！無茶はするな！！』

ガタガタ、と音がして、シドウはそう叫ぶ。

「はい！！」

「おう！！」

ツカサとヒカルは頷いて、速度を上げた。

ロックマンの電波が感じられず、ウォーロックの電波を探すと、先ほど分かれた公園から、すぐ傍の海に戦いの場所を移したばかり、すぐさま海の中に飛び込む。

さばん、と勢いを落とさないうまま、海へ飛び込む。

「……」

そこにいたのは、電波変換がとけたスバルと、そのスバルを守るように戦うウォーロック、そして胸の中央に巨大な穴の開いた、怪物だった。

「ツカサ、お前がスバルをつれて上に上がれ。あいつは俺が引き受けた」

ただの人間が何の装備もなくいるには、水の中はつらい。そう判断して、ヒカルは戦闘、ツカサはスバルの救出、という風に分けて。

「…うん！！」

たっ、と二人は同時に海底を蹴った。

「お前の相手は俺だ！！」

ヒカルはウォーロックと怪物が間合いを取った瞬間に、間に入った。  
『ジェミニ・スパーク、気をつける！！そいつは、痛みを感じない上に死なない！！』

「…なんでそんな奴が相手かねえ…っど！！」

怪我だらけの、ウォーロックの言葉に愚痴るようにしつつ、ヒカルはバトルカード、ワイドソードを腕に具現化し、ツカサの方に行こうとした怪物に、切りかかる。

「お前の相手は俺だっつーの！！急げ、ツカサ！！」

ヒカルの叫び声に急かされ、ツカサはスバルを抱き上げようとした。パリ、と頬を電気がかすめ、スバルの周りの空間が派手に放電を起こして、手をはじかれた。

「っつ……」

手を押さえると、指先に怪我ができていた。

「……何、これ…？」

スバルの身体のまわり、そこだけに何か薄い膜がある。それに触らないようにして手を伸ばす。しかし、少し触れそうになる距離でも傷みが走る。

「ツカサ、早く上につれてけ！！」

いったん怪物から距離をとったヒカルは、いつまでも動かないツカサにそう叫ぶ。

『連れて行かせるものか！！』

その声を聞いた怪物が、すぐさまヒカルに飛び掛る。ヒカルはソードで怪物の腕を受け止めながら、弾き飛ばす。

「駄目だ、スバルくんの身体の周りに何かあって触れない！！」

「はあ！？」

ヒカルは理解不能、といった表情だ。ツカサだって理解不能なのだが。

「触った瞬間、弾かれる!!」

「な……」

ヒカルは絶句したように、それでも怪物に反撃だけはする。

「でも、このままじゃスバルくんが……」

生きるための空気を断たれたスバルの顔色は、優れない。ヒカルとウォーロックも、水は妨げにならないとはいえ、スバルがここにいる限り、動きづらいことに変わりはない。

どうすればいいか、など一つしかない。

ツカサが、弾かれる痛みには耐えさえすれば、いいのだ。

覚悟を決めてツカサが、スバルの身体を抱えあげようとすると再び、放電が頬を掠める。

「……………」

ツカサは躊躇いなくスバルの身体を抱えあげると、スバルを抱えている腕だけでなく、全身に激痛が走る。先ほどのものとは比べ物にならない痛みをこらえ、それでも何とか立ち上がり、海底を蹴って一息で崖の上に飛び上がった。

着地でバランスを崩して倒れるも、何とか上がった。

「げほっ、げほっ……………」

辛そうに咳き込むスバルの背中を、ツカサは走る痛みをこらえてさする。スバルはひとしきり咳き込んで、うつぶせに倒れた。

「……………!!」

とりあえず仰向けにして呼吸を楽にしてやろうと腕をつかんだ瞬間ぬるり、と手のひらが滑った。水かと思っただが、感触が違った。手のひらを見ると、真っ赤に染まっていた。怪我を負った手のひらから溢れた血とは、また別の血で。

慌ててつかんだ腕…左肩を見ると、スバルの左肩のシャツは赤く染まっていた。

「スバルくん!!」

ツカサがスバルの名前を叫んだ瞬間、すぐ傍らに、影が降り立った。

## 月の生贄（前書き）

…バトルしてるのかしてないのか、えらい謎

## 月の生贄

ツカサはすぐさま、スバルをかばうように構える。

降り立った影は、怪物でもウィルスでもない代わりに、知らない電波人間だった。銀髪の、黄色のボディとヘルメットをつけていた。

「…君は、誰？目的は、何？」

ツカサが訊ねると、海を見ながら少年が口を開いた。

「訊ねるならそっちが先に名乗ったらどうです。そこのお姫様とどういう関係？」

少年の言葉に、ツカサは口を開く。

「ジェミニ・スパーク。……彼女の恋人だよ」

少年は不機嫌そうに眉をひそめた後、口を開く。

「…それで海の中の君のバトルウィザードと、このお姫様のバトルウィザードの名前は？」

「……僕は名乗った。そっちが名乗ったらどうだ」

少年は瞬きを幾度か繰り返して、それもそうだな、と呟いた。

「僕はルーン・スケープ。『月の皇子』様の命令で『太陽の姫』を探しに来てたんですけど、こんなに早く見つかるとは」

ルーン・スケープ、と口の中で繰り返して、ツカサは身構える。

「おっと、勘違いしないでほしい。僕はお姫様を守りに来ただけ。

皇子の命でね、『太陽の姫』をさらおうとしているスイジュリアを倒しに来たんですよ」

それとね、とルーン・スケープは付け足した。

「お姫様、この地上では考えられないほどに高貴で稀有な存在だから…閉じ込めておくには、輝きが強すぎて、隠せない」



「？」

ツカサはスバルに一度視線を滑らせて、構える。

「君とやりあうつもりはないです。お姫様を守ってるようだし。僕の相手はあいつだから」

海に飛び込む構えを見せたルーン・スケープは、思い出したようにそうそう、と喋って。

「お姫様に手出ししたら、うちの皇子切れちゃうから止めとけよー」意味の分からない一言を残し、ルーン・スケープは海の中へ飛び込んだ。

「…一体…？」

ツカサの呟きは、風に消え、誰も聞くことがなかった。

怪我は負わせられるものの、倒れる気配のない怪物に、ウォーロックとジェミニ・スパークBが舌打ちした瞬間、ザバン、と水しぶきを上げて、一つ、何かが降ってきた。

「なんだ!？」

『敵か!？』

二人は背中合わせに構える。ジェミニは怪物、ウォーロックは降ってきた影に向けて。

「倒れる寸前…でも、とどめのさし方を知らない、って訳か」

『お前は誰だ!?!』

ウォーロックが叫ぶと、少年は気分を害した風なく、口を開いた。

「『太陽の姫』をさらおうとしている、イジュリアを倒しに来ただけです」

『イジュリア?』

ウォーロックの言葉に、ルーン・スケープはつい、と敵…怪物を指した。

「そいつのことです。どいててください。君たち、急所を知らないでしょう?」

『そういつて簡単にどけるかよ!?!』

ルーン・スケープの言葉に、ウォーロックが吼える。

「ま、それが当然ですね」

そう呟いたルーン・スケープの姿が掻き消えた。

「!?!」

ウォーロックが慌てて後ろを振り返ったときには、啞然、とした表情のジェミニ・スパークBと、苦しんでいる痛みを感じないはずの怪物と、怪物の後ろに立って、頭部に剣をつきたてたルーン・スケープだった。

「何だ!?!」

「きさま……は……ルーン……」

ジェミニ・スパークBが驚いた表情で叫び、消え入りそうな声で唐突に現れたルーン・スケープの名を最後に言っつて、怪物は掻き消えた。

「よくもまあ、こんなのにてこずれるものですね」

「こんなのだと!?!」

ジェミニ・スパークBが叫ぶと、そう、とルーン・スケープは頷いた。

「ま、方法を知らないから当然ではありませんけど。よくもここまで傷だらけにできたものです」

「侮辱してんのか!?!」

「ほめてるに決まってるでしょう。普通はここまで行きませんし。この胸の穴なんか、相当なものです。狙いは悪くない」

君がやったんですか、と問いかけられて、ウォーロックが口を開いた。

「それは俺らがやったんだ」

「……お姫様のバトルセンスは、相当なものですね。これは視野に入れておかねば」

それからぶつぶつと呟きだしたルーン・スケープに、ジェミニ・スパークBが叫ぶ。

「だから、誰がこんなのだ!!!」

「きみですよ。僕にも用事というものがあります。では」

あっさりと返答を返し、用事があるので、といい置いてルーン・スケープは海の底から消えた。

『ジェミニ・スパークB。愚痴を後で言いあおうや。いくらでも聞いてやる』

「当然だ!!!とりあえず、上がるぞ」

背後に怒りのオーラを漂わせたウォーロックと、ジェミニ・スパークBは、そう約束してすぐさま上に上がった。

そして、崖の上の上がって見たものは。

「あ、ジェミニ、ウォーロック」

『ツカサ、どうしたんだその手!?!』

『スバル、しつかりしろ!!!』

電波変換をといたツカサの手は、赤く焼け爛れていた。スバルのほうもいささか血の気が戻ったとはいえ、呼吸が不安定だ。

「スバルくん、ツカサく...」

「どうしたの、二人とも!?!」

呆然として、それから慌てて駆け寄ってきたアシッド・エースとクイン・ヴァルゴと合流し、すぐさまWAXAに向かった。

## 理由

WAXAにつくなり、検査のためにすぐさま診察室にスバルは運ばれていった。

ツカサの両手も、二の腕から火傷を負っていたので、慌てて治療を施された。

そして、スバルはすぐさま手術室に運ばれた。

鎖骨あたり、左手の中ほど、手首付近に、怪物の…イジュリアの牙のかけらが残っていたそうで、取り出すためにだそうだ。

すぐに手術は済み、病室へと運ばれたスバルには、首から左腕の手の甲まで包帯が巻きつけてあった。傷口は浅いので、傷が塞がらなくても普段動く分には問題ないそうだ。

ツカサはベッドに横たわるスバルの横で、椅子に腰掛けて壁に寄りかかっていた。

傍には、シドウ、クインティア、ジャックがいた。

「大丈夫かよ、ツカサ？」

ジャックに問いかけられて、ツカサは何とかね、と頷いた。

「でも、スバルくん、大丈夫かな。…大丈夫じゃないからここにいるんだけどさ」

「まあ、大丈夫だろ」

ツカサの言葉に、ジエミニは落ち着かせる意味をこめてそういう。

「それにしても、電波体だけ弾くとはなあ…」

やれやれ、といった風にシドウが呟く。

先ほどアシッドたちが触ったとき、遠くまで跳ね飛ばされたが、シドウたちが触っても、何事も起きなかったのである。ちなみに、どちらとも怪我はしていない。

電波人間状態だと、跳ね返される電波体と、跳ね返されない人間が混じった状態だったので、怪我を負うらしい…というよりは、負う。

『スバルの周りを覆うこのノイズ、命を守ろうとしているわね』

『ああ。おかげで電波変換状態から、弾かれたんだけどな』

ヴァルゴの言葉に続けて、しみじみとウォーロックが呟いた。

「…弾かれた？」

『弾かれたから電波変換が解けたんだよ』

拒絶反応みたいなモンだった、とウォーロックが呟いた。

『恐らく…これをとかない限り、命に別状はない代わりに、起きないでしょうね』

「じゃあ、どうやってとくんでしょうか？」

アシッドの言葉に、クインティアが首を傾げると、シドウは至極あっさり。

「そのためにヨイリー博士が調べてるじゃないか」

「それもそーだな。聞きに行ってみるか」

そして、スバルとウォーロックを病室に残し、ヨイリーの研究室。

「ああ、それならね解けるわ」

すぱっとあっさり、ヨイリーは告げた。

「簡単に言くと、スバルちゃん…ロックマンの中にあつたスターフオース、オーパーツの残留電波を使って、ムーメタルが、ノイズを起こして身を守るように、身体を包み込んだ、というわけね」

それと、とヨイリーは言葉を付け足した。

「ウォーロックちゃんに影響が出ないように、って強制電波変換解除も、その力がやったみたいね。スバルちゃんの命に影響が出ないように、なおかつウォーロックちゃんには一切影響が出ないように、って」

「じゃあ何で、そんな特殊なこと…」

「…そういやあの怪物…真後ろから、俺らの肩を…確か、こう…なんか牙みてーなモンで貫いたな…傷口が焼けるように痛かったが…スバルと電波変換が解けたとき、痛みが消えてた…」

「それがスバルちゃんを包んでる電波の正体…でも、ノイズに近い訳だから…。そうね、仮として『ディフェンドノイズ』とでもつけときましようか。だったら、そのノイズに対策をたてればいいのよ」

「対策って、どうやってだ？」

「コーヴァスが問うと、ヨイリーはうふふ、と微笑み。  
「決まっているわ。ノイズ対策アビリティのレベルをあげればいいのよ」

一同は揃って顔を見合わせた。

場所を移し、スバルの病室。

ヨイリーはカチャカチャとスバルのハンターVGをいじる。ノイズ対策アビリティである、EISPGMに新たなプログラムをセットし終わり、プログラムを起動させると、ウォーロックが触っても弾かれなかった。

「ツカサ君、スバルくんが起きたら知らせてもらえないか？」

「はい、分かりました暁さん」

シドウたちが出て行き、ウォーロックたちも念の為検査する、という事で出て行った後に残されたのは、ツカサとスバルだった。

ツカサはとりあえず窓を開け放ち、それからそつと手を伸ばし、スバルの頬に触れた。

「…凄く情けないね、僕」

ゆっくりと滑らかな肌に手を滑らせ、呟く。

「…さつき、…スバルくんね、告白したとき…僕は…」  
「スバルくんの心を傷つけさせない」って、誓ったんだ」

スバルが聞いてないからこそ、いえる言葉。

「僕、スバルくんを傷つけたこと、あつたでしょ。謝っても許されるはずない、って思ってたのに、スバルくんは許してくれた。……それを除いても……絶対除くべきじゃないんだけど……スバルくんは何度も傷ついてた」

この世界のために。

大切な人が生きる世界のために。

未来があるこの世界のために、自らを犠牲に。

幾度も幾度も、傷ついてても。

「闘うことでなら……きっと誰もスバルくんにはかなわない」

ツカサの言うとおり、現にスバルが、サテラポリス内で最強なのだから。

「だけどね……スバルくんの心を守ること、それはきっと僕にもできると思うんだ。……勝手に僕が誓うだけなんだけどね」

そつ、自身の額の髪を払い、身をかがめて、スバルの硬く閉じられた脛に唇を寄せた。

それはまるで、眠り姫に目覚めの合図を告げる、王子様のキス。

唇を離し、ツカサが身体を起こすと同時、ぱち、とスバルの瞳が開く。

「あ、スバルくん。良かった……どこか痛かったりしない？」

状況が飲み込めてないのか、ぼんやりした表情で、ふるふる、とスバルは首を横に振る。

「……」

「ここはWAXAだよ。イジュリア……怪物と戦ったこと、覚えてる？」

こくん、とスバルは頷き、はっ、とした表情で慌てて身体を起こし

た。傷みが走つたらしく、肩を抑えて俯いた。

「駄目だよスバルくん、寝てなくちゃ……」

ツカサは慌ててスバルの身体を支えて、横たえた。

「…ツカサ、くん…け、が…大丈夫…?」

「え?あ、これ?大丈夫だよ、動かす分に包帯が不便だけど、そんなに痛くないから」

両手をスバルは見て問いかけたのだと気づいて、ツカサは笑って答える。

「でも…」

「ちよつと待ってて。暁さんたちに知らせなきゃ」

ツカサは笑うと、ドアのほうへ身を翻す。

「ま…待って!!」

スバルはツカサに手を伸ばして、引き止める。

「…スバルくん?」

ツカサは腰に腕が回されたので、振り返り、見下ろす要領でスバルを見た。髪留めを外され、ゆるくウェーブのかかった鳶色の髪が、風に揺れる。

「…それ以外、怪我して…ない…?」

「うん、してないよ」

「よかった…」

ツカサは微笑んで、スバルくん、と呼びかける。

「何、ツカサくん?」

「えつと、離してくれない…かな?暁さんたちに、スバルくんが起きたこと知らせないといけないし…」

「…あ、ご、ごめん!」

スバルはぱつ、とツカサから離れる。平気だよ、とツカサは微笑んで、シドウ達を呼びに行った。



恐怖？

「いってきまーす」

「いってきます」

「いってくるぜー」

「いってらっしゃい、気をつけてな」

「いってらっしゃい。スバルくん、あなたは今日もここに帰ってきなさいね」

「はい」

今日、二人は様子見もかねてWAXAに泊まったので、そのまま直行で、シドウとクインティアに見送られて、学校に登校することになった。もちろん、WAXAの職員寮に住んでいるジャックも一緒に登校中である。ちなみに、ツカサはジャックの部屋に泊まった。

スバルもツカサも、家には連絡してある。怪我のことは伝えてあるので、心配させたな、というのが本心である。

「……ツカサ君、本当に痛くないの？それ」

「うん、へーきへーき。ペンとか持つくらいだったら大丈夫だよ」  
ツカサが手を振って見せると、スバルは痛そうな顔をして、俯いた。しかし、ツカサやジャックにしてみればスバルのほうに痛々しいのだ。三角巾でつられた左腕は、華奢な首から手の甲まで包帯が巻かれていた。

それに、その下の傷も見てしまっているのだ。ツカサのほうもひどいのだが、スバルのほうは痕が残らないか、とハラハラするような傷の深さだった。一部、抉れたような傷跡もあった。

「おっはよー」

「おはよう」

「はよー」

三人が教室に顔を覗かせると、凄まじい凍りつくような殺気を感じ、スバルは肩を震わせ、ツカサは瞬きを繰り返し、ジャックは頬を引き攣らせた。

「おはよう、星河君、双葉君、ジャック君……」

「昨日は二人で早々と帰られたんですねえ」

こちらを見ずに呟くルナとミソラに、スバルは慌ててツカサの後ろに避難した。クラスメイトたちも、ルナたちが恐ろしいようでスバルたちを振り返れない。

ジャックが『俺しらねえぞ』、と口の中で小さく呟いているのを聞いて、『昨日も逃げたよねジャック』、とスバルが言うと、『それはウォーロックたちも一緒だろ』、と返された。

「ジャックくん、……に・げ・た・よ・ね？」

ツカサが一言ずつ区切って言うと、しぶしぶとジャックはその場に足をとどめた。

ちなみにウォーロックは『今日逃げたら怒るからね（にっこり）』、とスバルが前もって脅s…説得してあるので問題ない。

ジャックの肩を、ウォーロックがポン、と叩いた。

「さして、どうして帰ったのか、教えて……って、」

「二人ともどうしたのその傷!」

それにクラスメイトたちが振り返って、絶句したように固まった。

今は合服なのでどこから包帯が巻かれているか分からないが、ツカサは両手とも指先まで包帯が巻いてあり、スバルは左手を三角巾でつっており、その上に置かれた左手と、その三角巾がかかっている首は、包帯が巻いてあった。

なのでジャックがツカサとスバルの鞆を持っていた。けしてパシリ

ではなく、怪我を考慮したためである。

「何があつたのよ!!」

ミソラがわたわたとスバルに駆け寄ってきて問いかける。

「ちよつといろいろあつて。でも、牙のかけらとか全部取つたし…」

スバル、主語を省略したら、というジャツクの突っ込みが入るより早く。

「はあ!? 牙のかけら!? 何と戦つたらそうなる訳なの!？」

ルナがスバルの襟首を掴んで揺さぶる前に、ツカサからストップが入った。

「委員長、待つて。スバルくんの怪我、酷いから…」

ツカサの言葉に、ルナは眉をひそめた。

「ぐ…と、ともかく…昨日なんで双葉君と二人で帰つたか、ということだけ教えてもらいましょうか？」

スバルは、『ああ、来るぞ、絶対』と直感しながら、ツカサが口を開くのを見た。

「僕が誘つたんだよ。一緒にドリームアイランドの公園に行きたくて」

「うん、ちょうど花が満開で綺麗だったよ」

「へー、そうなんだ。今度作曲のアイデアのために行つてみようかなー…つて、そうじゃなくて!! 何で二人だけでそこに行つたの、つて話!!」

ミソラが和んだように会話していたが、鋭いツツコミを入れた。

「それは…」

「すみませんが、どいていただけませんかでしょうか？」

スバルが口を開くより早く、声のほうが早かった。振り返ると、銀髪の少年…ケープ・ラントがそこにいた。

「あ、ごめん」

一同がそれぞれ間を空けると、ようやくスバルたちの怪我にケープは気がついた。

「どうされたんですか、双葉君、星河君、その怪我は…」

「いろいろとあったんだ」

ツカサが口を開く。ケープは、スバルの頬に手を伸ばす。

「顔に怪我がなくてよかった、といたいところですが…そのように深い傷では痕が残ります……」

「そ、そう？」

「ええ…でも、僕は…」

それ以上先は言わせない、とばかりに、ぱし、とツカサがケープの手を掴んで、スバルの頬から離させた。

ぎり、と細身のツカサから想像がつかないほど、その握った手に、力が籠っていた。ツカサの唇が、僅かに笑みの形に歪み、言葉を発した。

「ごめんね、ケープくん。…悪いけど、そんなにべたべたスバルくんに触らないでくれる？」

最初のほうはいつもどおりの声だったが、後半になるにつれて酷く冷めて低い声になり、ツカサの目が、ヒカル並みに据わっていることにスバルは気づいていたが、ツカサの後ろに隠れた。

「悪いんだけど…僕、独占欲、強いほうなんだ」

「…けれど、彼女にはまだいないと思いますけれど」

更にツカサは、ぎりっ、と、握り締めたケープの手に力をこめた。

ケープは、唇に浮かべたままの笑みを消さない。

「ここにいるよ。だから、あんまりふざけた真似、しないでくれるかな？」

「いつの間？」

ケープの言葉に、ツカサはあくまで柔らかく微笑んだまま、目は据わったままで、答えた。

「昨日だよ。だから、やめて、って言ってるんだ。君が一番、危ないし?」

「…なるほど、では、やめておきましょうか」

その言葉を聞いて、ツカサはようやくケープの手を離した。

「……では、適度にちょっかひを出させてもらつとしましょう」  
「そっぴい置いて、ケープは席に着いた。」

「…どつという意味なの?」

「さーな」

ルナが首をかしげ、ジャックは肩をすくめた。

「ツカサくん、どつという意味なの?」昨日』って?」

ミソラが問いかけると、ツカサはそれはね、と前置きして。

「昨日は、僕がスバルくんに告白して、OKをもらつたんだよ」

そっぴいきつたツカサの笑顔は、この上なく、素敵なものだった。

…チャイムが鳴るまでミソラ、先生が来るまで、ずっとルナとクラスメイト（女子）の殺気にさらされたスバルだった。

おひるさま（前書き）

とぶなめ...

## おひるやすみ

相変わらず殺気に晒されつつも、お弁当時間である昼休み。

「さ、食べましょ」

ルナの合図で、一同は揃って『いただきます』、と言った。

ちなみに席は一番後ろのスバルの席に、スバルを筆頭に、ルナ、ゴン太、キザマロ、ツカサ、ミソラ、そしてケーブがいた。

「…ねえ、ミソラちゃん」

「なに、スバルくん？」

ミソラからお弁当を受け取り、スバルは当たり前のように自分の隣に座って、お弁当を食べているミソラを見ながら、一言。

「……母さん、怒ってる？」

「うん。『いくらそうとは言えども、女の子でしょー！！それにウオーロックくんも無茶してー！！』ってお父さんに怒ってた」

お弁当箱の中身を見て、母・星河あかねが相当怒っているな、とスバルは直感した。

「……五百円玉と、メモって……」

ぴら、とメモをひっくり返すと『これで何か買いなさい あかね』と、書かれていた。

「……ロック、後で母さんにメール、おくるつか……」

『……そーだな』

スバルは立ち上がり、購買部に向かった。

「…すごいなー」

『…すげえなー』

スバルとウオーロック、二人の台詞は綺麗にシンクロした。男女関係なく、多くの生徒が詰め掛けていた。

「…あるといいんだけど」

そういつて人ごみに入った。押し合い圧し合いしている、人の間を  
するするとすり抜けて、スバルはレジの前に立った。

この学校の購買いわく『早い者勝ち、順番は考えるな』ということ  
で、後から来ても人を抜かしてかまわならしい。お昼は学生にと  
つて必須なのだ。ありえないルールだが、現実にあるのだから仕方  
ない。

「んーと…」

スバルはショーケースに並べられているパンに、いったん端から端  
に視線を滑らせる。

『決まったか？』

「うん、流星パンにする」

ウォーロツクに問いかけられて、スバルは頷く。流星パン、とは流  
星の形をしたパンで、ぎっしりつまった中身は最高級のクリームら  
しい。ジャックが一回食べていたので聞いてみたら、なかなか手に  
入らない、とのことだった。

『流星パンください』

ぱちぱち、とスバルは隣にいた少女と同じタイミングでそういつて  
から、瞬きした。

黒い髪を肩で切りそろえ、前髪をピンで止めた少女だった。ネクタ  
イはスバルと同じ赤、つまり、一年生だ。

「あ、ごめんなさい。流星パン、一個しかないの」

「じゃあ、流星メロンパンってあります？」  
スバルが訊ねる。

「ああ、それだったらあるわ」

流星メロンパンとは、メロンパンの上に流星のマークがしるされ、  
何気に結構おもしろらしい。ジャックから聞いて、流星パンの次に  
気になっていた。…なぜかこの学校は、流星、と名のつくパンが多  
い。



スバルは知らなかったが、現在スバルの質問に対応してくれている、綺麗なお姉さんがパンを作っていて、ロックマンのファンなのだった。

「じゃあそれください」

スバルは代金を払い、すいすいと人ごみを抜けた。

「ま、まって!!」

「ん？」

スバルが振り返ると、先ほどのヘアピンの少女が人ごみを抜けたところだった。

「あ、あの…私、一年A組の水倉あいりと言います。それで、あの…ありがとうございます」

「えーと、お礼言われるほどのことじゃないと思うんだけど…」

「いえ、あの…いつもは、人に譲っちゃうので…食べられなくて…ああ、それはさぞ食べたかったんだろうな、とスバルは思った。

「別にいいよ。ちょっと今日はお弁当忘れちゃっただけだし」

「でも、譲ってもらったのに…」

スバルはそういいながら、すぐ近くにあった自販機で紙パックのジュースを購入して、そこで気づいたことがひとつ。あいりは気まずそうに、俯いている。

「…あの、凄く申し訳ないんだけど」

「はい、何でしょうか？」

「…これ、開けてください…左手、使えないから……」

「それくらい、お安い御用ですよ」

流星パンを抱えた少女は、頷いてジュースを開けてくれた。

「ごめんね、ありがとう」

「いいえ、これくらいは…」

近くに腰掛ける場所があったので、スバルはあいりを誘った。

「あの…」

「ん？」

「パンの袋、開けましょうか？」

「……すみません、お願いします」

ベンチに着くなり、あいりに確信をつかれてスバルはおとなしく渡した。

「ほんと、ごめんね。何から何まで……」

「いえ、食べたかったパンを譲ってもらえて、凄くうれしかったです」

二人はそのまま談笑する。

途中不意に好きなもののお話で、スバルは飲んでいたジュースを吹きかけた。

「え！？…水倉さん、ロックマンのファンなんだ？」

「はい。実は偶然、ロックマンに助けてもらったことがあったんです。…ロックマンにしてみれば、命がかかっていたたくさんの人の一人ですけどね」

それでも、それからファンになったんですよ、とあいりは続けた。

「響ミソラ、とか興味ないんだ？」

「響さんですか？凄くかわいくて、非の打ち所がない素敵なお人、っでは思うんですけど…私はあくまでロックマンのファンなんです」

『よかったなー、スバルくん？』

「うるさい、ロック黙ってて」

からかうように出てきたウォーロックをにらんで黙らせる。

「スバルくん」

不意に名前を呼ばれて、スバルとあいりは階段のあるほうを見る。そこにはツカサがいて、こちらに歩いてきた。

「ツカサくん」

「あ、ごめん。邪魔しちゃったかな？」

スバルとあいりを見比べて、ツカサは申し訳なさそうに言った。

「いいえ、大丈夫ですよ。星河さん、それでは」

「うん、じゃあね水倉さん」

互いにぺこり、と頭を下げ、手を振った。

「ご飯、食べ終わった？」

「うん。食べ終わったよ」

じゃあさ、とツカサが口を開いた。

「屋上、行ってみようよ」

「…うん」

スバルは頷き、ツカサの後について屋上に向かった。

## おひるやすみ02

ツカサとともに屋上に向かったスバルは、屋上の扉が開くなり、ゆつくりと息を吸い込んだ。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

スバルはツカサの言葉に頷く。

「空が近いね」

「うん」

スバルはフェンスの張られた、一段高くなった場所に腰を下ろし、ツカサもその隣に座った。

二人揃って空を見上げる。展望台の空も、ドリームアイランドの公園の空も、一人では寂しすぎるくらいに広がった。

それでも、空は何があっても、変わらずにそこにあった。

『なーにたそがれてやがるんだか』

スバルのウィザード、ウォーロックはあっさりと、雰囲気をぶち壊してくれた。

ジェミニがすう、と実体化して、あきれたようにため息をついた。

『ま、君に風流を理解しろ、というほうが無理だね』

『んだと！？ぐえっ』

『はいはい、いいから行くよ』

ジェミニはウォーロックの首辺りを捕まえるや否や、扉の向こうに引っぱり、消えていった。…二回目の、拉致実行である。

そんな二体を無視して。

「…ツカサくん」

「……何かな、スバルくん」

「……手、ごめんね」

え、とツカサは、スバルの言ったことを繰り返して、瞬きをして、笑った。

「何のことかな？」

スバルは右手でツカサの手をそつと掴んだ。力は籠っておらず、痛みはない。

「……この傷、僕のせいでしょ？……僕の周りにあった、特殊なノイズのせい……なんだよね」

「……どうしてそう思うの？」

ツカサが問いかけると、スバルは俯いて、口を開く。

「……うつすらとだけ、覚えてるんだ」

スバルは記憶をたどるように目を伏せ、ゆっくりと瞬きを繰り返した。

「……本当につつすらで、詳しくは覚えてないんだけど……皆が、そんなことを話していたから……」

「……でも、それはスバルくんが望んだことじゃない。それだけはきつと確かだと思うよ」

ツカサが『ね？』、と重ねて言うと、スバルは弾かれたように顔を上げて、つらそうな表情をしていた。

「でも……！！……っん……」

スバルの唇に、柔らかくて暖かい何かが触れた。

ゆっくりと離れて、微笑むツカサを見ながら、スバルはしばらく固まっていた。

「……スバルくんは望んで人を傷つけるような人じゃないもの、大丈夫だよ」

『ね？』、と再び言葉を重ねられて、スバルはこくん、と躊躇うようにしつつ、頷いた。

「……初めてだったんだけど……」

「そうなんだ」

ツカサの言葉に、スバルは更に俯いた。対照的に、ツカサは空を見上げる。

『微妙に会話かみ合ってねえな』

『そうだな』

扉の陰に隠れるようにして、二体の電波体：ウォーロックとジェミニは会話を交わしていた。

それから十分ぐらいそうしていただろうか。俯いていたスバルは気づかなかったが、空を見上げていたツカサははっ、とした。

「スバルくん!!!」

「え?うわっ!!!」

スバルが顔を上げる間もなく、ツカサは抱き上げて、扉のすぐ近くまで走る。

『何』と問いかけるよりも早く、スバルたちが先ほどいた場所に、剣が降ってきた。

「おやおや、避けられましたか」

とっ、とフェンスの上に人影が一つ、降り立った。

「：ルーン・スケープ!!!」

「誰?」

スバルは首を傾げて、ツカサに訊ねる。

「昨日、あのイジュリアを倒してくれた奴。：だけど、あいつも同じでスバルくんを狙ってる」

「：何のために?」

スバルが訊ねると、ツカサは首を横に振った。

「分からない。聞いてみたらどうかかな?スバルくんが聞けば答えてくれるかも」

「…できることがあるなら、実行しろだよね」  
スバルは頷き、顔を上げた。

「えと…ルーン・スケープだよね？」

「はい」

スバルはまず一番聞きたいことを、問いかけた。

「何で俺を狙うの？」

「皇子が、あなたをお待ちなのですよ。『太陽の姫』」

また、太陽の姫、とツカサは呟く。

「…『太陽の姫』って、何なの？」

「それを今、教えるわけには行きません。けれど、あなたは私とともに来て頂かねば、困るのですよ」

スバルは考え込むそぶりこそ見せたが、拒否の意もこめて口にする。

「やだ、って言ったら？」

「力づく、ということになります」

ルーン・スケープの言葉に、だったら、とスバルが口を開く。スバルはハンターV.Gを構える。

それに続くようにして、ツカサも構えた。

「トランスコード シューティングスター・ロックマン!!」

「トランスコード ジェミニ・スパーク!!」

スバルとツカサの身体が光に包まれ、光が解ける。

ふう、と急にルーン・ケープはため息をついた。

「…どうでもいいですが、戦うつもりがおありなら、降ろしたほうがいいのでは？」

「え?…あ」

『…忘れてたな』

…ツカサがスバルを抱えていたことを、ルーン・スケープに言われるまで、忘れていた一同だった。

## 光の射撃

ドオン、と何かが爆発する音がして、校舎が揺れ、生徒は悲鳴を上げた。

「何!?!」

ミソラとジャックはすぐさま窓際に走り、校舎の外を見た。

「ロックマンにジェミニ・スパーク…!」

ジャックは三人が攻撃を仕掛けている相手を見る。黄色のボディに銀髪、と言った電波人間だ。特徴的なのは、その手に持つ武器…二丁の拳銃だった。

「あれと戦ってるみてーだな。行くぞ、コーヴァス!!」

『分かつてる!!!』

ジャックはすぐさま身を翻し、教室から出てゆく。

「私たちも行くわよ、ハープ!!」

『行きましよう、ミソラ!!!』

ミソラもジャックに遅れつつ、その後に続いた。

二人はすぐさま近くのトイレの男女に駆け込み、ハンターV.Gを掲げた。

「トランスコード ジャック・コーヴァス!!」

「トランスコード ハープ・ノート!!」

スバルたちと同じように光に包まれ、それが解けたときには二人の姿はそれぞれその場から消え、少し上のウェーブロードにあった。

「行くぞミソラ!!」

「ええ!!!」

二人は頷き、すぐさま戦闘の場へ向かった。



「ロケットナックル!!」

ヒカルがその技を放つと同時に、ツカサが間合いをつめ、『エレキソード』で切りかかる。

「甘いですよ」

涼やかな声とともに、キーン、と澄んだ音を立てて、エレキソードが弾かれる。

「どうかな？」

ツカサはそういうなり、高く跳躍する。そしてその後ろに、ヒカルに支えられて立っているスバルの姿があった。左腕はだらり、と力なく降ろされていた。

「バトルカード ヘビーキャノン!!」

そう叫び、高密度のエネルギー弾が放たれた。

スバルの左腕は、現在うまく動かない。そんな状態により、右腕一本で撃つたので、その反動で後ろに一步下がる。それを防ぐ意味でヒカルに支えられていたのだ。

予想していなかったようで、ルーン・スケープにヘビーキャノンが直撃した。

…かに見えた。

「危ない危ない」

「!？」

爆発の煙が消えたときには、薄い膜に守られたルーン・スケープがそこにいた。

「…それは、ノイズ…かな？」

ツカサは淡く笑いながら、問いかけると以外にも返答は帰ってきた。「ええ。これは『デイノイズ』。あらゆる攻撃から使用者を守るノイズですよ」

ツカサは厄介だな、と内心で呟く。不意にとんとん、と後ろから肩

を叩かれて振り返ると、スバルがそこにいた。

「スバルくん？」

「…ツカサくん、僕があいつをひきつける。…その隙に一気に叩いて。そろそろ皆が来るだろうし。あ、ヒカルには話してあるから」  
スバルの言葉に、ツカサはこくり、と頷いた。

「じゃあ行くよ、ロックー!!」

『いつでも!!』

「トライブオン、グリーンシノビー!!」

スバルの身体が木の葉に包まれる。それが消えたときには、スバルの姿は忍者に変化していた。

左手を使えないというハンデを感じさせない軽やかさで、走る。恐らく、それを打ち消すためのグリーンシノビだろう。すばやさで相手を困惑させるための。

スバルはたーん、と高く跳躍する。

「シノビシユリケン!!」

三枚の手裏剣がルーン・スケープに向け、放たれる。それはディノイズで弾かれることなく、代わりにルーン・スケープの銃撃で撃ち落された。

「くっ…」

スバルが舌打ちすると同時。

「ジエミニサンダー!!」

「グレイブクローー!!」

「シヨックノート!!」

強くきらめく雷が、勢いのある紫の炎が、鮮やかな音色を伴った音符が、ルーン・ケープに向けて放たれた。

凄まじい爆発を生まれた瞬間、後ろから腕がまわされて、脇の下か

ら抱えあげられた。

「大丈夫か、スバル」

そう問われて声の主を見上げると、四枚の翼を持った電波人間の少年がそこにいた。

「ジャックくん」

ジャックは少し上のウェーブロードに一息で羽ばたいた。

「よっと」

ウェーブロードに降ろされるなり、電波人間の少女が駆け寄ってきた。

「スバルくん、やっぱり左手使えないんだね」

「うん、ちょっと不便かな…」

青色のギターをウェーブロードに立て、ミソラはスバルの左手を持ち上げて確認のように問いかける。

「…あつちは、大して怪我は負ってないようだね」

ツカサはウェーブロードを見降ろした。ツカサの言葉に、スバルたちも揃って下を見降ろす。

「お姫様は囷とはねえ…」

ジジツ…とルーン・スケープの姿が…いや、周りがかすれる。

「あれ…ディフェンスノイズ!？」

「なんなんだ、ディフェンスノイズって?」

ヒカルの叫びに、ジャックが問いかける。…昨日は怪我の酷かったツカサと、このノイズのせいで目覚めないスバルの為に、ジャックたちに説明は成されていなかった。

「昨日、スバルくんの周りに出てたんだ。とにかく、電波だったら完全に弾くんだ」

「…つまりブライの電波障壁みたいなものね」

ミソラの答えにそうかも、と他の一同は呟く。

「…まあ、コンビネーションは悪くないか」

ルーン・スケープはそういつて僅かに傷を追った身体を見下ろす。  
「んー、じゃ、本気でやってあげましようかねえ……」

そう言つて、ルーン・スケープは銃をスバルに向ける。

「エンシエント・ワルツ!!」

そういうと同時に、銃口から光があふれた。

溢れた光は銃弾の代わりのようで、いくつもの光がスバルに向けて放たれた。

『スバル、避けるぞ!!』

「うん!!」

ウォーロックの言葉に頷いたスバルは、高く跳躍する。

ルーン・スケープはあくまで柔らかく微笑み、呟いた。

「それは、追尾の光ですから……逃れるのは困難」

「だったら、正面からぶつかる!!」

スバルが叫ぶないなや、光に包まれる。

「トライブオン、ベルセルク!!」

パアン、と光が散り、サンダーベルセルクへと変化したスバルが、

光の大剣を高く掲げて、叫んだ。

「サンダーボルトブレイク!!」

真正面から向かってくる光の帯に、たけき光をぶつけて相殺する。

「……って……わ……うわっ!!」

「スバルくん!!マシンガンストリング!!」

爆発の余韻に身体が弾き飛ばされる。とっさにミソラが技を繰り出す。スバルの腕に絡みつかせて、引っぱりあげる。勿論、傷はつけないように、威力は抑えてある。

「ありがとう、ミソラちゃん」

「どういたしまして」

ミソラは嬉しそうにそういった。

ルーン・スケープのほうは楽しそうに笑っている。

「何がおかしい!!」

ジャックの問いかけに、ルーン・スケープは『それはですね』と前置きをして。

「さすがにお姫様に、傷を負わせるわけには行かないですよ。でも、あなた方だったらー!!」

ズドオン、とスバルに向けられたときよりも強く、多くの光が大量に溢れた。

「皆散つてー!!」

「皆散れー!!」

スバルとジャックの声が響くよりも早く、それぞれ別々の方向へ駆け出した。

光も当然のように分かれた。

一つはツカサに向けて。

一つはヒカルに向けて。

一つはジャックに向けて。

一つはミソラに向けて。

…けれど、スバルだけは狙われなかった。

一同を追尾する光は、先ほどより速度が上がっていた。

『おい、スバルあれじゃあ、あいつらに…!!』

「直撃する…みんつ…!!」

ウォーロックの声に、スバルは一同のところへ駆け出そうと、身を翻した瞬間。

「おっと、お姫様はここで大人しくしててくださいませ」

スバルの進路をさえぎるように、ルーン・スケープが目の前に降り立つ。

「どけ、ルーン・スケープー!!」

「それは聞けません。皇子の命は『太陽の姫を我が前に。他のもの

「たちが邪魔をするなら、その者たちを消してもかまわない」と

「……」

「なら、俺も消すのか？」

「……お姫様の電波体ですし……今度聞いてきましようか？」

「ロック、そんなこと言ってる場合じゃ……！！」

スバルは、ルーン・スケープの肩越しに一同を見る。

殆ど、光との差はないように見えた。

「皆、ツカサク……！！」

ルーン・スケープが手を伸ばすより早く、スバルはウェーブロードを蹴って飛び出す。

ピピツ、と音がして、スバルのビジライズバイザーに、ロックオンサイトとはまた別の、模様が浮かび上がり、声が聞こえた。

『デифェンドノイズ ノイズチェンジ キドウシマス』

ツカサ、ヒカル、ジャック、ミソラに攻撃の光が届き、派手なまでに爆発の光が当たりに散って、あたりは煙に包まれた。

## 光のノイズ

「いたた……」

ミソラは、むくりと起き上がる。そして自分の身体を見下ろして、驚く。

「ハ、ハーブ……私……」

『怪我一つ、なし……？』

慌てて、ツカサ、ヒカル、ジャックを見る。揃って同様に驚愕している。

それは、敵であるはずのルーン・スケープも同様だった。

「なんで……怪我一つ……ないの？」

あのサンダーベルセルクの技をぶつけてようやく相殺できた技なのだ。なのに、何故。

ミソラの質問に答えよう、そういうように、ざわり、と風が頬を撫でた。

ミソラは慌ててその風の発生源を探すように、視線をめぐらせて一つの答えを見つけた。

一同のいるウェーブロード、それを円の外側としたら、その円の中に浮かぶ黒い炎があった。

黒い炎が、あたりに散った。

その炎の中にいたものが、あらわになる。

仰向けになり、手と足をだらりとたらしただその人物の特徴は、黒のボディに、藍色の額あてのようなヘルメット、それに長い漆黒のつややかな髪。首にマフラーのように巻かれて、背中に流れる長い漆黒の布、腰あたりから覗くのは、大きく広がった、黒の羽根。腰か

ら下ははためく長い布に隠されていた。いふなれば、ドレスのような形。そして足は、踵の高い靴をのような形。例えるのならば、まるで墮天使のような、そんな色をしていた。

ゆっくりと下降しながら仰向けから、身体を起こす。くるり、と身体ごとこつちを向いた、その瞳は深い闇色。

そのままとつ、と地面に降り立って、胸に手を当てると一瞬でその手に杖が握られた。

「ロククマン……ディノイズモード……」

眩くようにそうつたスバルの視線が、ゆっくりとルーン・スケープに向けられた。その瞳に、光はない。

「……古代の電波に触発されてたとはいえ、こんなに早いとはねえ……」

やれやれ、と言った風に、ルーン・スケープがため息をつくと同時にスバルは手に持った杖をルーン・スケープに向けた。

「……ソルエッジ……」

ルーン・スケープが、とつさに張り巡らせたディフェンスノイズを切り裂き、攻撃を加えた光の刃があった。

バシィン。

ジャックの頬の横を何かが掠め、どつ、と鈍い音が聞こえた。

「……え？」

ジャックが後ろを振り返ると、先ほどまで見下ろしていたルーン・スケープが、煙を上げながら横たわっていた。

しかも、右肩に深い傷を負っていた。

同じく、スバルの掲げる杖からもシューウウ…と、煙が上がっていた。「……それでも、仕方ないですか……」

右肩を抑えながら、むくりとルーン・スケープは身を起こす。取り



落とした拳銃を拾い上げ、銃口をスバルにすえた。

すぐに動いたのは、ジャックだった。

「させるか、フェザーシックル!!」

四枚の羽のうち、二枚を変化させてルーン・スケープに向けて放った。ずばっ、とその手の甲を羽根が切り裂き、拳銃を弾き飛ばした。

ルーン・スケープは手の甲を押さえ顔をしかめ、ジャックをにらむ。

「痛いです…ね!!」

そう叫ぶなり、手の甲から伸縮する帯を放った。

「うおっ!?!」

ぐい、とルーン・スケープはジャックの片翼を絡め取ってから、奪って地面へと投げる。

「ジャックくん!!」

ミソラが悲鳴に近い声を上げる。

「うおおわああっ!?!」

とつさに体勢を立て直すこともできず、落ちていくジャックの一番傍にいたのは。

「こんの…届けーっ!!」

体勢を立て直せずに、落ちてゆくジャックの腕に必死で腕を伸ばしながら、ヒカルがウェーブロードから飛び出す。

「ヒカル!!」

ツカサが慌てたような声を上げる。

スバルは杖の先で円を描き、そこに一瞬で複雑な文字を浮かび上がらせると、その技を起動させるためのようについた。

「……エンジェリング」

光の輪が、落ちる二人のかなり下に浮かび上がる。かつ、と強くそ

の輪が発光すると、爆風が起こった。

「うおおおおおおっ!?!?」

「うわああああああっ!?!?」

今度は反対に空へと飛ばされるジャックとヒカル。

『ミソラ!?!?』

「うん!?!?」

ハープの呼びかけに頷き、目の前を上へと過ぎた二人に向け、ミソラはギターを構える。

「マシンガンストリング!?!?」

ミソラは音を奏で、五本のギターの弦を放った。ぎりぎりジャックの足と、ヒカルの腕に弦が届き、絡みつくのを確認し、傍に急いで降り立ったツカサと共に。

「せえのっ!?!?」

「えいつ!?!?」

ミソラは力いっぱい、引つ張り寄せた。二人は弧を描きつつ、ベチヤツ、と音を立てて一つ下のウェーブロードに、落ちる。

ヒュルンツ、と音を立てて絡まっていた弦がミソラのギター…ファイチャリングハープギターに戻った。

「…空飛べるから分からなかったけどよ……落ちるのは勘弁してえわ」

「ど、同感だな……」

ジャックがウェーブロードにはたん、と倒れてから言った言葉に、ヒカルは両膝と両手をウェーブロードに当てて、息を継ぎながら同意を示した。

「……………」

スバルは二人が無事だったことにも、顔色一つ変えずに、とんとんと杖の先で地面を叩く。ウン、と何かのスイッチが入るような音が出て、スバルの足元に何かの陣が広がる。

つい、とスバルは両手で、杖を捧げるように持ち替えて掲げた。

「まず……………」

ルーン・スケープが頬を引き攣らせた。

「永久の光に塵と消える……………」

「……………シャイニングエンペラー……………」

眩くような声の後、光の隕石がルーン・スケープへ降り注ぐ。

とつさにルーン・スケープは、ディフェンスノイズを張り巡らせた。しかしそれは、ディフェンスノイズを切り裂いて、その身へ当たった。

「うわあああああつ！！！」

ルーン・スケープの悲鳴が響く。

「……………私たちの攻撃、当たらなかったのに……………」

「あの状態のスバルくんの攻撃、全部当たってる……………」

ミソラが顔をしかめて眩き、その先をツカサが引き受けた。

「なんでだ？」

ジャックが首を傾げる横で、ヒカルはぼそり。

「まあ、そりゃあいつものごとく分かんねえんじゃねえの？本人らにも……………」

「……………そうかもな……………」

まあ、だいぶ経ってから分かったりするし、何にもヒントがない状態で考えるのも面倒だし、それでいいか、とジャックは思考を投げた。

スバルの攻撃がやみ、ふらり、とルーン・スケープはよろめく。

「……今は、戻るしかないですね……」

そう呟き、ルーン・スケープは姿を消した。それと同時に、ぱたん、とロツクマンの姿に戻り、スバルはその場に倒れた。

## 目覚め(前書き)

…テ、テストが終わった…オワッタ…

## 目覚め

ぱち、と前触れなくスバルは目覚めた。瞬間。

「スバル君が、起きたー！！」

「ぐはー！！」

どすん、と腹部に何かに乗ってきた。何もわかってない状態で飛び乗られ、スバルの混乱は最高潮である。

「ミソラ、離してやれよ」

ひよい、とすぐさまジャックに引き剥がされた。げぼげぼ、とむせたスバルはシドウに抱き起こされた。

「気がついてよかった、スバル」

辺りを見回すと、昨日スバルが泊まった病室だった。

傍にはミソラ、ジャック、ツカサ、クインティア、シドウがいた。

そして、ウォーロック、ハープ、コーヴァス、ジェミニ、ヴァルゴ、アシッドもいた。

「あの…何時間ぐらい、僕ここで…」

「丸一日＋五時間寝てたよ」

ツカサの言葉に、スバルは絶句する。

戦い始めたのが、十三時…一時ぐらいだったので、単純計算で今は十八時…六時になる。

「え、嘘!？」

「本当よ。起こせないぐらいぐっすり」

クインティアの言葉に、布団を引っ張りあげてスバルは顔をうずめる。…なんでこうも自分は、二日(三日)連続で気を失っているのだろう。

「お…起こしてください…」  
「…というのは冗談で、本当に起こそうとしたんだけど起きなかったのよ、あなた」  
珍しくクインティアが冗談を言った。

いつもならシドウがそういつた瞬間、どこから取り出したのか謎なお盆…もしくはお茶を持ってきた際に、持っているお盆で強かに殴り飛ばすのだ（ウチのクインティアさんはこういう扱い（酷））。それでも二人は仲がよく、人前でいちゃつかないものの、恋人同士である。

「…すみません…」

スバルはそういつて、枕に寄りかかった。

「…それでスバルくん」

「何ですか、暁さん」

示したように、一同はしいん、と静まり返る。

「…何があつたか、覚えているか？」

「…えーと、あの戦いですか？…ルーン・スケープの技があたりそうになったところからは…少しあやふやですけど…一応覚えてます。ロツクはどう？」

『俺はさっぱりだな』

すっぱりそういつたウォーロツクに、だろうね、とスバルはつつこみを入れて、シドウを向いた。

「よかった、それじゃあ、説明してくれないか？この姿のこと」  
つい、とスバルの前に一枚の写真が差し出された。

それは、クインティアとヴァルゴが電波変換した姿、クイーン・ヴァルゴに似てもいた。

それに写っているのは、スバルだった。当本人であるスバルには、

意識はほとんどない状態だが、なんとなくは覚えていた。

黒のボディに、藍色の額あてのようなヘルメット、それに長い漆黒のつややかな髪と深い闇色の瞳。

首にマフラーのように巻かれて、背中に流れる長い漆黒の布、腰あたりから覗くのは、大きく広がった、黒の羽根。腰から下ははためく長い布に隠されていた。いふなれば、ドレスのような形。シューズは、踵の

高いヒールのような形に、手に杖を携えていた。

例えるのならば、まるで墮天使のような、そんな色をしていた。

「…仮に…」

「ディノイズモード…護りのノイズが引き起こした力…」

シドウが口を開き、その先を言おうとした瞬間に、スバルが呟いた。呟かれた言葉はかすれて、普段のスバルの声より低く、抑揚がない上に、虚空を見つめるスバルの瞳からは、光が損なわれて、焦点が全くあつていなかった。

「スバルくん？」

ツカサが両肩を掴んで、軽くゆすつたが反応はない。

「太陽がもたらす命の恵み……………けれど……………同時に…」

「スバルくん…スバルくん!!」

力任せに、ツカサがスバルの両肩を揺るとびくり、と小さくスバルの身体が震え、ぱちぱち、と瞬きを繰り返して、ツカサの顔を見つめてから、辺りをきよるきよる見回した。

「…えっと、僕…何か言ってた？」

ツカサはほっとしたようにスバルの肩から手を離す。

「ディノイズモードとか何とか言ってたぞ」



ジャックが意味不明もここに極まり、とでもいうような表情をしていた。

『そついや…あの姿に変わる前』ディノイズモード、キドウシマス』とか言つてた気がするぜ』

『気づて…頼りないわね』

ウォーロックの言葉に、ヴァルゴは腕を組み、呟く。ハープもアシッドも同意して、頷いた。

『しかたねーだろ！！意識、力の本流に飲まれてたんだぞ！！』

「うん、僕もほとんど意識なかったもん」

憤慨するウォーロックをなだめるように、スバルは同意する。

しかし、それで止まるはずもなく口喧嘩を始めるのが、AM星人のウォーロックと、人工電波生命体のアシッドと、FM星人のハープ、ジェミニ、コーヴァス、ヴァルゴの一同である。

そんな一同を無視して、パートナーたちはスバルを向いた。

「ま、とりあえず検査は終わったし…どうする？今日は家に帰るか？左手はまだ使えないが、身体のほうは問題なかったぞ」

「本当ですか？じゃあ帰ります」

「電波変換で帰るといいわ。早いし、歩きだと、あれがあるから遅くなるかもしれないわ」

あれ、とクインティアが指差す先には、喧嘩を続けているバトルウイザードの一同。

「そうですね」

「じゃあ、帰ろうスバルくん。鞆は学校なんだけど」

ミソラにぐいぐい腕を引っ張られて、スバルは立ち上がる。

「……後で、取りに行こうかな……って、ああ！！学校、先生……」

「大丈夫だ。『サテラポリスの用事で』って教えてある」

シドウの言葉に、ほっ、と息をついたスバルは、それはもう問答無用、とばかりにミソラにずるずると引っ張られて病室を後にしたのだった。

…せめてものあがきで、ツカサにだけは手を振った。

## 帰宅（前書き）

…どンドングダグダになってゆく…いつものことか。

## 帰宅

ひゅん、と音を立てて、二つの人影がコダマタウン、星河家の前に降り立った。

「ただいまー」

『たでーまー』

「ただいまー」

『ただいまー』

少女二人分とウィザード二人分の声が、星河家玄関に響いた。一人は茶髪、もう一人は明るいピンク色。一人は緑色の身体、もう一人は琴の形をした体。

「あら、お帰：スバル！？電話で話は聞いてたけど：こんなに酷いなんて…」

「た、ただいま、母さん」

帰るなり左腕に絶叫した母・あかねに、とりあえず同じ言葉を繰り返した。

「おー、聞いてたより酷いなー」

「あ、ただいま父さん」

「ただいま、お父さん」

『たでーま、大吾』

『ただいま、大吾』

「おー、お帰り」

動揺することなく出迎えた父・大吾に、さすがだなあ、と思う娘・スバルであった。

制服を着替えて、宿題を済ませて、夕食。

席はスバルとミソラ、あかねと大吾が隣同士でテーブルに着いた。今日のメニューは、シチューとサラダ、それと林檎である。

「……つまりそれでツカサくん共々WAXAに泊まったのね？」

そして、おいしい夕食に舌鼓を打ちながら、あかねの確認のような問いかけに、スバルはこくりと頷いた。

「うん」

怪我をしたのは左手だけだが、スバルはお皿が押さえられないので、大きさにちょうどいいハーブに支えてもらっていた。

「……あ、ミソラちゃんがこの前凄く怒ってたから聞いたんだけどー」

「……なに、母さん？」

楽しそうに笑っているあかねに、何故か嫌な予感しか感じない。しかし、聞き流すわけにも行かず、スバルはお茶を飲みながら訊ねた。

「スバル、彼氏できたんだって？」

ぶふっ、とちよつど真横で実体化していたウォーロックに、全てのお茶がかかった。

『きたねえな、おい！！』

「う、ごめん……」

げげほスバルはむせながら、ウォーロックに謝り、あかねを見た。

「ミソラちゃん、そんなに不機嫌だったの！？」

「ええ、それはかなり」

「だあーって、ツカサくんにスバルくん、取られたんだもん！！私だって、スバルくんの事好きなのに！！」

不機嫌そうに言い切ったミソラに、スバルは言いたいことを一旦いっくらか飲み込んで。

「……ミソラちゃん、僕ら女の子同士だよな？それは気にしないんだ？」

スバルはとりあえず、シチューを口に運びながら、自然な振りで一歩聞きたいことを問いかけた。

「海外でオツケーな場所とかあるわよ、問題ないわ！！」

「……んぐ」

…いいのだろうか、トップアイドル響ミソラがこんな発言をして。差別するわけではないのだが…だが、芸能界はドロドロしたイメージがあるので、こういうのが蹴り落とされる要因になりそうな気がする。そんなことをつらつら考えていたら、ご飯をのどにつまらせた。

「ろ、ロツク、お水とって…」

「大丈夫か、スバル？」

ちよつど台所の水差しの傍にいたロツクにお水を取ってもらい、スバルはぷは、と息をついた。大吾の言葉にこくん、と頷いて最後の一口を食べた。

「ご馳走様でした」

「お粗末さまでした」

スバルは両手を合わせて、ちゃんとそういつて席を立つ。

「あ、そーだスバルくん。一緒にお風呂入ろうよ」

「え？なんでさ」

ミソラが急にそう言い出したので、スバルは首を傾げるが、あかねと大吾は揃って。

「そうしなさい、スバル。今左手、使えないでしょ」

「それがいいぞ、スバル。今左手、使えないだろ」

言葉遣いゆえにいさかかのずれは出るが、それでもぴたりとそろつあたり、さすが夫婦である。

「…そーだった」

「じゃ、一緒に入ろうね」

スバルはこれから来る、いささかぐつたりくる後を思い、部屋にやるけつつ戻ったのだった。

## 朝のひとつき

「かー」

「くー」

非常に幸せそうな寝息が、スバルの部屋から聞こえていた。

『おーきーろー!!』

『あなたも大変ねえ』

大声で叫ぶウォーロックと、隣で見守るハープの横に置かれた時計には『七時三十分』、と記されていた。

『こんの…起きろってんだー!!』

「うわあはい!!」

ついで、とばかりにベッドのふちを叩くと、スバルは起き上がる。

…が、起き上がろうとして、ぱたん、と後ろに倒れた。

怪我を負っている左手はともかくとも、自由のきくはずの右手が、動かないのだ。

「……………」

『ミソラも良くこれで起きないわねえ…………』

隣で丸まって眠るミソラを見下ろして、スバルは肩を揺さぶろうとして、はつとした。

「…腕、使えないんだっただ…でもなあ」

このままじゃ、起きれないことは確実である。

「ミソラちゃん、おき…」

スバルは、ミソラの肩を揺すろうと左手を伸ばした。包帯がゆるくなっていたようで、左手から包帯が滑り落ちた。

『!?!?』

『スバル、その腕!?!?』

「え?……………!!」

ハープが息を呑み、ウォーロックに言われて、スバルが見下ろした

左手には、傷一つなかった。

「な、な……」

『と、とりあえず、放課後にでもヨイリー博士のところに行ってみてはどうかしら？』

『そ、それもそうだな。とりあえず、今は包帯巻きなおし……てやれ、ハープ』

『巻きなおしておけ』と、いつもなら言うはずのウォーロックが、途中で言葉を変えた。

『何で私……そうね、私が巻きなおすわね』

『あんたが巻きなさいよ』と、いつもなら言うはずのハープも、途中で言葉を変えた。

それはひとえに、スバルの腕に抱きついていまだすやすや眠る、ミソラが理由であった。

朝日が頬をくすぐるように、ミソラの頬に降り注いだ。

「ん……」

「あ、起きた？ミソラちゃん。おはよう」

スバルはハープに手伝ってもらいながら、制服に着替え終わった。もぞもぞと起き上がったミソラに挨拶をして、スバルは微笑んだ。

「……おはよう、スバルくん……着替えなきゃ……」

もぞもぞ、ミソラは起き上がって階段を下りてくる。

「じゃあ、先行ってるね」

そういつてドアノブに手をかけたスバルの首で揺れる、星の首飾りが、淡く光ったことに、誰も気づかなかった。

スバルが階下に降りてゆくと、既に机の上に朝食が準備されていた。白いご飯、目玉焼き、お味噌汁、そしてお昼のお弁当のおかずのあまり。

既にあかねと大吾は席に着き、大吾は朝食を食べ終えて新聞を読ん



でいた。

「おはよう、母さん、父さん」

『おはようさん、大吾、おふくろ』

『おはよう、大吾、あかねさん』

「おはよう、スバル、ウォーロック、ハーブ。やっぱりウォーロックに起こされたか」

「おはようスバル、ロックくん、ハーブちゃん。…あら？ミソラちゃんは…」

「今着替え中。すぐ降りてくる…」

スバルの途中ではたん、とリビングの扉を開いたのは、ミソラだ。

「おはようございます、お母さん、お父さん」

「はい、おはよう」

「おはよう、ミソラちゃん。ハーブ、お願い」

『任せて』

ハーブは席に着いた、スバルの膝に落ち着くと、スバルのお茶碗を支える。

「ごめんね、ミソラちゃんのウィザードなのに…」

「いいよ。スバルくんの責任じゃないんだから、その腕早く治るといいね」

ぎくり、とハーブとウォーロック、そしてスバルは内心で固まっていた。

…時間があまりたっていないのに、完治してるなんて、言えない。昨日、シドウにも『左手は使用不可』と言われたのに。

「？スバルくん、どうしたの」

首をかしげたミソラに、ウォーロックが声を出した。

『なんでもねーよ。ほら、さっさと喰え。委員長たちが迎えにくる』

んじゃないのか?』

「ロックくんの言うとおりだね。じゃあ、いただきまーす」  
「ミソラをごまかせたので、ほっ、と三人は内心で息をつき、朝食に箸を進めた。」

「星河くん、ミソラちゃん、迎えにきたわよー!!」  
朝食を大体食べ終わったあたりで、ルナの声が聞こえた。

冷氣（前書き）

…さいごらん、ちょっと出てるか出てないか…

## 冷気

「…あれ？」

「あら？」

スバルは瞬きを繰り返して、ミソラはきよとんとした。

「…委員長、ケープくん、ってこっちからの登校だったっけ？」

「私たちと一緒に登校したいんですって。それともなあに？星河くんには、ケープくんと登校することに、不都合でもあるわけ？」

「や…そういうわけじゃないんだけど……」

そういうわけでもあるんだけど、とスバルは内心で突っ込んだ。ケープと一緒に登校したいんだけど、スバルがそこしか見ていないだけなのかもしれないが、ツカサの機嫌が、すこぶる悪くなるのだ。

とりあえず、ゴン太とケープとキザマロとルナに挨拶をして、ツカサを向いた。

「…おはよう、ツカサくん」

「うん、おはようスバルくん。あ、鞆持ってあげるよ」

右手で鞆を持ったスバルは内心でぎくり、としたことをおくびにも出さずに、驚いた表情を形作った。

「え！？い、いいよ！！ツカサくんも怪我酷いんだし……」

「スバルくんのほうが酷いよ」

『ゴメンなさい、もう治ってます』とは、スバルの心の声。

そんなスバルの心情の理由を知っているだけある、ウォーロックとハーブはすぐさま手助けに入った。

『だーいじょうぶだって。本人がこう言ってんだし、かまやしねえだろ』

「そーよ。どつかの馬鹿のパートナーなんだし、きつと無茶は大丈夫なんでしょ。でも、つらくなったら言いなさいね」  
「ちよつと待てハープ、誰が馬鹿だ？」

「それはウォーロックだな」

「ええ、ウォーロックよ」

「ああ、ウォーロックだな」

「ブルル：ウォーロック以外ないな」

「てめえら：まとめてぶつ潰す　　！！」

上からジェミニ、ハープ、コーヴァス、オックス。

喧嘩しつつウォーロック以外、楽しそうに去ってゆく（パートナーと電波変換することのできる）ウィザード一同だった。他の一同はするする、と逃げていたが、オックスだけはすぐさま捕まり、頭を殴られていた。

「ほら、ここでしゃべっていたら遅刻するわ。行きましょう」  
ルナに促され、一同は歩き出す。

先に行くウィザードたち（モードとペディアは除外）の後を、ルナを筆頭にゴン太とキザマロ、スバルとツカサ、ミソラとケーブ。

ツカサの横に並んで歩くスバルは、ツカサに問いかけた。

「ツカサ君、怪我：どれくらい治った？」

「んー：動かしても痛くはないくらいには治ったかな。まあ、一応最先端技術の手助けも借りてるんだけどね」

最先端技術を使った、傷の治療方法でも、早いほうだ。…完璧に治るなんて、ありえないことなのだから。せめて、痕が残るなり何なり、あるであろう。なのに、その痕すらない。

「先生やユイちゃんたちに絶句されたけど」

当然だけどね、と付け足し、苦笑するツカサの表情が、今は胸に痛かった。

「……ところで、ユイちゃんってこの前の子…だよな？」

スバルの脳裏に浮かんだのは、お淑やかな、腰よりも長い藍色の髪に、他校の制服を着た少女だった。

「そうだよ。同じ孤児院の子」

「…ふーん」

酷くそっけない返事。聞いておいてこれはないだろう、と自分に内心で突っ込んだ。

「もしかしてスバルくん、気にしてる？」

「え？そ、そんなことないよ？」

ツカサの淡い微笑みに、スバルは少しドキリ、としつつそう返した途端。

「二人でいい雰囲気作らないでくれる…？」

「僕たちは置いてけぼりですかね…？」

ミソラとケープの背後から、何故か冷気が漂ってくる。

「悪いかな？僕としては望むところなんだけど」

にこにこ、と微笑むツカサの笑みが、空恐ろしい。それと比べて遜色なしに、背後に冷気を漂わせたミソラとケープも恐ろしい。

「そっちとしては、てことで、僕としては最高なんだけど」

「そうですか」

「そうだよ」

にこにこにこ。

スバルはちょうど前を歩いていたゴン太とキザマロの元に、急いで駆け出した。あの場にいたら恐らく、きつと、というより絶対、凍り付いて歩けなくなる。それだけはごめんこうむりたいのだ。

…しかしなぜ、何が理由でああなるのだろう、そう首を傾げながら、スバルはゴン太たちに追いついた。

嵐到来（前書き）

...めめまじ、じっしおしるふ... ぼろ ぼろ嵐...

## 嵐到来

『ピンポンパンポーン。一年B組星河スバルさん、双葉ツカサくん、至急職員室に来てください。繰り返しします、一年B組星河スバルさん、双葉ツカサくん、至急職員室に来てください』

学校についたか、つかないかが良く分からない辺りで、この放送が聞こえてきた。

「……………」

「……………」

二人は黙って顔を見合わせた。ルナたちも訝しげに顔を見合わせる二人を振り返った。

「あなたたち、何かやらかしたの？」

「やったといえば、電波変換して戦ったことぐらいだし……」  
ねえ、とミソラは隣にふよふよ浮かぶハープに問いかけた。

『ええ、でも……』

「それもばれてねえし……」

ハープの言葉を、ジャックが引き取った。

『……じゃあ、何なんだ？』

『行ってみれば分かるだろ。行こうぜ、ツカサ、スバル』

ジェミニ二の言葉に、二人は職員室に向けて歩き出した。

朝礼のチャイムが鳴ったところ、スバルとツカサは職員室の前にいた。学校の教室移動距離の中で、靴箱から、職員室まではけっこう遠い方にはいる。

とんとん、と念のため軽く扉を叩いてから、スバルは扉を開いた。

『失礼します』

二人がそういつて職員室に入ると、ギクシャクしつつこちらを振り返る、先生たち。



…と、その少し奥で手を振っている男性と、落ち着いて座っている少女。

そして、サテラポリスのマークが胸に入った電波体と、短い杖を手に持った電波体。

「暁さん、クインティアさん」

『アシッドにヴァルゴ!! どうしてここにいるんだ!?!』  
スバルとジェミニは啞然として、二人を見ているだけで、ツカサとウォーロックが口を開いた。

「二人の様子、見てこいってヨイリー博士に言われたんだ。あと、事件現場の見返し」

先生たちはサテラポリスがいるので、いささかはらはらしている。恐らく、何かしでかしたのだろうか、という心配だろう。

スバルとツカサは、二人の前に腰を下ろした。

「昨日、現場検証は終わらせたんじゃなかったんですか?」

ツカサが訊ねると、クインティアが肯定の意を示す。

「ええ、そうなのよ。ただ…」

クインティアの声が、僅かに低くなる。

「…あなたが戦った相手、あれはあなた達や、私たちのような電波体との電波変換…というより、ノイズの電波体との電波変換だったのよ」

『ノイズの電波体…? そんなの聞いたことがないぞ』

訝しげにウォーロックは顔をしかめて、ジェミニとヴァルゴを見た。

『俺も知らないな』

『私も右に同じよ』

「だから、もう一度調べて来いとお達しが来たんだ」  
そう言いつつ、シドウは朗らかに笑う。

「まあぶっちゃけ、フィールドワークみたいなもので…端的に言えば、仕事サボりみたいなのがふ」

「仕事をそんな風に言わない」

「がん、と傍にあつたお盆でクインティアが暁の頭を叩いた。こほん、とクインティアは咳払いをして、口を開いた。

「ほら、あなたたちも含めてミソラちゃんとジャックも、あの特殊なノイズに触れたでしょう」

触れた、って言うよりは傍に近寄っていたら、とシドウが付け足す。

そして、その先をシドウが引き取った。

「その相手とは別に、あの怪物からツカサは怪我、スバルは牙を取り出したわけだろう。その様子見もかねて、授業参観ということで行って来なさい、とヨイリー博士に頼まれたんだ」

「なるほど」

「…授業参観、かあ…」

ふと、スバルは一つ疑問に思ったことが。

「あの…クインティア先生」

「なにかしら、スバルくん」

首を傾げるクインティアに、一番聞きたいことを、訊ねた。

「……ジャック、このこと知ってるんですか？」

「知らないわ。だって、あの子が行った後に頼まれたのだから。前もって先生から知らされるでしょうけど」

……それを知った後のジャックの驚愕ぶりが、うかがい知れる気がしたスバルとジェミニであった。

同時刻、一年B組教室。

「…というわけで、今日はサテラポリスの暁シドウさんと、クイン

ティアさんが……」

頬杖を着いて教室の外を見ていたジャックの耳に、そんな言葉が飛び込んだ。

「……は？」

謎に思いつつ、口を開くより早く、ルナが手を挙げた。

「先生、今サテラポリスって……」

「ああ、なんでも、暁シドウさんとクインティアさん、って人が授業参観……」

参観、でジャックは絶句し、その先は聞いていなかった。

## 対戦という名のバトル（前書き）

いつもとお話の進み方が違います。

## 対戦という名のバトル

こんにちは、ぼくは星河スバル。  
今は学校の授業、五時間目の体育だよ。

…え？始まり方が違う？  
それはほっといてよ。

だって、こうやって気を紛らわせてないと、心臓に悪いんだ。

…死にたくはないから。

< > < > < >

「そっち行ったぞ、ツカサ!!」

「おう!!くらいやがれ!!」

「ぎゃあ!!」

「やるなあ…俺も負けてられないな!!」

何故か怪我人のはずのツカサくんも参加してるんだよね。いや、あれはヒカルか。まあ、それはどうでもいいや。

そしてぼくは腕を怪我しちゃってるから、見学、ということになってクインティア先生と座って、男子のドッジボールを見てるんだ。

女子のほうは男子の応援がしたいってことで、周りに散らばって男子の応援中。

ちなみに、A組Vs・B組の対決だよ。C組Vs・D組も他コートでやってただけで、危ないからって中止になったんだ。

え？何で中止かって？

それはね、さっきの『死にたくはないから』に繋がるんだ。

A組にはジャックとツカサくんが、B組にはゴン太と特別参加の曉さんがいるんだけど…

じゃあ、まずはツカサくん…いや、ヒカルとジャックと曉さんが、人にボールを当てたときの話を…とりあえずあれは、当てた、というより流れ弾なんだけど…ああ、その前にきつかけを話さないといけないよね。

< > < > < >

ぼくはそのとき、先生の傍の体育館の壁に寄りかかって座ってたんだ。

「スバルくん」

上から声が降ってきて、見上げるとそこにいたのはクインティア先生。

「クインティア先生。もういいんですか？」

「ええ。皆、意外と覚えててすごくびっくりされたわ」

そういつてクインティア先生は、ぼくの隣に座った。さっきまで、コダマ小学校メンバーに囲まれてたんだ。

皆が覚えてたことは…ある意味当然かなあ。

だって、教育実習生、つてことでコダマ小学校に来たとき、弟のジャックも一緒に学校に来たんだから。そのジャックがいまだに一緒に学校に通ってるわけだし、覚えてるかな。

そうして、話している隣で、きつかけとなった先生の一言が聞こえたんだ。

「…力配分がなあ…」

A組とB組のメンバー…というより、男子生徒を見てぼそり、と呟いた先生の手元を、暁さんが覗き込んだんだ。

「どうしたんですか？」

「いや…A組とB組で差があるんですよ。牛島は力はあるんですけどすぐ終わって…その点、この前転校してきたばかりの双葉とジャックは強い上に切り替えも早いんで…大抵はB組圧勝なんですよねー…たまにはこう、白熱した試合にさせてみたいんですよ」

拳を握って熱く語る先生。

確かに、ツカサくとジャックは運動が得意だ。一瞬の判断ミスが、命取りになる場所で戦ってるからかな。

ツカサくんについては、先生は生徒資料を見たのかな。そんな先生に、暁さんが朗らかに言ったんだ。

「じゃ、俺がA組に参加しようか？」

って。そうしたら、先生が許可を出しちゃったんだ。

先生のジャージ（なかなかサイズが合うのが、なかったみたい）を着て、暁さんがA組コートに入ったのを確認して。

「それじゃあ、A組対B組、はじめ！！」

キヤーキヤー騒ぐ女子（委員長とミソラちゃんと水倉さんは騒いでなかったけど）、の声をBGMにして、ピー…、と先生のホイッスルが高らかに鳴った。

先攻はB組、ジャック。

「いっくぜー！！」

ジャックは全力で、外野にボールを投げた。そのボールの先には、ツカサくん。…今考えたら、ツカサくんはそれを取ったあと、ヒカールと変わってた。

「とれるモンなら、とってみろ！！」

そういつて、そのまま勢い良くボールを投げた。そこで暁さんがそのボールをとって、投げたんだ。

…きつと、ていうか…これが絶対、C組V s . D組試合中止のきつかけだった気がする。

そのボールが急にそれちゃって。

隣コートで試合をしていた（ここでは男子Aにしておくね）、男子Aに、そのボールが直撃したんだ。

…それは凄かったんだ。音と威力が。直撃した男子は気絶。その上で保健室直行。

先生がA組とB組優先、ってことで、C組D組の試合は中止になったんだ。

< > < > < >

それで話を戻すんだけど…

A組B組、それぞれ気絶…っていうより、ボールが当たったところが凄く痛いつて人たちが、保健室に行つてて。

大抵の人はコートの外にいて。

結果、コートに残ってるのがツカサくん、ジャック、暁さん、凄く奇跡的にキザマロ。

え？キザマロの扱いが酷い？だつて本人の目が、奇跡、つて語ってるんだもん。酷くはないよ。ぼくのせいじゃないから。

それにね、この話をしている間に、ツカサく…違った、ヒカルにボールを当てられたもの。

でも、暁さんがすぐさまジャックにボールを当てちゃって。

…それを考えたら、現在コートには、ヒカルV s . 暁さん、つて状況。ボールはヒカルの手。



「やるね、ツカサくん」

「てめえこそ」

暁さんは楽しそうに微笑み、ヒカルはにやり、と口端を吊り上げて笑う。

ツカサくんの中身が、ヒカルに変わってることに、暁さんも気づいてるけど、何も言わない辺り、大人だなあ。

「俺はサテラポリスのエースを自負してるんだ。だから…」

ちら、とこちらを暁さんが見た。すぐさまヒカルに戻しちゃったけど。ヒカルもこちらを見て、すぐさま暁さんに戻した。

「あの子に頼りっぱなし、頼みます、って訳には行かないだろう？世界中が認めているヒーローだけど」

暁さんの、本来なら普通の女の子なだから、と聞こえない声が聞こえたような気がした。

「それもそうだな。…ま、俺らも一緒に感じだよ。世界を救ったヒーローとはいえ」

もうあいつにばっか、任せて傷つかせたくねえ、とやはり、聞こえない声が聞こえたような気がする。

「…さて、じゃあ、行くぜっ!!」

そういつてヒカルがボールを構えた瞬間、とてもいいタイミングでチャイムが鳴った。…すべっ、とヒカルと暁さんが転んだ。顔面から行ったけど、大丈夫かな？

とりあえずその後、授業があるから、と先生の合図で、試合は終わった。

中途半端すぎるって？

仕方ないよ。試合を始めた時間が、暁さんの着替えで思いのほか手間取っちゃって、遅かったんだから。

選択(前書き)

…パソの絶不調もいいところ…

## 選択

そんな騒動があつたけれど、今日一日は何とか無事に済んだ。他愛ない話をしながら、途中でそれぞれの岐路に分かれて、最終的にスバルはミソラと共に、家に向かつていた。

「やっぱり、体育大変だったね…」

「だよ。でも、暁さんも大人気なかったな」

てくてく、と歩くスバルたちにやや遅れて、ウォーロックたちがついてくる。しかし、何故か喧嘩をしているような声。

「なんですってー！？じゃあ、どっちが早くコダマタウン五周できるか、競争しようじゃない！！」

『望むところだ！！負けて吠え面かくなよ！！行くぜ！！』

え、とスバルとミソラが揃って振り返ったときには、そこには何もおらず、鞆から急いで取り出したビジライザー越しに空を見上げると、凄まじい勢いで遠ざかってゆく電波体二つを見た。

「…スバルくん？」

いささかたそがれる様な眼差しになったスバルに、ミソラが首を傾げて問いかけた。

「…競争しに行つたみたい。理由はわかんないけど…五周しなきゃ帰ってこないよね…」

「そうだね…先に帰ってようか」

「それがいいね」

頷きあつて、再び二人は歩き出した。

…あまりにも早いウォーロックとハープは、しばらく本人たちの知らない間に、デンパくんたちの間で、『近づいたらデリートされる、ユウレイのような電波体がいる』と、囁かれることとなった。

「ただいまー」

「ただいまー」

「お帰りなさい、スバル、ミソラちゃん。あら？ロックくんとハーブちゃんは？」

ドアの開く音と声を聞きつけて、ぱたぱたとあかねが出迎えてくれた。

「何でか知らないけどコダマタウン五周してくるって」

「あらあら…それはともかく二人とも着替えてらっしゃい」

アカネにそう言われてスニーカーを脱いだ二人は、返事をしてそれぞれの部屋にあがった。

(ミソラがスバルの部屋で起床しているだけであって、ミソラの部屋はちゃんとあるのだ)

スバルは薄い赤の飾り気なしの七分袖シャツに、膝丈の黒のズボン、ミソラは薄桃色の愛らしいレースの七分袖シャツに、濃い目のピンクのショートパンツで、リビングに戻った。ちなみにスバルの胸にはいつもどおりのペンダント、頭にはビジライザーがあった。

「スバルー、お風呂入れて頂戴」

「はい」

ぱたぱたとスバルは風呂場へ向かう。

「あの、お母さん私は…」

「じゃあ、夕飯のしたく、手伝ってもらえるかしら？スバルは…ね」

「はい」  
本来だったらスバルに頼むところだったのだろうが、肝心のスバルは左腕を怪我している。とんとん、と軽やかな包丁の音を聞きながら、スバルは宿題を全て終えた。

しばらくすると大吾も帰ってきて、夕飯が始まった。…いまだ、ウオーロックとハーブは帰ってこない。

夕飯も大体済みそうになったときだった。

「スバル、ミソラちゃん。聞いてほしい話があるんだ。ああ、食べながらで構わないよ」

大吾はそう切り出し、それを聞いて箸を止めそうになった二人に、言葉を重ねた。とても真剣な眼差しで、食べながらでいいとは言われたものの、箸を止めざるをえない。自然と、全員の食事の手が止まっていた。

しばらく黙っていた大吾は、口を開くなり、話の本題をすぱり、と告げた。

「……近々… ロックマンの正体をばらそうと思ってるんだ」

「… ロックマンの正体を、ばらす？」

スバルは、瞬きを繰り返して、いわれた言葉を復唱した。

「詳しく言えば… ロックマンたちの正体を、世界に向けて発表しようと思ってるんだ」

「どうしてですか？」

ミソラがすぐさま問い返す。

「…正直、これ以上隠せない」

眉間に皺を寄せた大吾は、言葉を継ぐ。

「ほら、この前学校で騒ぎがあっただろう。あれは、スバルを狙ってきたわけだが… 極端に言えばロックマンを狙ってきた、ともいえるわけだ。それでな……」

大吾は立ち上がり、リビングのテレビをつける。

いつもの時間だったら長寿バラエティー番組の流れている時間にもかかわらず、今日は特別番組が報道されていた。右端に小さく浮かぶ言葉が、どんな番組なのかを、示していた。

そして、そこに表示されていたのは。

「……『ロックマンは人間の敵か、味方か』… か」

そして、どちらかということを示すグラフには、僅かながら『敵』  
という答えが上回っていた。

『だってそうでしょう。ロックマンが現れてから、頻繁に事件が起  
こるようになったんですよ』

『それに、この前の事件だってロックマンを狙ってきたみたいだし  
…』

とても自由に並べ立てられる言葉は、胸に重く突き刺さった。

「…この通り、ロックマンに良い感情を持たない人間だっている」  
あまり見せたくないようにチャンネルを大吾が変えようとした瞬間、  
怒りの声が響いた。

『それでも、ロックマンに助けられた人だっているんです！！サテ  
ラポリスじゃどうしようもない事件を解決してきたのも、ロックマ  
ンなんですよ！！』

穏やかそうな見た目とは裏腹に、髪を結び上げて綺麗な髪飾りで止  
めた、女の子が声を荒げていたのだ。

『電波ウィルスはロックマンが現れる前からいました！！電波ウイ  
ルスのせいで起きる現実の事故でも、助けようとしてくれてるんで  
すよ！？…そうしなきゃいけない、という理由はないとは思わな  
いんですか！？』

「アイちゃん…」

ミソラは誰かの名前を呟く。スバルが誰なのだろうと思っていると、  
ミソラは答えをくれた。

「最近芸能界に入ったタレントで、峰倉アイちゃん。最近話したん  
だけど…芸能界じゃちょっと潔白すぎるかな、って思っちゃったり  
するくらい、やさしい子だよ」

「…僕とロックが助けに行った現場に、いたのかな？」

「かもしれないな」  
大吾はとりあえずテレビの電源を切る。

「とにかく、これ以上隠していてもどこかに必ずぼろが出る」  
再び夕食の席につきながら、大吾の話に耳を傾ける。

「それに、何も知らない人たちがメディアの誤った情報だけでロツクマン…スバルを悪い方向に捉えて、心を傷つけかねない」

ミソラは隣にいるスバルの顔をそっと覗き見た。スバルの顔に、表情らしい表情はない。

「人は、顔が見えない相手には、どれだけ傷つこうが無頓着だ。相手が傷ついていることにすら気づかない。ならいつそ正体を明かして、きちんとそうなった理由を話しさえすればこの問題は多少なりとも、緩和するはずだ。…けれど」

大吾はまっすぐに、スバルに視線を据えた。

「これを世間に告げるかどうかは、スバル、お前が選ぶといい」

スバルの顔に、ようやく表情が戻ってくる。驚きの表情だ。

「…え？ぼ、僕？…父さん、ミソラちゃんたちは…」

「お前とミソラちゃん以外には教えてある。全員、承諾を得ている。それに、ミソラちゃんも構わないだろう？」

大吾の目線がスバルから、隣にいたミソラに移った。

「はい。…スバルくんはそんな風に考えてないのに、勝手なこと言われて、私、怒ってるんです」

ミソラの声、というか雰囲気がいっつもより冷たい。

「スバルくんを守る方法があるんだったら、私はそっちを選びます」

「ありがとう、ミソラちゃん」



大吾はそういつて、スバルに視線を戻した。

「判断を早く訳じゃないが…早いほうがいいだろう。下手に知られて、全てを壊されるよりは…まだ、こちらから知らせたほうが対処の仕様がある」

大吾の言葉に、スバルは躊躇わずに答えを口にした。

「……僕が正体を話せば、他の皆も傷つかなくてすむんだよね？」

「ああ」

「ロックマンの正体を、世間に話す。皆が傷つかずにすむんだったら、話すよ」

ミソラは内心、やっぱり自分より皆を優先させるんだね、と呟いた。

スバルは出会った当初、大吾が行方不明、という状況に陥っており深く傷ついていた。傷つきたくなくて人とかかわりを、絆そのものを拒否していた。

けれどスバルは、その傷を乗り越えた。それから、いつも自分より他の人を優先させて、傷ついて。傷ついている人がいたら、まっすぐに向き合って。

『だから、皆はあなたを守りたいと願うんだよ』と、ミソラは小さく呟いた。

とりあえず夕飯を済ませて、いささかぐったりと疲労しているウォーロックたちが帰ってきたので、スバルは話を切り出した。

「……あの、父さん、母さん。今からヨイリー博士のところ行つて来たいんだけど…駄目かな」

「どうして？」

「えっと……」

あかねの問いかけにスバルが言いよどむ。代わりに、ウォーロックが口を開く。

『俺が頼んだんだよ。スバルのハンターV.G、特殊なPGMを組み

込んでるからな。ちよつと前から少し調子が悪いんだ』

「なら仕方ないな。ともかく、早く帰ってこいよ」

「うん」

大吾の言葉に頷き、スバルは頷いて部屋に向かった。棚にしまつてあつたもう一組の靴を引つ張り出し、それを履いてハンターV Gを構える。

「じゃあいくよ、ロックー!!」

『おう!!!!』

「トランスコード シューティングスター・ロックマン!!」

スバルの部屋は一瞬光に満たされ、その光が薄れたときにはスバルの姿は部屋になかった。

## 検査

ウェーブロードを一路、NAXAに向かう途中、スバルはウォーロックとハーブがコダマタウン五周をするに至った理由、そして五周にしても帰りが遅かった理由を訊ねた。

「あー…それはな『電波変換してもあんたたち重いよね』って言われたんだよ。ほら、ミソラは電波変換後は音を主体に戦うもんだから体重ねえだろ。電波変換前は重いのによ」

「うんうん。…それ、ミソラちゃんのいる前で言っちゃ駄目だよ。女の子は体重を気にするらしいから」

事実ではあるが、本人がいたら烈火のごとく怒り出しそうな気がしたので、スバルはウォーロックに釘を刺した。

そしてそのスバルの言葉に、ウォーロックはすぐさま疑問に思ったことを訊ねた。

『らしいって…お前も女だろ』

「んー…僕は別に言われても平気だから。とりあえず、それで？」

スバルは思ったことを返し、ウォーロックを促した。

『戦うのに体重は関係ないし、俺らの速さで動きが決まるだろ』  
「…戦うのに体重は関係ないし、俺らの速さで動きが決まるだろ』  
って言ったら、あんまま口喧嘩からコダマタウン五周をするに至ったってワケだ』

「…ロック達らしいね、とは言っておくけど…それで、何で遅かったの？」

『途中でアシッド、コーヴァス、ヴァルゴに会ってな、そのまま全員で競争するに至ったわけだ』

大方説明したら全員参加、ということになったのだろうか、とスバルはあながちはずれではないことを考える。

…実際は『説明をしたらアシッドたちもウォーロックやハーブに対

抗心が沸き起こったので、半場無理矢理参加した』だ。

「…ナルホド…それで、結果何周したの？」

スバルが不意に、気になったことを問うと、ウォーロックはしばし考え込み、答えを口にした。

『二十〜三十くれえか…？』

「そんなに！？このコダマタウンを！？」

『おう。ちなみに俺が勝ったけどな』

嬉しそうに言うウォーロックに良かったね、とスバルは返答を返す。

『次はジエミニヤオツクスも誘うかな』

気軽なウォーロックの言葉に、スバルは目を瞬かせて、もしかしてと前置きをしてから。

「またやるつもりなの？」

『おう、アシッドたちもなんか燃えてたしよ』

「……………」

負けたままで済ませられるメンバーではなかったことを、スバルは今更ながらに確認したのだった。

< > < > < >

自室で今起きている事件のノイズを検査しつつ、何も得られないことに苛立ちながら、ヨイリーは、ふうと息をついて椅子の背もたれに寄りかかった。

何か飲みたくなり、椅子から立ち上がったときだった。

こんこん、と部屋の入り口の扉から音がして、そちらを見た。

「誰かしら？」

『……………あのヨイリー博士…スバルです』

躊躇うような控えめの声が聞こえて、ヨイリーは入ってらっしゃい、

と言った。しゅん、と音を立てて部屋の入り口が開き、予想通りの人物と電波体がいた。

自室の入り口に立っていたのは髪を解いている星河スバルと、そのパートナーであるウイザード、ウォーロックである。

スバルは相変わらず、左腕をつっていた。

「こんばんは、ヨイリー博士」

『よお』

「こんばんは、スバルちゃん、ウォーロックちゃん。どうしたの、こんな時間に？」

スバルをとりあえず接客用のソファアに落ち着かせて、ヨイリーは問いかけた。

「あの……他の人たちには黙ってもらえますか？……心配、かけたくないんです」

必死なスバルの瞳から、何かを悟ったらしいヨイリーは頷き、口を開く。

「？構わないけれど……その事を知っているのはウォーロックちゃんだけかしら？」

『ハーブが知ってるだけだ。もちろん、あいつには口止めしてある』

ウォーロックの言葉にそう、とヨイリーが返すのを待って、スバルは袖を捲り上げて包帯を解いた。流石に服を着ているので、首まで解けなかったが、とりあえず腕に巻かれていた包帯は、全て解いた。ヨイリーは言葉もなく、固まった。

当然である。その包帯の下にあるべき傷は、一日や二日で癒えるよ  
うな、しかも痕が残らないような生易しい類の傷ではないのだから。

「今朝起きたときに……包帯が解けて……そうしたら、傷がなくなっ  
てたんです。ヨイリー博士には話しておこうと思って……」

「ヨイリー、何で分かるか？」

スバルの状況説明の言葉を、頭の中で整理しながら、ウォーロックの言葉に否定を示す。

「……とりあえず、念のために検査を受けてもらえるかしら？ ウォ

ーロックちゃんもついてらっしゃい」

「はい」

「おう」

スバルとウォーロックは頷いて、ヨイリーの後に続いてヨイリーの自室を後にした。

騒動(前書き)

…ヨイリー博士ってこんなキャラでしたっけ…

## 騒動

スバルは病院で着る検査服に着替え、体内や血液を調べてもらい、結果が出るまでにしばらくかかるとの事だった。

ヨイリーに包帯を巻き直してもらい、私服に袖を通しながら、スバルは息をつく。ウォーロックはなんだかんだで部屋の外に出ている。…というより最近、スバルが着替えるときには必ず部屋の外に回る辺り、スバルがいくら無頓着であっても、流石に居心地が悪いのか。

スバルは髪を結い上げて、部屋の外に出る。

腕を組み、壁に寄りかかっていたウォーロックは、スバルが出てくると、ヨイリーから頼まれた伝言を伝えた。

『着替え終わったら帰っていい』だよ』

「うん、ありがとう、ロック。…でも、挨拶はしたいんだけど…一緒に来てくれないかなロック？」

スバルはしばらく考えた後に、ウォーロックに確認、というよりは同意を求めた。

『…それもそうだな。よし、ヨイリーの研究室に行こうぜ』

「うん」

二人は頷きあって、ヨイリーの研究室に向かった。

< > < > < >

ヨイリーの研究室は目と鼻の先、というところに来て。

『…!!スバル、どこかに隠れる!!』

ウォーロックは何かに驚いた表情をし、急にそう言った。

「?どうしたの、ロック…」



『いいから、どこか…あの部屋の中に隠れる』

黙っている、と目で合図をされて、小さく潜められた声でウォーロツクはスバルに一つの部屋…ヨイリーの研究室の隣室を指で示した。  
「う、うん…」

有無を言わさない声音に、スバルはただ頷いて、ヨイリーの部屋の隣にある部屋に入った。扉を閉めて、壁に寄りかかる。  
すぐに聞こえてきたのは、ヨイリーの怒声。

「…ヨイリー博士…？」

あのヨイリーが声を荒げるとは、誰が相手なのだろう。

「お帰りください！！すぐに！！！」

「だから、我々はロックマンが人類の敵であることを証明するために……」

スバルの胸に、その言葉は深々と突き刺さった。ウォーロックの表情も、とても硬い。

「……」

『……』

スバルは俯いたまま、声も出さずに壁に寄りかかって、ウォーロックは拳を固めてそれを戦慄かせていた。

そしてヨイリーは言葉を重ねた。

「帰ってくださいといっているでしょう！！早く帰って！！それ以上ぶざけたことを言わないで！！！」

「……分かりました」

「…出口はそこです。お帰りくださいませ」

ようやくヨイリーの声から僅かながら怒りのボルテージが下がった。

スバルはヨイリーの自室から出て、それぞれ思い思いのことを言う

人たちの足音が遠ざかるのを待ち、隣室の中へ滑り込もうとした瞬間。

ヒュ、バアン！！

スバルの頬を掠めて、分厚い書類が後ろの壁に当たった。

「…っ!？」

スバルはびっくりしてその場にペタリ、と座り込む。

恐々後ろを振り返ると、後ろの壁に巨大なへこみができていた。

「…あ…ご、ごめんなさいスバルちゃん！！怪我はない!？」

物を投げた体勢のヨイリーは、入ってきた人物がスバルだと知るや否や、こちらに駆け寄ってきた。

『大丈夫か、スバル!？』

「だ、大丈夫…け…怪我はないんだけど……ちょっとびっくりしただけ……」

ヨイリーの手に掴まり、スバルは立ち上がる。

「ごめんなさい、本当に怪我はない?」

「はい、大丈夫です。…あの……」

スバルがヨイリーの手を離し、言いよどむとヨイリーは首を傾げた。

『さっきの奴らと勘違いしたのか?』

ウォーロックが確信をついたことを言うので、スバルはウォーロック、と焦った表情を見せる。

「?さっき……ああ、テレビ局の人ね?」

そういつた瞬間、スバルは左手のひじ上辺りに手を添えて、俯く。

ヨイリーは苦笑しながら、俯いたスバルの顔を覗きこんだ。

「…ごめんなさい、さっきの話、聞いてたんです…」

申し訳なさそうに俯いたスバルの頭を撫でて、ヨイリーは口を開く。  
「私は大丈夫よ。…スバルちゃんとウォーロックちゃんは…平気な

の？」

スバルはこくり、としぐさで、ウォーロックは『おう』と言葉で、返事を返した。

「…無理だけはしないで、二人とも。あなたたちを大事に思う人は、確かにいるの。辛いときには、頼りなさい」

「……はい」

『……ああ』

ね、と目で訴えられて、二人は頷く。

ヨイリーは淡く微笑み、スバルの背中を軽く叩いた。

「さ、早くお帰りなさい。スバルちゃんは、明日は学校？」

ヨイリーの言葉に、スバルははっ、とした表情になる。

「あ…明日は…学校の社会見学です」

『まあ、遠足、とかとも言うらしいがな』

「あらあら。どこに？」

ウォーロックのちゃかしにうるさい、といって、ヨイリーの質問に答えた。

「アマケンです」

『ま、結構行つてつけどな』

スバルは楽しそうに、ウォーロックはつまらなさそうに答えた。

「ふふ、それじゃあスバルちゃんは明日一日、宇宙関係に浸りっぱなしね？」

「はい！！この前擬似宇宙に酸素発生装置が、ちゃんといたって、天地さんが言つてたので凄く楽しみなんです！！」

とても生き生きした表情を見せるスバルに、ヨイリーは微笑んで先ほど言つた言葉を繰り返した。

「さあ、早くお帰りなさい。スバルちゃんはねぼすけさんだから、遅刻しちゃうわよ？」

「あゝヨイリー博士ひどい」

『どこがだ。お前俺が大声出さないと起きないだろ』

しばらくそつやって話した後、スバルとウォーロックはNAXAを後にした。

## 気持ち（前書き）

今回は、ラブラブモードを目指して…撃沈しちゃった感が満載です。

## 気持ち

「ロック。展望台によってくね!!」

帰り道、スバルは突然、ウォーロックに告げた。

しかし、そんなことを急に言われて、納得するウォーロックではない。

「んな…お前、ヨイリーに『帰る』とか『明日はアマケンに行く』とかいったら？それに俺は疲れてんだ!!」

「それはロックがつまらない喧嘩して走り回った結果じゃないか。展望台についたら僕のハンターV.Gで休んでれば良いよ。最近はずっと星を見れなかったから、見なくなっちゃって」

ウォーロックはスバルの横に実体化して叫ぶが、スバルはウォーロックの言葉をはねつけて、家への方向ではなく、展望台への方向へ、進路を向けた。

< > < > < >

電波変換をとくと、スバルの身体が電波世界から弾かれ、とん、と展望台の地面を踏んだ。

髪を風に揺らせて、スバルは空を見上げる。

少しずつ変わり行く星々が、そこにある。

スバルはただ、穏やかな表情で星空を眺めていた。

…十分ほどは、流石のウォーロックも邪魔できない空気を感じたらしく、黙っていた。…が、きっかり十分経つと。

「かーっ、良く飽きねえなあ…」

ウォーロックは、頭を掻きながら、本当に面倒そうに言った。

「お前、良く星空眺めてて飽きねえな。星って動きやしねえだろう

に」

「だって、飽きるわけないよ。それに星だって動いてないわけじゃないよ。日々…うん、誰も気づかないくらい少しずつ動いてく星は、ちよつとずつでも前に進んでるみたいで…勇気をもらえるんだ。ちよつとずつでも良いから、前に進め、って教えられてるみたいで

…」

ウォーロックの言葉に反論して、スバルは淡い微笑を口の端に乗せる。

「それに…」

「それに？」

スバルはウォーロックを見ながら、言葉を切った。

「……」

けれど、それきりスバルは黙り込んで空を見上げたままだった。

「……けっ、あーあ、つつまんねー…」

ウォーロックは苛立ちつつ、文句を言う。

しかしそれでも、ウォーロックは展望台の手すりに腰掛けて、スバルの天体観測に付き合うのだった。

RRRRR!!…RRRRR!!

不意に、スバルのハンターV Gが鳴った。流石にスバルも、ハンターV Gの通話機能の立てる音に気づく。

「オート電話だ」

「ツカサだぞー。早く出たほうが良いんじゃない？」

ちゃんとウィザードの仕事をこなし、ウォーロックは電話相手の名前を告げた。

「はい、もしもし」

「あ、こんばんは、スバルくん」

「こんばんは、ツカサくん」

しかし挨拶をして、ツカサは黙り込む。

「ツカサくん、どうしたの？」

スバルが問いかけると、ジエミニに『はつきりして言えよ』と追い討ちのように言われて、ツカサは小さく深呼吸をすると言葉を切り出した。

『スバルくん…あの、いきなりで悪いんだけど……展望台に立つてこと前提で電話して大丈夫…？』

「…うん、展望台にいるから…大丈夫だけど…」

あっさりとスバルの現在地を当てたツカサに、すごいなあ、とスバルは内心で思った。

『……えっと、テレビ…見たかな…？その……』

「……ああ、うん。ロックマンが味方が敵か、でしょ？」

スバルのあくまで朗らかさを保った声に、ツカサは内心で、感情を抑えてるんだろうな、と思った。

「……僕なら平気、だよ。ロックは平気かどうか知らないけど……」  
そういつてスバルは、ウォーロックを見る。

『俺はあんな奴らになんていわれよーが、関係ねえよ。関係あるのは、……お前や大吾たち、俺らのことを認知してるやつら位だ』

ウォーロックは肩をすくめ、鮮やかなまでに、ウォーロックは関係ない、と言い切った。

…しかし途中で喋るのを一瞬だけやめて、何かに気づいたような瞳でウェーブロードに視線を走らせたことに、スバルは気づかなかつた。

「…ロックも大丈夫みたいだよ」

スバルは一応聞こえているとは分かっている、そう言った。

『じゃあもう一回聞いて良い？』



ツカサの質問の意味が分からなかったが、とりあえずスバルはうんと頷く。

『……スバルくんは、大丈夫？』

「……っ……え？」

スバルは目を瞬かせて、反応がやや遅れる。

「……あ……ツカサくん、僕は大丈夫だよ」

スバルは力説するかのように、展望台の手すりに置いた手に、力をこめた。

「本当に？」

すずやかな声が聞こえた。

スバルが振り返るより早く、スバルの手の上に肩越しに、手が重ねられていた。

冷たいような、あったかいような不思議なぬくもり。

ひんやりとしているけれど、それは突き放すような冷たさではなく、あったかいけれど、傷つけられるような熱さではない。

「……ツカサ、くん……？」

「……くんは、スバルくん。……って、これさつきも言ったね」

苦笑するツカサは手をそのままに、スバルの隣に立った。

「……どうして、ここに……？」

「……なんとなく、かな？スバルくんが、泣いてる気がして……」

スバルは『泣いている？』と鸚鵡返しにそう言って、ぱちぱち、と目を瞬かせた。

途端。

ツウ……と、頬を伝って、ぱたり、と手の甲に落ちたそれは冷たい雫。けれど、空は満点の星で雨雲なんてものは、一つも見当たらない。

だとしたら。

「…やっぱり、泣いてたんだね」

「……え……あ……泣いて……な……」

…そういつてくれるツカサに、安心したのかもしれない。だから、  
自覚もなしに涙が溢れたのかもしれない。

「ないて……な……」

ふわり、と柔らかい匂いに包まれる。ついでとくん、と安心できる  
音が、耳に聞こえた。

抱きしめられたのだと、不意に気づいた。

…熱いものが、目の奥からこみ上げてくる。

「……………つく……………ふえ……………」

スバルは、ツカサの胸に顔を埋めて、涙を流した。

ツカサは、労わるように腕の中にいるスバルを抱きしめる。

「ホントウは…っ……………そんな風に…思われてたって……………思わなかつ  
た…んだ……………」

そんな思いは関係ない、ただただ、大事な人を守りたいと、願って  
戦っていた。けれど、そんな風に思われていたとは、思っていないか  
った。

…皆にとって、人を傷つける『敵』、と思われていたことなんて。

頼りない肩を抱きしめたツカサは、ただ、抱きしめていた。今のス  
バルには、言葉ではなく、安心できる何かが必要だと思ったツカサ  
は、ただ、抱きしめて、『大丈夫だよ』、と伝えるようにその額に、  
口づけた。

ふわり、と風が、二人の髪を、揺らして去っていった。

気が済むまで泣いたスバルは、ぐいつ、と涙を拭って、ツカサから離れた。

「……も、平気……」

目元が泣いていたせいで結構酷い状態だ。

ありがとう、とツカサに言うと、す、とツカサはスバルに手を差し出す。

「？」

その意味が分からずに、スバルはツカサを見上げた。

「……順番、ぐちゃぐちゃになっちゃったけど……」

そういつて、穏やかに微笑むツカサは、スバルに告げた。

「……僕と……ブラザーになつてくれませんか？」

そういつて、いったん区切り、言葉を継げた。

「……離れてても、心は一緒だつて、目に見える証を、君に」

「……いい、の？」

スバルが躊躇いがちに問いかけると、ツカサはこくり、と頷いた。

「……僕は君を信じてるよ。……君が繋いだ絆を切るはずがないつて。

それにね、僕の秘密を最初に知つたの、スバルくんなんだから。……

責任とつて、ブラザーになつてね？」

スバルの気が少しでも明るくなれば、という意味をこめての明るい

口調に、スバルは満面の笑みで、頷いた。

「……うん」

そうして二人は手を繋いで、空を見上げた。

……しかし、そんな時間は長くは続かず。

「……そういえば、ロックは？」

ふいに芽生えたらしい、スバルの素朴な疑問に、ああそれはね、とツカサは口を開き。

< > < > < >

『だーっ！！離せ、ジエミニー！！』

『KYのお前を放したら、いい雰囲気めちゃくちゃになる。却下だつての』

展望台からやや離れたウェーブロードを、二つの電波体は歩いていた。

『誰がKYだ！？』

ウォーロックの怒りを流しながら、ジエミニはさらり、と返答する。

『お前以外ない。つたく、スバルは苦労するな…』

…以前はウォーロックの敵…ひいては世界の敵だったというのに、現在はなにやら周りの妨害を阻止して、スバルとツカサ、二人の恋愛を取り持つことに必死なジエミニであった。

< > < > < >

それからしばらくして騒がしく展望台に戻ったウォーロックとジエミニは、スバルとツカサと電波変換して、それぞれの家路の帰途についた。

とん、とスバルのつま先は、家のベランダを踏んだ。

靴を脱ぎ、窓を開けて部屋に入ると既に、ミソラがスバルのベッドで寝ていた。

「……待っててくれたのかな？」

『じゃねえの？』

ロックと顔を見合わせて、遅めの入浴を済ませるべく、階下に降りていった。

## 邂逅（前書き）

今回はあのキャラたちの登場です

## 邂逅

人の身では立てない、不可視の道に、二つの人影があった。二人が見下ろすのは、いまだ月に見下ろされた町だった。眠りについた場所もあれば、いまだ騒がしい場所もある。

「……またこの世界か」  
面倒そうに、少年は眉間に皺を寄せて剣を肩に担ぐ。

「そんな事いわないっ！！ほら、行こうよ！！」  
楽しそうに笑う、銃を腰に下げた……いや、いささか胸の辺りに柔らかい曲線があるあたり、少女だ。見た目が少年のようで、少年だと誤解されやすい。

とにかく、その少女に腕を引かれて、少年は黒いコートを翻して歩き出した。

「それに、今度は僕らから会いに行こうよ、サバタ！！」  
楽しそうな声が、夢で聞こえた気がして、ぱちり、と目を開けたスバルはやはり右腕に重みを感じた。

『あら、起きた』

『起こそうかと思ってたのによ』

上から覗き込むのは、ウォーロックと、ハープ。

「……おはよう、ロック、ハープ……」

もぞもぞ動いてから、スバルは身体を起こそうとして、昨日同様後ろに倒れこんだ。

ふわり、と遅れて自身の髪が、肩にかかる、スバルは口を開いた。  
「……ねえ、ハープ」

「何かしら、スバル？」

天井を見つめながら、ベッドの端にウォーロックと一緒に浮かんでいるであろう、こと座のFM星人の名前を呼んで、スバルは言いたいことを、言った。

「…ミソラちゃん、自分の部屋あるのに…なんで、僕のところ」

「スバルの傍が居心地いいんじゃないかしら？」

「そうなの？」

首をめぐらせて、ハーブを視界に捕らえる。ハーブは淡く微笑んで、言葉を繋げた。

「一人、つてモノは寂しいものなの。あなたも知っているんじゃないのかしら？」

「…そうだね」

父さんがいなくなったとき、母さんがいたから、一人ではなかったけれど、心は酷く寂しかった。

大事な人を失うことほど、心が寂しくなるものはそうそうないだろう。

「…つてじゃあ…何で僕は腕を抱きしめられてるの？」

「ミソラ、一人暮らしのときは抱き枕を抱いて寝てたから…多分、その癖ね」

そして、スバルが動けない理由を訊ねると、癖の一言で済まされたのだった。

< > < > < >

そして。

「天地研究所へ、ようこそ！」

天地研究所…通称、アマケン。

その所長である天地守の声に迎えられて、コタマ中学一年一同は、

社会見学と遠足を兼ね、天地研究所の玄関脇にクラスごとに集まって、座っていた。

「今から入場券を配ります。一人一枚ずつ…っと、スバルくんとかなくん、ゴン太くんとキザマロくんは以前に渡したパスは持つてきてるかい？」

それぞれパスを上を持ち上げて天地に見せる。

「なら…スバルくんたちは入場券を取らなくても大丈夫だよ」

スバルやルナは、天地に特別にパスをもらっているの、他の皆のように入場券は配られなかった。後ろに並ぶ女子は、入場券を受け取るさいに、こういった。

「何度もここには来てるんだね、スバルちゃんたちって」

「うん」

頷いて、スバルは前を向く。実際何度もここに来たのは事実だ。…中の展示物を見に来たのが、理由でないときもあったが。

「では、中にどうぞ」

天地の声で、一同は建物の中に入った。

そのとき上のほうで、会話が交わされていた。

「ねえねえ、サバタ。スバルくんたち、ここにいるかな？」

楽しそうに不可視の道を歩く少年は、後ろを歩く少年…サバタを振り返る。

「知らん。そもそもなんでここに来ようと思ったんだお前は」

サバタの問いに、前を歩く少年は立ち止まり首を傾げて、一言。

「……勘…？」

「何故そこでハテナがつく!？」

パタパタ赤い翼を羽ばたかせていた猫に、少年は手で頬を叩かれる。



ぶに、とずいぶん愛らしい音がした。

「まあ…ジャンゴの勘を信じよう」

なだめるかのように、ひまわりに似たしゃべる生き物は、そういつてまとめたのだった。あながち少年…ジャンゴの勘は全く外れていなかったと、後々分かる一同であった。

< > < > < >

それぞれ思い思いに説明文を読みながら、展示物を眺めてゆく。

あるものは真面目に文をまとめる。

あるものは友達と談笑しつつ。

あるものはブラックホールに見入る。

あるものは隕石に見入る。

スバルはツカサと一緒に、展示物を見ていた。ちなみに後ろから、ミソラとケープがついてくる。

しかし、二人ともそれには気づかない。…いや、ツカサは気づいているが、何も言わないの間違いだった。

「スバルくん楽しそうだね」

まっすぐに星の展示を眺めていたスバルに、ツカサは声をかけた。こちらを振りかえったスバルの頬は、やや紅潮していた。とても楽しいのだろう。目も生き生きしている。

「うん！！ブラックホールとか…久々に見たんだけど凄いなーって思ってる」

最近までウイルス相手で済んでただけで、と呟いて。

「そんな暇がちょっと、あんまり取れなかったから…」  
そういつてスバルは苦笑する。

ツカサもふふ、と楽しそうに微笑む。

「そうだね。じゃあ、ゆつくり見て回ろう?」  
スバルはこくり、とツカサの言葉に頷いて、再び歩き出した。

ちなみにその際、後ろにいた二人はツカサに目で『ついてこないでね』と、告げられてそこに立ちすくむ羽目になった。  
理由は至極簡単。

……表情はとてものにこにこしていたが、穏やかそうに見える『目』だけが、『ついてこないでね』と告げている『目』だけが、笑っておらず、氷点下を下回る冷たさであった。

そして、その視線を送られた二人はというと。

「…ねえ、ケープくん」

「はい、何でしょうか?」

ミソラは隣に立っている少年に、名前を呼びかける。

「……置いてかれたし……一緒に回ろうか」

「……それもそうですね」

二人は頷きあつて、スバルとツカサが消えた方向ではなく、別の方向へ歩き出した。

< > < > < >

「うつわぁー、すごい!!」

「こら、落ち着けジャンゴ」

ハイテンションでスバルたちが眺めている展示物を、見下ろすジャンゴを、ひまわりのような生き物がなだめる。鼻の辺りというか、口の辺りというか、とにかく、そこら辺がタツノオトシゴのようである。

後ろでサバタと、羽根の生えた猫があきれるように見守っていた。

「だって、オテenko!!!スバルくんたちの世界ってこんなにすごい

ものがいっぱいあるんだね！！ところで、スバルくんはどこにいるのかな？」

ひまわりにオテンコ、と呼んだジャンゴはぴょんぴょん飛び跳ねる。スバルはジャンゴたちのすぐ下にいるのだが、普段のスバルの姿など知る由もないので、気づいていない。

あきれたようにサバタはため息をついて、ブラックホールが生み出されている装置の方へ顔を背ける。

「めんどくさそうだな、サバタ」

にやにやと楽しそうに、翼のある黒猫はサバタを覗き込む。

「……お前は楽しそうだな、ネロ」

「まあね。俺らはこの前、ついてこれなかったし。しかし、本当にすごい技術だな……」

そういつてサバタの肩にトン、とのつた翼のある黒猫…ネロは辺りを見回した。

「それに俺らみたいにパートナーがいるみたいだな」

ネロの言うとおりである。ここにいる一同の後ろや隣に、ふわふわといういろいろなものが浮かんでいた。動物の形をしたものが多い。

そして、会話を途切れさせたサバタたちは、ジャンゴたちの会話を聞くともなしに聞いていた。

「それについては同意だが…そんなにはしゃいだら落ち……」

そんな声を背中に聞いていたサバタの耳に、ずる、といやな音が聞こえた。

「うわあー！！」

「ジャンゴー！！」

オテンコの声に、ぱっ、とサバタとネロが振り返ると、ジャンゴが眼下の少女に向けて落ちていくのが見えた。

< > < > < >

つまらなさそうに後ろをふわふわ浮かんでいたウォーロックは、急にぱつ、と顔を上げた。

『！！スバルあぶねえ！！』

「え？うわあっ！！」

ウォーロックの叫び声はやや遅く、星のことをメモにまとめていたスバルは顔を上げると同時、背中に衝撃を感じて前に倒れた。

「スバルくん！！」

ツカサが驚いてスバルを見下ろす。

「あいつててて……」

「いたたた……いったい何が落ちて……」

来た、とまではスバルは言い切れなかった。上に乗っている人影を見て、しばらく言葉を失ったからである。

つんつんした髪にゴーグル。腰に布を巻いて、それをベルトで絞めて、だぼつ、としたズボンをはいていた。顔立ちはかわいい、といわれる感じで、頬にはそれぞれ白の絆創膏を張っていた。

上に一枚だけ着ているノースリーブの胸の辺りが、ふつくらと柔らかい曲線を微妙に描いてるので女の子に違いないだろう。そして、首にはかなり目立つ赤のマフラー。

「……………ジャンゴ……くん？」

ちゃ、と音がしてスバルが少女に声をかけると、強かに打ったらしい鼻を押さえて、スバルを見た。

「え？君誰？」

スバルをじー、と見るも、ジャンゴは首をひねるのみ。

「……あ、そっか、こっちの姿は知らないんだっけ……ロックだったらわか、る……」

ウォーロックを見上げようとあたりに視線を滑らせて、辺りに視線が行った。

辺りを見回してようやく気がつく。

全員がこちらを凝視したまま固まっている。ツカサも啞然、とこちらを見下ろしている。

さらに追い討ちのように。

「大丈夫か、ジャンゴ!？」

ざっ、とひまわりのような生き物と、羽根の生えた猫と共に、巨大な剣を携えた、長いコートを翻し、黒に赤のラインが走った服を着た、左目に眼帯をつけた薄紫色の髪の少年が、とん、と軽やかに降り立った。

「まったくじだなー」

「むー」

頬を膨らませて、ジャンゴはすねたような表情をする。

スバルは『うわああああああ』と、それはもう内心で、声にならない叫びを上げていた。

悪化した、サバタとオテニコとネロが来て、確実に悪化した、と。

この世界で『ボクらの太陽』というアニメを知らない人は、ヤシブデパートに巨大なポスターがどん、と張ってあるくらいなのだから、まずいないだろう。

とりあえず、誰かが騒ぎ出す前に、と。

「ジャンゴ、サバタ、こっち!！」

そういつて出口に駆け出し、ジャンゴとサバタの間をすり抜けるついで、天地に叫ぶ。

「天地さん、研究室借ります!！」

「はい！」

スバルの勢いに押され、天地が返事を返すよりも早く、スバルはジヤンゴたちと共に姿を消していた。

番外編 01 (前書き)

今回は本編をお休みします。

## 番外編 01

『Thanks 10000Hit!!』

星河スバル（以下：ス）「こんにちはー！！今回は本編をお休みして、10000Hit、ってことで話を進めるのは『流星のロックマン』主人公こと、星河スバルと！！」

ロックマンエグゼ（以下：E）「はじめまして！！『ロックマンエグゼ』主人公のパートナー、ロックマンエグゼです」

ス「：何でロックマンエグゼが出てきてるの？」

E「『太陽の姫』作者・月峰夕こと作者がね、なにやら

『DSジャンゴ達出したんだし、ロックマンエグゼ達だそうかなあ  
：？』

とか、軽くふざけたようなこと抜かしてて。本人としてはほんとに出す気らしいんだ」

ス「何その軽いノリ!?!」

E「とりあえず、多分二章になつてかららしいんだ。：それすらいつになるか、つてのが不明なんだけど。でも、10000行ったからとりあえずゲスト、ってことでらしいよ」

ス「え?じゃあ、もし出番きたら今戦ってる相手と一緒に戦ってくれるの?」

E「どうだろう…。そこまで行くにしたって、作者の気分&amp;」



作者の現状 & amp ; パソコンの状況で決まるみたいだし」

ス「あー…パソコンがかなりやばいんだっけ。二分も立たないうちにネットが繋がなくなったりとか…書いてる途中で画面がやばくなったりだとか…確か、画面左半分が白くなったり黒くなったり…」

E「文章は別のパソコンで書いてるから、文章に関しては、被害はないんだけど…」

ス「…けど？」

E「…使ってるUSBメモリも相当接続が悪くて…かといって他のメモリでやろうとしたら…そのメモリの方が危ないっていう…」

ス「何それ！？ていうか、素直に新しいの買おうよ!!」

E「…買いに行きたいのはやまやまらしいんだけど…でもね、作者が住んでるの…宮崎県の…かなり口蹄疫被害が酷い地区なんだ」

ス「…そうだね…確かに買いにいけないや…」

E「宮崎市方面は学校以外では全く…隣町の電気ショップとか行けないんだって。しかも近所の方々全てが畜産業だから余計に。あと、近くに住んでる親戚が」

ス「…さびしいとか呟いてたの、そういう理由だったんだ…」

E「うん、行きがけに親戚の繁殖牛農家さん（せりに出すため、子牛が生まれてからしばらく、子牛を育てる農家さん）の、小屋の前通るんだけど、何もいなくなっちゃったからね…シヨックで泣

いたみたい」

ス「……そうなんだ……」

E「うん。幼稚園行く前から、そこにいるのが当たり前だったから……って。しかも今回……産まれてきた子牛の名前……女の子ね。……とりあえずどっちの性別が産まれても大丈夫なように『ヒカリ』、って頼まれて付けたんだけど……その後すぐ……その牛小屋で出ちゃって……辛いから……結局一回も見なかったって」

ス「天国で元気にしてるといいね、ヒカリちゃん。お母さんと一緒に」

E「そうだね。それはともかくも……いや、そうしちゃいけないだけどき、絶対スルーしちゃいけない問題なんだけど……きりがなくなりそうだし……話を戻そうよ」

ス「……とりあえず、パソコンも、ネットも、メモリの調子も絶不調なのは分かった。……となると……最終手段で……時代錯誤かもしれないフロッピー……出てきそうな勢いがするのは気のせい？」

E「何で分かったの!？」

ス「嘘、本当にそれしかないの!？」

E「……うん、ほんとにそれしかないって……まあ、本当にダメだったら携帯でちまちまやってくって」

ス「……良くやってこれたよね、これで……」

< > < > < >

ス「…とまあ、暗い話はこれくらいにして…！というか、する…ていうか、させて…！お願いだから…！せめてこのお話の中では忘れさせて…！」

E「そうだよね、せっかくの10000Hit。投稿しはじめてそんなに時間経ってないのに…暗い話だけだと、この小説を見てくれる人に失礼だよ…！」

ス「…よし、じゃあ、本題を言おうよ、ロックマン」

E「うん…！」

ス・E「セーの…！」

< > < > < >

ス「公式じゃ男の子、って僕を女の子にして、ツカサくと両思いになる、という設定上…見られなくてもいいから書きたい、って思ったらいいんだけど…これだけのHitは、ひとえに皆さんのおかげです」

E「僕ら『二百年前組』こと、『ロックマンエグゼ』一同の順番は、まだまだ先になるみたいだけど、それでもできれば呆れずお付き合ってください」

ス「あ、言い忘れるところだった。…えーと、僕が主人公を勤める『流星のロックマン』、ブラザーバンドでかわりのあった『ボクの太陽DS』みたいに、『ロックマンエグゼ』の主人公を女の子

にはしません」

E「流石にあの口調でやれ、って言われも無理だそうです。一人称が『俺』だから」

ス「DSジャンゴは攻略本で、

『ジャンゴは可愛いから』本当は女の子』説がささやかれているとかいないとか』  
と書かれていたことと、一人称が『僕』だったから何とかやれただけです」

E「そんなこんなで、拙い文章、幼稚な表現でありながらも、始めたこの小説ですが…」

ス「完結まで、お付き合いよろしくお願いします!!」

『Thanks you 10000 Hit!!』

月峰 夕

## 再会理由と緊急事態（前書き）

…話が今回、かなりわかりにくいかもです。

## 再会理由と緊急事態

ジャンゴとサバタの手を器用に右手で掴み走ってゆく、スバルの背中を、啞然と見送っていた一同だったが。

「……………今のつて……………」

ルナがぼそり、と呟いた。

「……………」

「……………」

きっかり、三拍黙った後、盛大に。

「きゃああああああああああああつ！！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおつ！！！」

楽しそうな悲鳴を上げて、男女関係なしにその背中を追いかけた。

そして、追っかけてくる一同が追いつくよりも早く、スバルは職員用通路に滑り込み、社員章をエレベーターのボタンの少し下の位置の、カードリーダーに通し、エレベーターが開くのを待ち飛び乗って。

「待ってスバルくん！！！」

そう叫ぶツカサが扉が閉まる寸前に、エレベーターの中に滑り込み、完全に扉が閉まると同時、バシイン、と何かがぶつかる音がした。ツカサは床に倒れて、息をついていた。

動き出すエレベーターの中で、しばらく無言で黙っていた一同だが。……はあ〜」

ずるずると、スバルは床にへたり込んだ。

「大丈夫、スバルくん？」

「た、多分……………ロックマンになって戦うときよりも、疲れた感じは

あるけど……」

立ち上がったツカサの手を借りて、スバルはふらふら立ち上がる。

「…それで、お前たちは誰だ？」

腕を組んだサバタは、不機嫌そうにこちらを睨み言った。

「本来のこの姿は二人とも知らないから仕方ないけど…もうひとつの姿のとき、ライマーって言う敵相手に、一緒に戦ったよね」

スバルはそういつて柔らかく微笑み、ニュースマールに添付されてきたロツクマンの姿を、ハンターV Gに映してジャンゴに見せた。

「…え？じゃあ、今のもスバルくん、これもスバルくん？」

「…いささかジャンゴの言葉は、要領を得なかったが、何が言いたいかだけは分かった。」

「うん。この姿のときは星河スバル。こっちの姿は、シューティングスター・ロツクマンだよ。あつ、それでね、こちらは双葉ツカサくん。僕と同じ力を持つてるんだ」

ツカサは話をふられて、柔らかい笑みを浮かべたまま、

「はじめまして、僕は双葉ツカサ。スバルくんと同じでもう一つの姿を持つてるんだ。そのときはジェミニ・スパークって名前だよ」

「はじめまして、ツカサくん!!」

ジャンゴも、ツカサと同じように楽しそうに笑う。

「それにしても……二つの名前があゝ。なんかかつこいいかも!!」

「しかし、間違えそうではあるな……」

「確かに。面倒くさいと思うぞ」

そういつたジャンゴの声に返答を返し、ひょこん、とひまわりの生き物と、翼の生えた黒猫が顔を覗かせた。

「うわっ!?!びっくりしたー…二人のウィザード!?!」

「う…ういざーど？」

スバルはようやく、その不思議な生き物がいたことを思い出し、スバルの言った『ウィザード』の言葉に、ジャンゴは首を傾げて何それ、と訊ねる。

「僕らのパートナーで、電波体のことかな。僕のパートナーは今、隣にいるウォーロックだよ。ツカサくんはジェミニ」

『よろしうな、ジャンゴ、サバタ』

『よろしく、ジャンゴ、サバタ』

「よろしくね、ウォーロック、ジェミニ」

ジャンゴだけウォーロックとジェミニの、挨拶に返事を返して、今度は自分達の傍にいるパートナーについて口を開く。

「パートナーはあってるけど、オテンコたちは星霊獣だよ」

「星霊獣？」

今度はスバルが首を傾げる番だった。

「僕らの住む、星のあらゆる自然の意思が、具現化した精霊の事。

オテンコはボクのパートナーで、光の星霊獣。ネロはサバタのパートナーで、闇の星霊獣だよ」

スバルはその話を頭の中で纏めようとしたが…

チン。

「…あ、ついた」

やけに軽やかな音を立てて、エレベーターが開いた。

「二人と…オテンコとネロもついてきて」

スバルとツカサはエレベーターの外を確認し、歩き出す。そうして、ジャンゴとサバタ、オテンコとネロを手招く。

「うん！！」

ジャンゴとツカサはスバルの隣に並んで歩きながら頷き、サバタはやや遅れるようにしてついてきた。ウォーロックとジェミニは、ス



バルのやや後ろ、オテンコはジャンゴの横、ネロはサバタの肩、とそれぞれきちんとしていく。

入り組んだ廊下を歩いて、途中職員の人とすれ違う、そのたびにぎよつ、とした表情で見られたが、しばらくして目的である、天地の研究室にたどり着いた。

「…うん、ここだ。皆、中に入って」

ツカサ、ジェミニ、ジャンゴ、オテンコ、サバタ、ネロ、スバル、ウォーロックという順番に部屋に入り、自動ドアが閉まる。

天地の研究室には巨大なロケットが置いてあり、やはり巨大なモニターがあった。

「…うわあ、機械がいっぱい色々あるなあ…」

ジャンゴは物珍しげに、辺りを見回した。

「あ、椅子はともかくもそれ以外には絶対触らないでね。壊されたら責任が持てないから」

椅子を人数分（ウォーロックとジェミニは除外）、ツカサと共に引っ張ってきながら、ロケットに手を伸ばしかけたジャンゴに、そういった。

「だそうだ、あきらめるジャンゴ」

「…どうせすぐ物を壊しちゃうよーだ！」

サバタが釘を刺すように言うと、すねたようにジャンゴはそっぽを向いた。

スバルは苦笑しながら、椅子を二人の目の前に置く。

「二人とも、座ったら？あ、はいツカサくん」

「ありがとう、スバルくん」

端から二人分の椅子を引っ張ってきて、ツカサに渡し、スバルも椅子に座って。

スバルとジャンゴが、ツカサとサバタが、向かい合うような形で座っていた。

ちなみにスバルとツカサ、ジャンゴとサバタが隣同士である。

それから少し離れた位置に椅子を引っ張ってある、オテンコとネロ、ウォーロックとジェミニは、気楽そうにしていた。

しばらくそのまま黙っていたが。

「…それで、どうして二人ともまたこの世界に？」

スバルがとりあえず、話を切り出した。

「あー、それがね……」

困ったように、ジャンゴは苦笑する。かわりに、サバタの眉間に盛大に皺がよった。

「理由を話すと、こうなんだ……」

そういったジャンゴは、苦笑していた。

< > < > < >

確か、この始まりはお昼ご飯を取っていたとき、そのときに持ちかけられた話。

「…『太陽のかけら』？」

もぐもぐとマスターお手製のおいしいサンドイッチを、頬張るジャンゴの横で、サバタが顔をしかめて繰り返した。

その言葉を繰り返された相手の頭には、おっきなうさみみ。

「そや、『太陽のかけら』や」

に、と楽しそうに笑う相手の言葉は関西弁。

「『太陽のかけら』とは、何だ」

サバタが、余計なことを聞いて話を止めないように、と心がけてでもいるかのように、言葉少なめである。…いつも言葉は少ないが、いつも以上な気がしてならない。

「ウチらひまわり娘の、宝物、みたいな感じやなあ」

ごつくん、とサンドイッチの一つ目を食べ終え、二つ目を手に持ったところで、ジャンゴがサバタの肩越しに、話を持ちかけた相手を、嫌な予感を感じながら、見た。

サバタも、嫌な予感を感じているらしく、口を開けない模様。

傍をふよふよ浮かびつつ、移動していたオテンコモ、カウンターに置かれた平皿の中に、注がれたミルクを飲んでいたネロも、ぴたり、とその動作をとめていた。

けれど、誰かが口を開かねば、話はまったく進まない、というその状況の中で、時間だけが確実に流れていきそうになったところだ。

「…それがどうしたの、アリス？」

…ジャンゴが、やっと口を開くのだった。

そうして、『アリス』と呼ばれた、頭にうさみみをつけた少女は、本当に楽しそうに笑った。

「つまりあんたら、ちょっと異世界に行ってきた、というこつちゃ…ものすごく、簡単に言われた。中身はかなりぶっ飛んだ内容だが、それでも、『異世界』を否定しない二人は、二年ほど前に行ったことがある。

「ま、善は急げ、ってことで今から準備するさかい、いつてきてほしいんや。あ、お礼はちゃんとするで。それまでにちゃんと準備しといてやー」

「え？え？」

「ちよつと待て、アリス」

二つ目のサンドイッチを持ったまま、硬直するジャンゴの横で、ネロが急いで名前を呼ぶが、ひまわり娘こと、アリスは既に姿を消していた。

< > < > < >

「……ってワケで、夕方ぐらいにこっちに送られたんだ。問答無用で」

「……」  
ツカサとスバル、ウォーロックとジェミニは同時に思った。

アリスって人……中々話を聞きゃあしないんだ、と。しかし、うさみみってなに？

……しかし、そんなことを考えてる時ではなく、ジャンゴの話の続きを聞いた。サバタは腕を組んで俯いている。

「でもこっちじゃ夜中だったから、『太陽のかけら』探しは後回し。それでね、この世界見覚えあるなーって思ってたら、スバルくんがいる世界だな、って。だから、とりあえずスバルくん、会いに行こうかと思ってここに来たんだ」

「……しかし、ジャンゴの勘、大当たりだな……」

なにげにスバルたちの話を聞いていた、オテンコがぼそり、と呟いたそれは、誰にも届かなかったが、サバタとネロも同意見であった。

そして、きよとん、としているスバルの顔を見て、ジャンゴは言葉を繋いだ。

「…あの…迷惑…だったかな？」

「え？あ、全然！！むしろあえて嬉しいぐらい！！…嬉しいぐらいなんだけど…なんで上から降ってきたの？」

上から降ってくる、それは、誰もが気になるところ。

「…見たことないものばかりだから、はしやぎすぎてウェーブロードから足を滑らせたんだよ」

横の方から、毛づくろいをしているネロから説明が入った。

「へ、へえ…」

スバルはなんと返していいやら分からずに、いささか投げやりすぎる返答を返した。

「ところでジャンゴくん、『太陽のかけら』っていうのは、なんなの？」

『あ、俺も気になってた』

ツカサが逸れていた話題を自然に修正すると、ジェミニもそれに乗ってきた。

「うん、あの後説明を聞いたらね。『太陽のお姫様』に渡さなきゃいけない大事なものだって」

「！！！」

『！？』

スバルとツカサの顔が自然と強張る。

ウォーロックとジェミニもそれを顔に出さないだけで、反応は同じである。

「『ソルライト・ルナ』、って名前の石、って言ってたけど」

グローブに包まれた指先で、頬に指を当てて名前を記憶から手繰っ

たジャンゴは、そう言った。

けれど、それスバルとツカサ、二人とも聞いてなかった。

「……それで、お前たちはそれを知ってるのか」

腕と足を組んで座っていたサバタは、眼帯に隠された左目からも怖い雰囲気がいじみ出る、鋭い眼差しをこちらに向けた。

「え？スバルくんたち、『ソルライト・ルナ』知ってるの!？」

「ううん、全然。だけど……」

ジャンゴの期待にこたえられないことに申し訳なく思いつつ、スバルは否、と返した。

その先はツカサが言葉を続けた。

「……ただ…スバルくん、ここしばらく『太陽の姫』ってことで襲撃を受けてるんだ。詳しい訳は知らないんだけど…必要なんだって」ツカサの言葉を聞きながら、携帯を引つ張り出したサバタは、急にどこかへかけた。

「…ああ、アリスか。『太陽の姫』らしき人物を見つけた。何か特徴は?……」

何か言葉を交わしていたサバタだったが、不意に、スバルへ近寄ると、スバルの胸の赤いリボンが解いて、がば、と白のブラウスが開いた。

白い胸当てに包まれた目に鮮やかな真っ白な肌の胸元が、露出する。しかしそれを気にせず、目的のものを見つけたようで軽く嘆息し、アリスに報告しようとして。

「…アリ……」

「……っ、きやあああああああああああ

っ!

」!

…女の子の悲鳴がアマケンに響き渡った後、鋭い平手の音が聞こえた。

< < < <

「……サバタサバタ。僕は宿で一緒だし、慣れてるからいいよ。けどね、スバルくんにはいくらなんでも暴挙すぎるよ」

ジャンゴは、頬に平手の痕が残ったサバタに、呆れたようにそう言った。

隣でオテンコが盛大に何度も頷き、ネロは大爆笑していた。

あの後すぐ、サバタへ蹴りをかましてくれた、ツカサ（中はヒカル）にすぐさま抱きついて、ぐずった。その後はその声を聞きつけてくれた天地とミソラが部屋に飛び込んできて、ことのあらましを話すこととなった。

「で、何で急にこんなことをしたんだい？」

「胸に痣があるかどうかを確認しろ、といわれたんだ」

頬に平手の痕がありありと残るサバタは、むすっ、とした表情で返答する。

「…痣があるかどうか、確認するように言われたただけだ」  
不機嫌極まりない声で、サバタはそういうと腕を組んだ。

『痣？』

一同の声は綺麗に揃った。もちろん、一同というのはサバタ以外でこの場にいる一同だ。

スバルは左腕のことを隠しているの、右腕でもぞもぞと、服のボタンを外そうとするがうまく行かずに、ミソラに外してもらった。すると、右胸の肩に近い辺り、そこに奇妙な文字のような、紋章のような、そういうものが浮かんでいた。

「…これ、刺青じゃないな…」

一応天地は断りを入れてそれに触れた。

傷跡みたいに腫れて、膨らんでいるわけでもなく。

かと言つて、裂傷のようにえぐれて、へこんでいるわけでもなく。一言で言うなら、昔からそこにあつたように平らだった。

「…昨日は、なかつたんだけど…」

「…じゃあ、何かがきつかけで、浮かんだ、つてこと…かな？」  
ミソラがスバルのボタンを留めながら訊ねる。

『…じゃあ、何でだ？』

ウォーロックは首を傾げ、ジェミニとハーブも、同じように首を傾げている。…ハーブに首があるかどうかは、やや不明だが。しかし、気持的にはそういう反応だろう。

「…経過を見ていくしかないな…」

「はい」

天地の言葉に、スバルはリボンをきゅ、とミソラにしめて貰いながら、頷いた。

「それじゃ、スバルくん、ツカサくん、社会見学に戻ろうよ」

ミソラに腕を引かれて、スバルはそうだけど、と返す。ジャンゴたちを、放つて行くわけにも行かないのだ。

スバルとしては、ジャンゴたちの『ソルライト・ルナ』探しを、手伝いたい。が、学校の行事があるのだ。

「そういえば、ジャンゴくとサバタくんはウェーブロードに立てるんだよね？」

天地はふと、何かを思いついたかのように、二人を振り返った。

「はい」

「ああ」



二人揃ってこくり、と頷く。

「だったら、スバルくんたちのハンターV.Gに、入っていればいいんじゃないかな？夜の宿代わりになるだろうし、情報を集めるときも姿を晒さずに調べられるよ」

天地の言葉に、ジャンゴたちはきよんとする。確かに一理あるのだが…

それを実行するためには、スバルたちの次の言葉にかかっている。

「僕はいいよ」

「あ、僕も」

「私もいいわよ」

「やったー！！」

スバルたちは揃って、いい、と言うので、ジャンゴは嬉しそうにぴよんぴよんはねる。

「あの…でもさ、流石に個人情報とか入ってるから…サバタにはツカサくんのハンターV.Gに入ってほしいんだけど…見られたくないし…それに…」

スバルは途中で言葉を途切れさせるが、一同にはその理由が良く分かった。

…さっきのがどうやら、トラウマになったようである。

ツカサはサバタに向き直り、ずい、と腕を突き出す。

「…じゃあ、サバタは僕のハンターV.G、ってことで」

スバルもずい、とジャンゴに腕を差し出した。

「はい、じゃあどうぞ」

二人が触れると、二人の姿は掻き消えて、代わりにハンターV.Gの中へ消えた。

「じゃあ私は、オテンコとネロ、どうぞ」  
オテンコがぺちり、ネロがペタリ、とミソラのハンターV.Gに触れる。瞬間、その姿は消え、代わりにその中に現れる。

「居心地はどう?」

『すっごくいいよー。広いし、なんか気持ちいいし、落ち着く〜』

『確かにな』

『ほんとだ、広い…』

『羽根がのびのび伸ばせるぜー』

ハンターV.Gの中はスバルたちが思っていたよりも、良好だったようである。

これでとりあえず一時的には、ジャンゴたちの拠点、に関する心配はしなくていいだろう。

社会見学に戻りたいのは山々だが、問題が。

「…しかし…社会見学を続けるにも、スバルくんは不便があるんじゃないか?」

「………ですよね」

なにせ、みんなの目の前で、ジャンゴとサバタを引っ張って逃げただから。

どうしようかな、と悩んでいると。

RRRRR!!…RRRRR!!

突然、スバルのハンターV.Gになった。スバルは、ウィザードであるウォーロックに問いかけた。

「誰からなの、ロック?」

『んあ?…珍しいな、大吾からだぜ』

スバルが訊ねると、いささか間の抜けたような声を出して、電話を

かけてきた人物の名を告げる。

「…父さんから？とりあえず、出ないと…」  
スバルが通話ボタンをオンにする。

「スバルか？」

「父さん、どうしたの急に…」

スバルの電話越しに、何故か張り詰めたような、大吾の雰囲気伝わってきた。

「…スバル、今何か話してて不都合とかないか？周りに関係者以外で誰かいたりするか？」

「うん、大丈夫だよ。天地さんの研究室にいるから。傍に居るのはツカサさんと、ミソラちゃん、ロックとジェミニにハーブ、それに天地さんだよ」

ほっ、と大吾が息を継ぐのが聞こえてきた。

「そうか、なら…今から来てくれないか？」

「…どこに？」

スバルが問いかけると、大吾はいささか疲労したような声で。

「WAXAの記者会見場」

と、言った。

スバル、ツカサ、ミソラ、天地、ウォーロック、ジェミニ、ハーブは、無言で固まった。

「…スバルくん？どうしたの？」

ハンターV.Gの画面越しに、首を傾げるジャンゴが見える。ジャンゴになんでもない、と返して。

「…父さん。先に謝っておくね。…何急に言ってるの、まだ学校行事が」

「…本当はもつと先の予定だったが…昨日、手荒な取材方法で、乗り込んできたテレビ局があっただね…」

スバルの言葉（愚痴）を途中でさえぎり、大吾は電話した理由を告げる。…というと、昨日のアレか。

「…もしかして昨日ヨイリー博士のところに来たアレ？」

『…ああ、そこがロックマンを散々に言っているね。…シドウくんが危ない』

…大吾のその一言に、危ない!!怒る、の数式が、遠い目になったスバルたちの中で、何故か自動に出来上がった。ともかく、と大吾が言葉を継いで。

『シドウくんに、暴れられても困る。それを防ぐ意味でも、来てほしいんだ。緊急事態だ、学校は長官に頼めばどうとでもしてもら…シドウくん落ち着け!!クインティアさん、止めてくれ!!』

大吾の言葉に被るようにして、破壊音が聞こえた。すぐにザバツと音が聞こえた。

『…と、とにかくすぐ来てくれ!!』

慌てた大吾はそう締めくくって、ぶつつ、と通話が途絶えた。

「……………」

スバルとツカサとミソラは無言で顔を見合わせて、ミソラは。

「…ジャック君、呼んでくるわ。先に行つてて、二人とも」

「うん、お願い。…先に行つてるね。…暁さんの暴走が凄いいただし…」

一同は頷きあい、天地に見守られてアマケンから、WAXAに急いだ。

ウェーブロードをかけながら、スバルとツカサは内心で焦っていたりする。

シドウを抑えきれるかどうかは、クインティアの腕にかかっているが、そこは多分問題ではない。

…問題なのは、シドウが記者会見の場で怒り出すことだ。

『あいつが敵だと、ふざけたこというな!!』

と、かなり盛大に怒っていきそうな気がする。

「…暁さん、いくらなんでも記者会見場で暴れてないよね？」

『行ってみないとわからねえぞ、それは』

スバルの心配そうな声に、ウォーロックは真剣みを帯びた声で呟いた。

「とにかく、急がないとね!!」

「急に越したことはねえだろ。そーいや、お前らもついてくるのか？」

ツカサの言葉にその通りだと返しながら、ヒカルはスバルの右手を掴んだジャンゴと、ヒカルに遅れずにかけてくる、サバタを振り返った。

そして、それぞれのパートナーの肩にしがみついた、オテンコとネロ。

「スバルくんが困ってるから、助けたいなって思ってた」

「…この馬鹿は言い出したら聞かないから、しかたないだろう」

むう、と、ジャンゴはサバタを睨むが、効果は皆無のようである。

「まあ、そういうことだ」

「そーそー。いつものこった。気にしなくていいぜ」

オテンコとネロが必死に肩にしがみついているが、口調は軽い。…オテンコの花びらの向きが全て後ろ向きなのと、ネロの翼が伸びきっているところからすると、風圧は凄いようである。

が…自力で駆けるサバタはともかくも、スバルの右手に掴まったジャンゴは平気そうである。

「本当にいいのかなあ…」

「その場に着いたら、真実を告げる姿を見せてもらっぞ」

スバルはサバタとジャンゴを交互に見て、頷いたジャンゴを見て、前を睨むように目を細くさせた。

「……分かった。ジャンゴ君、しっかり掴まって。ツカサ君、ヒカル、サバタ、オテンコ、ネロ…飛ばすよ!!」

「ああ!!」

「おう!!」

「ふん…」

スバルの声に応じて、ウェーブロードをかける速さが、上がった。

< > < > < >

所かわり、WAXA会議室。

「はーなーせー!!」

「離すわないでしょ!!」

アシッド・エース状態のシドウを、同じくクイーン・ヴァルゴ状態のクインティアが杖を、シドウの体の前に回し、必死にシドウが記者会見場に取り込まないよう、押さえていた。

『…アシッド、アレは止められないわけ?』  
傍で見ていたヴァルゴは、アシッドにそう訊ねるが。  
『無理だ。それに、電波変換を強制解除すると、負担がかかる』  
『…それは仕方ないわねえ…ティア、いつもの方法をとりましょう』  
アシッドの返事はあまり色よくはないので、そういったヴァルゴの言葉に、クインティアはそれもそうね、と呟いて。

ガン!!

杖でシドウを抑えつつ、思い切り、クインティアはどこからか出したお盆で、後頭部を叩いたのだった。

「…きゃー!!」

『ティア!!』

ぐらりとシドウの身体が前に傾いで、それに引きずられて、倒れたシドウの上に、重なるようにしてクインティアも倒れた。

途端、傍に降り立つ人影が。

「すみません!!遅く……」

「……わあ、クインティアさん大胆」

「……何やってんだ、お前ら」

『スバル、大丈夫かお前』

『無茶言つな、固まってるぞ』

「わあ、何なのオテンコ?」

「見るな!!ジャンゴは見るべきものではない!!」

「ひゅー」

「…ふざけている暇があるのか、お前ら」  
上から誰がしゃべったかというと。

まず、ついたことを言おうとしたスバルは顔を赤くして固まり、

ツカサは少し楽しみに、ヒカルはあきれたように眩き、

ウォーロックはスバルの固まりっぷりを心配し、

ジェミニはウォーロックに突っ込みをいれ、

目をオテンコの身体で覆い隠されたジャンゴは首を捻り、

オテンコは情操教育によくないとばかりにがんばって、

ネロは楽しみに口笛を吹き、

サバタが一番的確な場所につっこんだ。

「あ…こ、これはっ!!!」

「あいたた…あれ？何をしてるんだ、クインティア」

顔を赤くしながら、慌てて説明しようとしたクインティアを遮るように、シドウが起き上がり。

「…っ、元はといえばあなたのせいでしょう!!!」

がいん、と手に持った杖でしたたかに、シドウの頭を殴り飛ばしたクインティアだった。

< > < > < >

そして、WAXA記者会見場前。

「…よし、揃ったね」

シドウの頭にできているたんこぶを気にせずに、大吾はその後遅れてきたミソラとジャックを含めた一同を眺める。



ジャンゴとサバタは、なぜここにいるのか、という説明が一同になされた後に、上のウェーブロードで会見を見るように言われたので、ジャンゴとサバタはウェーブロードにいた。

「相当、覚悟を要しただろうに…みんな、良く決断してくれた」  
WAXA長官の言葉に、一同の瞳は、ただまっすぐだ。

「しかし、皆の背中を押したのは…『世界を救った英雄を守るために』かな？」  
スバル以外の一同が、揃って頷いた。

「私の心を助けてくれたスバルくん。今度は私が守る番だ、って思ってたから」  
そういつてミソラは、スバルの左肩に手を置いた。

「私たちに光を教えてくれた。こんなにも綺麗な世界に気づかせてくれたから」  
そういつてクインティアは、スバルの右肩に手を置いた。

「俺のあこがれるヒーロー。それを傷つけられたのだから、守ろうと思った」  
そういつてシドウは、スバルの両肩に手を置いた。

「犯罪者である俺に、『罪を償ったら一緒に遊ぼう』と告げてくれた。だから、その光を消させたくない」  
そういつてジャックは、ぐしゃぐしゃとスバルの頭を撫でた。

「スバルくんの心を傷つけた僕を許してくれた。ヒカルのことも、認めてくれた。それに…大事な人だから守り抜きたい」  
そういつてツカサは、スバルの右手を取った。

「…決意は固いようね」

ヨイリーの言葉に、ミソラ、クインティア、シドウ、ジャック、ツカサが頷き、スバルも、こくり、と強い眼差しで頷いた。楽しそうに、ヨイリーは唇を吊り上げる。

「…さあ、皆。……表舞台へ、立っておいで!!」

「「「はい!!」」」

「ええ!!」

「おう!!」

「ああ!!」

一同は、大きく頷いて、記者会見場へと開く扉を見つめた。

ON AIR!! (前書き)

ちょっとわかりづらいことこの上ない…

## ON AIR!!

きっかけは、アマケンロビーにおいてある、テレビに映し出された緊急記者会見と、それを見つけた、生徒の一言。

「ん？あれ、ミソラちゃんじゃないか!？」

そういつた少年は、スバルと同じB組で、クラスメイト。その声に惹かれて寄って来たのは、ロビーにいた生徒たちだった。もちろん、見張りのためにいた先生もそこに集まった。

「え？あ、何で響は、あそこにいるんだ!？」

…先生が、一番パニックを起こしていたりする。

「だってさつきまで…ここにいたよ？」

先生をなだめながら、女子生徒は首を捻る。

その騒ぎに、アマケンの職員たちも、テレビのところに集まってくる。

そして、そこからやや離れた場所に、天地は佇む。そして。

「…スバルくん…」

天地は小さく、先輩である大吾の娘であり、世界を託された小さき英雄の名を呟いた。

< > < > < >

記者会見場はともざわついていた。

ロックマンが現れて三年経った。なのに、誰もその真実の姿を知る手がかりを、掴めていない。

訳とすれば、徹底的にWAXAがそれを阻み、そして、ロックマン自身がその姿を隠し続けていたからだ。

そのロックマンの正体を、ようやく知ることができる。  
だからこそ、各国の記者たちはここに集まった。

記者会見場の扉が開き、世界でも有名な宇宙飛行士の一人、星河大吾が出てきた。

こちらに一礼して、マイクのスイッチを入れた。

『では、ロックマンの正体をお知らせする前に、ロックマンと共に戦ってきた人物を紹介します』

一同の顔は不満に彩られるが、大吾は気にしないように言葉を繋いだ。

『音を主体として戦う、ハープ・ノート』

青色のギターを携えた、愛らしい少女が扉の向こうから現れる。大吾の方を見て、大吾が頷くのを確認すると、電波変換をといった。そして、そこに現れた少女に、すぐに記者会見場は騒然となる。

『ハープ・ノートの正体は、響ミソラさんです』

まず現れたのは二ホンの国民的アイドル、響ミソラ。

とん、と軽く踵をあわせ、記者会見場に設けられたステージの、一番奥に立った。それに合わせて、ハープ・ノートについて簡単な説明がなされた。

『電気を主体として戦う、ジェミニ・スパーク』

そして、それぞれ巨大な腕を持った、白と黒の二人の少年が、扉の向こうから現れた。

ミソラの隣に立って、電波変換をとき、そこに現れたのは、穏やかなような黄緑色の髪の少年。

『ジェミニ・スパークの正体は、双葉ツカサくんです』

ついで現れたのは、おとなしそうな風貌の少年、双葉ツカサ。

『ジャック・コーヴァス』

四枚の羽根を背中に持った、黒い姿の少年。

ツカサの横に並んで、電波変換をとくと、そこに現れたのは、逆立った髪をした黒髪の少年。

『ジャック・コーヴァスの正体は、ジャックくんです』

そして、特長的な髪をした少年、ジャック。

『クイン・ヴァルゴ』

杖を携えた、いかにもクインと言った格好をした女性。

ジャックの横に並び、電波変換をとくと、そこに現れたのは、髪を二つに結んだ女性。

『クイン・ヴァルゴの正体は、クインティアさん』

髪を二つに結び、カチューシャのようなものをつけた女性、クインティア。

『アシッド・エース』

肩に盾のような装甲を付けた、サテラポリスのマークが胸元を飾る青年。

クインティアの横に並んで、電波変換をとくと、そこに現れたのは、胸に赤いビジライザーをかけた男性。

『アシッド・エースの正体は、暁シドウくん』

サテラポリスの刑事の一人である青年、暁シドウ。

一通り、ロックマン以外で戦っている人々が、紹介され記者たちは次に、英雄かと思いきや。

『そして、次はシューティングスター・ロックマン…と、行きたいのですが…その前にお話があります』

<> <> <>

「あれ？名前が呼ばれないんだけど…ロック、なんでだろ？」  
スバルは何で、とウォーロックを振り返る。

『俺も知らん。が、訳があるみたいだな。見てみるよ』  
ほら、とスバルがウォーロックに示された先には、険しい表情をした大吾。

そして、上の方で会見を見ていたジャンゴも首を捻る。

「どうしたのかな、大吾さん」

「何か考えているんだろう。この後に起こることのために」

ジャンゴはふらふら足を揺らしながらそこに座り、サバタは足を組んですわっていた。

「どうということなの？」

「見ていれば分かる。だから、大人しくしている」

そうサバタに釘を刺されたので、ジャンゴは大人しく首を縦に振るのだった。

< > < > < >

『話をする前に、シューティングスター・ロックマンを敵だ、と報道した局があります。そのことについて話があります。その局の人は、立ってください』

大吾の声がいつもより低く抑えられて、感情が見えない。

そして、その言葉に応じて記者が一人、立ち上がる。

『いきなりで、なんてことは思いませんので言います。謝ってください』

大吾のその言葉に、記者は顔をしかめた。

「何故ですか」

記者はあくまで強気にそういった。

『理由は、ここにいるミソラちゃん…と、ツカサくんに話してもらいます』

ミソラちゃん、と大吾は促してマイクを渡した。

『…私は、ロックマンである子と出会った時、歌うことが苦しくて仕方なかった。ママが亡くなって、誰のために歌えばいいのかが、分からなくなってた』

今だから語られる、ミソラの心の闇。

『コダマタウンの展望台であの子に出会ったときは、あの子は私が人気の歌手だ、なんて全然知らなくて、当たり前のように普通に接してくれた。それがとても嬉しかった。私の素性を知った後も、歌うことが辛くて逃げ出した私を守ってくれた。…でも、私は歌うことを強要されて……』

ミソラはゆっくりと瞼を閉じる。

『何も知らない人たちに、ママとの歌を汚されそうになった。だから、それをこの地球を滅ぼそうとしてきた宇宙人に利用され、たくさんの人を傷つけた。あの子は人をたくさん傷つけた、この私を止めようとしてくれたけど…私は、それを嫌がった。『邪魔しないで、ママとの歌を汚す奴らを全員消してやる』って』

ミソラは、瞼の裏にうつる景色を言葉にしていく。

『あのと私の私は、皆が邪魔で邪魔で、しょうがなかった。結局あの子に止められたけど、あの子が止めてくれなかったら…私の歌を待っていてくれる人に気づけなかったし、気づけないままだったらそのまま…この星を滅ぼしていたわ。確実にね』

睨むような眼差しで、ミソラは記者を見下ろした。

『…だからね、ただ、世界を守るために、自らの命すら省みないで、戦ったあの子が敵だなんていわれるくらいなら、私は裏切り者よ』



言いたいことを言い終わったミソラは、ツカサにマイクを渡す。

ツカサはこくり、と頷いて、口を開いた。

『僕は両親に置いていかれて、ひとりぼっちでした。そして世界を憎んだ。だから、心の怪我が、ようやく癒えようとしていたロックマンである、あの子のパートナーが守っていた、地球を滅ぼすための武器、それを起動するための、鍵を奪うために…あの子に近づいた』

ツカサはきゅ、とマイクを握り締める。

『けれど、そのために言葉を交わすうちに、親しくなるうちに、僕はある子に、惹かれていました。僕の境遇を知っても、普通に接してくれたあの子を、僕は好きになった。…だけど、復讐心を消すことはできず…あの子を、利用する道を選びました』  
瞳には、冷たい光だけが宿る。

『そうして、ようやく心に負っていた傷が、癒えかけていたあの子の心を傷つけた。僕は何度も何度も躊躇った。けれど、どれだけ揺らごうとも、復讐心は消せなかった。人並みの幸せを得られず、人並みに生きていくことが難しかったから…そのために利用して、心を傷つけた僕を、あの子は許してくれた』  
握り締めた手のひらは、力をこめすぎて感覚がない。

『僕を否定しないでくれた。まっすぐに笑ってくれた。…あの子が敵になることだけは、何があっても絶対にありえない』  
ヒカルが、中で『そうだ』と叫ぶ。ヒカルも、二重人格、という自分を、否定しないでくれるスバルの存在に、救われた一人だから。

ミソラとツカサは、大吾を振り返る。

「…ミソラちゃん、ツカサくん、あの子をここへ」  
大吾はそういって、僅かに微笑む。

大吾のその声に頷き、背中を押され、ツカサとミソラは扉の方へ手を伸ばす。

< > < > < >

スバルは二人が差し出した手に、淡く微笑む。たっ、と軽やかに踏み出す。

「行こう、ロック!!!」

『ああ!!!』

そうして、スバルの姿は光に解けてゆく。

< > < > < >

テレビを通じて話された過去に、コダマ中学校一年一同は、ごくり、と息を飲み込んだ。

そうしていると、ミソラとツカサは、扉の方へ手を伸ばす。

とん、とシューティングスター・ロックマンが姿を現す。

ふわり、とその身体から淡い色合いの電波がほどけてゆく。完全にその電波が解けたときには、星飾りの揺れるゴムで髪を結んだ、茶髪の長い髪の少女が、そこにいた。同じ色の瞳は、柔らかな光を宿している。

「……………あれ、は……………」

「星河さん!?!」

一同は絶句して、現れた少女をまじまじと見つめた。

そして、今をもって、シューティングスター・ロックマンの真実の姿が、世界へとオンエアされた。

## 真実とかけら

たん、と中央に踏み出したスバルは、伸ばされた二人の手をとる。ふわり、と柔らかく茶色の髪が後ろにたなびいた。

スバルはミソラとツカサの間に立ち、踵をそろえて立つ。

『これでお分かりになったかしら？』

いつの間にか、マイクはヨイリーの手に渡っていた。

大吾が苦笑しているあたり、マイクはツカサの手から大吾に渡った後、ヨイリーに奪取された模様である。スバルは『父さん…』と、無言で大吾を眺めるのだった。

が、いつまでも気を抜いている場合でも、場所でもない。

ヨイリーは眉をひそめて、口を開く。

『あなたたちが敵だと根も葉もない噂で、敵だ、と言ったたシューティングスター・ロックマン、あなた方はその正体である少女の心を傷つけた。本来なら名誉毀損で訴えてもいいところよ』

『…どう、スバルちゃん。訴える？』

ふるふる、とスバルは首を横に振った。ヨイリーの手からマイクを取り、スバルは口を開く。

『僕は、…皆さんがロックマン、と呼ぶ本来の姿…星川スバルです。スバルは少し俯きがちに、口を開く。』

『確かに僕のせいで、戦いが起きるようになりました。…僕と僕のパートナー・ウォーロック…ロックの持つ力を狙ってくる敵もありました。それだけ地球が狙われる理由をもつ力を持って、力を手放

さない僕は、…ある意味で人類の敵です。…だけど』

スバルはゆっくりと顔を上げて、前を見据える。

『二人で一つとなって、ロックマンとなって戦う鍵である、ロックは僕の初めての友達なんです。そのとき僕は、父さんが『きずな』の事故で行方不明となり、…大事なものを失う苦しみを自分が味わいたくないが為に、人との絆を否定していました。失う傷が深くなくなるくらいなら、最初からかわらなければいい、って』  
だけど、とスバルは言葉を繋ぐ。

『僕が人との絆を否定せず、友達を作れたのはロックのおかげでした。…だから、ロックと離れたくない。大事な親友と、離れたくない。それが、僕が人類の敵であり続ける理由の一つ』

そして、とスバルは言葉を区切り。

『後一つは、この力が僕にとっての、大事な人たちを守るための力になるからです。電波の犯罪、それに対抗するための力でもあるから。…大切な人と離れたくない、大切な人たちを守りたい。それが、僕がロックマンであり続ける理由です。そのせいで、誰かを傷つけてしまっているのなら、そのせいで僕の大事な人たちが傷つくのなら…僕はそれと向き合いたい。逃げたくない。だから、ここにいます』

どこまでもみはるかすような、真っ直ぐで、純粋な瞳。それはまるで、真っ直ぐに宇宙を駆ける流星のよう。

< > < > < >

アマケンのテレビを通じ、それを見ていたクラスメイト達だけでなく、先生達、職員達…真実を知らなかった人々は、ただただ、言葉を失った。

地球と人々の命。

二年前から、ずっとずっと、今よりも幼く頼りない肩に全て乗っていたのだと、今更ながらに知ってしまったこと。

自らの命すら、危険に晒して大事な人々を守るために、戦い続けていたのだと、知ってしまったこと。

真実の姿を今まで誰も知らずにいた、蒼き英雄。それが、あんなにも儂く華奢な少女だったと、知ってしまったこと。

ルナ、ゴン太、キザマロ、天地は祈るような気持ちで、ホールを見ていた。

水倉あいろは憧れていたヒーローが、少しだけ言葉を交わした少女であることに絶句し、ケープ・ラントは何かをこらえるような瞳で、画面を見つめていた。

< < < <

勝手なことを報道してしまった、テレビ局の記者はその真っ直ぐな瞳に気圧されて、たじたじた。

スバルの手からマイクを取ったヨイリーは、記者をにらみつけた。

『確かにこの子は地球を滅ぼせるだけの、力を持つてる。けれど、それに見合うだけの覚悟を持っているわ。なのに、どうして敵だと言いつけるのかしら?』

「しかし、ロックマンが現れ始めてから、いろいろな事件が…」  
記者はいらだつたように反論する。

『確かにそうね。…でも、この子がロックマンとして戦い始める前から、ウィルスに関する事件は起きていたわ。それはこの責任ではないんじゃないのかしらね?』

ぐ、と記者は言葉につまる。

『…この子がこうでなければ、この星は滅んでいたわ。二年前、とつくの昔ね。もし、この世界が滅んだ後、それでも、敵だと言いつけるのかしら？』

「……」

記者は俯いて黙る。

『認められるのなら、素直に謝って頂戴。もちろん、あなただけじゃなくテレビ局にも謝罪を要求するつもりよ』

「よ、ヨイリー博士、そこまでしなくていいです…」

『スバルちゃん。……私たちが許せないのよ』

…ヨイリーの目が怖く、止めようとしたスバルはおとなしく引き下がった。『たち』という言葉に引つ掛かりを覚えたが、それを訊ねる勇氣は（命知らずな真似はし）ない。

ちなみに『私達』、とは…ツカサ、ヒカル、ミソラ、ジャック、クインティア、シドウの電波変換組一同と、ルナ、キザマロ、大吾、あかね、天地、ヨイリーの無電波変換組である。

「…す…すみませ…」

記者がおとなしく頭を下げようとした、その瞬間。一瞬だけ何か小さく光り、

眩い光が、辺りに満ちた。

## 漆黒の渦（前書き）

とりあえず、一章終わりです。

## 漆黒の渦

とっさにスバルたちは、目をかばう。

記者達の間から悲鳴が聞こえ、うっすらと瞳を開く。

騒ぎの中心である光の中心には、命を宿さない人形のように、指も手も、無理矢理引つ張られたように伸びていて、だらり、と力なく垂らし、身体に何か靄のような黒いものが骨のような身体に纏わりついた、記者の変わり果てた姿がそこにあつた。

その異様な姿に、スバルが小さく息を呑むと同時、上のウェーブロードから、人が飛び降りてきた。

言わずもがな、ジャンゴとサバタ、オテンコとネロである。

「スバルくん!!」

幸いにも、ジャンゴたちが飛び降りてきた位置が、スバルからすれば目に痛いほどの光を遮る位置だった。

ジャンゴは頭にかけていたゴーグルを下げ、光から瞳を守っていた。

「どうしたんだろう、あの人……」

ジャンゴが、小さく呟く。ああなつた理由は、誰にも分からない。けれど、スバルには何故か直感的に分かっていた。

「ジャンゴくん、あの胸のブローチ……もしかしたら、『サンライト・ソル』かも……」

え、と呟くジャンゴは、青年を振り返る。

青年の身体は強く発光しているが、中でも胸のブローチが強く発光している。

『確かにな。…凄まじく嫌な電波を放つてやがる……』



とても鮮やかなオレンジ色の石から、それには不釣り合いなほどの悪意と、唯一つの思いが宿った電波が放たれていた。

《邪魔をするな。私は姫の手にだけふさわしい》

それだけを、繰り返し発している。

「先ほどアリスに電話をした。…あのかけらはどんな手段を使っても、本来の持ち主にたどり着こうとするらしい。…だからこそ手荒な、こんな手段をとったようだな」

サバタは巨大な剣：ヨルムンガントを、構えてそういった。

「しかし、本来の持ち主の手になれば、ああいう風に暴走する」

「…つまり、あの石を壊すかなんかしないとあのまま、ってこと？でも、アレをとってスバルくんに渡せばいいんじゃない？」

太陽銃『ナイト』を二丁腰から引き抜きながら、ジャンゴはサバタに問いかけた。

『無理だな。あれ、人間はもともとから、電波人間であっても、電波体であっても、傍に近づいたら精神が狂う類のものだ。下手に近づけば、精神がおかしくなっただけはいい終わり、だ』

「ならどうすればいいの！！」

苛立って声を荒げる、スバルの問いかけに。

「壊す」

『それしかねえ』

即答な二人に、スバルとジャンゴは、眉を潜めて半眼になった。もう少し壊すことに、躊躇を持って欲しいものである。

「ともかくだ、お前は戦えるのか？」

サバタの問いかけに、スバルの後ろにいたウォーロックをスバルはちら、と見て。

「……僕は大丈夫。ロックは？」  
に、と楽しみに口端を吊り上げて、ウォーロックは口を開く。  
『平気に決まってるんだろ！誰に聞いてると思ってるんだ？』  
スバルは凜とした表情で、そうだね、と呟く。

「……さあ、行こう！！」

『ああ、行くぞ！！』

ウォーロックの姿が、ハンターV Gに消える。スバルはハンターV Gを構える。

「トランスコード！！シューティングスター・ロックマン！！！」

スバルの身体が光の中に消えて、代わりにそこには、蒼い流星の英雄が佇んでいた。

サバタは変わり果てた姿の記者へと、剣を向けた。

「待ってサバタ。ツカサくん、ミソラちゃん、ジャック、クインテ  
イア先生、暁さん。…みんなを避難させてもらえませんか？」

スバルが言った言葉に当然だ、と頷きを返した一同は、ハンターV Gを構える。

「トランスコード！！ジェミニ・スパーク！！！」

「トランスコード！！ハープ・ノート！！！」

「トランスコード！！ジャック・コーヴァス！！！」

「トランスコード！！クイン・ヴァルゴ！！！」

「トランスコード！！アシッド・エース！！！」

ツカサの身体が光の中へ消えて、二人の白と黒の電波人間がそこに現れた。

ミソラの身体が光の中へ消えて、軽やかな音楽を纏った電波人間がそこに現れた。

ジャックの身体が光の中へ消えて、巨大な四枚の羽根を持つ電波人間がそこに現れた。

クインティアの身体が光の中へ消えて、捌きを執行するかのよう電波人間がそこに現れた。

シドウの身体が光の中へ消えて、誰もが知る白い英雄である電波人間がそこに現れた。

一同はすぐさま記者達の身体をそれぞれ抱えられるだけ抱えて、扉の向こうへ消えてゆく。大吾たちも、避難者を誘導している。

ジャンゴは両手に持つナイトを、スバルはロックバスターを、それぞれ向けた。

「…よし…やるぞ!!」

「うん!!」

とは言うものの、ウォーロックの言葉は確かなようで、先ほどから頭痛がする。ともすれば、意識が狂いそうな、強い痛み。

「どうやって近づこう?」

『遠距離系のカードで叩きやあいんじゃねえのか?』

「遠距離系って…」

「じゃあ、僕が撃ってみる」

ちや、とナイトを構えて、ジャンゴは引き金を引いた。

ドオン、と銃弾は躊躇いなく光の中に当たり、爆発した。

…しかし、当たったはいいが、爆発した銃弾が跳ね返ってきた。

慌ててその銃弾の跳ね返ってきた場所にいたスバルは、身を横に引いた。

そして、やや後ろでその銃弾は爆発した。しかも、光のほうは無傷。

「ご、ごめんスバルくん!!」

「大丈夫だよ。怪我してないし……」

ジャンゴはスバルに頭を下げて、慌てふためく。スバルは

「…遠距離系も攻撃は無理か」

サバタは剣を構えると、そのまま一步深く踏み込んだ。

「はあああああつ!!」

そのまま光に剣を振り下ろすと、キーンと音を立てて、僅かながらにひびが入った。だが。

すぐさまスバルたちの傍にまで一瞬で戻ってくると、がくり、と膝を突いた。

「サバタ、どうしたの!？」

ジャンゴが傍に駆け寄ると、左目を抑えて、うめくような声で呟いた。

「…頭の中をかき回されるみたいだ……くっ……」

「だから言っただろーが!!なんであれ、傍に近づいたら精神が狂う類だつて!!」

ウォーロックに怒られ、サバタは眉を吊り上げ、す、と光の塊を指差した。

一同は自然と光の塊を見る。

ちなみにスバルは、相変わらずジャンゴの後ろにいる。

「でも、あれには近接系しか効かないぞ」

「…まあ、そうだが……」

ウォーロックもサバタの指した、ひびを顔をしかめて見る。

「……そうだ、ねえロック。…ウォーロックアタックで、どうにか

なるかな？」

ふと、スバルはウォーロックアタックを思い出す。

ウォーロックアタックとは、ロックオンした敵に一瞬で近寄り、その間はどんな攻撃をも受け付けない、ある意味ではロックマンの特殊能力である。

「…やってみる価値はあるが…どうせならギャラクシーアドバンスを叩き込んでやれ。けど、お前左手…」

ちら、とスバルは扉の方へ視線を向ける。

避難は流石、というべきか、この部屋に関しては完全に完了していた。

「…みんなにばれるけど、やるしかないかな…？」

スバルは左腕を押さえる。しばし俯いていたが、きつ、と顔を上げて。

「バトルカード！ワイドソード、ロングソード！！」

ピピ、と音がして、スバルのビジュライズバイザーに、ロックオンサイトが表示された。

ギャラクシーアドバンス

「GA、ジャイアントアックス！！」

一瞬で間合いを詰め、勢い良く、ギャラクシーアドバンスが、光の塊に振り下ろされた。

耳障りな音を立てて、ぴしり、と光にクモの巣のように細かいひびが走った。

頭の中がぐちゃぐちゃにかき回されるような激痛が走るが、一瞬で元の場所に戻り、その場に座り込んで、頭を抑えた。

スバルが亀裂はどうなったかと顔を上げると、サバタが先ほどと同じように、光に走っていた。



けて叫ぶ。

「呑まれるな！！剣か何かを床に突き立てて耐える！！」

「バトルカード！ソード！！」

慌ててバトルカード、ソードを右腕に出して、床に突き立てた。

下に横たわる記者が、飲み込まれずにすんでいるのが、唯一の救いか。

「まるで、ブラックホール……！！」

厳しい顔をしてスバルが呟くと、ウォーロックが出てきて。

『ブラックホールつつたら、アマケンにあった入ったら出てこれなくなるアレか……！』

「そうそう、それ……って、そんなこと言ってる場合じゃないから！！」

いささかのんきなことを言ったウォーロックに突っ込みつつも、必死にソードを床に突き立てて、スバルは踏ん張る。

『スバル！！踏ん張れ！！』

そこに、ちょうどここから近いところにいた、記者達や職員を外に連れ出してきたツカサたちが扉のところから顔を覗かせた。

「そ、んなことっ……言っつて、もっ……ロツ……ク……！！うわあ！！」  
踏ん張りきれずにふわり、とスバルの身体が浮かび上がった。

「スバルくん！！うわっ……」

「ツカサ！！く……！！」

「きゃあ……！！」

とっさに駆け込んで、手を伸ばしてスバルの手を捕まえたツカサ、ツカサの手を掴み引っぱろうとしたヒカル、そしてそれを支えていたミソラは、黒い渦に飲まれた。

「スバルくん！！ツカサくん！！ミソラちゃん！！」

後には、叫ぶように黒い渦に飲まれた一同の名を叫ぶジャンゴの声だけが、響いた。



## 第二章 過去へ（流星組の場合）（前書き）

…一章までだいぶかかると言ってたくせに……

## 第二章 過去へ（流星組の場合）

黒い渦の中を落ちて行きながら、スバルはかすかに聞こえる声を聞こうとしたが、混濁してゆく意識の中で、うつろな瞳で目を閉じ、意識を手放した。

その後すぐに、ぱあ、とスバルのペンダントが電波変換したシューティングスターエンブレムが光り、スバルの周りに三体の朧な、サテライト管理者の姿が現れる。

…過去…………我等が…力…………スター…………フォー…………ス…を…………  
朧な姿は光の塊となり、その光はポウ…と、スバルの周りを回って、身体の中に溶け込んだ。黒い渦が薄れゆく中、どさり、とスバルはデータの床に落ちた。

< > < > < >

「ねーつとー!!」

青いバンダナをつけた少年…光熱斗は、そのバンダナを外しながら名前を呼んだ幼馴染を振り返った。

「メールちゃん。一応中にいたウイルス全部デリートしたから、動くとは思うぜ。ロック、頼むな」

『うん、任せて』

ぴっぴつ、と青いナビは映し出されるコントロールパネルを操作して、オーブンを起動させた。

チン、と軽い音がして、きれいに焼けたスポンジケーキが出てきた。

ミトンを手にはめたピンク色の髪の少女…メールは、それを持って嬉しそうに笑った。

「やったあ！！焦げてなかったよ、ロール」

『焦げてなくてよかったね、メールちゃん』

メールの肩に乗った、半透明のホログラムであるピンク色のナビ…  
ロールがそういつて微笑む。

「よし、プラグアウトだロック」

『うん』

青色のナビ…ロックマンエグゼが頷くと、熱斗の肩に、ロックマンの姿が同じく半透明のホログラム姿で現れた。

現在、秋原中学校一年A組女子は、ケーキ作りの調理実習の真っ最中だった。そんな中、調理実習室全てのオーブンの調子が悪い、という状況になった。

そんな訳で、コンピューター実習室でプログラム作成中であった、メールの幼馴染で、ネットセイバーで、世界を救った英雄でもある事で有名な、熱斗とロックマンが、女子とそのナビ一同に呼び出しをくらったわけである。

…『早く直せ、と目がマジだった』、とは熱斗談。

ふいに、二人はぱつ、と外を見た。

「熱斗？」

『ロック？』

二人が首を傾げて訊ねると、熱斗は何、と聞き返した。

「…どうしたの？急に外なんか見ちゃって」

「……………何か…悪い予感じゃないんだけど…なんだろ…」

『うん。…とても優しい力…だけど、何か…』

その先は熱斗とロック、どちらも言い淀んでしまったので、メールたちは聞かない事にしたのだった。

< > < > < >

しばらくして、スバルの意識は回復した。

「……ん」

『気がついたみてえだな、スバル』

スバルはぱちぱち、と瞬きを繰り返して、目の前に浮かぶウォーロックを見る。

「…ロック……」

スバルは身体を起こし、きよるきよる辺りを見回す。  
どこかの電腦のようにも見えた。

「そつだロック!! ツカサ、くん…ヒカル…ミソラちゃん…は…!!」

『分からねえ。はぐれたな』

首を振るウォーロックに、スバルはきゅ、と手を握りしめる。

「探さなきゃ…!!」

立ち上がったままでは良かったが、ふらり、とスバルの身体がよろめいた。

すぐさまウォーロックの叱責がとんだ。

『馬鹿!! あの電波の影響を、多少受けてんだ。とにかく、今は外に出て休むぞ。情報探しはそれからだ』

「…うん」

スバルは、ウォーロックの言葉に頷いて、一旦電脳世界の外に出た。  
が。

「あいたつ!!」

ウェーブロードに飛び乗ろうとしたスバルは、どしゃつ、と背中から、地面に落ちた。

周りに行く人たちは、スバルに気がついてないので、いまだに電波

変換状態を保っていることだけは、はつきりしている。

「いったた…な…なんなの？」

『おいスバル、上を見る！！』

「上？」

焦ったウォーロックの声に、スバルは後頭部をさすりながら顔を上げる。ビジライズバイザーを通して、見上げた空には何もなかった。

「ウエーブロードが…消えてる……」

『…消えた、というより…電波自体ない感じだ…』

「ないって…なんでそんな急に……そうだ！！」

慌ててスバルはブラザーバンドを確認する。

「嘘！？」

ツカサとミソラ、それ以外のブラザーとの絆が、切れていた。

「どう、して…」

『しかも、時計も表示されてねえぞ』

困惑したように呟く二人の耳に、ニユースが流れてきた。

「…そして、五年後の20XX年X月X日後完成の予定です。では、次のニユース…」

二人は瞬きをして顔を見合わせる。

「……ロック、今の聞いた？」

『おう。…五年後の20XX年とか言ってたな。逆算して、考える…』

「…ここは……二百年前の世界、ってこと？」

スバルは邪魔にならないとわかりつつ、隅のほうに寄って胡坐をかき、指を唇に当てて考え込む。

「…ってことは、あのブラックホール……時空に開いた穴みたいなもの…？」

『しかも俺らばらばら、ってところ考えるといろんな場所に穴が開い

たみたいだな……」

あの黒い穴に吸い込まれたのは、スバルとウォーロックだけではないのだ。

ツカサとヒカル、ミソラ、そして彼らのパートナーである、ジエミニ、そしてハープもいる。

「……とりあえず、今後の目標は……」

『……ジエミニたちを探す、か?』

「うん。とりあえず、どこかで電波変換をとかなきゃ……」

スバルは立ち上がり、とりあえず近くにあったシヨッピングモールの屋上に飛んだ。

物陰で電波変換をとり、ハンターV.Gの電源を切って、人ごみに紛れるとスバルからすぐさま呟き、というか文句が出た。

「動きやすい服に着替えたい……」

一応ビジライザーをかけているので、隣に浮かぶウォーロックは見える。

『諦める。この時代の金、持ってねーじゃねーか』

しかしながら、ウォーロックからすぐさま諦める、と告げられた。

「……ん?」

スバルは、『この時代の金』という言葉に引つ掛かりを覚える。

「……この時代……お金……えーと……あ……!」

『なっ、何だ!?!』

「天地さんに貰ってたんだ!! いらなからって!!」

幸いにも、天地が以前整理している際に出てきた、大量の過去紙幣を『処分』という名目でスバルは貰っていたのだった。

シヨッピングモールから出てきたスバルの格好は、目深に被った流星マークの入ったキャップと、普通のTシャツに、薄手の灰色のパ

「カーを着て、七分丈の藍色のスボンに、スニーカーに黒のソックスを履いて、胸には小型通信機であるペンダント。

一見すれば、女の子とは分からないのでちょうど良い。

制服一式は、ついでに買ったリュックサックに押し込めてある。たつたつ、と足取りだけは軽やかにスバルは人ごみの中を歩く。

「似合う、ロック？」

「大丈夫なんじゃねえの？」

心配そうに自身を見下ろすスバルに、ウォーロックは呟く。

「ビジライザーを通してスバルはウォーロックが見えるものの、傍から見れば、独り言を言っているようでもある。」

「どこから調べようかな？」

「お前、学校でこの時代の歴史、習ってるんじゃねえのか？ だったらどこが最適かぐらい、分かるだろ。」

「スバルは信号で止まりながら、記憶を手繰り寄せる。」

「…調べものは…科学省…かな。この時代では最高レベルの情報が集まる、って教科書では習ったけど…その分、セキュリティがとてつもなく高いって。」

「よし、科学省に行くか。」

ウォーロックの目が何故かキラキラしているので、それを突っ込む気にもなれずに、傍にあつた看板を見た。

「…じゃあ、電波変換していい？」

秋原町から考えると、遠いし、とスバルはウォーロックに言った。

過去へ（音符組の場合）（前書き）

今回は『彼ら』との遭遇です。



## 過去へ（音符組の場合）

おそらく、スバルに次いで、情報を得たのは彼女達が早かっただろうが、この時代の最強のナビのうちの一人と接触したのも、早かった。

出てきた場所は、様々な情報が飛び交っており、しばらく混乱していたが、冷静になって情報を調べてみると、いろいろと分かった。時間と場所だけは分からなかったが、きっとWAXAだ。

「ねえ、ハープ」

『ええ、ミソラ』

「……」

『……』

二人は互いのいいたい事が良く分かっているのでそろって沈黙した後、せーので。

先ほども同じことを言ったが、ミソラとハープにしてみれば、言わなきゃやってられない。

「『ここはどこなの（よ）

っ！！』」

キーン、と後に尾を引くような大声で盛大に叫び、ミソラは両肩で息を継ぐ。

ぺたん、と誰もいない電脳空間の、その場に腰を下ろして、ミソラはぶう、と頬を膨らませた。

「しかも、ツカサくんどころか、スバルくんもないし」

『はぐれたか、さっきの渦の中からそれぞれ別々の場所に落ちたのしかいえないわ』

はぐれてから、大した時間は経っていない。…だが、それでもよく知らない場所、よく知らない時間。

それが、不安を掻き立てて、収まらない。

「……………スバルくん…それにツカサくん…会いたい…」  
「…そうね…騒がしいのがないから……………」

怖い、とは思うものの、それでも。

「でも、私にはハーブがいるから一人じゃないもんね」

『ええ、私にもあなたがいるから一人じゃないわ』

寂しいなんて、思わない。

「…さて、ちょっと休んだらスバルくん達を探しに行かなくちゃ」

『ええ、そうね。少しだけドウォーロックたちの電波が分かるわ。』

それを頼りにして探しましょう』

「うん!!」

ミソラは膝を抱えて、隣にぶかぶか浮かんでいるハーブを見て、頷く。

『あ。…そうだわ、ミソラ。あなたの歌を聞きたいの。歌ってもらえるかしら?』

「うん、モチロン!! あ、新曲: 『ナガレボシ』って言うんだけど…作ったんだ。それを歌うね」

『ポロロン、どんなのかしら。楽しみ』

ハーブは隣に腰を下ろし、ぽろろん、とフィーチャリングハーブギターの弦を弾いて、すう、とミソラは息を吸い込む。

その笑顔を 僕はなくして

一人膝を抱え 孤独の暗闇にいた

そんな僕に君は笑って 手を差し伸べて

大丈夫だよって 笑顔を向けてくれた

深呼吸して 暗闇の中で前を向いて  
一筋の光を 僕は見つけたんだ

シューティングスター 今輝いて  
心に響く 温かな絆の音色  
心に輝く 未来つくる導の光  
絆を守り 闇を駆け  
今 絆と絆を繋ぎ 宇宙そらを翔ける

何も無い日々 僕は焦って  
誰かを傷つけて 周りを見ずにいた  
そんな僕を君は怒って それは違うって  
焦らないでって そつと言ってくれた

そつと力を抜いて 周りを見渡して  
柔らかな笑顔 僕は見つけたんだ

シューティングスター 今煌いて  
光と闇のように 対なす僕ら  
抱えきれない痛み 溶かして  
レゾンを守り 光を駆け  
今 心と心を繋ぎ 宇宙そらへ羽ばたく

宇宙を彩る スバルの強き光の煌き  
宇宙を駆ける シューティングスター  
消えた光 刹那の光 永遠の光  
今僕らに 降り注ぐ

聴き終えたハープは、柔らかく微笑んで、口を開いた。

『ふふ、イメージはシューティングスター・ロックマン…いえ…スバルとスバルに助けられた二人、ね?』

「せーかい」

「ぱちぱち、とミソラは手のひらを叩く。

『宇宙そふを翔ける、なんてところはスバルならではね』

そういったハーブに、ミソラは、少し遠い目で。

「…ちょっとツカサくんには申し訳ないかも、なんだけど。…私の勝手なイメージで作っちゃったから」

それでも、ミソラはふふ、と微笑み。

「これ、気づく人何人いるか楽しみなんだ。ふふっ、今度スバルくんにも聞いてもらおうと思っ…!!」

不意にミソラは辺りを見回して。

『ミソラ!!』

「うん!!」

とーん、とミソラは高く跳躍する。先ほどまでミソラ場いた場所に人影があった。

「くらいなさい、ショックノート!!」

ミソラの傍らに二つのアンプが出現し、音を衝撃波として放った。その人影はソードを一閃させ、衝撃波を叩き切った。

『…随分と、あっさりやってくれるじゃない? 気を抜いちゃダメよ、ミソラ!!』

「ええ、でも、その前に…」

ミソラはきつ、と人影を睨んで。

「あなたは誰!? 何でいきなり攻撃してくんのよ!!」

ミソラが叫ぶと、叩き切った際に起きた煙の向こうから、右腕をソ

ードにしている、赤いヘルメットに銀髪をたなびかせた少年、と言ったほうがいい年頃の人影が現れた。

「俺はブルース。…科学省の最重要場所に侵入しておいて、俺のことを知らない上、ずいぶんどのんびりしてるんだな」

ブルースと名乗った少年は、まっすぐにこちらに剣を向けている。

「……科学省？最重要？……なにそれ？ここ、WAXAじゃないの？」

「それに、ナビにしても身体づくりが違うようだ。…何が目的だ？」

「ナビ？電波人間じゃなくて？」

ミソラはブルースの口からぼんぼん出てくる、謎の単語に首を捻る。そして、それを聞いた事がある授業を思い出し。

「……ゴメン、悪いけど今日の時間と日付と、場所を教えて」

「？…20XX年のX月X日、場所は科学省中央コンピューターだが」

首を捻りつつ、ミソラが訊ねると、思ったとおりの日付が帰ってきた。

しばし、ミソラとハーブは固まって。

「……ハーブ」

「……ええ」

すう、と先ほどと同じように、同じタイミングで息を吸って。

「私達、過去に来ちゃったの　　っ！？」  
そう絶叫するのだった。

ミソラはとりあえず、何だかんだ言いつつも質問に答えてくれた少年に、名乗り返し、状況を説明することにした。

「私はハーブ・ノート。電波人間よ。私達は、未来から飛ばされて、

偶然ここに落ちたのよ」

「未来？電波人間？」

ブルースも首を傾げたそのときだった。

『そんな馬鹿な…』

『そんなことが…』

「うわ、びっくりした！！誰なの！？」

二つ、声が聞こえてきて、思わずその場から飛びずさったミソラは、声を荒げて辺りを見回した。

『伊集院炎山。ブルースのオペレーターだ』

『驚かせてすまなかった。私は光祐一郎。科学省の職員だよ』

「オペレーター…って言えば、私達の時代で言えば、ウィザードのパートナーか」

『ウィザード、とは何かな？』

ミソラが自分の時代で思い浮かべると、祐一郎が柔らかな声で問いかけてくる。

「私達の時代のナビみたいなものです。ウィザード、って一口に言っても普通のウィザードとバトルウィザードに分けられるんですけど」

『どう違うんだ』

炎山は感情があまりない声で、問いかけてきた。

「ウィザードは文字通り普通のパートナー。バトルウィザードはウィルス退治とか、戦闘に特化したウィザードなの」

その後、再び沈黙が降りたが、どうしてもミソラは聞きたい事があった。

「とりあえず、外に出たいからウェーブアウトしたいんだけど…」

「ウェーブアウト？外に出るなら、プラグアウトじゃないのか？」

その後再び黙っていたが、炎山が沈黙を破った。

『…ブルース、とりあえず一回そいつをプラグアウト場所まで連れて来い。外に出るならそこでもいいだろう』

「炎山様、よろしいので？」

『…光博士からの頼みごとだ。仕方ない。それに、プラグインした形跡が全くないからな…それを信じるしかないのが、正直なところだ』

「…ありがとう、ブルース、炎山君、光さん！！」

たたつ、とハーブ・ノートがプラグアウト場所に飛び乗ると、ぱあつ、と炎山と祐一郎の目の前に、モニターに写っていたはずのハーブ・ノートが現実世界に現れた。

その後再び光ると、制服姿の、炎山と同じ年くらいの少女がそこに立っていた。隣にはぶかぶか、と何かが浮かんでいる。

「私は響ミソラ。こっちはパートナーのハーブ。よろしくね、炎山くん、光さん！！」

『ハアァイ。よろしく』

そういつて笑うミソラとハーブに、炎山と祐一郎は内心で、『桜井【メールちゃん】とロールに似ている』と同時に思った。

## 手伝い

現実世界に出てきたミソラを連れ場所を移し、科学省の喫茶店。

「とりあえず、今話した事で全部です」

ミソラはそう言ってぱくつ、と目の前に置かれた、デラックスチョコパフェを頬張った。

「ん〜!!おいしい!!」

嬉しそうににこにここと、ミソラはパフェを口に運ぶ。

その傍でそれぞれコーヒー片手に、啞然とするのは炎山と祐一郎。

「本当に未来から来たのか…」

「そーだよ。あ、あとね。はぐれちゃったんだけど後二人、一緒に来てるんだ。しかしほんとにおいしい」

啞然とつぶやく炎山に、ニコニコと返答を返した後、ミソラはまぐまぐ、とパフェを食べる。

「とりあえず、放っておく訳にもいかない。熱斗たちにも呼びかけて、手伝ってもらおう。海外に落ちている可能性も否めない。ライカくん達にも呼びかけて…炎山くんも、手伝ってもらえないかな？」

「ええ。構いません」

そういつて炎山が頷き、傍にあったパソコンからメール画面を祐一郎が開くと。

「ご馳走様でした」

「はや!!」

両手を合わせてスプーンを置いたミソラに、炎山と祐一郎が思わず突っ込んでしまったのにも、訳がある。

ミソラがすべてを話し終わって、ようやく来たデラックスチョコパフェ。



これは科学省に所属する研究員、その子供用兼甘党向けに作られたパフェ。

量が半端なく、子供はまず食べきれない、食べきれぬにしても時間がかかる、といわれる代物を、あっさりと短時間で平らげた。

「…炎山くん、お代わりいい？」

「構わないが…まだ食べられるのか？」  
ちなみにミソラのパフェ代は炎山持ち。

「すみませーん。デラックスチョコパフェ、後二つください」

「そんなに食うのか!？」

「女の子は甘いものは別腹だもん」  
そういつてくびくび水を飲むミソラ。

「と、とにかく。…写真か何か、ないかな？」

あっさり巨大パフェを後二つ、と清々しく言い切ったミソラに、硬直していた祐一郎は何とか立ち直る。

「写真?それなら確か……」

ポケットにいつも入れているポーチ、その中から写真を引っ張り出す。

「これと…これ!」

二枚の写真が目のおかれる。

片方は茶髪の長い髪の少年。

もう片方は、黄緑色の髪の少年。

「こっちの茶髪の髪の子が、星川スバルくん。こっちの黄緑色の髪の子が双葉ツカサくん」

「とりあえず、これを熱斗たちに…」

< > < > < >

P i P i P i ! !

「うわっ!!」

「きゃっ!!」

真面目に板書を取っていた熱斗とメイルは、突然のメールに驚いて声を上げてしまった。

一斉にクラスメイトと先生が振り返る。

ロックマンとロールはそんな中、差出人の名前を告げた。

『熱斗くん、パパからメールだよ。急いで、って書いてはあるから…開けてみたら?』

『メイルちゃん、熱斗くんのお父さんからメールだよ。急いでって書いてあるけど…』

「光ー、桜井ー急ぎかー?」

先生から声が飛んでくる。

三十代前半の男性教諭、三船先生だ。

「みたいでーす。開けてみていいですか?」

「おう」

先生に許可をもらい、熱斗はロックに頼んでメールを読んでもらう。

熱斗、メイルちゃん。

授業中とは分かっていて、このメールを送る。

至急、保護して欲しい二人がいる。

一人は星川スバルくんという子で、もう一人は双葉ツカサくん。

どちらも二人と同年で、顔写真を添付してある。それを手がかりに探して欲しい。  
できれば早急に頼む。

一人、彼らの仲間だという女の子を保護した。  
名前は響ミソラさんといって、彼らとはぐれたらしい。

彼らはこの時代にはないものを多々持っている。

もしかしたらそれらを狙い、騒動が起きるかもしれない。

その前に、彼らを保護したい。今から探しに行ってくれ。

学校は『科学省からの用事』ということで、できれば早退して欲しい。  
できれば構わない。

祐一郎

『熱斗くん、添付画像を開くよ』

ぱっ、と映し出されたのは、奇妙なゴーグルを頭にかけた茶髪の少年と、肩にかかる長さの黄緑色の髪の少年。

『早退はあんまり嫌なんだけど…パパからの頼みごとだし…』

「そうだな。早退するか」

熱斗はこくり、と頷き、ロックマンも仕方ないね、とつぶやいた。

「熱斗、私たちも手伝わわ」

「メールちゃん…ありがとう…！先生、緊急に科学省からの用事が

あるので、早退します。あ、事件とかじゃないんでご心配なく」

「おー。気をつけて帰れよ。光、桜井」

「はい!!!」

二人は鞆を手に、教室を飛び出した。

## 唐突な来訪者

「…と、言っても何で狙われるか、つてのをまず聞かないと」

「そうなのよねー…」

祐一郎から送られてきたメール。それは熱斗たちがああいつても来るであろう事を見越して、書かれたメール。だからこそ、重点がいくつか抜けていた。

科学省へついた熱斗は、いつもどおりに父親、光祐一郎の部屋へ向かう。

そして、扉が開いた先にいたのは。

「あれ、デインゴ、チャーリー、テスラ、燃次さん、ジャスミン、炎山」

熱斗が不思議そうに見た先には、ヘアバンドをつけた少年、軽装ないでたちの男性、髪をきつちりとまとめた女性、頭に手ぬぐいを被った男性、それに伊集院炎山がいた。

「お、二人も来たのか」

『メールも来るとは、珍しいな』

ヘアバンドをつけた少年は、カレーシエフ、デインゴ。そしてそのパートナーである、羽飾りを揺らすナビ、トマホークマン。

「久しぶりネ。熱斗、メール!」

『ロックとロールも久しぶりね』

髪をお団子にして花の飾りで止めた少女は、薬師、ジャスミン。そしてそのパートナーである、看護師の格好をしたナビ、メディ。

「よお。どーも」

『相変わらずなかいねえ、おふた方』

腰で上着を結んでいるのは、パイロット、チャーリー・エアスター。そしてそのパートナーである、背中にプロペラをつけたナビ、ジャイロマン。

「クロスフュージョンメンバー、集められたっばいぜ。つっても何人かだけだ」

『まあ、暴れられるんだったら良いけどよ』

腕を組み豪快に笑う、エプロンをきつちりつけた男性は、花火職人、六尺玉燃次。そしてそのパートナーである、両腕がランチャーになっているナビ、ナパームマン。

そこに、扉が開いて入ってきたのは、熱斗の父親で、有名な科学者でもある、光祐一郎。

「皆、急に集めてすまない」

そういって、一同の目の前で足を止める。すぐに質問をぶつけたのは、熱斗だった。

「パパ、人探してどういうこと？」

熱斗が問いかけると、祐一郎は扉の向こうに『入ってきてくれ』と告げる。

扉が開き、そこから現れたのは熱斗とメールと、さほど歳が変わらないように見える少女。

「はじめまして、響ミソラって言います」

一同の前に出てきた少女…響ミソラは、背中にギターを背負っていた。

「じゃあ、ミソラちゃん」

祐一郎に促されて、こくりと頷き、手を高く掲げた。

「電波変換、響ミソラ、オン・エア!!!」  
ミソラの身体が光に溶け、光が解けた後には青いギターを携えた少女が、そこに立っていた。

一同が構えると、祐一郎は一同を落ち着いて、とんだため、少女の説明をする。

「ミソラちゃんがこの姿はハープ・ノートだそうだ。そして、未来の世界から来た、電波人間でもある」  
再びその身体が光に溶けると、後には先ほどの少女と、琴の形をした。

『お化けーっ!!!』

「落ち着けロックー!!!」

熱斗の頭の後ろに、必死になってロックマンは隠れる。

ミソラの隣にぶかぶか浮かぶ、琴の形をしたお化けのようなものは、不機嫌そうに、それでも楽しげに。

『まっ、お化けとは随分なご挨拶じゃなくて？私はFM星人のハープ。覚えときなさい』

「宇宙人？そんなものいるわけないじゃない」

髪をきつちり纏めた女性、テスラ・マグネッツがあっさり拒否を示すが。

『あら、だったらどうやって私のことを証明するのかしら？プロگرامであるネットナビならともかく、私は電波よ。電波に命を宿すだなんて、生半可な事じゃないわ』

ハープにある意味過去の常識では、もっともな事を言われ、ぐ、とテスラがつまる。

祐一郎は一同が口を閉ざしたときを見計らって、口を開いた。

「今見てもらったとおり、ミソラちゃんの持っている力は熱斗たち…いや、ロックマンたちとはまったく異なる類のものだ。彼女のパートナーであるFM星人は、地球人の身体と融合しないとまともに戦えないそうだ」

その言葉に、こくり、とミソラとハーブは同時に頷く。

「そこで、相性のいい人間と融合して電波人間となる。この融合を彼女達は電波変換と呼んでいる。…まあ、根本的な部分で言えば…クロスフュージョンに近いな」

そういわれて一同はああ、と納得した。

「それで、人探しとどういう関係があるんですか？」

メールが訊ねると、ミソラが口を開いた。

「私のほかに、後二人、この力を持った友達がこの時代に飛ばされちゃって…一応、居場所は周波数で分かるんだけど…」

「周波数？なんだそりゃ」

デインゴが首を傾げて呟くと、ハーブが答えた。

『生きているものなら、全ての存在が発しているものよ。機械やナビは発していないのだけど』

それはともかく、とミソラは言葉を遮る。

「ハーブは、スバルくんたちの周波数が、日本にあるって分かったんだけど…もう一人…ツカサくんの周波数だけ、ニホンにはないって…」

『どうも外国に飛ばされてるっぽいよねー。ウォーロックとスバルは臆げだけど、こっちに向かってきてる。情報収集、ってことで侵入でもするつもりだったのかしら？』

何気に物騒に呟かれた単語に、一同は青ざめた。



しかし、ミソラは気にした風なく。

「ロックくんだったらやるよね。スバルくんが止めそうだけど」  
『必要最低限だったら、スバルもやるでしょう』

それ以上物騒な会話を聞きたくないの、祐一郎は言葉をさえぎった。

「とにかく、星河スバルくんの搜索は問題ない、として。問題は双葉ツカサくんだ」

「外国か…ライカと、プライドだけじゃ少ないしな…」  
「だから集まったんだ」

熱斗の言葉に、炎山からすぐさま一言飛んだ。

『どういうこと？だから集まったって？』

「そうだよ炎山。まさか今から外国に行く、なんてこと…」  
ロックマンが首を傾げ、熱斗はそれに同意する。

「は言わないが、明日から行くぞ」

炎山が鮮やかに言い切った言葉に、十分無茶だ、と熱斗とメールとデインゴとミソラは思った。

「私だけなら今からでも行って帰ってこれるけれど…下手に動くとスバルくんを見失いかけないし…」  
ふう、とミソラはため息をついた。

「この時代じゃ、ミソラちゃんたちの力は十分特異だ。下手に動けば、ネットポリス沙汰になるかもしれない、と頼んで抑えてもらってたんだ」

祐一郎の言葉に、ミソラははあ、とため息をついて頷く。

「それに、ツカサくんも十分私以上に特異だけど、一番特異なのが、スバルくんだから」

「スバルってやつも、さっきみたいになるんだろ？さっきのあれ以上の特異、って事はどんな感じに……」

デインゴがミノラに問いかけようとして、ブツン、と、一斉に科学省のありとあらゆる電源が落ち、熱斗たちの周りに、電波人間が降り立った。

**流星参戦（前書き）**

…多分、双子組は2、3話後に出てくるかと思います。

## 流星参戦

急にスバルの後ろにウォーロックが現れる。

『スバル!!』

「?どうしたの、ロック…っと…」

電波変換をして、かなり足元が危ないウェーブロードを伝っていたスバルは、危うく落ちそうになった。

『科学省に何かやばいものが…!!一旦電波変換をとけ!!…この状態だと、やばいものに気が付かれて…こちら辺にも被害が出る…それに、結界みてーなモンがはられてやがる……』

「わ…わかった!!」

スバルは素直に頷いて、ウェーブロードから飛び降り、ウェーブアウトした。

たん、とスバルは物陰に降り立つ。

『急げスバル!!』

「分かつてる!!」

そして、体勢を立て直す間もなくスバルは駆け出した。

< > < > < >

スバルとウォーロックが電波変換を解いて、駆け出す少し前。

ミソラたちの前に現れた電波人間は、ジャミンガーだったが、普通のジャミンガーとは装備も色も違う。

「何だこいつら…!!」

「ナビじゃなさそうだが…」

熱斗が叫び、炎山が眩く。

ハーブは驚愕したように、急に現れた電波人間達を驚愕して見た。

『こいつら、ジャミンガーだけど……この前のノイズの電波人間と同じよ!!ノイズだらけ!!』

「この前、スバルくんを浚いに来たアレと同じって事!?!ってことは、あのノイズのジャミンガー……ああもう面倒くさい!!ノイズジヤミンガーで良い!?!」

『まあ、気持ちは分かるからノイズジャミンガーと呼びましょう。そういうことになるわね。…ミソラ、やるわよ!?!』

「うん、電波変換、響ミソラ、オン・エア!!!」

ミソラの姿が、ハーブ・ノートに変わる。

「パパ!!!」

「分かっている!!!」

祐一郎は頷き、名人へと連絡を入れる。すぐに、ディメンショナルエリアが展開された。

「なに!?!」

『あなた達、何をしたの!?!』

ミソラとハーブが驚愕した表情で、辺りを見回す。

「まあ見てろって。行くぞ、ロック!!!」

ミソラにかっ、と笑いかけて熱斗は、肩に乗ったナビに呼びかける。

『うん!!!』

ロックマンが頷き、熱斗はPETをその手に持ち、普通のチップとはまるで違うチップをポケットから取り出す。

「シンクロチップ、スロットイン!!!」

ピピッ、と画面に結晶のようなものが浮かび上がる。

「クロスフュージョン!!!」

熱斗の声に応じ、画面から強い光があふれ出し、身体を包んだ。制服が一部のすきもなく体に纏わりつき、その上からロックマンのデータが重なった。

パン、と光が飛び散った後には、ロックマンの姿をした熱斗が、立っていた。

遅れて、他の一同もクロスフュージョンする。メールも、この前正式にラッシュのデータを基に作られたシンクロチップを使い、クロスフュージョンした。

クロスフュージョン後の姿は、パートナーナビの姿をしつつも、オペレーターの様も混じっていた。

『ナルホド、これがあなた達の現実で戦ったための姿、ね?』

「そーゆーこと!!! 助太刀するぜ!!!」

熱斗が笑うと、ミソラは僅かに頬を緩めて微笑む。

「…アリガト、熱斗くん」

そういつてミソラは、すう、と息を吸い込んで叫ぶような声で言った。

「皆、油断しないで!!!」

『おう!!!』

『ああ!!!』

『ええ!!!』

『うん!!!』

ミソラの言葉に、全員が頷く。

「さあ、かかってきなさい!!!」

「やれるモンならやってみろ!!!」

ミソラがギターを構え、熱斗はロックバスターの照準を合わせた。

「まずは先手必勝!!」

ミソラが天井を飛び越えるほどの高いジャンプを見せる。

一度すり抜けて、すぐさまその姿が見えたときには、ミソラはギター先の先を、まっすぐにノイズジャミングーに向けていた。

「くらいなさい、ショックノート!!」

ミソラの傍らに、二つのアンプが出現し、衝撃を纏った音符がまともにもぶつかる。

ドオオン、と派手な音を立てて、ノイズジャミングーたちの何体かが倒れる。

「続いてパルスソング!!」

ハート型の音波がぶつかり、倒れていたうちの数体が消えた。

「…すつげえー…」

「ぼけつとしている場合か、熱斗!!」

啞然、とミソラの繰り出す技の威力に、熱斗は口をあけていたが炎山から叱責が飛んだ。

「バトルチップ!! バリアブルソード!!」

炎山は使い方次第で技の変わるソードを繰り出す。

「びつくりしたただけだ!! 行くぞロック!!」

『うん!!』

自身と一体化しているロックマンに叫んで、熱斗は顔を上げる。

「バトルチップ、バルカン!!」

熱斗が手を前に突き出すと、腕がバルカンになっていた。すぐさま火を噴いて、弾が発射される。

「バトルチップ、キャノン!!」

熱斗は攻撃を避けながら、次々と攻撃を叩き込んでいった。

「いつくぜー!! トマホークスイング!!」

デインゴは高い攻撃力とスピードを生かして、敵を翻弄しつつ攻撃していた。

しかし、横合いから放たれたキャノン避けきれず、吹っ飛ばされる。

「とりあえず回復！！トータム様！！」

たんつ、とトータムポールの上に着地を決め、デインゴは叫ぶ。すると傷は全て癒える。

「トマホークローリング！！」

叫んで、デインゴは炎を纏いながら、敵に突っ込んだ。

「ロールアロー！！」

「メデイカプセル！！」

メイルが矢を放ち、ジャスミンが同時に何かしら異常を起こす爆薬カプセルを投げた。

ロールアローを避けたノイズジャミングは、メデイカプセルをくらった。

どうやら今回は、効果としては盲目だったようである。

「今ネ、メイル！！」

「うん！！バトルチップバンプランス！！」

単独では他の一同より、攻撃力も体力も防御力も低いロールとメデイ。

唯一防御力は高い方だが、マグネットマンの防御力には遠く及ばない。だからこそ、他の一同の足手まといにならないようにと、コンビを組んでいた。

そのかわり、特殊能力はとてつもなく秀でている。

特殊能力とはロールの体力回復能力と、メデイの異常を起こさせるカプセルを指している。

「私達を、なめないで！！」

「さあ、かかってくるネ！！」

…ある意味、タッグを組んだら恐ろしい二人だった。



「マグネットボム!!」

敵に向けて一度だけ曲がるマグネットは、躊躇いなくノイズジャミンガーたちに当たる。

「くっそ…このおばさんつええぞ!!」

やぶれかぶれなのか、ノイズジャミンガーたちは、テスラにそう叫ぶ。

…ぶちん。

隣で戦っていたチャーリーが、あーあーあーあー…と僅かに焦った表情を見せる。

「だ…だあれえがぁ…っ」

それきり黙るかと思いきや。

「誰がオバサンよ　　っ!!」

そう叫んだテスラの後ろに、轟々と炎が立ち上る。

傍で戦っていたミソラと熱斗が、びっくりした表情で固まる。

それは同じように傍で戦っていた、ノイズジャミンガーたちも同様である。

「徹底的に叩き潰すわ!!」

ぎゅっ、と手のひらを握り締めるテスラの瞳には、本気の殺気だけが宿っている。それはもちろん、オバサン呼ばわりしたノイズジャミンガーに向けてである。

「…ごくろつなこって」

やる気満開になったテスラの横で、隣でチャーリーが、苦笑しながら呟く。…火に油を注いだ、ノイズジャミンガーたちであった。

< > < > < >

「…はぁ…はぁ…」

スバルは肩で息をしながら、顔を上げた先には、逃げるように出てくる人たちと、何か特殊な薄いドーム状のもので覆われた科学省。

『くそ、電波変換した状態でも、あの結界みてーなのは超えられそうにねえな…』

なら、とスバルは一旦深く息を吸い込んで。

「とにかく、行けるとこまで行ってみよう!!」

だつ、と駆け出した。しかし、数歩も行かないうちにウォーロックが慌てた声を出す。

『オイスバル!!この中…ハーブとミソラの電波がある!!』

「本当!？」

『ああ。それと…大量のノイズと、何人かが一緒に戦ってるな』

「…行かなきゃ!!立ち止まれないよ!!」

スバルは人ごみをすいすい避けながら、科学省の入り口へと踏み込む。

すぐさま、警備員の人たちがスバルを止めに入る。

「どいて!!」

「君は一般人だろう、早く避難…」

警備員の人たちが、スバルを止める。それに騒ぎを聞いて急いで加わった、メガネをかけて、手にグローブをつけた男性も止めに入る。「できない!!友達が…この先で戦ってる!!この先に行かせて!!」

暴れた拍子に、帽子がぱさつ、と床に落ちるが、きつ、とスバルは男性を睨み付ける。

瞬間、男性は驚いた表情になる。

「きみは…星河…スバルくん…?」

男性は手に持った機械と、スバルの顔を交互に見比べる。

「え?あ、はい…」

名前、何で知ってるんだろう、とスバルはメガネをかけて、手にグ

ローブをつけた男性を見る。

「なら、大丈夫だ。この子は僕が引き受ける。星河くん、こっちにおいで。中に入れるようにしよう」

男性がそう言っつて警備員が、スバルを解放する。

『付いてつて大丈夫か？』

「…信じるしかないよ。入る手段がないから」

ウォーロックの言葉に、スバルは小さく呟いた。

「こっちへおいで」

男性の後について歩きながら、ウォーロックとスバルは、もしも何かあったときの為に、と会話を交わす。勿論、男性には聞こえない。

『…何かあったら、全力で逃げる』

「分かってる」

スバルは男性の横に並ぶ。とりあえず、基本的なことを。

「あの、僕はあなたをなんと呼べばいいんですか？」

ああ、と男性は私はね、と前置きをして。

「名人と呼ばれてるから、そう呼ぶといい」

「…名人…さん？」

スバルに初対面の人を、呼び捨てにするだけの勢いはない。そんなスバルの額に男性…名人はびしり、と指を突きつけて、たった一言。

「さんはいらない」

「はあ…」

スバルは顔をしかめて、首を傾げる。

「入りなさい」

スバルが促されて入った部屋には、たくさんの計器類が並び、いろんな人がそこにいた。そして、その部屋は特殊な結界のぎりぎりの

淵に位置していた。

「名人、いったいどこに行ってたんですか！！状況は依然、好転なし！！」

思い切り傍にいたオペレーターの人なのか科学者の人なのか分からない人は、怒声を飛ばしつつ、きちんと状況を説明してくれた。

「すまんすまん。けど、光博士に頼まれてた搜索しなければ行けなかった子の一人、連れてきたぞ。星河スバルくんだ」

一同の視線がスバルに集中するが、スバルは戦闘中の一同が映し出された一番大きいモニターにスバルは目を見開く。

「ミソラちゃん！！」

スバルはパネルに駆け寄って、焦った声を上げる。

「名人、このままじゃメールちゃんが限界です！！」

女性オペレーターが慌てた声を上げる。スバルは名人に駆け寄り、口を開いた。

「僕が行きます。だから、道を開けてください」

「無茶だ！！」

「あなた、ネットポリスの人間じゃないでしょう！！」

何も知らされてないようで、他の一同からも制止の声上がり、まだるっこしい、とばかりにスバルは腕を掲げて、叫んだ。

「電波変換、星河スバル、オン・エア！！」

スバルから、シューティングスター・ロックマンに姿を変える。

「これで良いですか？」

一同がよく知る、ロックマンエグゼとよく似た色合いの、ナビ…いや、電波人間がそこに立っていた。瞬間一同は固まり、名人だけが

唯一ボソツ、と呟いた。

「驚いたな…光博士の言う通りとはいえ…」

「？」

ちよいちよい、とスバルは手招きをされて、地図が表示されたパネルで、戦っている場所と現在地を名人は示す。

「いや、こつちの話だ。いいかい、皆が戦っている場所は、ここ。とりあえず、今いるこの部屋の近くで一時的にこのシールド…ディメンショナルエリアの一部を解除するプログラムを起動させ、穴を作って…ここの階段を上って…」

スバルは名人の横から、つい、と一つの道を指で示す。

「ここの天井と壁突っ切っていきます。周波数変えちゃえば、壁突っ切れます」

ほら、とスバルは壁に手を当てるかと思いきや、その手は壁を抜けた。ヴウン…と、手を抜いてパネルの前まで戻ってきて、さっきと同じ道を示す。

「で、さっき言ったみたいに、こう行ってこう行けば良いですね」

「いやまあ…そうだな…それじゃ、いいかい？」

「はい」

名人はかなり疲労した表情で、合図を出し、一同はプログラムを起動させた。

ドオオオン！！

「いまだ、行けスバルくん！！」

爆風に飛ばされないようにこらえる名人は、大声で叫ぶ。

「行ってきます、名人さん！！」

「さんはいららないぞ、スバルくん！！」

スバルは名人の叫び声を背中に聞きながら、ディメンショナルエリアの中に突入して、すぐにディメンショナルエリアのシールドは閉じた。

< > < > < >

「くそ、ちっとも数が減らない!!」

熱斗が叫ぶぐらいに、倒しても倒してもどこから湧き出てくる。

「このままじゃ…つく…きゃ…!!」

不意に攻撃を避けきれず、とっさに腕を交差させて攻撃から、頭をかばったミソラは、そのままどさっ、と背中から壁に叩きつけられる。

痛みをこらえて目を開けると、目の前には拳を振りかぶったノイズジャミンガー。

「ミソラちゃん!!」

焦った熱斗の声が、やけに遠くに聞こえるな、と思いつつミソラは瞳を閉じる。

「もらっ…」

「バトルカード、バリア!!ブレイクサーベル!!」

一同にとっては聞きなれない声、ミソラにとっては聞きなれた声があたりに響いて、ミソラに向けられた攻撃はミソラには一つも当たらなかった。

その上、攻撃を加えようとしていたノイズジャミンガーは、消え去った。

ゆっくりと瞳を開けて、ミソラは硬直した。

こちらに背中を向けて、ブレイクサーベルを構えて立っている影。

「……………スバル、くん……」

ミソラの前には、熱斗とよく似た格好の少女…星河スバルが、手  
前に突き出して、立っていた。

「ミソラちゃん、大丈夫？」

緩やかに振り返ったスバルは、優しく微笑む。

「そこで休んで。行くよ、ロック!!」

『おう!!』

スバルの後ろに、おいぬ座の電波体：ウォーロックが姿を現した。

「ウェーブバトル、ライドオン!!」

たっ、と流星の名を冠する少女は、地を蹴って駆け出した。

## 流星の輝くとき

「ミソラちゃん、大丈夫!？」

「大丈夫ネ!？」

メイルもジャスミンもぼろぼろなのに、慌ててミソラに駆け寄ってくる。ミソラは肩を抑えながら大丈夫だよ、と笑って、スバルを見上げる。

「本当に、スバルくん……」

じわ、とミソラは泣き出しそうになる。本当に、スバルくんは私が危ないときに助けてくれる。

「えっと…ミソラちゃんをお願い」

誰なのか分からなかったスバルは、ミソラが気を許しているので味方だろう、と判断をつけてそう言った。

「うん!!」

「任せるネ!!」

スバルは他の一同に下がって、と目で頼む。

他の一同は察してすぐさま後ろに下がる。…テスラだけが、相変わらず怒っていて、チャーリーに引きずられて下がった。

自然体で構えるスバルは、ウォーロックに、ロック、と呼びかける。

「臆げだけど覚えてるんだ」

「何をだ？」

「AM三賢者が、スターフォースを託してくれた事」

そう言ったスバルは目を閉じる。

ふわり、と胸元が淡く光り出す。



淡い光はとても神秘的で、柔らかにスバルの身体から溢れ出す。ぱちり、と瞳を開けたスバルの目の前に、三枚のカードが浮かび上がる。

「まずはこれ!!」

ぱし、とスバルはカードを手取る。

「何をするつもりか知らないが、させるか!!」

ノイズジャミンガーたちが一斉にスバルに襲い掛かってくる。スバルは焦った風なく、口を開いた。

「スターブレイク!!」

そう叫んだ声に応じるように、辺りが清涼な蒼あおの光に包まれる。

その中から光を砕くように、上へと飛び出したのは、凜とした冷気を身に纏う、天馬のような姿。

「ロックマン、アイスpegasus!!」

翼を広げて、空中でその姿を現したスバルが、名を告げた。

手のひらを地面に向けて広げる。そして。

「マジシャンズフリーズ!!」

その声に応じるかのごとく一瞬で、ノイズジャミンガーの足元に巨大な魔法陣が生まれ、魔方陣は作動した。

キーン、と澄んだ音色を立てて、何人かのノイズジャミンガーが、凍り付いて砕け散った。

「あの技、近距離は無理そうだ!!一斉にかかるぞ!!」

何体かのノイズジャミンガーが、スバルめがけて飛び掛る。にこり、とスバルは微笑んで、手のひらにカードを生み出す。

「スターブレイク!!!」

その叫んだ声に、再び光が生み出され、今度は柔らかな翠みどりの光に包まれる。

それが辺りに荒々しく解けた後には、過ぎ行く風を身に纏う、龍のような姿。

「ロツクマン、グリーンドラゴン!!!」

翼が消えて、たっ、とスバルは地面に降り立つ。

「エレメンタルサイクロン!!!」

その場で腕を広げ、一度だけくるり、と軽く回り、その後は勢い良く回り始める。

すると、一斉に襲い掛かってきたノイズジャミンガーが、その風…竜巻に巻き込まれて消えた。

「ぐああああああ…!!!」

それを見た残りのノイズジャミンガーたちが一斉に、スバルに飛び掛る。

「スターブレイク!!!」

そして、最後は荒々しい紅あかの光に包まれる。

そして、その紅い光を散らすようにして姿を現したのは、猛々しい焰を纏う獅子の姿。

「ロツクマン、ファイアレオ!!!」

スバルはぐ、と腰をかがめて真正面から向かってくるノイズジャミンガーに向け、左手の獅子を突き出し。

「アトミックブレイザー!!!」

その声に僅かのぶれなく、炎がノイズジャミンガーたちを飲み込む。それは破壊の炎であり、その場にいたノイズジャミンガーたちを跡形もなく消し去った。

そしてそこから、巨大ジャミンガーが生み出される。  
瞬間、ミソラは身体を抱えて蹲る。

「ミソラちゃん!!」

「どうしたネ!？」

「ノイズがさつきまでと違って圧倒的に増えた……ノイズは電波にとつては毒なのよ……一応対策として、ノイズ対策アビリティ……P  
GMはもらっているのだけれど……それさえあまり効果がない……」

対照的にスバルは顔をしかめて、スバルの後ろにウォーロックが現れて告げる。

「凄いノイズだ……スバル、あいつが本体だ!!」

「分かってる!!」

スバルはだつ、と駆け出しながらファイアレオを解除すると、腕を前に突き出す。

ザザツ、とスバルの身体が凄まじくぶれ始める。

「お前らが引き起こすノイズ……利用させてもらっぜ!!」

スバルの後ろにいるウォーロックが吼える。

「ノイズ、200%突破だ!!やるぞ、スバル!!」

スバルが頷き、とん、と軽くジャンプしたスバルは空中で叫ぶ。

「ファイナライズ、ブラックエース!!」

スバルの身体が黒い渦に吞まれる。

そして、時々ぶれの生じる赤く発光する薄い膜が揺れる機械的な羽根を背中につけた、ぎらり、と赤く輝く瞳をした姿にかわつたスバルが現れた。

「しまった、ファイナライズだと!?!」

『この時代にジャミンガー共はいねーし、未来から来たんなら、帰り方を教えてもらおうか!?!スバル、吐かせるぞ!?!』

「うん!?!」

スバルは、頷いて低く、鋭く飛んで一瞬で間合いをつめる。

「バトルカード、ソード!?!」

スバルはソードを振りかぶって、切りつける。SSロックマン時とは、速度が違う。

巨大ジャミンガーは、何とか避けるものの怪我を負う。

「バトルカード、リユウエンザン!?!」

左手を、赤い刀身のソードに変えると更に切りかかった。ずばつ、とスバルが斜めに振り下ろしたリユウエンザンは、ジャミンガーの身体を一刀両断にする。

「く……くそ……『姫』……を……未来に……連れ帰る……までは……!?!」

切れ切れの声で呟く巨大ジャミンガーは、そのまま周波数を変えて逃げた。

スバルはくつ、と険しい表情をすると、一度だけ床をドン、と踏んで。

「くそつ、逃がした!?!」

『また追えば良いだろう。あれだけ深手を負わせたわけだしな』

「…うん、そうだね。さ、電波変換を解除しよう」

< > < > < >

熱斗たちの前で、ぱあ、と光が解けて、そこにはリュックを肩にか

けた、華奢な少年が立っていた。  
灰色のパーカーに、藍色の七分ズボン。そして、黒のスニーカー、  
というどこにでもいそうな少年の格好をしていた。  
しかし、胸にかかったペンダント、それに長い茶髪の髪を、頭の後  
ろの高い位置で一括りにして、肩に髪を乗せている辺りは、特徴的  
とも言える。

「君が…さっきの……」

「はじめまして、光熱斗さん。一応、未来でロックマン…シューテ  
ィングスター・ロックマン、って名乗ってます」  
そういつて、スバルは笑う。

しかし対照的に熱斗は、背筋を何か冷たいものが駆け上ったような  
表情をしていた。

「うわ、敬語はやめてくれ！！スバルだっけ？歳幾つ？」

「？十三ですけど……」

熱斗は必死そうに、スバルの肩を掴み、叫ぶ勢いで口を開く。

「ならなおさらやめてくれ！！熱斗でいいし、俺もスバルって呼ぶ  
から！！」

「う、…うん、よろしくね、熱斗……くん」

「くんなら別に良いよ。名人さんにも熱斗くん、って呼ばれてるし」

ようやく熱斗は落ち着いていたようで、気軽に笑うと、スバルは顎に指  
先を当てて、でもさ、と前置きをして。

「…名人さん、さん付けで呼ばれるの嫌ってたね」

「なんだけど、呼んじゃうんだよなあ…」

「二人とも、さんはいららないぞ」

「うわあ！！」

「ぎゃあー!!」

急に聞こえた声に、スバルと熱斗は横に飛ぶようにして、逃げた。

「息ぴったりだな。二人とも」

デインゴが横から突っ込む。

「だってだって、ホントにビックリしたんだよ!!」

「だってだって、ホントにビックリしたんだぜ!!」

「まあまあ。とりあえず今日は家に帰ってゆっくり休めばいい。…

あ、スバルくんたちの家を決めないといけないね。じゃあ、スバルくんは……」

「パパ、俺が引き受けたい!! ロックマン同士色々話したいしさ!!」

「僕も!!」

はいはい、と熱斗は手を上げる。ロックマンも手を上げている。

「スバルくんは熱斗の家…で良いかな?」

「はい」

スバルが頷いたので、次は。

「じゃあ、ミソラちゃんは」

「あ、私、私!! ミソラちゃんを引き受けるネ!! 女の子三人で積もる話したいネ!! メールも私の部屋に来るといいネ!!」

ジャスミンがびよんびよんと跳ねながら、手をあげた。

「うん。じゃあ、明日デパートにミソラちゃんのお洋服買いに行こうよ。海外に行くにしたらって、私達も色々準備が要るだろうし」

「久々にゆっくりお買い物!!」

楽しそうに笑うミノラの表情を見ながら、家に帰ることとなった。同だった。

…但し、光祐一郎博士を筆頭として、科学者達は残って、科学省の復旧に全力を注ぐ事となったのだった。

過去（双子組の場合）（前書き）

… 出番なくてごめん、双子組……



## 過去（双子組の場合）

スバルたちが熱斗達の家に行く前に、まず、決定的に外国に行く理由となった双子組の話をしておこう。

< > < > < >

…多分、未来から過去に来た一同の中で、真つ先に情報が手に入らなかった上に、置いてけぼりに近い状況に置かれたのはおそらく彼であろう。

「…ここ、どこだろうね」

> 知るわけねえだろ <

『さあな』

ツカサの疑問に、中と外から即行で知らない、との返答が帰ってきた。

ツカサは、どこかの屋上の淵にぽつんと座っていた。隣には、電波変換が解けたので、ジェミニが浮かんでいる。

風にネクタイと結んだ髪、シャツの裾がなびく。

「確か、僕はスバルくんの手を掴んだ筈んだけど…」

『途中で手を離れたんだろう。結構中は力が荒れ狂ってたからな。』

…近くにウォーロックとハーブの電波反応はねえな…』

そこでふと、ツカサは思い至る。

「…連絡とってみよう」

そこで初めてハンターV.G、ブラザー画面を覗くと、二人との絆は繋がっていたが、それ以外の一同の絆が切れていた。

>…少なくとも、二人と…ワイザードは無事、つてことか  
「だね。とりあえずメールつと…」  
メールを打って、とりあえず二人に送った。しかし、受け取り拒否、  
という表示が出た。

このとき既にスバルは電池残量と、ウォーロックが勝手に出てくる  
事を考えて、ハンターV.G電源を切り。

ミソラは炎山達に状況説明をするために、科学省にいて、ついでに  
スバル同様、電池残量を考えて電源を切っていたので、どちらにも  
届く事はなかった。

「…電源切ってるかも」

>まあ、何かあったんなら…電池考えるところかつに、つけっぱなし  
はできないしなく

ヒカルが腕を組んで呟く。

ツカサはじゃあ僕も切っておこう、と呟き電源を切った。

「…とりあえず、下に降りて…」

開こうとしたドアはがっちり施錠されており、開かなかった。

…となると、下に降りる方法は、これしかなくなる。

「…電波変換、双葉ツカサ、オンエア」

『えらくやる気のねえ言い方だなオイ』

電源を切っているので、必然的にこうなる。

ジエミニニからのツツコミを受けながら、ツカサは電波変換して、か  
なり足場のやばいウエーブロードしかなかったので、建物の屋上を  
経由しながら、下に降りた。

物陰で電波変換をとき、路地に出て辺りを見回し。

「…どこに行けばいいのかな？」

『どっか…電気屋のラジオとかで聞けばいいんじゃないか？』

「…それもそうだね」

< > < > < >

現在、ツカサの目の前には、パレード真っ最中という、楽しそうな国民達がいた。

ふんわりと柔らかい髪をして、ティアラを頭にそつと載せている、女王を乗せた車が緩やかに進んでいく。とても綺麗で、雰囲気も柔らかく、国民の人たちに事細やかに手を振り返している。

そして、夕方まで粘りに粘って、ようやく分かった、現在地…と、  
現在時間。

「…ここ、クリームランドなんだね…」

『…しかも二百年前とは、めんどくせえなおい』

ツカサはとすん、と石段に腰を下ろして、ふう、と息を吐き出す。

「ほんとだよね…お金もないし、連絡方法もないし。下手に動く遭遇できないだろうし」

『…まだあいつらがいるところだったら動きやすかったかもしれないな』

あいつら、とはスバルとウォーロック、ミソラとハープ達である。

「せめて二人とも、合流していると良いんだけどね」

『お前は良いのか？』

ジエミニの言葉に、ツカサは少し考え込むような仕草を見せてから。

「んー…ちょっと怖いな、って思っただけど…」

『けど?』

ジェミニの言葉に、ツカサはジェミニを見上げ、次に自分の胸に手を当てて柔らかく微笑んで。

「傍に、ジェミニとヒカルの二人がいるから、大丈夫」

>…言うようになったな、お前もく

『ははっ、面白いことを言うな、ツカサ』

二人はそれぞれ、居をつかれたような表情をして、嬉しそうな表情を浮かべる。

「けどね、」

しかし、不意にツカサは前触れなくそう呟き。

「…おなかすいたのだけは、傍に誰がいようとどうしようもないね

……………」

ぐう、となるお腹をさするツカサに、ジェミニとヒカルから出た一

言は。

『…電波変換してる』

>…電波変換してるよく

だった。

< > < > < >

パレードを真横に見ながら歩くツカサは、隣で同じように歩くヒカルを見ながら、口を開く。

「確かに電波状態だったら、関係ないよね。空腹とか」

「ったく、いきなり何を言い出すかと思っただぞ、俺は」

『右に同じだ』

ヒカルとジェミニの言葉に、ツカサはでもさ、と前置きして。

「お昼食べてないし、お昼ご飯の入ったお弁当は、未来なんだから。しかもお金ないし。普通の人間はお腹すくに決まってるじゃないか」  
『人間はそこが不便だな。電波なら腹は減らない』

うんうん、とヒカルが頷く。…どうやら、『お腹がすかない』というそれは、身体の主導権を持たない方の二重人格にも適用されるようである。

「この国、平和だね」

「確かに。そういやお前、この時代の歴史習ったろ」  
ヒカルの言葉に、ツカサは頷く。

「うん。光熱斗とロックマンにより、幾度も世界が守られたって。スバルくんもロックマン、って名乗ってるし…この名前って、何かあるのかもしれないね。世界を守るための名前とか」

「あ…そうかもしんねえな…」  
そういわれると、自分達の知るシューティングスター・ロックマンといい、歴史で知るロックマンといい、確かに世界を救っている。

そんな他愛ない話をしながら、ツカサとヒカルが歩いていると。

「きゃああああああああ！！」

「うわあああああああ！！」

急に悲鳴が上がリ、そちらを見やると、未来のウィルスと似ている過去のウィルスが実体化していた。何か、棒のようなものが大量に突き出っていて、それに合わせて先ほどまではなかったシールドが出来る上がっていた。

啞然、と見ていたが、ウィルスに襲われている人たちがいて、ツカサはきつ、とした表情で駆け出す。

やや遅れて、ヒカルも駆け出す。

「いくよ、ヒカル!!」

「めんどくせえ!!」

「そんな事いわない!!バトルカード、ミサイルレーダー!!」

ツカサはそういいながら、バトルカード、ミサイルレーダーを使う。無属性のウィルスのうち、大半が消し飛んだ。

流星に速さがあって逃げたのもいたが、無属性はともかく、大半が消えた。

「こんだけへりゃ、避難も何とかなるだろ…サンダーソード!!ツカサ、お前はちっせえガキとか優先的に避難させやがれ!!」  
「そうやって振り分けられるのは、穏やかであるかどうかという、性格の問題だろう。」

「分かった!!無茶はしないで、ヒカル!!」

「分かっているっての!!やるぞ、ジエミニ!!」

『おう!!』

ヒカルが相手を引き受け、ツカサは逃げ遅れた人たちを安全な場所へ運ぶ。

怪我をしているお年寄りを背中に背負い、小さい子たちを抱きかかえて、ツカサはシールドの淵、ぎりぎりにまで走った。

「大丈夫。落ち着いて避難して。ね?」

ツカサの言葉に、こくこく、と頷く。

それを何度か繰り返し、ツカサは周波数を感じ、最後の避難者を見つける。

「最後は…あの子だけだ!!」

瓦礫に隠れるようにしていた小さい男の子は、ツカサの姿を見て、悲鳴を上げる。

「大丈夫、お母さんのところに連れて行ってあげるからね」

怖くない、と言った風に右手で、その頭を撫でてやる。すると小さい男の子は、ツカサの左腕にしっかりと掴まってくれた。

「飛ばすよ、しっかりと掴まってるね!!」

言うなり、ツカサは地を蹴って安全なルートを確保しながらシールドの、淵に急いで駆けた。しかし。

「…ツカサ、逃げる!! その建物に攻撃があたる!!」

「え?」

ヒカルの焦った声に、ツカサが上を見上げると、ドオオン、と音がして、建物の一部が崩れて落ちてきた。子供を抱えて急いで跳ぶが、距離が足りず、瓦礫の下敷きになる、と思わず覚悟したとき。

「キングダムクラッシュャー!!」

ツカサめがけて落ちてきた瓦礫が、突如出現した鉄球に砕かれた。

「な…なに?」

「大丈夫ですか!」

真っ白い、右手に鉄球の鎖が繋がった、騎士の兜を被った女性が、後ろに立っていた。

「は、はい。…あ、早くこの子を避難させなきゃ!!」

しかし、すぐさまツカサの目の前に、ウィルスたちが立ちはだかる。

「させない!! ロイヤルレックキングボール!!」

しかし、白い騎士の女性は、鎖を回転させて、鉄球を振り回し、それを投げる。まっすぐに、道が開く。

「今のうちに！！早く！！」

「はい！！」

ツカサは必死でこちらに向かってこようとする女性を見つけて、小さい男の子を、その女性：お母さんに渡して、急いで先ほどの場所へかけ戻る。

白い騎士の女性は、ウィルスを何体かいつぺんに消しているが、それでも、どうしても避けきれない攻撃があった。

「危ない！！」

「ロケットナツクル！！」

焦るツカサの声に重なるようにして、ヒカルの腕からロケットナツクルが放たれた。

「手間かけさせんなよ！！」

たっ、と着地したヒカルは、女性にそういって、ウィルスの群れに突っ込んでゆく。

「無茶はしないでください！！」

ツカサが駆け寄りさういうと、白い騎士の女性は、頷いて。

「…でも、私は最後まで戦うわ。…私はこの国の王女。守るための力があるのに、何もしないでいるなんて、できない！！」

そういって、ヒカル同様、ウィルスの群れに突っ込んだ。

王女様だったのか、とツカサとヒカルとジェミニは内心で突っ込んで、ツカサもやや遅れてウィルスの群れに突っ込んだ。

< > < > < >

ウィルスがツカサとヒカル、白い騎士の手により一掃されて、シールドが解けると、白い騎士の姿が薄れて、代わりにこの時代の通信



端末PETと、先ほど見かけた王女が出てきた。  
ツカサもやや遅れて、電波変換をといた。

「…あなた…」

王女は目を見開いて、PETとツカサの顔を交互に見て。

「…双葉ツカサ…くん？」

「…そう、ですけど…なんで僕の名前を…」

ツカサが首を傾げると、王女はPETを差し出し、一枚の写真と、  
文章を表示させる。

「光博士から、あなたを探して欲しいと連絡が」

映し出された写真は、確かにツカサで、ハンターV.Gをつけている。

>…光博士って誰だよ？<

「この時代の有名な博士ですよね？ええと…」

ヒカルの答えに返答もかねて、ツカサは王女に訊ねた。

「私はプライド。気軽にプライドって呼んでくれて構わないわ」

「はい、それで…」

ツカサの質問に答えてなかった、と言った顔をして、クリームラン  
ドの女王…プライドは頷く。

「あ。ええ、ツカサの言うとおりそうよ。…でも、ニホンの科学省  
に行くにしても遠いし、疲れたでしょう？」

そのプライドの質問にツカサの返答はなく、くうっう…と何か、お  
腹が鳴るような音がして。

「…お腹すいた…」

ぐったり、とツカサはその場に座り込む。

『そういや、お前が電波変換してたのは空腹からだっただけ…』  
ジエミニの言葉に、ツカサは力なく笑って、プライドは。

「じゃあ、一緒に来て。…あなたはこの国を守る事を、手伝ってくれたヒーローだもの。誰も文句は言わないと思うわ」

プライドに半ば引きずられるようにして、ツカサがたどり着いた場所  
所は、やはり。

クリームランドの、王城であった。

「……わー」

『流石王城。FM王の宮殿みたいだ…』

>そういやお前、右腕だったなく

『あ、そう言えばジエミニはFM王の右腕だったね』  
同時にヒカルとツカサは呟く。

とりあえず食事の前にお風呂で身体を洗って、出されたものを好き嫌いなく、食べれるだけ食べて。プライドの案内で、ツカサは小さな部屋の前にいた。

「この部屋を使ってね、ツカサ」

「うわー!!」

『広いなオイ』

ツカサは驚愕してその場に固まり、ジエミニも突っ込みを入れる。  
小さな部屋、といっても王城なので、随分と普通の宿屋の部屋に比べると広いのだ。

「一応、一番小さい客室なのだけど…そんなに広いかしら？」

こくん、とツカサは頷く。

でも、と前置きをして。

「なにからなにまで、ありがとうございます…」

「いいえ。あなたのおかげで幸い、重傷者や、死者は出なかった。

アレだけ大量のウイルス……私一人じゃ、きっと死者どころか重傷者さえ出さずにいる事は、難しかったもの。…ゆつくり休んでね」  
クスツ、とプライドは微笑み、その後、酷く寂しそうな瞳をする。  
それは、力のない自ら悲しむ瞳か、そう分かるだけの力しかない自らに苛立つ瞳かは、判断が付かなかった。

「はい、おやすみなさい」

プライドに頭を下げて扉が閉まったのを確認して、ツカサは、天蓋つきのふわふわなベッドにもぐりこんで、目を閉じるや否や、眠りの淵に引きずりこまれた。

今日一日の出来事を、整理する暇もなく引き込まれた辺り、疲労はピークだったようだ。

…迎え入れられた先が王城という、緊張から来る精神的な疲労が。

< > < > < >

その後、科学省で徹夜復旧を完全に終了させ、その後すぐにプライドから『双葉ツカサを保護した』、とメールで知らせをもらった祐一郎は、ひとまず『星河スバル、双葉ツカサの保護』と『科学省復旧』という、今現在の心配事の枷が取れたようで、その場に倒れこんで寝てしまった。

しかしその後すぐに、交代で来たばかりだが、事情をきちんと知っている科学者たちにより、担架で仮眠室に運ばれた。

だが、光博士が倒れた事により、スバルや熱斗、一同はツカサが保護された事を知らないままだった。

## 明日の予定（前書き）

昨夜眠い中書いたので、ただでさえ低クオリティなのが、更に低クオリティですよ…支離滅裂すぎる…

そんなこんなで、テストが近いので、更新が遅くなるかもしれませ  
ん。

## 明日の予定

そんなツカサの状況を全く知らない、ニホンにいる未来組二人。時差があるので、ツカサがクリームランドを、絶賛さ迷っている時間帯にまで戻して、一旦こっちの話も進めよう。

< > < > < >

まずはスバル。

熱斗の家にたどり着いてまずは説明。

「……と、言うわけなんだけど」

「それは良いけど、熱斗の部屋に泊めるのもねえ……」

そういつて熱斗の母、光はる香はふう、とため息をついた。

「え？」

熱斗が首を傾げ、ついでにスバルも首を傾げる。

「だってスバルちゃん、男の子の部屋は気にするんじゃないかしら？」

「『え』」

熱斗とロックマンは、そろって絶句する。

「いえ全く。家の部屋が、男の子みたいになってます」

はる香の一言を、さっくりスバルは否定する。

が、はる香はそうはいかない。

「……でもねえ……あ、私と一緒に寝る？タブレットだから、スバルくんもゆったり寝れるわ」

「……じゃあ、お言葉に甘えます」

スバルは躊躇った後、そう返事をする。

はる香はばん、と手のひらを合わせて微笑む。

「はい、決まりね。…あ、でも服はどうしましょうか…」

「今日の分の下着は、ちょっとデパートによる用事があったので、買いました。…パジャマはないんですけど…」

スバルは斜めがけのリュックサックを一度軽くゆすった。

スバルの言葉に、はる香は大丈夫よ、と肩に手を置く。

「熱斗の小さいころのがあるから、出しておくわ。だから、お風呂に行つてらっしゃい。ゆつくりね」

「はい。ウオーロックはここにいてよ」

スバルにしか、ビジライザー越しに見える相棒にそういつて、スバルは風呂場に消えて行った。

「…ママ、いつからスバルが女の子だつて気づいてたの…?」

『…僕も気が付かなかつた…』

全然気が付かなかつた一同の中で、一番最初にスバルが『女』だと知つた熱斗とロックマンは、ぎぎぎ、と音を立てる首を、なんとかかんとか、はる香のほうへ向けて、問いかけると。

「最初からに決まつてるわよ。だって、髪長いし、身体のラインがとつても柔らかいじゃない」

との返答をいただく事となつた。

< > < > < >

続いて、ミソラ。

ジャスミンが住んでいる動物園の、ジャスミンの部屋に来て、全員

お風呂に入って、パジャマに着替えた。

ミソラの着ているパジャマは、ジャスミンのチャイナパジャマである。メイルは泊まりに来た事があるので、ハートがあしらわれたパジャマを着ていた。

今は夕飯も食べて、女の子のトークタイム突入である。

「へー…ジャスミンって動物園に住んでるんだね」

「修行でこっちにきて、それ以来ずっとネ。いい修行になるネ」

ジャスミンは机の椅子に、ミソラはベッド、メイルはソファにそれぞれ座っている。

『…そう言えばミソラちゃんとハープって、すごく強いよね』

『そうそう！！一人で戦えるって凄いわ！！』

ミソラは互いにフォローしあわねば、厳しいところのあるロールやメディと違い、一人で戦えるのだ。

「私なんかまだまだだよ。スバルくんの方が戦闘歴長くて、強いもん」

ミソラがジャスミンのパソコンに写る、ハープにそう告げると、随分と謙遜しちゃって、と笑われた。

「あー…確かにすごく強いよね。…圧倒的だったし…」

「確かに、凄く強かったネ」

メイルとジャスミンの脳裏に、様々な姿に変わるスバルの姿が浮かぶ。

「あの力…ペガサス、ドラゴン、レオ…あれはスターフォースって言って、スバルくんと、ロックくんの力だから。スバルくん曰くハープと私じゃ、あの力に全然、波長が合わないんだって」

『へー…』

『波長が合わない…まるでクロスフュージョンみたいね…』

『まあ、そういえるかも』

ロール、メデイ、ハープもその会話に興味を示す。

「…ところで、スターフォースがスバルくんには使えないのって…なんで、ハープ？」

不意に、前々から持っていたらしい疑問を、唐突にミソラは訊ねた。

『あの力はAM三賢者…つまり、AM星人の力なの。そしてウォーロックも、AM星人。だから、FM星人である私じゃなくて、AM星人のウォーロックに波長が合うのは当然ってわけね』

えーえむせいじん？とメイルが呟き。

えふえむせいじん？と、ジャスミンが呟いた。

ミソラが傍にあったペンと紙を引き寄せる。

『人』プラス『電波体』と書いて、最後に、と『電波人間』と書いた。

「私達がさつきみたいな姿…電波変換するには、パートナーとなる電波体…つまり、私達からしてみれば、宇宙人が必要になるの。言うなら、クロスフュージョンみたいなものかな？」

ねえハープ、とスバルが問いかけると、ハープは頷き。

『スバルの場合は、そのパートナーがAM星人だった、って訳なの…なにもあんながさつをパートナーにしなくても良いんじゃないかしら…』

ハープは、本音からそう呟いた。



「お父さんの手がかり、ロックくんしか持ってなかつたんだって」「ミソラがそういうと、ハープはそうだったわね、という表情をする。ええと、と話についていけず、視線を向ける一同に、ミソラとハープが言った言葉は。

「スバルくんのお父さん、宇宙で行方不明だった時期があつたんだ。そんなときに、ロックくんに出会ったんだって」

『そういえば、自殺しようとした事もあつたっていつてたわね』  
ちよつとハープ、それは言っちゃ…と、ミソラが言う前に。

「『自殺!?!』」

ハープの言葉に、マイルとジャスミン、ロールとメデイの音が綺麗にハモつた。

< > < > < >

「くしゅん!!」

盛大に、スバルはくしゅみをした。

「どうしたんだ、スバル?」

「どうしたの、スバルちゃん?」

現在光家は夕飯の真っ最中だった。ちなみに夕食はハンバーガーカレーとサラダである。

唐突にくしゅみをしたスバルに首を傾げて、熱斗とはる香が顔を覗き込んでくる。

「い、いや…なんか、噂されてる気がして…でも、はる香さんの料理凄くおいしいですね」

「あら、ありがと。そう言っただけでありがたいわ」

恥ずかしそうに微笑むはる香は、不意に二人を交互に見て。

「…そういえば、明後日から二人とも外国に行くんじゃないの？」

「うん、そうだよ。でも、旅行鞆とか引つ張り出したり、スバルの服、どうしようか…」

熱斗がはる香を見ると。はる香はあっさりと言い切った。

「お金はママが出すわ」

「あ、あの。この時代のお金僕持ってます！！だから、お金は大丈夫…」

流石にそこまでは、というスバルを押しとどめて、はる香と熱斗は笑い。

「いいのいいの。という訳で、二人ともリストを渡すから、明日買出しに行つてらっしゃい」

という事で、スバル & amp; 熱斗の明日の予定は決まった。

< > < > < >

「そついえば明後日から海外だよな」

「まずはクリームランドに寄るらしいネ」

「とりあえず、明日はショッピングだし」

早めに寝ようよ、と言ったメールの言葉に。

「のんびりお買い物ー！！」

『良かったわねえ、ミソラ』

両手を挙げて喜ぶミソラと、それにくすくす、と微笑んで見せるハープ。

という訳で、こちらも明日の予定は決まったのだった。

## PET入手

そして、流星&amp;mp;音符組のいる二ホンの、翌日。

< > < > < >

「それじゃ、いってきまーす」

「いってきます、はる香さん」

肩にいつも通りのリュックを背負った熱斗と、斜めがけのリュックサックの中にあつた、制服をハンガーにかけてはる香のクローゼットにしまつて、リュックの中を空にしたスバルは、光家玄関にいた。

「いつてらつしゃい。気をつけてね」

穏やかに微笑んで見送るはる香に、二人は手を振つて、秋原駅に向けて歩き出した。

「ところで、熱斗くん。どこに買い物に行くの？」

「んー…まずは…デンサンシティ、かな」

スバルの質問に、熱斗は唇に指を当てながら、

「ほら、スバルの使ってるのは未来の通信端末だろ。こつちじゃ使えないしさ」

「あ…そうだった…」

熱斗の言葉に、スバルの後ろにいたウォーロックはうんうん、と何度か頷いた。

『ウォーロックくんは、僕らにも電脳世界か何かを介さないと、見えないから。言い方悪いけど…おばけみたいでやだなあ…』

「そついやロック、お化け苦手だもんなあ。毎回悲鳴を上げるし。」

ナビなのに、珍しいって言われてるぞ」

『し、仕方ないじゃないか！怖いものは怖いんだから！！』

怯えるようにそういったロックマンをからかう様に熱斗は言って、  
ロックは熱斗の肩で抗議する。

「こ、怖いものは仕方ないよ」

ね、となだめるように言ったスバルの頬も、若干引き攣っている。  
それを見逃すウォーロックではない。

『スバルも怖いのは苦手だもんなあ』

「怖いものは怖いのっ！…克服したいなとは思っけど」

ウォーロックの言葉に、思いつきり叫び、小さい声で努力はしている  
ような言葉を呟く。ちなみに、その努力が、実る事はないのが実  
状である。

「…スバルもお化け苦手なんだな。…ロックマンで、お化けが苦手  
な性格なのか…？」

「さあ…でも、僕はお化け大っ嫌いだからね」

…語尾に音符をつけて、満面の笑みを浮かべるスバルの瞳は、全然  
笑っていやしなかった。

< > < > < >

「ジャスミン、やっぱり最初は…」

動物園のある町の駅で、行き先をメールが示すと、ジャスミンはこ  
つくり、と肯定を示す。

「最初はやっぱり、デンサンシティに行くのがいいネ」

「デンサンシティ？」

「色々な電化製品がそろっている街なの。ミソラちゃん、PET持

つてないでしょ？」

「あ……」

そうだった。現在ミソラの腕についているのは、PETではなく、ハンターV Gなのだ。

「で、でも…高いんじゃない？」

ミソラがおろおろしながら一人に訊ねると、二人はにっこり笑い。

「安心して、ミソラちゃん。私、それなりに稼いでるのよ？」

「私もそれなりに稼いでるネ。マイルと合わせれば大丈夫ネ」

クロスフュージョンできる人が貴重だから、と毎回戦うことに報酬が出ているのだ。

「という訳で向かうはデンサンシティネ！！」

ジャスミンの言葉で、一同はデンサンシティに向かった。

< > < > < >

現在、朝食を食べ終えたツカサは、ブライトに小さな箱を渡された。

「開けてみて。ツカサ」

がさがさ、と箱を開けてその中に入ったものを取り出したツカサは、目を瞬かせた。

「…これは…PET？」

ブライドからジェミニのマークの入った白と黒のPETを渡され、ツカサは首を傾げた。

「あなたが使っているのは、未来の端末だと先ほどニホンの科学省職員から、連絡が入ったので…そのままでは不便でしょう？」

「…そういえばそうですね。ありがとうございます、プライド」  
ふふっ、とプライドは微笑み、ツカサはありがたく貰った。

<> <> <> <>

PET売り場でPETの色で悩むスバルの横で、付属品売り場を見  
ていた熱斗は、スバルを振り返る。

「スバル、どの色にするんだ？」

「…これ、かな」

青をメインにした、薄い黄色のPET。それは、夜空を駆ける光の  
ような色合いだった。

それを持って行くと、やはり当然ながら店員に訊ねられた。

「マークはどうする？」

「このペンダントの形にして欲しいんですけど…」

スバルは胸元で揺れるペンダントの紐を僅かに持ち上げて、それを  
示す。分かった、と頷いて、すぐさまできた平らな流星の形のプレ  
ートを、カチリ、とはめ込まれてPETを渡され、それを自分で買  
ったホルダーにはめた。

熱斗はメモ用紙を引っ張り出し、えーと、と唸り。

「じゃあ、次は服と鞆と、旅行用生活必需品で…」

「あ、このお店だっけ？」

スバルが小さく書かれた地図と住所を示すと、熱斗はそうだな、と  
いって二人は頷きあい。

「じゃあ、行こうぜ」

「うん」

熱斗の先導で、スバルたちは店を後にした。…ちなみに気づいてい  
なかったが、入れ替わりにミソラたちが、PETコーナーに来てい

たことを知らなかった。

ミソラは黄色とピンクの鮮やかな色合いの、音符のマークが入ったPETにした。

< > < > < >

特に騒ぎに巻き込まれる事もなく、何度も確認しながら買うべきものを選んで、二人は安全に家に帰宅したが。

「…っ、つつかれたー…」

鞆に買ったもの全てを入れて、それを引いて二人はぐったりと倒れこむように、玄関の入り口に座り込んだ。

「お帰りなさい、熱斗、スバルちゃん、ロック、ウォーロックくん」

二人ははる香に迎えられて、顔を上げる。

「ただいま、ママ」

『ただいま、ママ』

「ただいま、はる香さん」

『ただいま、おふくろさん』

ウォーロックの言葉に、いち早くスバルが突っ込んだ。

「ロック、僕んちじゃないんだから、そういう呼び方は…」

「いいわよ、スバルちゃん。結構新鮮で珍しい呼び方なもの」

ふふ、と微笑むはる香の笑顔に負けて、それ以上スバルはウォーロックを追及しなかった。

「お疲れ、ご飯まで準備してたらどうかしら？明日の出発は早いみたいだし」

二人ははる香の言葉に、一も二もなく従った。

< > < > < >

こちらもそれぞれ一通り買い揃えて、メイルだけは家に一度帰らねばならないので、分かれることとなった。

「じゃあね、メイルちゃん、ロール」

「また明日ネ、メイル、ロール!!」

「じゃあね、ミソラちゃん、ジャスミン」

女性陣はそれぞれに分かれて家路に着いた。

< > < > < >

明日は、星のお姫様と、光の王子様の再会。

それは、どんなやさしさをもたらすのだろうか。



## PET入手（後書き）

…最後、童話風な言い方してみたのは、今のところぜんぜんラブラブに見えないから、フラグを立てようかと。

## 番外編02（前書き）

…投稿する時間がなかなか取れないので、誤魔化しもかねて（コラ）  
あと、キャラ崩壊もあるので、苦手な人はスルーの方向で。

## 番外編02

光熱斗（以下：ね）「こんちわ！！またまた来ました番外編！！つてことで話を進めるのは『ロックマンエグゼ』主人公こと、この俺、光熱斗とー！」

ウォーロック（以下：ウォ）「よおー！！『流星のロックマン』主人公のウィザード、ウォーロックだぜ」

ね「前はロックとスバルだったから、この前出てなかった俺とウォーロックで話を進めて…『ていうかだべれ。つか、だべってきやがれ』、だつて」

ウォ「…なんか作者、精神状態やばくねえ？」

ね「なんだか今日は簡単なテストですんだらしいんだけどさ、…次週が苦手科目の連打なんだつて」

ウォ「地球人は大変だな…てすつてのがあつて」

ね「まあ、そんなやばい時期に投稿するほうが大変だと思うけどな…点数とか」

ウォ「まあそれはいい。で、何をだべれと？」

ね「あ、うん。えーと『自分のパートナーについてだつて」

ウォ「…自分のパートナーに対しての愚痴ならあるぜ？」

ね「え？なんか以外だぜ。スバルってそんなのから縁遠いかと…」

ウオ「…と、に、か、く寝起きが悪い。毎朝毎朝、俺だって苦勞してんだ！あと、星を見に行ったら無言で二時間も三時間も付き合わされて、こっちは暇なんだー！！」

ね「…なんか、ロック（エグゼ）の愚痴聞いてる気分だ…」

ウオ「…んで、後は風呂と着替えか」

ね「なんでまた、風呂と着替え？」

ウオ「あいつ女って事忘れてるときと忘れてないときの差が激しいんだよ！！忘れてなかったら自然に外に出てけるが…忘れてたりしたらいきなり目の前だぞ！？しかもその後問答無用で、ハーブたちにはこられるしよ！！俺が何したってんだ　！！」

ね「…スバルの着替え見たからじゃないのか？」

ウオ「俺のせいか!？」

ね「…まあ、それについては触れない方向でいくか」

ウオ「俺の切実な叫びは無視か!！」

（無視）ね「…えーと…とにかく口うるさいし、説教好きだし…」

ウオ「あ、それはスバルも一緒だな」

ね「あ、やっぱり？でもさあー…」

ス「口

っク

う…?」

E「ね

っどくう

ん…?」

バキベキボキ。(セツト壊して登場)

ね&amp;mp;ウオ「い…いつからそこに…?…ていつか、めが「わ…」

ス&amp;mp;E「いっぺん地獄に落ちろおおおおおおおおおおっ!」

番外編02（後書き）

熱斗のキャラがうまく掴めてない……スバル&amp;ロックのキャラ壊れた……短い……短い……

過去での再会（あとがきに、番外編の詳細）（前書き）

テストがようやく終わったあああああああ…きつといろいろ死ぬる。点数で。

## 過去での再会（あとがきに、番外編の詳細）

そして、出発の日。

はる香と、この時代のチップショップの店主、日暮闇太郎と、その従業員、城戸舟子、そして熱斗の同級生氷川透に見送られて、一同は飛行機の中にいた。ちなみに、祐一郎、名人はいまだに科学省復旧に関わっていて、見送りにこれなかった。

この飛行機に乗ったメンバーは、

星河スバル

響ミソラ

光熱斗

桜井メイ

伊集院炎山

メイ

ジャスミン

ディンゴ

六尺玉燃次

そして先ほどスバルとミソラが初めて会った、熱斗達の同級生、

大山デカオ

この飛行機の所有者、

綾小路やいと

がいた。



チャーリーとテスラはチャーリーのヘリで行くそうだ。

とりあえず、乗って最初に絶句したのが、内装だったりするスバルとミソラであった。

「…ふかふかなソファアがある!!」

「…ふわふわなベッドがあるわ!!」

金持ちや豪華、と言ったものから縁遠い二人は、そう叫んで絶句する。

家の居間、みたいにも見えた。

委員長も社長令嬢だが、さすがに自家用の飛行機は見たことない。

「ソファアは好きなどころに座つて。ベルトはしっかりね」

そういつてやいとは四人がけのソファアに腰を下ろす。その隣に、早くも順応したミソラと、ジャスミンと、マイルが腰を下ろす。

「だつてさ、行こうぜスバル」

熱斗とデインゴにポン、と背中を叩かれて、スバルは肩に乗っているウォーロックのホログラムを見る。

「……」

『行きやーいいだろ』

熱斗とデインゴとデカオは、四人がけのソファアに座っている。

そして、そのソファアに向かい合うようにしておかれたソファアに、炎山、燃次が座っている。

スバルもそこに座ろうかと思つたが、傍にあつた本棚に何気に目が行つて、そこに星の本を見つけて。

すぐさまその傍にあつた一人がけのソファアに座つて、スバルの手のひらほどの幅がある本を引っ張り出した。

『はええなおい!!』

ウォーロックの突っ込みも何のその、星に関する本を読むスバルは、止めようがなかった。

<> <> <>

同時刻、クリームランド。

プライドは執務室に籠って仕事をしているので、ツカサはクリームランドの図書館に来ていた。

「広いなー……」

『ホントだな。で、何を読もうと思ってるんだ』

ツカサの肩に乗った、ジェミニのホログラムは、ツカサに問いかける。

「この時代のPETとか、そついうのが詳しく書かれた本かな？」

> 司書に聞いた方がはええぞ<

やれやれ、と言った口調で、呟くように言うツカサ。

「分かってるって、ヒカル」

ツカサはヒカルの言葉に返事を返し、足を踏み出した。

<> <> <>

「わあー」

いつもと違った景色に、ミノラは感嘆する。

「スバルくん、スバルくん、下見て、凄いやー!!」

窓際にいたミソラが、本に集中しているスバルを手招きする。

しかし、スバルは反応せずに黙々と本を読んでいた。目が右から左へと移ってゆくことの繰り返しだ。

ちなみに、五分の二ほど読み終えていた。

「……………」

むう、とミソラは目を半眼にする。しかし、めげずに呼ぶ。

「わぁー、雲が真下にあるよ！！ほらほら、スバルくん見て！！」

「……………」

ぱらり、と本をめくった程度で、反応皆無。

「……………ミソラちゃん、どんまい」

そういつたマイルが代わりに窓を覗き込む。

「……………マイルちゃん……………」

こちらを見るミソラの瞳が、ありがとう、と語っている。

「そういえば、やっぱりミソラちゃんの好きな人って……………スバルくん……………」

ふと、マイルはミソラにそう問いかけるが、どんよりした雰囲気です。ミソラは首を横にふった。

「……………私だとスバルくんと付き合うのは、無理なんだよね……………」

「何だよ？チャレンジもしないで諦めるワケ？」

やいとも、ミソラを覗き込んで問いかける。

しかし、ミソラはでも、と呟く。

「……………チャレンジ以前の問題で……………って、あれ？言ってなかったっけ？」

「何をネ？」

きよとん、とマイル、やいと、ジャスミンは首を傾げ。

「スバルくん、女の子だよ」



< > < > < >

『ツカサ、通信だぞ』

図書館で数冊の本を傍らに積み上げて、黙々と読んでいたツカサはジエミニの声で、それを中断した。

「誰から…って、決まってるね」

『そのとおりで、プライドだけどな』

ツカサはいつもの癖で訊ねて、今自分の持っているPETにアクセスできる一人を思い出す。

ジエミニは頷いて、通信を繋いだ。

「はい、ツカサです。どうしたんですか？」

小さな画面に映るプライドは、頬を僅かながら紅潮させて、楽しそうに笑っていた。

284

『ツカサ、貴方の仲間と一緒に私の友達が来るの！！一緒に行きましょう！！』

「…仲間って…スバルさんと、ミソラちゃん？というか、どこに…」  
ツカサが首を傾げていると、プライドは優しく微笑んで、答えを口にした。

『空港よ。図書館の前に出ていて。迎えに行くから』

「はい、分かりました」

かたん、と椅子を引いてツカサは本を返しに向かった。

< > < > < >

「おもしろかった」

『へいへい。そりや良かったな』  
分厚い本を閉じるなり嬉しそうに、スバルはそう言った。  
ウォーロックは正反対にくったりと、相槌を打った。

『お前、全然反応しねえんだもんよ…人が散々…』

「え？ロック、何か言ってたの？」

ウォーロックが嫌味をこめて言おうとすると、スバルはきよとんとそう返す。

『……ったく、俺は寝てるぞ！！』

「ちょ…ロック？どうしたの？」

拗ねてスリープモードになったウォーロックに首を傾げながら、スバルは本を本棚に直した。

「スバルくん、下見て、凄いよ！！」

再び窓際にいたミソラが、スバルを手招してる。

「そっなの？」

スバルは窓際に歩み寄って、窓の下を覗き込む。

「わぁ、本当だ凄い！！」

「でしょ？」

スバルとミソラは、顔を見合わせて笑う。

「…ミソラちゃん、強い…」

「本当だわ…」

「ファイトネ…」

メール、やいと、ジャスミンは揃って、ミソラの打たれ強さに感心し。

「…本当に本を読んできるときって、スバル、何言っても聞こえないんだな」

『熱斗くんも見習ったら？勉強に関して』

読書時のあまりの外部拒絶っぷりに、感心した熱斗にロックマンからの正論が飛び、隣で炎山とブルースに揃って頷かれた。

「すげえな…俺らのカレーの仕込みぐらい、集中してたぞ…」

「ホントだな…」

「花火も繊細だから、あれぐらいやらねえとまずいか…」

細やかな作業が求められるディンゴ、デカオ、燃次はううむ、と悩んだ。

『まもなく、クリムランド空港です。座席に着き、シートベルトを着用ください』

そんな一同の元に、ナビのその台詞が届く。

「え？そんなに時間経ってたんだ…」

『…時間の流れさえシャットダウンしてるんだ…』

スバルがきょとんとし眩くと、ロックマンは本当に凄いなあ、と咳いて、感心すると同時に、呆れたのだった。

< > < > < >

「……あ、あれですか？」

ツカサが指した先には、ピンク色の飛行機。

「ええ。熱斗のクラスメイトで綾小路やいとさん、と言うのだけど、彼女の飛行機だそうよ」

ブライドがそういうと、ツカサは絶句した後。

「…飛行機持つてるって…」

ようやくそれだけ呟いた。

委員長も資産家令嬢だが、自家用ジェット機を持っている、なんて聞いたことない。  
どこまでがお金持ちか、という感覚が全く理解できない、ツカサであつた。

< > < > < >

荷物を受け取った一同は、出迎えロビーに来ているはずの人物、プライドに会うために、辺りをきよるきよる見ていた。

熱斗曰く『かなりの美人でふわふわ金髪で、俺見たら一直線に抱きついてくる友人』だそうだ。

「…大雑把だな」

それを聞くなり炎山がそうだったが、熱斗は。

「こういわないと、プライドが誰か、なんてスバルたちが分からないじゃん」

両手を腰に当てて、きつぱり言い切る。

炎山はしかしだな、と前置きをして。

「もう少し説明と言う…」「…ねつとー!!」

炎山の説明を遮り、ぎゅう、と金髪のふわふわな女性が、熱斗に抱きついた。

スバルとミソラはビックリして、固まる。

「プライド、久しぶり!!」

「久しぶりね、熱斗。元気だったかしら？」

熱斗の言うとおり、確かに



かなりの美人  
ふわふわ金髪

熱斗を見たら一直線に抱きついてくる  
に、当てはまった。

しばらく二人とも抱擁していたが、プライドがぼけっ、と突っ立つ  
スバルとミソラに気づいた。

「…あら？こつちの人たちは見慣れないけれど…」

「あ、今回この国に来る理由になった、星河スバルと、響ミソラち  
ゃん」

熱斗はプライドに離してもらいながら、スバルを指してから、ミソ  
ラを指した。

じい、とプライドはこつちを見ていたが。

「かわいい!!」

「うあっ!?!」

スバルも熱斗同様、ぎゅう、と抱きしめられた。いきなりすぎて硬  
直したスバルは、あちらこちらに視線を彷徨させた。

「あ、自己紹介がまだだったわね」

そして、プライドはそういつてようやく開放した。

「私はプライド。よろしくね、スバル、ミソラ」

そういつて差し出された手を、二人が握り返した途端。

「ちなみにプライド、クリームランドの王女様だよ」

と言う熱斗の声で、無言で固まったのは言うまでもない。

しかし、それは一人の声で壊された。

「スバルくん！！ミソラちゃん！！」  
後ろから聞こえてきた声に、びくっ、とスバルとミソラの肩が跳ねた。

二人が振り返った先にいたのは、黄緑色の髪の少年。しかも、その少年は、スバルたちのよく知る…

「……ツカサ、くん？」  
ミソラがこわごわ問いかけると、こくり、と頷いたのは。

「無事でよかった、スバルくん、ミソラちゃん」  
穏やかな眼差しで微笑む、軽装な少年は、双葉ツカサであった。

ツカサの傷一つない無事な姿を見たスバルは、とん、と身を翻し、ツカサの差し出した腕の中に飛び込んだ。

「…ツカサくん…っ…無事で…よかった…た…」  
「…スバルくんも、無事でよかった」

安堵して言葉につまるスバルを、ツカサはしっかりと、抱きしめた。

過去での再会（あとがきに、番外編の詳細）（後書き）

甘く書けないよう…苦手なもの多すぎるううう！！（愚痴）  
…はい。

てな訳で、お久しぶりです、月峰夕です。

テスト準備期間 & a m p ; テスト期間

だったのでだいぶ間が空いた上に、番外編がぐだぐだすぎて…ぐだぐだはいつものことですね、うん。

今度はきちんとした番外編を乗せようかと思ってます。明日か、明後日ぐらいに。

本編とは離れた時間枠で書こうか書くまいか、悩んでるんですけどね。

いっそ、座談会とか。

それと、おそらく夏休みは…あんまり…というより、完全完璧に、こちらは投稿できないと思います。

こちらに投稿せず、本編時間枠総無視の

番外編

…本編が季節の時間枠総無視なので、時間枠にあった行事を書こうと思っっています。

それでなのですが…もしよろしければ、キャラクターを作っていただけないでしょうか。

私の作るキャラはワンパターンなので…募集しようかと思っ

す。

以下に、決まりを乗せておきます。

- ・ 投稿は一度きりで、投稿するキャラは一人だけ。
- ・ 性格は詳しく、容姿も詳しく書いてください。ナビか、ウィザード、どちらかがいるのなら、マークと、ナビ&amp;mp;ウィザードの性格も詳しく。

そして、完全にこちらの都合になりますが…

- ・ 年齢は大体12〜19ぐらいの間で。
- ・ 性格や設定の、多少変更あり。
- ・ 一回きりの出番。

以上でも構わないという心の広い方がいらっしやいましたら、よろしく願います。

P・S 『20000アクセスありがとうございました!』

番外編03（前書き）

…番外編でのスバルのキャラ崩壊が、当たり前になってきたような  
…

## 番外編03

ス「今回は番外編。ってことで、星河スバルと、光熱斗でお送りします」

ね「作者曰く、主人公'sに座談会進行役任せるってき。ロック&amp;mp・ウォーロックはセット側で見学中だぜ」

E「やつほー」

ウォ「よあ」

ス「それはいいけど、熱斗くん。前もって言っとくけど…余計なこと言ったら即退場。だからね（にっこり）」

ね「お、おうよ…（スバルの笑顔の後ろに黒いのが見える…）」

ス「とりあえず、なにをすればいいのかな？…あ、メモがあった。…BGMは、最近小説書くときに聞いている、某家庭教師のアニメのキャラソンで、虹の天空のお孫さんの曲って…この場所の雰囲気と曲があってない！！ていうか、作者の趣味全開だよこれ！！」

ね「あ、俺もメモ見つけ。なになに…最近はこれと僕達の漫画を出してる、発行所の某会社のカードゲーム漫画、そのアニメの『クロス』のときのOPって…うっわあ、すごい両極端だな！！…あんまり知られてないって分かってて聞いているって」

ス「確かに！！キャラソンがすごく穏やかな曲なのに、OPかなり賑やかな曲だもんね…」

ね「あ、続きがある。えーと…」『キャラソンは普段、OPはバトルとか考えてる時に聞いている』って」

ス「確かに穏やかな曲じゃ、バトルは難しいね」

ね「まーな。元々バトル描写が凄い苦手だそうし。この小説にしてみても、普段のマンガイラストでも、慣れなきゃって結構苦労してるみたいだしなー。さて、作者はほつといて、スバル、番外編の座談会、今回のお題は？」

ス「…えーと『尊敬してる人と、パートナーについてどう思っていますか？』だって。パートナーについてはこの前やったよね…まあいいか。熱斗くんの尊敬してる人は？」

ね「尊敬してる人は…：やっぱりパパだよ！！時々パパってば無茶もするけど、とっても頼りになるし、やっぱり男たるもの父親が目標だし！！」

ス「あ、僕も。父さんの影響で、宇宙が大好きで、宇宙飛行士になりたいって思ったし、父さんの言葉にいっぱい、助けられたから」

ね「ロックについては…：説教されたりして喧嘩もするけどさ、やっぱり一番のパートナーだぜ！！でも、パートナーっても…：俺らの場合、特殊だしなー。ロックが彩斗兄さんなんだから」

ス「あ、そつか。まだ『タイヒメ』本編では触れてないけど…：熱斗くんとロックマンで双子なんだよね」

ロックマン、熱斗に光彩斗、光熱斗兄弟（五歳）の写真を渡す。

ス「あ、写真ありがと、ロックマン。うわあ、ほんとそっくり!!」

ね「一卵性双生児だし、似てて当然だろ」

ス「普段の性格、違うけどね」

ね「それは言わない。自覚あるし。そういうスバルは？」

ス「僕は…愚痴ってからで良い？この前ロックが愚痴ってから、僕も愚痴りたい」

ね「別に良いぜ？どぞ」

ス「…まず第一に、星を見るときに邪魔しないんで欲しいよっ！」

ね「あ、そっぴや星見たら二、三時間は見てるんだっけ？でも、何言っても反応しないって言ってるけど…」

ス「無視はするけど、ロックてば結構うるさいだよ。あと、人の望遠鏡壊さないで欲しいな」。確か、この前二台目も壊したし。……性能が良いのは、とてつもなく高いんだって…」

ね「…どんまい」

ス「でも、ロックに出会えたから今の僕がここにいる。…昔は人の絆を考えるだけでも凄くいやで、関わるなんてことは論外だったし。ましてや、誰かの為に動くななんて事はね。…ロックは、絆の力を教えてくれた、大事なパートナーだよ」



ね「スバル……」

ス「でも、だからと言って人の望遠鏡壊した罪は消えないよ？……二台目の、ちよつと奮発して買ったのに……高性能倍率装置も付いてたのに……！！」

ね「……スバル？」

ス「……それに、その傍にあった、折角人ががんばって作った……星の模型も壊して……」

ね「……す、スバルさん？聞こえてますかー？」

ス「しかもしかも、その余波で父さんと一緒に作ってできたばかりのロケットの模型も壊して……思い出したら腹立ってきた……！！」

ブチン。

ね「ぎゃあ！！スバルが切れた！！ウォーロック逃げろ！！」

ウォ「おうよっ！！」

ス「逃げるな！！」

ウォ「逃げるに決まってるだろ！！死にたくねえ！！」

ス「なら……マテリアライズ！！電波銃！！えいつ！！」

ドン。ウォーロックは避けたので、熱斗の斜め辺りすぐ上のセット、破壊。

ね「うわあああああつ!?!」

E「熱斗くん!!!」

下敷きになる前に、慌ててロックマンに抱えあげられて、熱斗無事救出。

E「大丈夫、熱斗くん!!!」

ね「俺は無事!!!俺は無事だけ、ど...」

二人揃って、スバル&amp;ウオーロックを見る。

ウオ「おま...それ反則だろ!!!」

ス「問答無用!!!」

ばっ、と身を翻して逃亡してゆくウオーロックを、おもちゃのような電波銃を抱え、スバルは追いかけて退場。

ね「す、スバルがこええ!!!」

E「鬱憤が相当たまってたんだね...」

ね&amp;E「これ以上は危ないので、今回はこれで終了!!!バイバイ!!!」

## 双りの紹介

しばらく周りの雰囲気シャットダウンして、互いだけの世界に浸っていたが。

『何やってんだ、お前ら？』

という、非常に空気を読まないウォーロックの一言で、それがぶち壊されて。

『……ウォーロック、ちょっとこっち来い』

『さっさとしなさい！！』

何か、後ろに黒いものが漂っている、ジェミニとハーブに引つ張られて、消えていった。

抱き合っていた二人は、スバルのほうがぱっ、と離れて、顔を真っ赤にしている。

「う、ごめん！！」

「別に謝らなくても良いよ？僕としては嬉しかったもの」

くすくす、と楽しそうに微笑む、髪を後ろで結び、ラフな格好をしたツカサに、スバルは顔を真っ赤にして更に黙ってしまった。

「じゃあ、改めてになっちゃうけど……スバルくん、ミソラちゃん、無事？」

「スバルくんが助けてくれたから、無事だよ」

ミソラはすぐさまそう返し、ツカサも目立つ場所に傷のないスバルを見て、ほっ、とため息をついた。

「…良かった、怪我、ないみた…」  
言葉を途切れさせて、ぼつ、とツカサはスバルの腕を取る。

「…スバルくん、怪我はどうしたの」

酷くさめたようにも聞こえる、抑えられたツカサの声。

「え?…あ、えつとね、過去に来る途中で治っちゃったみたいなんだ。すごいよね、あはは…」

まさかたった数日で完治したとは言えず、そうやってごまかす。

「よかったあ、スバルくんも同じだったんだ」

「え?」

「ほら」

包帯が解かれると、まっさらに傷のない手のひらがあらわになる。

「僕もここに来てお風呂に入ったら、怪我が消えてたんだ」

「そ、そうなんだ…」

スバルは硬い笑みを浮かべ頷きながら、パートナーが引きずられていったほうをちら、と見て、いいたいことができしまったな、と思っただ。

「でも、無事でよかった、スバルくん」

スバルの手をとって笑うツカサと、穏やかに微笑むスバル。

「…ツカサくん、私は無視?」

むう、としたようにミソラが二人の間に割ってはいる。ついでに、ツカサにとられていない、スバルの手をとる。

「さっきミソラちゃん、自分で言ったじゃない。『無事』って」

にっこり、と笑うツカサと、む、と顔をしかめたミソラの間で、…ばちつ、と火花が散った。

間に挟まれているスバルは、手を握られていて、避難は不可能である。

咄嗟に熱斗達を振り返るスバルだったが、助けて、と目で言う前に『無理！！絶対無理！！』、とばかりにプライド以外の一同に、首を横に振られるのだった。ついでにナビたちにも、である。

唯一首を横に振らなかったプライドは。

「ふふ、仲いいのね」

…穏やかにニコニコ笑って、仲が良い、と呟くだけで、相変わらずの天然さを発揮して、空気を読んでいなかった。

空港にいるほかの客達も、その空気を読んでいるのに、だ。

…お陰で、スバル & amp ; ツカサ & amp ; ミソラの半径2mには誰もいない。

そんな中、その空気を壊したのは。

「お、随分とお早いおつきで〜」

ひらひら手を振る男性と、その横に立っているビジネススーツ姿の女性。

「チャーリーさん、テスラさん！！」

「チャーリー、テスラ！！」

『ありがとう！！』と言わんばかりの勢いで、スバルはチャーリーとテスラの元へ駆け寄った。

同時に熱斗も『この空気から開放してくれてありがとう！！』とばかりに、駆け寄った。

何なんだ、と首を傾げつつ、写真で見ただけの少年がそこにいることに、気づいて。

「んで、そっちの彼を紹介してくれるかい？スバル」

「あ、はい。彼は……あれ？」

スバルは頷いて、ツカサを紹介しようとして、  
ぱちぱち、と目を瞬かせて、スバルはじい、とツカサの瞳を覗き込  
む。

「どうしたの、スバルくん？」

穏やかに微笑んでいるだけのツカサが、ちよつとだけ首を傾げて、  
スバルの瞳を覗き込む。

ミソラも、首を傾げてスバルを見た。

「ツカサくんじゃなくて、君、ヒカルだよな？」

ツカサの微笑みが、少しだけ硬直する。

「何で出てるのさ。しかもいつの間に」

スバルはどうして、と僅かに瞳を半眼にしてみせる。

「くくつ…あつはつはつはつはつ！！」

ツカサは、急に楽しそうに大声で笑い出した。

プライドだけがきよとん、としていて、熱斗達は穏やかそうな見た  
目に反して、結構元気のよい性格なんだな、と思った。

「…いやー、からかってみようかと思ったただけだったの。暇だった  
し。もう戻…出てきたなら出て来たで、ちゃんと自己紹介して！  
」

むう、とスバルに睨まれて、先ほどまでのツカサとは、まるで別人  
のツカサは深く嘆息する。

「わーっただよ！！」

「…えーと、俺は双葉ヒカル。よろしくな。ツカサとはまた別だか  
ら、間違えんなよ。…つつても、無理だけどな」

「ヒカル…？ツカサではないのですか？」

プライドが首を傾げると、ツカサ…いや、ヒカルはけどな、と前置

きをして。

「俺もあいつなんだけどさ、別物とを考えてくれ。スバル、ツカサに代わるぞ。……なんでヒカル出てきたんだろ……」

ふう、と穏やかそうな表情で、スバルに苦笑して見せるツカサに、  
一同は首を傾げる。

「……なあ、ロツク。……なんか、さっきまでと性格ちがくね？」

『うん。……まるで、身体の中に二つの人格があるような……』

こそこそ、と熱斗とロツクマンは言葉を交わす。

「……ロツクマンと彩斗兄さんみたいなものか？」

『それとは違うと思うよ。僕も彩斗くんも、全く同じで少し違って  
いるだけだし……というより、同じものだよ』

熱斗はロツクマンの言っている意味が少しは理解できた。だが、それでも理解できない事が大半だ。

不意に、スバルはぶに、と、ツカサの片頬を引つ張って、口を開く。

「嘘つかない。ツカサくんに代わって。紹介が終わらないじゃないか」

「……じゃあ、頬にキスしてくれよ」

不意に良い事思いついた、とばかりにツカサの振りをしていたヒカルは笑う。

「……へ？」

スバルはきよとん、と瞬きをする。

「そしたら、大人しく引つ込んでやるよ。頬で良いから」

「……ええええええええええっ！？やだ！！恥ずかしいよ！！」

言葉の意味を理解したスバルは、顔を真っ赤にして、

「なら、もどんねえぞ？」

ヒカルがニヤニヤと笑いながら、あう、と困ったような表情をしたスバルはしばらく悩んだ末に、顔を真っ赤にしたスバルは目を閉じると、僅かに背伸びをして、ヒカルの頬に、唇を当てた。

「これでいいでしょ！？早く変わって！！」

むう、と無意識の上目遣いで、スバルはヒカルを睨みつけた。ヒカルは降参、とでも言う風に両手を上げた。

「…ほいほい。ほんつとお前ぐらいだよな、気づくのって。…  
なんでヒカル出てきたんだろ…」

じい、とヒカルなのかツカサなのか良く分からない少年を、しばし睨みつけていたスバルは、ふう、と息を吐き出す。

「ツカサくん、自己紹介。改めて、彼は双葉ツカサくん。僕の同級生です」

「はじめまして。双葉ツカサです。よろしく」

穏やかに微笑むツカサに、先ほどまでの賑やかさはない。

「あ…そだ、スバルくん。僕も良いかな？」

「何を？」

不意にスバルにそういったツカサを、スバルは見上げて首を傾げる。  
「頬つぺたのキス。ヒカルだけじゃずるいよ」

かあ、とスバルは頬を真っ赤にする。

「…後でっ！！今はヒカルだけでも恥ずかしいのっ！！」

「スバルくん、私もいい？」

そういつて、後ろからミソラがスバルに抱きつく。

「ミソラちゃん…スバルくんにくっつかないでくれる？」

「そういうツカサくんこそ、スバルくんにくっつかないでよ」

ばちっ、と再び二人の間で火花が散る。すぐさまスバルは熱斗の傍



に避難する。

「…ところでスバル、ツカサって、ヒカルってさっきは言ってたけど…」

「え？あ、うん、えと…ちょっと色々あってね。口が悪いのがヒカル、口調が柔らかいのがツカサくんって覚えておけば良いから」

熱斗の質問に、スバルは戸惑いつつ、適度なあたりで返答を返した。

『口が悪いと悪くないって…』

「気にしちゃだめだよ。ロックマン」

うつむ、と首を傾げるロックマンに、スバルはそういつて流し、いまだ火花を散らす二人をどうすべきか、迷いつつ、帰ってきてくつたりしているウォーロックをPETに迎え入れた後に、結局二人の頬に口付けを送って、やめさせたのであった。

## 軍人少年

とりあえず、帰ってきてぐったりとしたウォーロックが、肩にホログラムとして浮いているスバルは、今回ばかりはなんとなく聞かないほうが良い、とあたりをつけて、無視する事に決めた。

「よし、じゃあ移動しようぜ!!」

「さて、デインゴ」

くたびれたようにそういつたデインゴに、炎山から『待った』がかかった。

「まだライカが来てないんだ。もうちょい待とうぜ」  
熱斗はそういつて手を頭の後ろで組む。

「ツカサくんが保護された、って今からメールしてももう着くだろうし」

だったら待つててやるうぜ、と熱斗がいつて、ふと気が付いたことがあったスバルは、くる、とプライドを振り返る。

「…そういえば、王女さ…」  
「プライドよ。スバル」

にっこり艶やかに微笑まれて、同性ながらにどきまぎしつつ、頷きスバルは口を開く。

「…そ、それで、プライドさん。ツカサくん、いつ、保護したんですか？」

「この前の夕方だけ…それがどうかしたの？」  
スバルの質問に答えた後、不思議そうに首を傾げた。

「…誰かにそれ、連絡入れましたか？」

スバルはしばし考え込んで、次の質問をぶつける。

「光博士に、すぐに入れたけれど……」

「え！？パパ何も言っていない！！」

プライドがばちばち、と瞬きをして答えると、熱斗が驚いたような声を上げる。

しばしスバル同様考え込むようになしぐさをしていた、ロックマンが熱斗に声をかける。

『熱斗くん』

「どうしたんだロック？」

熱斗は不思議そうにロックマンを見る。

『……時差から考えて、もしかしたらパパ、科学省の大まかでも大事なところの復旧で、徹夜した後に、そのメールが来て、ひとまずの問題ごとは片付いて気が緩んでそのまま寝ちゃったんじゃないのかな？……単なる予想なんだけど』

「……ついでにその場で寝て倒れたかなにかしたりして、俺達に連絡入れるどこじゃなくて、職員の人たちに仮眠室に運ばれてったんじゃないのか？パパって、無茶するし」

本人達は知る由もなかったが、予想、と言いつつも当たる辺り、流石息子達である。

「……ん？科学省？」

ふと、熱斗は何か思い出したように呟く。

『どうしたんですか、熱斗さん？』

それに気が付いたグライドが問いかけてくる。ロックマンは何も言わず、熱斗を見上げる。こちらも何か思い出しそんな表情をして、黙っている。

「『あーっ……！』」

急に揃って、二人は声を上げ、慌てたように熱斗は急に鞆を開けると、スバルとツカサに、真っ白い箱を渡した。ミソラには、大きな白い箱を渡した。

「…何、これ？」  
手のひらサイズで、あまり重くない。

「名人さんが作った、ハンターV Gの充電器だって」  
いつの間に、とスバルが呟くより早く、ミソラが納得した表情で口を開く。

「あ、だから私の箱、大きかったんだ」  
「…どーゆーことだ？ミソラ」  
ジェミニが不思議そうに問いかけると、ミソラは箱の封を切って。

「ほら」  
「ぱか、と開かれた箱の中には、充電器と。

『ミソラちゃんのハンターV G！！』  
スバルとツカサは口を揃えていった。

『この前、科学省からジャスミンの家に行く帰り…っていうか、科学省の入り口で名人と会ったのよ』  
「ハープがミソラの肩に、ホログラムで現れながら、そう言った。  
熱斗& a m p ;スバルは、メール& a m p ;ミソラ& a m p ;ジャスミンより早く帰っていたので、無論、出会う事がなかったわけである。」

「それでね私達の時代の携帯端末の電源、入れてなかったらもし未来と通じたとき、気づかないんじゃないか、って言われて」

「確かに。充電器を作るため、ミソラちゃんのハンターV Gを借りた、と」

ツカサが確かめるよう言うと、ミソラはこくん、と頷いた。

「うん。ツカサくんの言うとおりだよ。主要なデータはPETに映してあるから、問題ないし」

ミソラはハンターV Gの電源を入れると、充電満タンの状態で起動した。

「うん、うまくいったみたいだよ!!」

「じゃあ、電源入れておこう」

スバルもツカサも、専用ホルダーに収まったハンターV Gを起動させる。

「あ、そだ。ロック、勝手に出てきたら、僕、怒るからね?」

『はいはい。心配しなくても、PETのほうにいるっての』

起動させた後、スバルは肩に乗つかるウォーロックに念を押す。ウォーロックは気にした風なく、そう返した。

本当かなあ、と呟いたスバルに、ウォーロックが突つかかるより早く。

「あ、ライカ来た」

熱斗の声で、それは遮られた。

< > < > < >

「熱斗、すまない!!」

緑色の軍服の上にマントを着込み、鞆を片手に持ったライカが、こちらに駆けて来た。

「出掛けに飛行機のトラブルがあって、遅れてしまった」

「別に良いよ。俺らもさつきついたとこだし、もう見つかったし」

ぐったりした表情で、ライカは熱斗にこれだけ返した。

「……連絡ぐらい入れてくれ……」

「もうつきそうだったから良いかと思つてさ。プライドが保護してくれてたんだ」

に、と笑う熱斗は、そういつて、事の次第を説明する。

「パパに連絡入れたは良いけど、パパから俺らに連絡が届かなかつたんだ」

「…光博士に何かあつたのか？」

緊張した面持ちのライカに、熱斗は違う違う、と返して。

「ちよつと日本の科学省に敵襲があつたんだ」

『…熱斗くん、それは十分あつた、つて言うんじゃないかなあ…敵襲だし』

そうかあ？、と熱斗は呟き、ぐったりした表情で言うロックマン。

ライカの肩に乗っている右手がスコープガンになっている、ライカのナビ…サーチマンが、ものすごく何か言いたげな目で、熱斗を見たのだった。

「んで、その復旧に狩り出されたその疲労で、そこにツカサくん保護の連絡が来て、そのまま寝たんじゃないか、つてのが俺とロックマンの予測」

「なるほどな…」

あながち、間違っていないだろう。

問題となっている光祐一郎の息子、その予測だ。

「それで、こっちが保護したスバルと、ミソラちゃんと、ツカサくん、そのパートナーで、ウォーロックと、ハープと、ジェミニだ」

「初めまして。僕は星河スバルです」

『俺はウォーロックだ』

そういつて手を差し出したのは、長い髪に流星マークのペンダント

を下げた、小柄な少年…スバル。一見ただけでも、熱斗よりも小柄に感じた。

そして、肩に浮かぶのは、見た事もない形のナビ。いうなれば、何か、獣のような。

祐一郎が『訳があるから、保護したい』と言っていた事について、移動中にも聞けるだろう、とあたりをつけて、ライカも自己紹介する。

「シャーロ国軍所属、ライカだ。よろしく頼む」

『私はシャーロ国ネットワーク第十三部隊所属、サーチマンだ』

ぎゅ、と手を握り返すと思いのほか、スバルのその手のひらは小さかった。

よく見れば、熱斗よりも小柄に感じたのは気のせいではなく、本当に小柄なのだ。肩幅はあまりなく、服の裾から覗いている腕も足も本当に細い。

…なのに、『保護しなければ、狙われるわけを持つ』とは、どういった意味なんだ？

特殊な力でもない限り、狙われそうもないのに。

「あ、そだ。ライカ、スバル女の子だから、男と勘違いしないようにな」

「『……は？』」

熱斗がふと、思い出したように言った言葉に、ライカとサーチマンは同時に固まった。それを傍で聞いていたプライドも、硬直する。

「…え？スバルって…男の子じゃ、なかったの？」

「いや女の子。俺達も気が付かなかったから気にするな」

プライドが訊ねると、そうやって親指を立てて笑う熱斗の笑顔に、

何か救われた気分になる、プライド&amp;mp;ナイトマン、ライカ&amp;mp;サーチマンであった。

とりあえず、気を取り直して。

「はじめまして。響ミソラです!!」

『ポロン。パートナーのハーブよ』

メイルよりも濃い色の桃色の髪に、ギターを携えた少女…ミソラはそういつて伸びやかに笑う。

そして、その肩に映る半透明のホログラムには、豎琴の形をしたナビが浮かんでいる。

そして、最後に。

「初めまして。僕は双葉ツカサです。よろしくお願ひしますね」

『パートナーのジェミニだ。まあ、よろしく頼むぜ』

薄い黄緑色の髪を後ろで結び、鳶色の瞳を細め、そういつて少年…ツカサは穏やかに微笑む。

その肩には、電気のようなボディに、二つのお面をつけたナビが浮かんでいる。

とりあえず、ライカ&amp;mp;サーチマンに対しての自己紹介はすんだので、やいとがとったホテルに、一同は移動する事にした。



説明時間（前書き）

…夏休みは、たぶん…投稿出来ないと思いますので、あしからず。

## 説明時間

「単刀直入に言います。僕とツカサくとミソラちゃん。…ここから二百年先の未来から来ました」

場所を車中に移し、スバルが真つ先に言った一言が、これであった。

「……………」

『……………』

ライカとサーチマン、デカオとガッツマン、やいととグライド、プライドとナイトマンは啞然、とした表情でスバルを見た。

「…何を言い出すのかって思いますよね」

ミソラが言った後、スバルはただ淡々と、口を開く。

「けど、事実なんです。僕らの持っているものは、あなたたちの持っているものとは違う。…そんな事、絶対しないんですけど…その気になれば、完全犯罪だって可能なんです」

『ならやればよかったじゃねえか。俺らの場合、情報集めるためにウオーロツクは腕を組んでそう零し、スバルに睨み付けられた。』

ウオーロツクは腕を組んでそう零し、スバルに睨み付けられた。

「だめ。必要最低限、問題の出ない程度だったらやったかもしれないけど、ロツクはやりすぎ」

『かーっ、かてえな、お前は』

そういつて首を振るウオーロツクに、スバルはさらり、と澄ました表情で。

「ロツクみたいな暴走ウィザード持つんだから、当然でしょ？」

『…スバル、お前誰にその『暴走ウィザード』って表現習った』

流石のスバルでも、言ったことのない台詞であったし、第一スバル

の場合言葉に『宇宙』関係が使われるのだ。  
ウォーロックが謎に思い、問いかけてみると。

「アシッドとこの前話した時に、会話に混じったから」との返答が帰ってきて、ウォーロックは何故そうなったのか、をすっ飛ばして、切れる。

『あんのすかしやるおおおおおおおっ!!いい加  
「ウィザード・オフ」

ぱちん、とスバルはウィザードの機能を切った。

現在ウォーロックはPETと連動しているが、ウィザードでもあるので、可能だったようだ。

啞然とする熱斗達一同を総無視して、ツカサが口を開く。

「僕らの場合のパートナーは、ナビではなくウィザードと呼ばれる電波体なんです」

「そんな馬鹿なこと…」

ライカも無視してゆく方向で決めたようである。

『…ライカ様、嘘ではありません。…全く、データ反応が見られませんが』

ライカが声を荒げるより早く、ライカの肩に映るホログラムのサーチマンから、ツカサの言葉を肯定する言葉が出る。

「…だからこそ、狙われてもおかしくないの。この力を手に入れれば、さっき言ったように、完全犯罪が可能になるから」

ミソラはそう言って、一旦間を置き。

「でも、私達のパートナーを奪ったところでどうにもならないけど。私達人間と、ハーブたちが電波変換してなきゃ」

『そーゆーことだなー!!』  
いつの間にもやらウォーロックがスバルの肩に、ホログラムとして現れていた。

「とにかく、スバルたちが敵の手に落ちないように、死守すれば良い、ってことかしら？」

プライドが問いかけると、ツカサが頷いて口を開く。

「僕ら…僕とジェミニ、ミソラちゃんとハーブだけでも、相手にとっては十分かもしれない。…けど、それ以上に死守しなければならぬのは…スバルさんとウォーロックなんだ」

「…それって、もしかしてこの前の姿が関係あるのか？」

デインゴが訊ねれば、スバルとウォーロック以外のツカサとジェミニ、ミソラとハーブが同時に頷く。

ミソラたちが口を開くので、一同は聞き手に回ることにした。

「まず一つ目。スターフォースって呼ばれる力が、スバルさんとロックさんの体内にあるの」

ぴ、とミソラは人差し指を立てる。

「これを手に入れれば、星を破壊するだけの力がある。熱斗君たちは見たと思うけど…『アイスペガサス』、『ファイアレオ』、『グリーンドラゴン』がスターフォースの力だよ」

ミソラはハンターV.Gを操作して、『アイスペガサス』、『ファイアレオ』、『グリーンドラゴン』を映し出してゆく。

ツカサが続いて、指を二本立てる。

「次に二つ目。オーパーツと呼ばれる力が、ウォーロックの中にある」

ハンターV.Gに、トライブのデータを映し出す。

「繁栄しつつも滅びた、ムーの遺産『トライブ』の力」

一枚目は、雷の大剣を携えた剣士。  
二枚目は、巨大な手裏剣を携える忍。  
三枚目は、恐竜の頭に似たものが左手にある、拳士。

「上から『サンダーベルセルク』、『グリーンシノビ』、『ファイ  
アダイナソー』ってあって、もし力が暴走すれば…世界は簡単に滅  
びる。実際、ムーはこれで滅びたし。…でも、絆の力がスバルくん  
をこの世界に留めて、それを防いでる」

「絆がなければ、扱うのも難しいんだろ？」

「まあな。力が強大すぎる」

ジェミニの言葉に、ウォーロックが肯定を示し、スバルは本当に助  
かったよ、と心底思う風情で呟いた。

「そして、三つ目。ノイズを操る力」

続いてツカサが、指を三本立てた。

「僕らの世界に溢れる、電波体にとっては有害な『ノイズ』。それ  
を、スバルくんは自在に操る事ができる。僕やミソラちゃんの場合  
は、近づいただけでも行動不可能になってしまうんだ。専用の機械  
がなかったら話なんだけど…それさえ超えてしまったらやっぱり  
ダメなんだけどね」

ぴぴ、とミソラがぶれる黒い体の剣士と、紅い体の戦士を映し出す。

「…あ、もしかして…この前…科学省で見たあれ？」

メイルが指差した先には、黒い体の剣士。

「うん、そうだよ。これは『ブラックエース』。もう一つの姿は『  
レッドジョーカー』っていうんだよ」

ミソラがそれぞれを示しながらそういう。

「これはノイズが最大にまで、高まった最終の力。僕らはこれをフ  
アイナライズって呼んでる」

『…ファイナ、ライズ…』

ツカサの言葉に、ロックマンが繰り返し、押し黙る。

不意に、自分の説明なのに口をあまり開かずにはいたスバルが、口を  
開いた。

「実際、これは流れ星がもたらしたものだから…最初に言った星の  
力といっても良いけど…それとは違うんだ」

記憶をたどるように、告げられた言葉を、スバルはそのまま繰り返  
した。

「『紅の破滅の力。けれどそれを扱うのは蒼の再生の戦士』ってあ  
るくらいだし、滅びの力のようなものだね」

「蒼の、戦士…」

けれど、熱斗が気に留めたのは紅ではなく、蒼。

そして、その脳裏に浮かんだのは、ロックマンではなく、スバルの  
電波変換後の、姿。

「あ…もしかしてスバルの事か？」

熱斗の質問に、スバルは首を傾げた。

「再生の蒼の戦士って」

スバルはああ、と合点が行った表情になった後、頷いて、僅かに頬  
を紅くする。

「うん。ちょっと恥ずかしいけどね。…ところで、僕らが泊まるホ  
テルって、どこ？」

一旦スバルの力について、全て話し終えたので、スバルは話を思い  
っきり逸らした。

「クレイノホテルよ。クリームランドーのホテル」  
やいとがふふん、と笑ってそういい、スバルは目を瞬かせて。やいとで連想できる事を考えて、口を開く。  
「…もしかして、高級って意味での？」  
「当然でしょ？しかも貸切」

ぱかつ、と顎を落とすスバル、ミソラ、ツカサである。

熱斗達は慣れている模様で、けろっとしている。炎山に至っては当然、と言った表情である。

「…やばい、何か感覚が、感覚が」

「…うん、やばい、麻痺しそう」

「…そうだね、ホント…なんか、麻痺する…」

「人間てのは…」

「凄い人もいるものね…」

「そーかあ？」

思い思い呟くスバルたちと、ウォーロックたちであった。

## ホテルについて（前書き）

五日前ほどに、『流星のロックマン3 BLACK ACE』やっと  
ゲットしてクリアしました！……けれどゲットしたその日に、U  
SBが折れて使い物にならなくなりました……小説データ全部飛ん  
だあああああっ！！（泣）



## ホテルについて

「……」

「どーしたんだ、スバル？中入ろうぜ！！」

クレーノホテルにつくなり、啞然、と言った風情で絶句する、スバルたち未来組。

熱斗たちは慣れた風情で、すたすたと中に入ってゆく。

熱斗の周りには、世界でも屈指の企業の令嬢、この国の王女様、そしてスバルたちは知らないが、有名企業の女性社長、世界でも屈指の企業の御曹司、という一同がそこにおいて、慣れなければやっていられない部分があるのである。

「……わー」

「ひろいねー」

「下のカーペットもふわふわだ」

スバルはそれきり言葉をなくし、ミソラは辺りをきよきよる見回し、ツカサはカーペットのあまりの柔らかさに驚愕していた。

「スバルくんは一人部屋と相部屋、どっちがいい？」

メールがフロントの前から問いかけてくるので、しばし考えて。

「一人部屋かなあ」

「では、これを」

そういつて、ホテルのカウンターにいた男性は、一枚のカードキーを差し出してきた。

「部屋のキーだよ」

メールがそつと言ったので、スバルはそれに書かれた番号を確認す

る。

「ええと『107・00』…?」

つまり、この階は。

「スバルくんは百七階…最上階だよ」

メールの言葉に、ええ、とスバルが驚いた表情をすると。

「遮る建物が少ないから、星が見やすいと思うわ。星河くんは、星が好きなんでしょう?」

傍にいたやいとがふん、と笑ってそういった。

「…ありがとう、綾小路さん」

「やいとでいいわよ、星河くん。綾小路なんて、友達に、呼ばれてないもの」

礼を言うスバルに、そういつてやいととは、他の一同の元へ歩いてゆく。

入れ替わりに、ミソラがこちらへ歩いてくる。

「あ、やっぱりスバルくんは一人部屋かあ」

くすくす、と笑うミソラに首を傾げつつ、スバルはミソラに問かけた。

「ミソラちゃんは、一人部屋?」

「ううん、四人部屋だよ!。メールちゃんと、やいとちゃんと、ジヤスミンちゃんと一緒。最初は五人部屋にしてただけど、スバルくん一人部屋、つてなったから四人部屋」

「…あ、ごめん…」

しゅん、とスバルは落ち込んだ表情で、そういつとミソラは明るく笑って、スバルをなだめる。

「謝る事ないよ。スバルくんが選んだんなら、怒る理由にならないもん」

ぼんぼん、とスバルの肩を軽く叩いて、ミソラは笑った。

じゃあね、と手を振るミソラと入れ替わりに、ツカサが歩いてきた。  
「ツカサクん」

「スバルくんは一人部屋なんだ？」

スバルが手に持つキーカードを眺めながら、ツカサは問いかける。

「うん、そうだよ。ツカサクんは部屋どうしたの？」

「僕も一人部屋。あ、それでねプライドは王城に帰るみたい。それでライカさんもそっちに行くって」

「へえ…」

やっぱり王女様が国にいるのに、城に不在なのは心配なのだろうか。ふと、スバルの視線は怪我の癒えたツカサの手のひらに、移る。

包帯の解かれた下は、無傷の肌。

あれほどに酷い傷だったのに、『自分同様』癒えていた傷跡。

…後で、ウォーロックに話さなければならぬ事…は、ツカサクんの傷が完治してたこと…それに…

ツカサの傷が完治していたこと以外に、問題は山積みで。

未来に戻ることに。

そのための手段。

自分を追って来た、とも言える敵側。

その原因となった『太陽の姫』とはなんなのか。

『太陽の姫』を必要としている『月の皇子』とは。

何故、敵は未来から自分を追ってこれるのか。

つらつらとスバルは自分の思考の海に沈んでいたので、呼びかける声に気づかなかった。

「……………スバルくん、どうしたの？」

不意に思考を途切れさせる声が聞こえて、瞳の焦点を結びなおせば、真っ直ぐに視線を合わせて、覗き込んでくるツカサの瞳がそこにあった。

虚を突かれたこともあって、とても綺麗に美しく光るツカサの瞳を、スバルは真っ直ぐにただ、見返していた。

穏やかで、それでいて鮮やかな黄緑色の髪とは正反対の、穏やかだけれど静かな色合いの瞳。

本当にただ、綺麗だと思えて。

「スバルくん、どうしたの？」

「へっ？」

ぼちぼち、と目を瞬かせるツカサに、スバルもようやく我に返る。

「……………ぼーっとしてるから、どうしたのかなって思っただけど…  
疲れたの？」

「え？あ、なんともないよ、大丈夫だよ」

スバルが慌てて笑顔を作ると、あまり納得していない表情でツカサはそう、とだけ呟いた。

「…さ、行こうスバルくん。皆行っちゃったしね」

ツカサの言葉に辺りを見回せば、確かに皆エレベーターの前に移動している。

「…ごめんツカサくん！..」

慌てた表情のスバルに、ツカサはくすくす笑って。

「ふふ、じゃあ、いこっか」

自然なしぐさで、手を差し出してくるツカサの手を、スバルはぎゅ、と握り返した。

< > < > < >

ホテルに設けられたエレベーターは外側に位置した部分が、ガラスになっていてその為、すさまじい勢いで上るエレベーターからは、クリームランドが一望できた。

ちなみに今回乗ったのは、スバル、ツカサ、ミソラ、熱斗、炎山、メイル。

残り一同、デインゴ、デカオ、やいと、チャーリー、テスラ、ジャスミン、燃次は、隣のエレベーターである。

「うわあ、凄い眺め!!」

スバルは、ただうわあ、と楽しそうに、叫ぶ事を繰り返す。

「凄いよな!! たかーい!!」

スバルの横で下を見下ろす熱斗も、同じ反応である。

『ウエーブロードにいるときの目線だな』

ウォーロックのしれっ、とした言葉に、はあ、とジェミニがため息をついた。

『お前には風情と言うものがないのか』

『フゼイ?なんだそりゃ』

『……もういいわよ、黙ってなさい、ロック』

ハープがムスツ、とした表情で睨みつける。

「あはは、でも、ホントにウェーブロードにいる気分だね、ツカサくん」  
「楽しそうに見下ろしているスバルの邪魔をしたくないので、ミソラはツカサに話を振った。」

「ホントだね。僕はコスモウェーブに行ったことないけど…更に高いんだっけ？」

「うん、地球が一望できるから…スバルくんのテンションが高い高い」

不意にツカサが持ち出したのは、スバルたちの世界の話。

「はは、スバルくんらしいね」

「だね」

くすくす、と笑いあう二人を見ながら、メールと炎山も下を見下ろしていた。

「本当にたかーい。こんな高いところ、クロスフュージョンしても来た事ないなあ…」

「当然だろう。大抵出るのは、地上なのだから」

炎山の、ある意味風情ぶち壊しの一言に、メールは目を半眼にして。

「…わからず屋」

意味が違うような気がしなくてもなかったが、とりあえずメールはそれだけ呟いた。

< > < > < >

チーン、と音がして、まずは熱斗、ミソラ、メールが百五階で降りた。

隣を見れば、ディンゴ、デカオ、やいと、ジャスミン、燃次が降り

ていた。

残るは、スバル、ツカサ、炎山。そしてチャイリー、テスラ。続いて百六階でチャイリーとテスラが降りた。

そして、スバル、ツカサ、炎山は百七階で降りた。

スバルは『107-00』、ツカサは『107-20』、炎山は『107-22』に、それぞれ向かう。

「じゃあ、昼食でね」

「うん」

「遅れるなよ」

そういつてツカサと炎山と別れて、スバルは『107-00』の扉を開く。

「……………わあ」

「……………うお」

スバルとウォーロックは、それだけ言つて黙つた。

入るなり、目の前は広々とした部屋。前面は強化ガラス張りで、広々とクリームランドの景色が広がっている。

そして照明はシャンデリア。ふかふかの絨毯を踏んで靴を物置場所に置き、ためにソファアに座ると、とても心地よい座り具合。此処だけでもぐっすり眠れそうである。

壁についているテレビも、委員長の家にあるものと大差ないほど大きく、クローゼットも大きい。

ために開けてみた風呂場は、広々していて、ついでに大きなジャクジー。こちらも、外側に位置する場所はガラス張り。

ベッドがなく、代わりに扉があつたので、開けてみれば寝室とリビ

ングが別なようで、ベッドルームもベッドルームで、凄かった。

やはり照明はシャンデリア。こちらにもソファーと巨大なテレビに、マッサージチェア。

ベッドも大きくて、天蓋つき。ぱたん、と倒れこんでみると、かなり寝心地が良かった。

色々、常人感覚が拒絶を起こすが、どこの部屋も一緒だ、と自分を宥めるスバルであった。

実際何人部屋だろうと、備え付けのタオルや、ベッドの数が違うくらいで、どこの部屋も一緒である。しかし、スバルの部屋だけは、ちよっとだけ家具が豪華なのであった。

とりあえず、様々な状況に拒否反応を起こし、何とか落ち着いた後。「……ロック、話があるんだ」スバルは前触れなく、そう口を開いた。

「ん？どうした、スバ……！！」

窓から出たり入ったりを繰り返して、スバルの声に振り返ったウォーロックは、スバルのあまりに静かな瞳に、ただ、何も言えなかった。



番外編04（前書き）

キャラ崩壊が苦手な人は、閲覧をお控えください。

## 番外編04

E「どうもお久しぶりです。今回は僕、ロックマンエグゼと」

ウォ「この俺ウォーロックでお送りするぜ」

E「例によってセットのそばで、熱斗さんとスバルくんは見学中だよ」

ね「こんちわ!!」

ス「久しぶり」

E「さてさて、今回はゲストがそれぞれの作品から来てます。まずはロックマンエグゼではお馴染みの最強ナビ、フォルテ!!」

ね「ちよつと待てー！ー！ー！ー！ー！ー!!」

E「いきなり何？熱斗くん」

ね「いやいやいや、おかしいだろ!?なんでフォルテ!?普通炎山とかブルースとかさ!?!」

E「だってありきたりでつまらないよ」

ス「それが本音!?!」

ウォ「あー、うっせー。次行くぞ!!」

ス「そ、それもそうだね。ロックよろしく！」

ウォ「んじゃ、流星のロックマンから、ムー族唯一の生き残り、ソ  
ロ！！」

ス「ちょっと待てー！ー！ー！ー！ー！ー！」

ソロ（以下：ソ）「うるさいぞ、星河スバル」

ソロ、ゲスト席にカミカクシから登場し、着席。

ス「もう来ちゃってるし！！」

フォルテ（以下：フォ）「呼んだのはお前らだろうが」

フォルテ、普通にゲスト登場通路から現れ、ゲスト席に着席。

ス「こつちも来てるし！！」

ソ「なんだ、来てたらずいのか」

ス「マズくはないよ。でも、何でだろ…命の危機を感じるんだけど。  
ムーメタルがらみで」

フォ「なんだそれは」

ウォ「スバルの体内にある、特殊なムー族の遺産だ。手にすれば強  
い力が手に入れられる代物だぜ」

ウォーロック、フォルテに説明。

ちなみに光熱斗 & amp; ロックマンエグゼ、現在進行形にて口論  
中。

フォ「…それはそれで、手に入れてみたい力だな」

ス「でも、この前ムーの紋章が浮かび上がったから、ムリ」

ソ「……チツ」

ス「ソロ、最近君をストーカーでサテラポリスに訴えたいってつくづく思う」

ウォ「諦める。サテラポリス連中が返り討ちに遭っただけだ」

ス「ですよ〜。やっぱり自力で撃退か」

ウォ「諦める。シリウスの呪い…っか怨念はこええな」

ソ「厄介なものに関わったな」

ス「それを君が言うか!？」

フォ「…言えなさそうだな」

ね「てかフォルテ、何ナチュラルに会話に参加してんだ!？」

光熱斗& amp ; ロックマンエグゼ口論いつの間にか終了。

ス「あ、口論終わったんだ」

E「うん。でもフォルテ、君がそれを言う?ある意味君も十分厄介だよ(黒)」

ウォ「エグゼがこええ!!! (怯)」

ス？「ロックが怯えた！？」

E「では、今回のお題、気を取り直していつてみよー！！」  
ロックマンエグゼ、お題のはいつたくじ引き箱を取り出す。

ね？「流れ総無視だ！！」

E「今回のお題は？…じゃん」ロックマンエグゼ、一枚の紙を取り出し目を通す。

E「『もしライバルとデートできたらどこに行く？』」

ス&amp;ね？「なにその奇跡に近いほどやなお題は！？」

E「うるさいよ、熱斗くん、スバルくん。じゃ、フォルテから」

フォ？「な！？…そう、だな…」

フォルテ、五分ほど黙りっぱなし。

E「はい次ソロ」

ソロ、しばし考え込む仕草の後。

ソ「…… ロツポンドーヒルズの、フジヤマクリームパフェでも食いにいきたい」

ウォ「…普通だな。今度つきあってやれよスバル」

ス「えー。行くんだったらツカサくんがいい。それに何度も言うけど命の危機感じるからヤだ」

星河スバル、思いきりヤな顔をして断言。

ソロ、何故か落ち込んだ表情でカミカクシにて退場。

E「フォルテ、まだ決まんないの？」

フォ「……ああ」

E「じゃ、帰って。そろそろ閉めるから（黒）」

ロックマンエグゼ、フォルテを閉じかけたカミカクシに突き落とす。

ね「ぎゃー！！フォルテー！！」

光熱斗、慌ててカミカクシを覗き込む。

ロックマンエグゼ、人のよい笑みを浮かべ、手を振る。

E「じゃ、またねー」

ウォ「次も多分、予想できない奴らかもしんねーぜ」

## 兆し（前書き）

… たぶん、別連載を始めるので更新は遅めになると思います。

## 兆し

振り返った先に佇むスバル。

その瞳は真剣そのもので、逸らすことすら、口火を切ることさえつらい。

「……ロックは、僕の怪我がたったちよっとの時間で治ったの、覚えてるよね？」

『ああ。…それがどうかしたのか？』

どうかあるよ、とスバルはつぶやく。

「…ツカサくんの怪我也、僕みたいに治ってた」

『な！？』

ウォーロックはスバル同様、怪我のひどかったツカサの両手を思い浮かべる。

「ツカサくんは、『過去に来て気づいたら治ってた』って言ってたけど……」

『…なるほど、お前みたいに数日で治ったかもしれない、ってか？』  
こくり、とスバルは頷く。

戦いに支障が出るので、スバルにしてみればいいことでもあると同時、自分の身体なのに、急に違う人の身体に入れられたようで、気持ち悪い。

「……原因が分からないから、下手に喜べないし」

『だよなあ…喜ぶにしても、もしかしたらこれが敵に狙われる理由かもしれないねえ……』



腕を組んで、それぞれの意見を口にし、スバルは再び口を開く。

「……もしかしたら…」

ピンポーン。

しかしスバルの言葉は、最後まで言い切ることなく、遮られた。

「はい!!」

スバルは寝室から出て、扉の前に急いだ。覗き窓から覗いてから、扉を開ける。

「ツカサくん、炎山くん」

そこにいたのは穏やかに微笑むツカサと、クールな雰囲気をもとって表情を変えない炎山。

「お昼食ベに行こう、スバルくん。お腹すいたでしょ？」

「百階にレストランがある。他の奴らは向かった」

二人の言葉にスバルは頷く。

「うん、ちょっと待ってて」

そういつて一旦部屋に引っ込む。

「…ロツク、この続きはあとで良いかな？」

『ああ、良いぜ。それよりメシだメシ!!』

両腕をブンブン振ってそういうウォーロツクに、スバルは眉を潜めて。

「…ロツクは食べれないよね？」

『キブンだよ!!キ・ブ・ン!!』

そう叫ぶように告げるウィザードにふう、とスバルは息をついて、

鍵を抜いて、待つてくれていたツカサと炎山と合流した。

< > < > < >

「うわー…」

昼食をとるレストランは絶景だった。

所々に置かれた飾り物の食材も丁寧に装飾がしており、美味しそうに見える。

『うおおお！！すっげえ！！』

『かなり美味しそうだな…俺たちは食べられねーけど』

『……………』

思い思いの反応をするウォーロックとジェミニを見ていたブルースは、無言を貫き通した。

「スバルくん、ツカサくん、炎山くん、早く早くー」

「あ、うん！！」

メイルが手を振っているの、スバルとツカサは窓際の、熱斗とメイル、ミソラとジャスミンが座っている席に腰を下ろした。

炎山はやいととデカオ、燃次とチャーリーとテスラが座っている席に着いた。

それぞれが昼食を選び終わると、隣に座っていた熱斗の元に昼食が置かれた。

それはいたってシンプルな。

「…チキン…カレー…？」

「俺、カレーが大好きなんだよ！！」

スバルが呟くと、目をこれ以上ないほどにキラキラさせている熱斗が、嬉しそうにいった。

『…熱斗くん、確かおととい二十皿食べたよね？』

ロックマンの言葉に、え、とスバルとミソラは驚愕する。ジャスミンは慣れたようでも「相変わらずアル」と言った。

ちなみにツカサは、後ろからデカオに話しかけられて、こちらの話を聞いていない。

代わりに炎山が凄まじい勢いで熱斗を睨んでいるが、本人は気づいてない。

スバルが思わず怯えても睨みつけていたが、ツカサと一言三言交わし、睨むのをやめた。

「カレーはいくら食べても飽きないって！！人によって違うカレー…時間によって味の変わるカレー…カレーには無限大の可能性がある！！ビバ、カレー！！」

銀色のスプーンをこれでもかと握り締め、見事に自分の世界に浸る熱斗。

「そ、そうなんだ…」

スバルは若干引きながら、あはは、と僅かに笑みを浮かべた。

冷静なまでに、『熱斗くん冷めちゃうよー』と言うロックマン。

メールも『カレー冷えて後悔するわよー』と言うのみ。

…要するにこれは慣れだと、スバルとミソラは悟った。

< < < <

一方、ツカサは後ろから声をかけられて、振り返った。

「なにかな、デカオくん」

飛行機の中で話していたのもあり、大分慣れた。

内心で『ゴン太くんそつくりだなあ』と少し思っていたりする。

「ツカサたちって、特殊って熱斗がメールで言ってたんだがよ…そういうの抜いて、誰が一番強いんだ？」

熱斗め、と炎山が熱斗を睨みつけるが、本人が気づかない代わりに、スバルが気づいて怯えた表情になった。

しかしそれを気にせず睨んでいると、ツカサに何故かものすごく睨まれた。

「デカオくん、ちょっとゴメンね」

デカオとの会話を中断して、ツカサは炎山の方を笑顔…しかも満面の笑みでこちらを向いた。

だが、笑みを浮かべているが瞳が、全くと言って良いほど笑っていない。何か言いたいことがあるのか、と視線を向けると、にっこりと笑みを浮かべたままで。

「何か…」

「炎山くん、スバルくん怯えてるからやめてくれないかな？」

炎山の言葉を遮って、かなり人当たりの良さそうな笑みを、あくまで穏やかに浮かべたままニコニコと笑うツカサが。

どういう意味だ、と反論しようにも、思い当たる節が満載なので、とりあえずと思い、口を開くが。

「も…」

「やめろってのが聞こえねえ？」

しかし、再び言葉を遮った瞬間ふと笑みを消し、ツカサの表情に影が落ちた。

それから、脅しをこめた口調で呟かれたので、炎山は睨みつけるの

をやめた。

「で、僕らの中で一番強い人だね」

くる、と笑顔を浮かべて、ツカサはデカオの方を向く。デカオはおう、と頷く。

どうやら炎山以外の一同は、見なかった事にしたようだ。

やっぱリー、と呟いて。

「スバルくんだよ」

『スバルだな』

<スバルだ>

ツカサとジェミニ、ついでにツカサの中にいたヒカルも、そろって同じ返答を返した。

「じゃあ次は誰なのよ？」

やいとが運ばれてきたハンバーグを横目で見ながら、ツカサに訊ねる。

「次に強いつて言ったら、暁さんかジャックくんだよね」

『まあ……なあ……一応、そこに俺らも含まれると思うぞ？』

ジェミニの言葉に、ぱちくり、と瞳を瞬かせたツカサは、きよとん、とした表情をする。

「そうかな？ 暁さんやジャックくんに何度か勝った事はあるけど

……スバルくんには負けっぱなしだからその辺り、良く分からないや」

『あれが桁外れなだけだ。バトルセンスも、機転も凄まじい。ウオ  
ーロックはともかく』

実際のところは、相性も、その相性のシンクロ率もあるのだが、なんだかねで皆さん、内心ではウオーロックを認めているのである。

普段はからかったりするが。

「へえ〜あの嬢ちゃん、そんなにつええのか」

「うん。なんていったって、世界を救った英雄なんだから」

ツカサの言葉に、デカオとやいとは違和感を感じつつも、目の前に置かれた昼食にとりあえず、意識を向けた。

そんなツカサの前にも、昼食が置かれたので席に着いた。

ふと、メイルはぼんやりとしているスバルに、問いかけた。

「…あれ？スバルくんは食べないの？」

「え？あ、食べてるよ、ちゃんと」

そういつて笑うスバルだが、ドリアの入った器に、スプーンを突っ込んではいれるものの、それを口に運ぶ気配はない。

猫舌なのだろうか、とメイルは適当にあたりをつける。

「ご馳走様。部屋戻ってるね」

しかし、しばらくしてスバルは席を立った。

誰も気が付かなかったが、スバルの顔は血の気が引き、真っ青だった。

番外編05（前書き）

PVが、30000を超えたので、それもかねた番外編。

## 番外編05

ス「はい、本編よりすらすら書けるといふことでまたまた来ました、番外編！！」

ウォ「……なあ、スバル。……それ、言っちゃまっていいのか？」

ス「だめだろうね。でも作者がバトル描写苦手すぎるゆえの、この状況だし」

ウォ「……まあいいか。んで、今回はFM星育ちのAM星人、この俺ウォーロックと！！」

ス「そのパートナーで、シューティングスター・ロックマンとして結構無理矢理戦いに引っ張り出された僕、星河スバルでお送りします」

星河スバル、ふと手に持っていたメモを読み上げる。

ス「なお、今回光熱斗くんと、ロックマンエグゼはなにやらこの前のフォルテをカミカクシに突き落とし事件で一悶着が起きたようで、お休みだそうです」

ウォ「んじゃ、今回のゲストは……」

ス「『ロックマンエグゼ』より、幼馴染なので当然ヒロインの立ち位置である桜井メール&ロールと、『流星のロックマン』よりややこしいのでいっぺんに呼ばれたらしい、響ミソラ&白金ルナ！！ちなみにハープは一時実家に帰ってくる、モードは調べることがある、だそうで欠席です」



桜井メール、ロール、響ミソラ、白金ルナ、普通にゲスト登場通路から現れ、ゲスト席に着席。

桜井メール（以下：メ）「こんにちは。今日はよろしくね」

ロール（以下：ロ）「ロックはいないのね……」

響ミソラ（以下：ミ）「やっほ。よろしくね」

白金ルナ（以下：ル）「って、どういふことよ……！」  
白金ルナ、急に怒り出す。

ウォ「何だよいきなり……！」

ル「どうしたもこうしたもないわよ……！ 何で私とミソラちゃんがセットなのよ……！」

ス「え？ だって実際どつちがヒロインかわからない状況だって作者が。だからセットで呼ばれたんだよ」

ル「ほ……し……か……わ……く……う……ん……？」

ス「何？ 違うところでもある？」

星河スバル、しれっと白金ルナをにらんで黙らせる。

ミ ス……スバルくんが黒い……

ロ「と、ところでスバルくん。ロックは？ 熱斗くんも姿が見えな  
いけど……」

ス「あ、そつか。ロールちゃんたちには言ってなかったね。この前ロックマンが、フォルテをカミカクシに突き落としちゃって。それで一悶着起きたからお休み」

メ「？なにやってるのロックくん!？」

ス「その後ちよつとごつん、って音が聞こえたからソロに当たったのかもしれないね。フォルテあの角かな?……当たったら痛そう」

ミ「それはソロも怒って怒鳴り込みにいったんじゃ……」

ス「かもね。さて、今回のお題は……」もし主人公に一日時間をもたえたらどうする?』だって」

星河スバル、話の途中で『お題BOXくじ』を引く。

ウオ「?話の途中でくじを引くな!! しかもなんだその一見まともなお題!！」

ス「……ちよつとロックマンをまねてみたんだよ。なんだかんだですらすら進むから。ではまずメールちゃん」

メ「そ、そうねえ……やっぱり、お買い物に引っ張り出すか……一緒に遊園地に行きたいな。思い出の公園がある、あそこに」

ウオ「普通だな」

ス「それはそれで素敵だね。素朴だし、ポピュラーだし」

メ「うん。熱斗はネットセイバーで忙しいから、一緒に遊園地出か

けたら、ウィルス騒動起きるのも当たり前になっちゃって……のんびり楽しめたことなんて、最近ないわね……」

桜井メイ、かなり遠い目で天井を見上げる。

ウオ「それはそれで大変だな……」

ス「じゃあ次ロールちゃん」

ロ「私は……電腦ファッションショーに行ってみたいかなあ……やいとちゃんがこの前チケットくれたし、しかもこのチケットで気になった服を試着できるし」

ロール、ひらりと電腦ファッションショーのチケットをそよがせる。

ミ「へえ。そんなのあるんだね」

ロ「でも、ロックのことだから……朴念仁な答えされるんだろうなあ……」

ロール、セットの隅でひざを抱えて落ち込む。

ス「じゃ、次ミソラちゃん」

ミ「そうだなあ……私は……やっぱりロッポンドーヒルズで、フジヤマクリームパフェをスバルさんと食べに行きたいな……」

響ミソラ、星河スバルを見る。

ス「この前ソロも言ってたし、本当にツカサくと食べに行きたいな……」

星河スバル、今度ツカサくんを誘ってみよう、とつぶやく。

響ミソラ、いいもんいいもん。今度マモロウさんといっってくるもんとすねる。

ウォ「で、お前は？」

ル「わ、私！？ そ、そうね……ヤエバリゾートに行きたいわね。昔行つたときは散々だったもの」

ス「今度はちゃんとベッドで寝させてね。ソファで寝るとあちこち痛いんだよ」

ル「あ、あなたじゃないわよ！！ 私が言ってるのは、ロックマン様なの！！ ほ、星河くんじゃないんだからね！？」

ス「でもそうになると、遊べなくなるよ？ 電波体って人の目には見えないし。僕の持つてるビジュライザーも一緒に電波変換しちゃうし」

ウォ「そうそう」

ル「うるさいうるさいうるさ い！！」

白金ルナ肩を怒らせてふくれる。

ス「大体全員から意見が出たし、全員がなんらか落ち込んだりしてるので今日はここまで。バイバイ！！」

星河スバル、ひらひらと手を振る。

ウォ「いつも思うけどぐだぐだだな……」

ル「星河くんっ！ー！！」

## 憑依（前書き）

この前ハンターV.Gを起動したので、『電波変換』から『トランスコード』にしました。

## 憑依

よろよろと壁伝いに歩いて、部屋に戻るなり、ぱたり、と二人がけのソファーに倒れこんで、スバルは目を閉じる。

別段飛行機に酔ったわけでも、車に酔ったわけでもなく、何か急に気持ち悪くなったのだ。

スバルは髪を結んでいたゴムを解いて手首につけて、本格的にソファーに沈む。

ウォーロックが見かねたように出てくる。

『スバル、寝るならベッドで寝ろ。折角ふかふかなんだぞ？』

「そう…だね…おやすみ…ロック…」

のろのろと歩いて、PETとハンターVGを傍に置き、天蓋を引っ張って周りを遮断し、ベッドにもぐりこみ、目を閉じる。

そして、そのまま眠りに付こうとした所で、どくり、と不自然にスバルの鼓動が跳ね上がり、ウン…と音がした。

急にスバルの電波に混じった力に、慌ててウォーロックが天蓋を通り抜けたところで、ぱあ、とスバルの胸の少し上辺りに、見慣れた特殊な一族の紋章が…：ムーの紋章が、鮮やかに浮かび上がる。

『スバル！！』

ウォーロックが叫び声を上げる。

スバルはゆっくりと身体を起こし、ウォーロックの方を向くが、にい、と普段のスバルからは全く想像のつかない笑みの形に、唇を吊り上げて代わりにウォーロックに手を伸ばす。

『電波……変、換……………』

< > < > < >

「ごちそうさまでしたー！！ おいしかったー！！」  
ミソラは満足してにニコニコ笑う。

「本当だね。凄く美味しかった」  
ツカサもご馳走様でした、と両手を合わせる。

「でも、スバルくん全然手をつけてないね……………」  
「どうしたのかな……………」  
二人が顔を見合わせて唸ると、ドオオオン、と上から何かが爆発する  
ような音が聞こえ、ぱらぱらと埃が降ってくる。

「何だ！？」  
チャーリーがテスラを庇いながら上を見上げる。  
瞬間、スウと天井を突き抜けて、シューティングスター・ロッキマ  
ン………… スバルが現れる。

とん、と周波数を変えたスバルは軽やかに床に降り立つ。  
「スバル、くん…………？」  
「！！ だめだ、ミソラちゃん、離れて！！」  
ミソラがとん、と一步スバルに向けて歩き出そうとする。  
ツカサは走ると同時、念のために叫びつつ、ミソラの腹部辺りに体  
当たりのようにぶつかる。

二人そろって転倒した後、ビキビキツ、といやな軋みが聞こえたか  
と思うと、先ほどまでミソラの立っていた位置から、真っ直ぐに床  
に亀裂が入っていた。  
それはメールとやいとこの傍でようやく止まった。

そしてその亀裂は、スバルの足元から続いていた。  
否、スバルが突き立てたロングソードによって、引き起こされていた。

「……………！！！」

「スバル、お前何やってんだよ!？」

メイルとやいとが息を呑み、熱斗が抗議する声を上げれば、スバルはにいに、と唇を笑みの形に吊り上げるだけだ。

『シュゾクノ……………フツコウ……………ヲ……………ソノミヲ……………ヨコ……………セ……………！！！！』

スバルの喉から出た声は、少し低い感じの声とはまるで別物の、幾人もの声が重なった『声』だった。

スバルはロングソードを消し、自然な仕草で肩の後ろに手をやり、ぶん、と一振りの剣を取り出した。

銀色の柄に雷の刀身の、巨大な剣……ベルセルクを。

それを高く掲げれば、スバルの身体が雷に覆われて、銀色の剣士へ姿を変えた。

「……………サンダー……………ベルセルク」

炎山が呟いたのは、ホテルに来る前に車の中で見せられた、姿の一つ。

たっ、と軽やかにスバルは、熱斗との間合いをつめる。

熱斗とスバルの顔が、これ以上ないほど近づいていた。スバルの唇が、きゆう、と不気味に吊り上げられる。

しまっ……………！！！！



熱斗がそう思うより、早く、疾く、振りかぶられた剣の刀身が、鮮やかに煌く。

『熱斗くん!!』

焦ったように大声を上げるロックマンの声、やけに遠くに聞こえた。

『……っ、熱斗　　っ!!』

ロックマンの声にかぶさるように、ガキイイイン!!と何かがつかり合う音がした。

ぶつかり合った衝撃の余波が、熱斗の頬を叩くが、切られた痛みはないし、その衝撃自体も熱斗は受けていなかった。

「くう……っ……!!」

僅かにうめく声が聞こえて目を開ければ、オレンジ色の髪をした白いボディの、見た事もないナビ。スバルの持つ剣を手のひらから具現化させている剣で受け止めていた。

「ツカサくん!!」

ミソラが焦った声を上げ、駆け寄ろうとしたミソラを、熱斗の目の前にいるナビの少年と、そっくりな少年が止めた。

「やめておけ、足手まといになりたくなかったらさっさと電波変換しろ!!」

「う、うん!!」

黒い少年のもつともな一言に、ミソラはPETを構える。

「行くよ、ハープ!!」

『ええ!!』

ミソラの肩に映っていたハープの姿が消えて、ミソラはPETを構

える。

「トランスコード ハープ・ノート!!!」

ミソラの姿が淡い桃色の光にとけて、それがほどけたときにはミソラとハーブの電波変換した姿、ハープ・ノートがいた。

「えええいつ!!!」

ツカサが力いっぱい剣を振り切れば、たたん、とスバルは一旦距離をとる。

「大丈夫、熱斗くん？」

そういつてスバルを真っ直ぐに見据えた白の少年の横に、黒い少年が並ぶ。

「ツカサくん……なのか？」

「うん、そうだよ。これが僕がジェミニと電波変換した姿、ジェミニ・スパークだ」

そういつて熱斗を振り返って、白い少年……ツカサは熱斗に手を差し伸べてくる。機械で作られたかのような大きい手ではなく、普通の手を。

左右反対の巨大な腕に、そっくりな顔立ち。まるで鏡写し、とでもいうように色はともかくも、そっくりであった。

「ジェミニ……双子、って言うだけあって、二人になっちゃうんだけどね。ね、ヒカル」

「無駄口叩けるんだったら大丈夫そうだな、ツカサ。……とりあえず」

僅かに苦笑を滲ませてツカサは、スバルを真っ直ぐに見据えている黒い少年……ヒカルを振り返る。

ヒカルもツカサを見て、すぐにスバルのほうを見た。

スバルは今現在、だらり、と剣を持つ左手をけだるそうに下ろし、俯いている。

「……………どうするか」

「だよな……………スバルくんには暴走されちゃうとはね……………」

「スバルくん、僕たちからしてみれば桁違いだし……………」

ヒカルは面倒そうに顔をしかめ、ギターを構えるミソラはため息混じりに同意を示し、ツカサは少し苦い表情で呟いた。

『…というより、あのバカはどこに行つたのかしら？』

『大方一緒に力に飲まれてるんじゃないのか？』

ハーブはスバルのパートナー・ウォーロックはどこに、と呟き、ジエミニは一番妥当であろう答えを返した。

途端、スバルの膝がかくり、と折れた。

## 自我

「つつ……つつつつつつ……！！！」

急に、ぼんやりと立っていただけのスバルが、何の前触れもなしに苦しみだして、叩きつけるように、ベルセルクを床に落とし、頭を押さえて、その場に膝をつく。

そして、スバルの身体から黄色と緑と赤の、剣を持った人型と、手裏剣と、恐竜のオーラが現れる。

『テイコウ、スルナ……！！ オトナシク、ベルセルク、ノ、チカラヲウケイレ、ロ……！！』

『シノ、ビノチカラヲ、ウケイレロ……！！ テイコウ、ナド、シユゾク、フツコウノタメ、ニ、ナンノ、イミモ、ナイ……』

『イヤ……ダイナ、ソーノ、チカラ、ウケイレ、ロ……！！ ワガシユゾクノ、タメニ……』

ビシリ、とスバルを中心として、床がへこむ。ぎっ、と鋭い瞳でそのオーラを睨みつける。

「嫌だ！！ 抵抗、してやる！！ 皆を、傷つけてみる…… お前達を、許さな……うあああああっ！！」

スバルの背後に、ウォーロックも現れて、ニヒルな笑みを浮かべて、口を開く。

『ス、バル！！ その調子で、抵抗、してる！！……ぐ、あ……グアアアアアアアア！！』

しかし、抵抗するように叫んだ瞬間、鋭い痛みが身体の中を駆け抜けて、スバルの意識を、同化したウォーロックの意識を臙げにしてゆく。がくん、と身体を折り曲げて、しばらくその場に蹲って、顔を上げたスバルはい、と先ほどの狂ったような笑みを浮かべて、

ベルセルクの剣を拾い上げて、ゆうらり、と立ち上がる。

「サア…シユゾクノフツコウニ…ヤクダツテモラオウカ…？」  
スバルの声が再び消え、幾人もの声が重なった禍々しい声が響く。  
いつもなら優しい微笑む瞳が、血塗れた色に紅く染まっている。

「スバルくん！！」

「くそつ、下手に手え出せねえ！！」  
顔をしかめてツカサが叫び、ヒカルはぐつ、と齒噛みする。

「スバルくん……」

ミソラは悲痛そうな表情で顔を歪め、フィーチャリングハーブギタ  
ーを握り締める。

熱斗達も状況が分からないなりに、相当にやばい状況だとは理解し  
ている。

「名人、デイメンシヨナルエリアを！！」

「分かっている！！」

早くも炎山がデイメンシヨナルエリアを名人に要請し、エリアが形  
成される。

そしてやいととデカオ以外の一同がすぐに、ナビとシンクロし、姿  
を変える。

けれどただひとり、シンクロせず、ぼんやりと立ち尽くしている少  
年と、そのパートナーナビがいた。

かつて今のスバルたち同様暴走し、多くの人たちの命を奪いかけた、  
サイトスタイルがうまく操れなくて暴走している自分達みたいだと、  
熱斗は思う。

そして、今の状態がスバルにとって良くないことも分かる。ぎゅつ、  
とP.E.Tを握り締めて、熱斗はスバルを見つめる。

ツカサに切りかかり、ヒカルに止められて、スバルは剣を跳ね上げられる。しかし、なんでもないことのように、くるり、と軽いしぐさで飛ばされかけた剣を握り締め、返す刃でヒカルを切り上げた。

「ぐうつ……！！」

「ヒカル！！　つと……！！」

跳ね飛ばされたヒカルを気にせず、スバルはそのまま、今度はツカサに振り下ろす。バックステップでツカサは後ろに跳んで下がる。そこへミソラが降り立ち、攻撃を仕掛ける。

「パルスソング！！」

マヒと盲目の追加効果のある音波を放つが、スバルはそれを綺麗に一刀両断する。

「くつ……」

「ミソラ、さがるネ！！　メデイカプセル！！」

「ロールアロー！！」

ジャスミンの音が響き、たたんと軽やかに飛び上がったミソラの後ろにいたのは、ミソラのパルスソングのように特殊効果の付いたメデイカプセルをなげたジャスミン。そしてすぐに攻撃がはいるように、とロールアローを放ったメイル。

けれどただ、にい、と笑うだけで。バチバチツ、と雷の剣に雷が纏わりつき、それを勢い良く振り下ろす。

雷の衝撃が地を走りぬけ、カプセルを粉碎し、矢を砕いた。

「そんな……！！」

『オトナシク……シュゾクフツコウ……ソノイシズエ、ニ……』

一歩スバルは前に踏み出すが、すぐに何かに気づいた表情をする。

「デルタレイエッジ！！」

「マグネットボム！！」

「ナパームボム！！」

「トルネードアーム！！」

その叫びと共に、爆発が生じる。炎山の放った剣の攻撃と、テスラと燃次の放った爆弾を乗せたチャーリーの風圧の攻撃。

炎山の攻撃を避ければ、テスラと燃次の爆弾を乗せたチャーリーの風の攻撃が。

テスラと燃次の爆弾を乗せたチャーリーの風の攻撃を避ければ、炎山の攻撃に当たるように、計算して放たれた技だ。

「流石にアレは避けられる……」

ひゅう、と口笛を吹いて腕を構えるチャーリーの言葉を遮ったのは、ヒュ、と背後から何かが空を切つて放たれた音。

「きやあつー!!」

テスラの悲鳴が聞こえた後、横にいたはずのテスラが吹っ飛んで窓ガラスを突き破った。

「テスラー!!」

チャーリーも床を蹴つてテスラの落ちた窓から外に飛び出し、落ちてゆくテスラを抱きとめる。

「な……!?!」

炎山が手裏剣が飛んできた方向を振り返るが、そこには何もいない。一同の集うフロアにチャーリーがテスラを抱えて戻れば、からんとテスラの背中から抜け落ちたのは、緑色の手裏剣。

「手裏剣……?」

「まさか……」

ミソラとハーブが顔を見合わせて、ツカサとヒカルが頬を引き攣らせて、メイルとジャスミンの元にミソラ、やいととデカオの元にツカサが、チャーリーたちの傍にヒカルが駆け寄った瞬間。

気配すら感じさせずに、ふっ、と炎山の真後ろに、人影が降り立った。

ばっ、と一同がその人影を見れば、左手に雷の剣、もう一方の右手に大地の手裏剣。

そこに佇むのは、シノビとベルセルク、両方の力を併せ持った忍者

剣士。

「しまった!! 逃げて、炎山くん!!」

ツカサが叫ぶが、それよりも早く、スバルが剣を構えた。

『エレメンタル……ブレイド……!!』

雷の刃が横に薙ぎ、一回目は避けたが、二回目は避けきれずに喰らってしまい、最後に振り下ろされた剣に纏われた木の葉の竜巻が、炎山を襲った。

「うわああああああああつ!!」

パシイン、と強制的に炎山のシンクロが解除され、炎山は壁に叩きつけられ、傍らにブルーの映るPETが落ちた。

『炎山様!!』

ブルーの焦った声と、ピクリとも動かない炎山を興味もなしにスバルは見て、次にと、熱斗をひた、と見据えた。

決めた、とばかりにこつ、と微笑むスバル。

その表情は、本当に僅かだったが本来のスバルに近かった。

こんな状況で笑うどころか怒る性格の事を考えれば、少しやばいところはまだ頑なに『復興』を訴える呪縛に、スバルの意思は押さえ込まれているのだろう。

どこか痛みの伝わってくるスバルを見据えながら、熱斗はぎゅ、と腕のバンドにはまったPETを握る。

「ロック、あのさ……」

冷静に、熱斗は小さな情報端末の中にいるパートナーに、作戦を告げれば。

『そんな…無茶だよ!! だって、スバルくとウォーロックは…』

即行で反対だという意見が帰ってきた。

「でも、あのままじゃ二人が!!」



ロックマンの翠の瞳と、熱斗の茶色の瞳が真っ直ぐに互いの瞳を見る。

ロックマンはパートナーを心配する、どこか兄のような瞳。

熱斗はただただ、真っ直ぐに、自分の意思を揺るぎなく訴える瞳。

しばらく互いの瞳を見たまま動かないでいるかと思いきや、こつこつ状況だったので、やはりいつものようにロックマンが折れた。

『……分かった、でも、熱斗だけでやるんじゃない』

分かっているよね、と、ロックマンではなく、ロックマンのもう一人の人格で、熱斗にとっては、たった一人の兄の表情で、念を押されて熱斗の顔が綻ぶ。

「……そうだったな、俺達で、だよな!! 行こう、彩斗兄さん!! ……そして、」

次に見えた表情は兄の彩斗のものではなく、幼い頃から傍にいた、大事な親友の表情。

「ロック!!」

『うん!!』

だっ、と熱斗は床を蹴って、手に持ったシンクロチップを取り出す。

「シンクロチップ、スロットイン!!」

『クロス、フュージョン!!』

熱斗の声とロックマンの声が重なり、熱斗の姿に、ロックマンの姿が重なった。

## 奪取

勝負は一瞬で決まる、と、予感のような、けれど現実起こりそう  
だと思いながら、光の中から飛び出した熱斗は真っ直ぐに、スバル  
に向けてロックバスターの照準を重ねる。

「ロックバスター!!」

けれどそれを剣で防いで、スバルは一步ずつ歩み寄ってくる。

目を逸らさずに、熱斗は声を張り上げる。

「……チャーリー!! テスラを下に!! メイルちゃんとジャス  
ミンたちも、炎山とやいとちゃんとデカオを下に!!」

チャーリーは頷きテスラを抱え上げて、窓から飛び降りる。

ジャスミンもテスラの容態を確認しながら、飛び降りる。

燃次もデカオを抱え、バトルチップを使い窓から飛び降りる。

メイルはやいとを抱えて飛び降り、ヒカルが炎山を抱えて飛び降り  
た。

「熱斗くん!!」

ツカサの声に、何、と大きい声で返して、熱斗はじり、と少しだけ  
足を前に出す。

「……スバルくんを、お願い。助けてあげて」

「……私達じゃ、連れ戻せないから……」

おそらく痛々しい表情で俯いているであろう、ツカサとミソラに向  
けて、熱斗は声を上げた。

「俺はそんな事ないと思うぜ!! スバルたちがまだ自我を保って  
られるのって、二人のお陰なんだろ? だったら、きっと二人が連  
れ戻せるよ!!」

『僕もそう思う。だから、僕らがダメだったら、ダメじゃなくても  
手段が見つかったら……お願いするね!!』

熱斗とロックマンの言葉に、ツカサは少し驚愕した表情で、ミソラは少し泣き出しそうな表情になった。そしてその後、確かに頷き返して、足場の安定しないながらも、そこに存在するウェーブロードに飛び降りた。

しん、と静まり返るレストラン内部。

ホテルの外からの騒ぎ声が聞こえてこないのは、ここが随分と高い場所にあるからに違いない。

そして、従業員達の声が聞こえないのは、手際よく避難を終えたらしい、と当たりをつけて熱斗はぎゅ、と床を踏みしめた。

「バトルチップ、エアースチール!!」

ばっ、とスバルのウォーロックブーストに似た方法で、一瞬にして熱斗は間合いを詰める。スバルはいささか驚愕した表情で、熱斗を見る。

「バトルチップ、エアスプレッド!!」

至近距離でを放つが、ポウンッ、と音と共に煙が立ち昇る。先ほどの熱斗よりも早い、スバルの斬撃が繰り出される。

『熱斗くん!!』

「バトルチップ、イアイフォーム!!」

しかし、更にそれよりも早く、熱斗のバトルチップの攻撃が、繰り出された。

「ええい!!」

スバルの剣を握る左手を力任せに薙ぎ、その手からベルセルクの剣が跳ね上げられ、熱斗はベルセルクの剣を掴む。

瞬間。

「ぐっ……!!」

ずるり、と意識の中に、別のものが、どす黒い嫌な何かが進入してくる。

まるで意思を食い尽くされるかのような感覚に、熱斗は唇を噛み締め耐える。

たった一つのオーパーツでこれなのだ、スバルたちはよくこれに反抗できたな、と頭の片隅で思っても、すぐにそれをかき消した。

幸いにも、ベルセルクを失った影響か、スバルの動きが止まっているので、熱斗は自分の中へ意識を集中させた。

< > < > < >

あたりには幾百という、人々の影のイメージが浮かぶ。

そして、その中央に立つ自分と、ベルセルクの突き刺さった台座。

熱斗はベルセルクに手を掛けて引っ張るも、まるで一つの岩で作られたかのように抜けない。

それに焦って引っ張る熱斗を嘲るように、影達は自らの意思を押し付けてくる。

『ソノミヲ、ヨコセ!! ベルセルク、フツコウノタメニ!!』

『ソウダ!! ベルセルク、フツコウノタメニ!!』

『サア、ソノミヲアケワタセ!!』

こちらの意見を全く聞かず、頑として『復興を』、とだけ唱え続け、熱斗の意識を塗りつぶす。

頭が割れそうなほど、それを繰り返す『影』達。

これだけでも狂いそうなのに、スバルとウォーロックの中で暴れまわる、これらはオーパーツに宿った呪縛の一部に過ぎない。

スバルたちの中にあるのは、ベルセルクだけでなく、後二つ、同じような事を繰り返し、持ち主の『自我』を侵食するシノビ、ダイナソーの、力もなのだ。

「く……うつ……!!」

熱斗は呻き、ベルセルクの柄を握り締めながら、寄りかかって頭を抑える。

『ハヤクオトナシクナレ!!』

『テイコウスルナ!! ソノミヲ、ヨコセ!!』

『ワレヲ、ベルセルクノタメニ!!』

嫌というほどに繰り返される言葉に、ぎゅっ、と目を閉じた瞬間。

『自我』、という意識が消えそうになり、熱斗は立ちくらみのような感覚を味わい、そのまま身を委ねそうになり。

「熱斗、聞いちゃだめだ!!」

寸前、ぐい、とその声に引きずり戻される。

瞬間で『自我』が戻り、自分を引き戻してくれた声の主を見上げる。

「全くもう、だから無茶だって言ったのに……」

そういつて熱斗を飲まれる直前で引き戻した少年は、『だから熱斗くんは……』と、状況が状況なのに、いつものように説教をし始めようとした。

「い、ごめん……」

そこにいたのは、熱斗が謝れば『全くもう』と、そういつて怒るくせ、顔に浮かぶのは笑顔という、らしい表情をした、ロックマンエグゼ……そして、光彩斗と言う名前を持った少年だった。

ロックマンもベルセルクの柄に手を当てながら、口を開く。

「スバルさんとウォーロックを助けるんでしょ？」

こつん、と確認するかのように額を合わせて、ね、とロックマンが言えば、擦ったそうに熱斗は笑って頷く。

今の風景に不釣合いだが、元々一つの魂が二つに別れた存在だからこそ、落ち着いて、自我を確固たるものにし、心を言葉にする。

「俺達なら」

「僕達なら」

互いの瞳を真っ直ぐに見て、同じタイミングで、言葉を続ける。

「必ずできる」

「絶対できる」

頷きあつて熱斗とロックマンは、ベルセルクの柄に置いた手に力をこめる。

「行くぞ!!」

「うん!!」

ぐ、とタイミングを合わせて、思いつきり引つ張り、叫ぶ。

『はああああああああつ!!』

二人の魂の叫びが籠った声に応じるかのごとく、それまで頑ななままで台座に刺さっていたベルセルクが、二人に従うかのように抜け始めた。

ゴトツ、と鈍い音と共にベルセルクが抜け、それを掲げる、熱斗と彩斗を中心として、強い光が沸き起こった。

< > < > < >

バチィッ、と強い放電を辺りに散らして、ベルセルクの剣を掲げるのはスバルではなく。

「ロックマンエグゼ、サンダーベルセルク!!」

どこかスバルとウォーロックのサンダーベルセルクに似た、熱斗とロックマンの絆が生み出した、新たな雷の剣士が、真っ直ぐに剣先を、すらり、と躊躇い無く、シノビとなったスバルに向ける。

「さあ、俺達が…」

『さあ、僕達が…』

「『相手だ!』!」

そして、ゴウッ、と凄まじい衝撃が巻き起こった。

## 番外編06

E「こんにちは、40000PV、ユニーク5000突破ってことで……番外編、『タイヒメ参加メンバーを呼んじやいまSHOW！』の時間だよ。今回はロックマンエグゼ組でお送りしまーす」

ね「なんだよそれ！？ ていうか、何そのネーミングセンスの欠片もない番外編題名はどこから！？」

E「分かりやすくして良いじゃない。良い案が浮かばなかったのもあるらしいけど」

ス「それは言っちゃダメだよ！！ 作者も色々分かってるけど、あえて言わなかったんだから！！」

星河スバル、セット傍の椅子から立ち上がる。

ウォ「お前も言ってるぞ！？」

ウォーロック、今回はウィザード・オンして登場。

E「例によって、流星組はセット傍で見学中だよ。もはや見学してもしなくても、ごちゃ混ぜだから意味ないけど」

ね「と、とりあえず、題名は良い案が浮かばないから、誰かに付けて貰えたら付けて貰うまで、これで行くとして！！ えっと、今回のゲストは……」

E「『ロックマンエグゼ』クロスオーバーキャラとして登場の、太陽少年ジャンゴー！！」



ウォ「ちょっと待て！！ そいつ、登場してねえぞ!？」

E「そしてそして」

ロックマンエグゼ、ウォーロックのツツコミ無視。

E「『流星のロックマン』クロスオーバーキャラとして登場の、見習い銃士ジャンゴ!』 なお、オテンコは『オテンコ』がどちらの時間軸の要に共通するからと、お休みだそうです」

ウォ「ごらあああああつ!! 無視すんじゃねええええええ

つ!! って、何すんだスバル!!」

星河スバル、怒り狂っていたウォーロックの背中辺りの毛並みを何かを探すように触る。

ス「いや、メモ用紙が見えたように見えたんだけど……」

ね「メモ?」

ス「あ、あつた」

ね「何でそんな場所に!？」

星河スバル、ウォーロックの電波の毛並みの中に見えたメモ用紙を引っ張り出す。

ス「じゃ、読むね」

ウォ「おう」

ス「えーっと……『DSのジャンゴと、こちらの番外編に出すかは分かりませんが、DSのサバタは海外バージョンの名前で行きます』

だって」

ね「あ、そういえば海外でも出てるんだっけ」

ス「DSジャンゴはアーロン、DSサバタはルシアンで行きますのであしからず」、だって。凄いね、二つも名前があるなんて。ね、アーロンくん、あといらっしやい、ジャンゴさん」

アーロン（以下：ア）「そうかな？ スバルくんも姿に合わせているんな名前があるよね。僕はそっちが凄イと思うなあ」

ジャンゴ（以下：ジャ）「こんにちは、スバルくん。でも、僕よりはましだと思うよ。バンパイアだからって、黒ジャンゴってつけられた事があるし（苦笑）」

GBAジャンゴ & amp; DSジャンゴもとい、アーロン、いつの間にかゲスト席に着席。

ね & amp; ウォ「だからなんでしれっとしてるんだっ  
！？」

光熱斗 & amp; ウォーロック、ジャンゴ & amp; アーロンに驚愕しながら飛びさる。

ジャ「アーロンの時代のひまわり娘が送ってくれたんだよ。それよりも、久しぶりだね。熱斗くん、ロックマン」

ね「そ、それもそうだね。久しぶり、ジャンゴくん」

E「にしても、印象が違うんだね。ジャンゴくとアーロンくんって」

ス「あ、ロックマン。『タイヒメ』設定だとアロンくん、女の子  
ってことになってるから、番外編もそれで行くって」  
星河スバル、メモの下に書かれた追記事項を読み上げる。

ね「!？」

ア「あはは、全く見えないでしょ？」

アロン、いつの間にもやら準備されていた、赤い太陽マークのマグ  
カップに入った蜂蜜ミルクを飲み、笑う。

ジャ「でも、アロンの日本での名前はジャンゴ、なんだよね？  
お父さん、名前なんていうの？」

ア「何で名前？」

ジャ「もしかしたら、僕が知ってるかもしれないって思った  
んだけど……」

ウオ「気になんのか？」

ジャンゴ、ウォーロックの言葉に苦笑。

ジャ「だって、同じ名前と同じ戦士だったら、何かそんな気がし  
ちゃって……きのせ」

ア「父さんはトリニティだよ」

アロン、ジャンゴの言葉の途中で喋る。

ジャ「似てない!! かなり似てないよ!?! 髪質はともかく、  
顔が!!」

ジャンゴ、急に驚愕した表情で叫ぶ。

ね「 何いきなり!? ていうか、トリニティって、あのちびっ子  
!?!?」

光熱斗、シntax登場キャラクターを思い出す。

E「 なんだか似てないね」

ジャ「 ちなみに、何か言っていなかった?」

A「 なんかバンパイアの策略で閉じ込められてるのを、助けたとか  
言ってたよ」

ジャ「 ……その通りデス」

ジャンゴ、目の前に置かれていた赤に白い太陽の模様が入ったマグ  
カップの、ココアに口をつけて、返答した。

ジャ「 にしても、トリニティの……」

A「 ジャンゴさん?」

ジャ「 ……」

ジャンゴ、辺りを見回す。

S「 どうしたんですか?」

ジャ「 や……なんか、来そうだな、と……」

ウオ「 ? どういう意味だ?」

ス「まあまあ、本番中だし来れないよ。さて、ロックマン」  
星河スバル、どこからともなくいつもの箱を取り出す。

E「じゃあ、お題くじ引きに行ってみよう!! 熱斗くん引いて」

ね「俺!？」

星河スバル、持っていた箱を、熱斗に向ける。

ね「えーと(ガサゴソ)。あ、これだ。なにになに……」もし時間移動が出来るなら、どの時代に行きたい?」

E「じゃあ、まずはジャンゴくん」

ジャ「僕? 僕は……まだ、家族が幸せだった時に行きたい、かな。まあ、そんなに長い期間じゃないんだけど、ね」

ジャンゴ、さびしそうな表情でつぶやく。

ジャ「結構散々だったんだけど、ね。幸せな時間の終わり方が。でも、写真は欲しいよ……。ところで、アーンはどの時代に行きたい?」

ジャンゴ、アーンに話を振る。

A「僕は……父さんやサルタナ、エレンさんがいた頃に行ってみたい、かな。あんまり記憶に残ってないから」

ね「サルタナ? エレン?」

A「記憶に残ってるんだよね、その名前が。ちなみに、エレンさん、って人が僕の母さんなんだって」

ウォ「……人って、覚えてねえのかよ」

ア「覚えてるわけじゃないじゃない。小さかったし。いつの間にかいなくなっちゃったし。サルタナの方は……なんだか、イラツとくるんだけど……チョコレートとか、甘いもの取られた気がして……まあ最近、サルタナがルシアンだったのは分かったけど、完全に別人だし」

ス「別人？」

ア「記憶がないんだって。サルタナはいつつも笑って接してくれてたけど、ルシアンが笑うことなんて、めったにないもん」

ジャ「……サバタそっくりだー。サバタもめったに笑わないし」  
以下、なにやら相棒の愚痴りあい大会。

「怒ると無言でこっちに銃口向けてくるんだよ！！ 危ないの何の……」

「そうそうっ！！ 怒ると人の頭、力任せに搦んで、痛いよっ」  
以下、30分後……

「……アロン」

「ジャンゴさん」

ジャンゴ & アロン、がしり、と手を取り合う。

EXE組 & 流星組、完全に蚊帳の外で、集まって話  
出す。

ス「ね、ねえ……。な、何か、話ずれてない？」

ね「うん、すつごくずれたね……。ていうか、相当鬱憤がたまってるみたいだね、アーロンの方……」

ウォ「ああ……。背後に何か黒いものが見えてやがる……」

E「なんだか話が逸れちゃったので、ゲストさんたちには悪いけど、勝手に終わらせて貰いまーす。では、『タイヒメ参加メンバーを呼んじやいまSHOW!!』 また次回!!」

P・S

ウォ「あ、一応、タイトルのネーミング悪いんで、タイトル変えるかもしんねーぜ」

ね「ていうか、『タイトル変えたい』だつて」

光熱斗、隅っこに置かれたスケッチブックに書かれた言葉を読む。

ス「思いつき次第&amp;もしかしたらタイトル消すかもしれないけど、しばらくはこのままです」

E X E & a m p ; 流星「では、今度こそまた次回!!」

番外編07（前書き）

……今回は今までにないほどに、キャラを壊した気がします。なので、キャラ崩壊が苦手な方、キャラが会わないことをやっているのが苦手な方は、見ないでください。



## 番外編07

ス「新年」

ウォ「あけまして」

ね「おめでとう」

E「ございませーす」

星河スバル ウォーロック 光熱斗 ロックマンエグゼの順番に挨拶をする。

以下、司会者組の格好。

星河スバル、赤に流星マーク入りの振袖。

ウォーロック、いつも通り。

光熱斗、青地にナビマークの入った羽織と、水色の袴。

ロックマンエグゼ、水色にナビマークの入った羽織と、青地の袴。

ス「50000PV&60000PV突破記念、『タイヒメ参加メ  
ンバーを呼んじやいまSHOW!』は、今回は新年明けて一作目  
なので、全員参加です」

ね「結局そのままかい」

E「一回またメモデータ全部消えたって。ついでに違うタイトルを  
メモった紙、なくしたって」

ね「それで、今回こんなに長く投稿できなかったのはなんでだ？」

ス「まず文化祭でどたばたでしょ」

ウオ「あ、それはいつてたな……」

E「次に持久走練習が始まってへとへとになって」

ね「引きこもりだから運動苦手だって言ってたな」

ス「ついでにインターネット環境がほとんどだめになって」

ウオ「いつものことだな」

E「そこに風邪引いて高熱出して、へろへろで年末寝て過して」

ね「……紅白見れなかった、ってぼやいてたな」

ス「そして二週間前ぐらいにインフルエンザにかかって」

ね「身体鍛えてよ作者!!」

E「とどめとばかりに一週間前に学年末試験が、終わったばっかりなんだよね」

ウオ「……重なりすぎじゃねえ？ 特に病気辺り」

E「それはともかく、ではでは新年一発目のゲストは……!」

ウオ「無視かオイ!?!」

ス「『ロックマンエグゼ』より、熱斗くんの親友で、よきライバル  
！！ 大山デカオくんとそのパートナー、ガッツマン！！」

E「『流星のロックマン』より、二つの心を持った少年、双葉ツカ  
サ&ヒカルとそのパートナーFM星人のジェミニ！！」

大山デカオ、ガッツマン、双葉ツカサ、ジェミニ、既にゲスト席に  
着席済み。

以下、『EXE組』と『流星組』に別れて新年挨拶。

『EXE組』

ね「デカオ、ガッツマンあけおめ」

E「あけましておめでとう、デカオくん、ガッツマン」

デ「おう、あけおめ！！」

ガ「あけましておめでとつでガッツ！！」

デ「で、熱斗。さつそくだが……」(シャキーン)

ね「おう」(シャキーン)

光熱斗、大山デカオ、PETを構える。

ね「プラグイン！！ ロックマンEXE、トランスミッション！！」

デ「プラグイン！！ ガッツマン、トランスミッション！！」

光熱斗、大山デカオ、ネットバトル開始。

『流星組』

ス「ツカサくん、ヒカル、ジェミニ、あけましておめでとう」

ウオ「今年もよろしくな!!」

ツ「うん、あけましておめでとう」

ジェ「今年も世話になる」

ス「……えっと、ヒカルに僕の声、聞こえてる?」

ツ「大丈夫、ちゃんと聞こえてるよー」

ヒ<……一応、あけましておめでとうは、言うておく>

ス「うん、あけましておめでとう」

ね「ロックマン、そこだあ!!」

デ「うわああああ!!」

光熱斗&ロックマンエグゼペアの勝利で終わる。

ス「あ、終わった?」

E「うん、終わったよ」

< > < > < >

ス「じゃ、今回のゲストへのお題は、個人個人違ってお題で行くから、まずはデカオくんたちから引いてね」

星河スバル、大山デカオにくじ箱を差し出す。

デ「(ごそごそ)えーと、なにになに? 『好きなだけ時間がもらえた』とします。あなたは何をしますか?』」

デ「そりゃあやっぱり、ネットバトル修行と、カレー修行だな!!」

ね「期待してるぜ、デカオ!!」

デ「おう、任せておけ!!」

光熱斗、大山デカオ、がしり、と手を組む。

E「……ネットバトルとカレーにかける二人の目の光が、尋常じゃないよ……」

ガ「いつもの事でガス……」

ス「何かもうキラキラ通り越して、キラキラだよね……」

ウオ「地球人てのは凄えな、オイ……」

ツ「アレは尊敬に値するほどの熱中ぶりだね……」

ヒ「人間ここまで熱中できるもんなのか……」

ジエ「もはや凄い以外の言葉をなくしそうだ……」

ロックマンエグゼ、ガッツマン、星河スバル、ウォーロック、双葉ツカサ、ヒカル、ジエミニ、後ろの方で固まって心の内を語り合う。

< > < > < >

E「じゃあ、次はガッツマンだね。はい」

ロックマンエグゼ、気を取り直し、ガッツマンにくじ箱を差し出す。

ガ「えーと……、もしパートナーを代えることができたなら、誰がいいですか？」って、無理でガス！！ デカオ様以外は考えられないガッツ！！」

デ「ガッツマン……」

大山デカオ、ガッツマン、互いの手をガシッ、と取って、感動のあまり泣き始める。

ス「僕はちよつとパートナー代えたいって思うときあるんだけど、あそこまで無理って言い切るの、凄いなあ」

ウオ「おま、それ酷くないか!？」

ス「……人の天体観測を邪魔したり、望遠鏡を破壊したりしたの、誰だっけ……? ……あ、そうだ、マテリアルウェーブのストックでたただけわかる?」

星河スバル、一切目が笑っていない笑みをウォーロックに向けつつ、何気にマテリアルウェーブのスキーマのストック（尖っている方）を向ける。

ス「……少し……反省しようか……（某白い魔法少女の台詞のような読み方で）」

ウォ「すみませんでした。俺が悪かったです、だから怖いからやめてくれええええええ！！頼むから構えるなああああ！！しかも叩くじゃなくて刺す気満々たるお前ええええ！！」

ス「やだなあ。ウォーロックは電波だから実体で刺されたくらいじゃ、死なないでしょ？じゃ、覚悟！！」

星河スバル、目だけものすごく光らせて、フェンシングでもするように、ストックを振る。

ウォーロック、必死で回避する。ただし、ストックの先が身体を掠めている。

ツ「……スバルくんって怒らせるとものすごく怖いんだって、何で分からないんだろうね……」

双葉ツカサ、準備されていたジュースを飲みながら呟く。

ヒ>馬鹿だから学習しないだけだろく

ジェ「それより、光熱斗とエグゼが怯えてるぞ」

光熱斗、ロックマンエグゼ、セットの端で固まって怯える。

ね「スバルが、スバルがマジで冗談抜きに怖い!!」

E「フォルテとか、ダークロックマンより怖いよあれは!

」!

ツ&ヒ「<あ>」

双葉ツカサ、ヒカル、綺麗に声がシンクロする。

<> <> <>

ス「はい、ツカサくん。後でヒカルに交代してもらえるかな?」

ツ「うん、いいよ」

星河スバル、先ほどのことを忘れたような晴れやかな表情で、双葉ツカサにくじ箱を差し出す。

ジエ「……オイ、無事かウォーロック、光熱斗、ロックマンエグゼ」

ジエミニ、地面に倒れるウォーロックを揺さぶり、ようやく立ち直った光熱斗とロックマンエグゼに声をかける。

ウォ「あー……なんとかなー……」

ね「怒らせちゃいけない人リストにスバル追加しておこう、ロックマン」

E「そうだね、それが賢明だよ……」



ス「…………？ 皆、何か言った？」

ウオ&ね&E『なんでもないです！！』

ウォーロック、光熱斗、ロックマンエグゼ、揃って星河スバルに返答する。

ス「…………変なの。それでツカサくん、お題は？」

ツ「えーと…………『通信端末として使うのなら、P E TとハンターV Gのどちらがいいですか？』」

ね「俺はやっぱり、使い慣れたP E Tだな」

デ「だよな」

光熱斗はロックマンエグゼのナビマークが入ったP E Tを、大山デカオはガッツマンのナビマークが入ったP E Tをそれぞれ取り出す。

ス「P E Tも慣れてみれば使いやすいくけど…………僕はやっぱり、使い慣れたハンターV Gかな」

星河スバル、手に付けたハンターV Gを見つつ、光一家が用意立ててくれたP E Tを見る。

ヒ>俺はハンターV Gだけしか使ってないな。P E Tの使い方はツカサが使ってたから分かるけどな。まあ、使うとしたらやっぱりハンターV Gか<

ツ「うーん、そうだね。やっぱり両方使ってみて、思っただけどね……使い慣れてるハンターV.Gの方がいいかな。画質も性能もいいし」

ス「そつか、そうだよね。確かにハンターV.Gの方が、表示される画面とか大きいしね」

星河スバル、PETとハンターV.Gの画面を表示させながら、双葉ツカサに同意。

ね「俺も使ってみたいなー。同じくらいの大きさで実体化できるんだろ？ それだったら、色々一緒に景色見えるじゃん！！ って、うおー！！ 画面がお盆みたいに持てる！！」

光熱斗、星河スバルのハンターV.Gが表示した画面を振り回す。

ス「あ、熱斗くん、その画面……」

ウオ「ごらあああああ！！ 人が中に入ってる画面振り回すなあああ ……！！」

ね「わああああああ、ごめんなさーい！！」

光熱斗、ウォーロックの怒りに、必死で謝る。

ス「ウォーロックのカスタム画面だから、怒られるよって……遅いか」

星河スバル、言い損ねた言葉の続きを何となく呟いた。

< > < > < >

E「じゃあ、ヒカル。はい」

星河スバル、ツカサからヒカルに交代した双葉ツカサに、くじ箱を差し出す。

ヒ「俺は……『女装するとしたら、どういう衣装がいいですか』って、なんだこのお題!？」

ス「うつわあ、それ引くつて、けっこう運最悪だね、ヒカル……」

ね「というか、誰が入れたんだ? いつもくじの準備してるのつて、スバルとロックだろ? ロックが入れたのか?」

E「僕でも、スバルくんでもないよ。遊び半分で、作者がそれと後一個、『爆弾質問』を入れたんだよ」

ヒ「出て来い作者ああああ!!」

ウオ「ん? ……おい、ヒカルこれ」

ウオーロック、またもやなぜか毛並みに埋まっていた、折りたたまれたメモを取り出し、ヒカルに渡す。

ヒ「……なんだ? (パラ) 何が書いて……」

ヒカル、ウオーロックから受け取ったメモを開き、硬直する。

メモ『ここはキャラの座談会なので、出ません。ていうか、逃げま

す。 b y ・月峰 夕『

ヒ「逃げるなああああ!!」

ヒカル、手に持っていたメモを握りつぶす。

ス「で、どういう衣装がいい？」

ヒ「聞くな、俺に聞くな」

ス「じゃ……」

ジエ「俺に振るな」

星河スバル、ジェミニのほつを見るも、ジェミニ、言つより早く拒絶。

ス「……じゃ、ツカサくん」

ツ「僕にも振らないで……。身体は、僕なんだから……」

ス「じゃ、ろ……」

E「……肌白いから、ゴスロリでいいんじゃないかな？」

ね「ていうか、もうやめてあげて……」

ウオ「ああ、もういいだろ……」

ガ「でガス……」

デ「ヒカル……頼むから、頼むから」

ジエ「……もうゴスロリでもいいから、頷いておけ」

ツ「>じゃないと追究されるよ……<

ヒ「……これ以上話題にならないんだったら、もうなんでもいい……」

男性陣、結託してお題を強制終了。

<> <> <>

E「はい、ジエミニ」

ロックマンエグゼ、落ち込むヒカルを放置し、ジエミニにくじ箱を差し出す。

ジエ「……『ロックマンEXE or 流星のロックマンのどちらかに、存在を選べるとしたら、どちらを選びますか?』だな」

ね「やっぱり、流星の方に存在したい?」

ジエ「まあな。利用した形とはいえども、ツカサとヒカルと、一緒にいるのもなんだか当たり前になってきたし、意外と人と触れ合うのも悪くないし……」

E「へえ〜」

ジエ「それになにより、ハープと一緒に馬鹿と書いて、ウォーロックと読む奴をいじるのが楽しい」

ウォ「……………喧嘩売ってんのかよ、テメエ？」

ジエ「何を今更」

ウォ「……………」

ジエ「……………」

ウォ「スバル！！」

ジエ「ツカサ、ヒカル！！」

ウォーロック&ジエミニ、ウェーブバトルにパートナーを促そうと振り返り。

ス「…………ふ、た、り、と、も…………？」

星河スバル、ウォーロック&ジエミニが振り返った先に佇み、二人を睨みで一瞬で沈黙させる。

E「スバルくん、間違いなくこの番外編の主導権握ってるね……………」

ね「普段がかなり真面目で優等生だから、これが反動なんじゃ……………」  
「？」

デ「とにかく、怒らせるな、だな……………」

ガ「ガッツ……」

ヒ「俺らはゲストだから、そうそうこつこつ目にあわないから……」

ツ「二人とも、頑張ってね」

ウォーロック&ジェミニを除く男性陣、密かに頷きあう。

< > < > < >

ヒ「なあ、熱斗く

ね「ん？ 何、ヒカル？」

ツ「スバルくんの説教が終わりそうにもないし……。終わらせたら？」

双葉ツカサ、いまだ続く星河スバルの説教を示す。

デ「それがいいんじゃないか？」

ガ「こつちに飛び火が来ないうちに、逃げるでガスよ……」

E「それもそうだね。じゃ、熱斗くん」

ね「ああ。せーの」

E&ね「じゃあ『タイヒメ参加メンバーを呼んじゃいまSHOW！』、また次回……！」

## 番外編07（後書き）

大分遅いですが、あけましておめでとございます、そしてかなりのお久しぶりです。

ちなみに投稿できなかった理由についての、スバルたちの話ですが、……自分でも信じられない重なりようでした。

年末の熱の方は初日に夜中に39度を超え、意識朦朧として、そこから二日間は37度と38度代を行き来して、新年明けるまで下がらなかったです。

そしてついこの間、朝起きてなんかしんどくてそれでも出席日数、と学校に出て、やっぱりしんどくて保健室に行ったら、38度台を出して、病院にいけばインフルエンザと風邪のどっちでしょうねと言われ……。

あ、鼻の粘膜調べる検査では（鼻の奥をぐりぐりとするあれ）、インフルエンザ反応は出なかったんですけど、インフルエンザの薬を貰って帰って、飲んだ翌日にはけろっとしていて熱を測れば、36度台まで下がっていたので……。

妹が私の熱が下がったその日に熱を出し、ついでに私のことをお医者さんに言った母曰く。

「風邪だったら、インフルエンザの薬じゃ下がらないから、確実にインフルエンザ」  
だそうです。

時々いるらしいです。反応が出なくても、インフルエンザに感染してる人が。ちなみに妹は風邪だったようです。



よかった、うつしてなくて……。

ちなみに父も去年同じような出来事がありました。インフルエンザかと思つて調べたら反応がなくて、風邪薬もらつたはいいけど、ずっと下がらなくて病院に行つたらやっぱりインフルエンザだつたつて言つ……。

……その、ただ、……これでクラスで人に移してたら……絶対に、やばいどころじゃないですよね……（泣）。うううう……。

そついうわけなので、進路は決まっていますがネット環境という問題のため、しばらく投稿できないと思ひますが、それでも、これからも宜しく願ひします。

過去VS未来（前書き）

……何ヶ月も本編投稿してない上に、体調崩して五月末までに投稿できなかつたって……。

………どんだけ身体弱いんだ自分！？

## 過去VS未来

炎山は安静にと細心の注意を払い横たえられ、テスラは傷に響かないようにとつつ伏せにされて、マイルとジャスミンの治療を受けている。

デカオとやいとも、戦えないからこそ心配そうに怪我した二人を見ていた。

そして、熱斗に言われてホテルから逃げ出した一同…とん、とミノラが最後に地上に降り立った瞬間、上で凄まじい爆風が起こる。

「な、なんだあ!?!」

「……あそこだ!?!」

チャーリーが声を上げた瞬間、ヒカルの指した先、ぱっ、と爆風で起きた砂塵を切って飛び出してきたのは、銀色のボディに雷の剣を持つ剣士と、緑色のボディに赤いマフラーの忍者。

たんっ、と臆げなウエーブロードに両者は着地を決めて、にらみ合う。

じいつ、と一同が見つめる先で、シノビから姿を晦ませ、続いてベルセルクもその姿を晦ませた。

「『消えた!?!』」

マイルとロールが叫べば、ミノラが違うわ、と告げる。

「周波数を変えて戦ってる。……電波には影響が出るかもしれないけれど、建物や人……周りに影響を出さないように周波数を変えたんだわ」

『多分、無理矢理スバルとウォロックの二人がやったんだろ』  
ヴウン、と音を立てて、ツカサの後ろにジェミニが出てくる。

「それは、どういう意味なんでえ？」

燃次が問いかければ、今度はミソラの後ろにハープが出てきた。

『微量に、本当に一瞬だけだったけど、呪詛の言葉に埋もれる中から、二人の周波数が強く漏れたわ。それと』

ハープはまず、そう前置きをして、ツカサが言葉を受け継いだ。

「それと、熱斗くんたちも……周波数の調整を無意識にやってる。

……相当なバトルセンスだね」

初めて周波数というものを使った戦い方をするのにね、と、ジエミニに意見を求め、ジエミニも、そしてミソラも頷いた。そして落ち込んだ表情をしながら、ツカサは呟いた。

「……こんな時にだけど、流石スバルくん、って思うよ……」

「……私も思う。私、止めることさえできてないのに……」

ミソラもしゅん、と落ち込んでいたが。

がん、こん。

ヒカルがツカサを巨大な右手で、ミソラは女という事で手加減したように、普通の左手で叩いた。

「ヒカル、急に何するの」

「痛いよヒカルくん」

ツカサに比べれば、ミソラは痛くない部類に入るだろうが、気持ちというものだ。

「なに、しけた面してんだお前ら。さっき、熱斗も言ってただろ、スバルたちがまだ自我を保ってられるのって、二人のお陰なんだから」って

『……ベルセルクのこととは、ともかくも……実際、絆がなければ、今よりも状況は悪化していたはずよ』

『スバルがまだあの中で、人のことを考えていられるのは、お前らがいるからだ。自信を持って。お前らが最後の命綱なんだぞ』  
真剣そのものといったハーブと、ジェミニの言葉。

「……なら、二人にもちゃんと役目はあるってことよね」  
ふむ、と呟くやいとの声に、そちらを振り返る一同。

「……しっかり星河くんたちがこれ以上、オーパーツの力に、呑み込まれないようにするっていう、役目がね」

「電波に対して手立てを持ってねえし、クロスフュージョンさえできない俺らこそ、悔しいが何もできねえ……。だからこそ、頼んだぜー!」

そう言うてに、といたずらっぽく笑うやいと、拳を突き出すように鼓舞するデカオ。

「……そう、だね。そうなんだよね、ミソラちゃん」

「……うん、そうだよ!! 私たちがしっかりしてないと、絆って弱くなつて途切れちゃうもん!!」

少しか表情が硬いが、しっかりとした瞳で、ミソラを振り返るツカサ。

そしてぎゅっ、と拳を作つて、自分にも言い聞かせるように、言葉を綴るミソラ。

『そうそう。分かったのなら、信じてなさい?』

『お前たちが、本当に命綱を託されてんだからよ』

くすくすと元気を取り戻したパートナーを見てうれしく思うハーブと、少しだけ緊張をほぐすようにつげるジェミニ。

そして、電波の戦いを捕えることのできるツカサ、ヒカル、ミソラ、ジェミニ、ハーブは空を見上げ、瞳に映る戦いの行方を追った。

不謹慎ではあるが、元気を取り戻し、信頼の笑みを浮かべる三人と

二体のパートナーたちに、ほつと息をついたやいととデカオ。

「なんか、光くんを励ますときみたいね」

「でも俺らが、実際何もできないのは本当だしなあ……………」

「悔しい、わね」

「ああ……………」

眉を寄せて呟いたやいととデカオの二人は、何も見えずとも、祈るような思いで空を見上げた。

「ま、実際二人ともレベルが凄まじいから下手に手出しはできないし、本当にやばくなったら手を出すか」

「めんどくせえが……………それしかねえな……………はあ」

そんな会話を後ろで聞き、メイルたちの治療を見ながら、そう言っ  
て頭の後ろで手を組むチャーリーと、珍しくため息をつく燃次。

「力があっても、力になれねえってのは、しんどいぜ……………」

「ああ……………」

そうして、二人も目に見えぬ戦いを追うように、空を見上げた。

「……………結局は、熱斗に託すしかないネ……………。でも、私たちにできる  
ことも、ちゃんとあるネ！！」

「うん！！ 今私たちにできることを！！ だから、熱斗、頑張っ  
て……………！！」

二人の治療をつづけながら、祈るように、ジャスミンとメイルは空  
を見上げた。

<> <> <>

ばちいつ、と派手に火花を散らせてベルセルクと、巨大な手裏剣で  
打ち合っていた二人は離れて、距離をとる。

とんつ、と熱斗がウエーブロードに降り立つも、降り立った場所に、  
ビキィッ、と音を立ててひびが入る。

けれどそれ以上、ウェーブロードにひびは入らず、熱斗はその上に踏みとどまった。

この時代の電波の道、ウェーブロードは酷く不安定だ。

……というか、ウェーブロードが空にあることさえ知られていない時代である。

電波よりもネットワークが発達しているから、仕方ないのかもしれないが、同じように静止したシノビ姿のスバルを見ながら、ぼつりとロックマンが呟く。

『……今思うのって実に不謹慎だけど……、エアージューズ、ナビカスで組み込んでおいてよかったと思った……』  
「……ロック、今俺もそれ思ったから、気にしなくて大丈夫だと思う……」

改めて熱斗はぎゅっ、とベルセルクの柄を握り締めて、ぼっ、と脆いウェーブロードを走り出した。  
スバルはふわり、と木の葉のような軽さで、ウェーブロードをかけたくる。

「はあああっ!!」  
ざんっ、とスバルに向けてベルセルクを振り下ろすが、とーん、と軽い仕草でスバルはそれを上に飛んで避ける。

そのまま体重がないもののように、刃の部分に片足で立つと、蹴りを熱斗の顔面にお見舞いしたのち、鋭い手裏剣の追撃を喰らわせる。

手裏剣が届く前に、なんとか体勢を立て直した熱斗は雷を落とすし、その手裏剣を全て破壊した。

「はあ、はあ……」

「……」

熱斗は慣れない力のため、両肩で息を継ぐが、スバルは無表情のまままで立っている。

スバルの意思を反映し、年齢よりは落ち着いているがくると意思が変わる瞳が、今はまるで苦しさだけが表面化したような瞳。

けれど、あれと似た瞳を、どこかで見たような気がしてならない。

不意に、そつと、寄り添うように問いかけてくるパートナーの声でした。

『大丈夫、熱斗くん？』

「……ああ、大丈夫だったの。……ロックも大丈夫か？」

一つになっけていても聞こえる、信頼できるパートナーの声に、熱斗は頷いた。

ロックマンも、熱斗の言葉にこくりと頷く。

そして、動かずに剣を構えながら、ロックマンは口を開いた。

『はやく、解放してあげなくちゃね。苦しいなんて、言ってる暇なんかないよ？』

「……でも、なんていうか、ダークチップ使って苦しんでたブルーとか、ダークロック見てる気分になる……」

少しだけ、苦しい表情をしてスバルを見つめる熱斗の瞳に、一瞬だけ違う影が映った気がした。

『……そう、だね』

そつだ。

あれは、孤独の、瞳だ。

誰か助けて、ともがいて、一人は嫌なのだと、苦しいから助けてほしいと叫ぶ、あの瞳だ。



「でも、俺たちはその苦しみも、痛みも知ってる。……早く、助けてやるう？ ……やれるよな？」

息を整え終わった熱斗はそう言って、じり、と足を少しだけ動かす。「そうだね……。うん、……。さ、行くよ！！」

熱斗の問いかけの言葉に、頷いてロックマンは言葉を返す。

……苦しみを知っている君にだから、熱斗くんとは別に思いを共有している君にだから、頼めるんだ。

……どうか、苦しんで声の届かない、孤独に堕ちているスバルくんとウォーロックを助けるために、力を貸して。

ロックマンは自らの身の内に眠る、ダークロックマンにそう、呼び掛け、熱斗の意識が向かっているバトルへと、意識を向けた。

「はあああああつ！！」  
勢いよく剣を横に薙ぐ熱斗。スバルはそれを手裏剣でガードすると、冷静に、今度は拳を叩き込んできた。

「……っつ……！！」  
見た目よりも、ずっと重いそれに、ずさあつ、と後ろに後退する熱斗。

シュンツ、と軽やかに熱斗の目の前に迫る、スバル。

今度は蹴りでも拳でもなく、巨大な手裏剣自体が熱斗の身体を傷つけようと、薙ぎ払われる。

『今だ……！』

ロックマンの鋭い声に合わせて、熱斗は一枚のチップの名を叫ぶ。

「バトルチップ、カワリミ!!」

瞬間、スバルの手裏剣の刃がとらえた熱斗は、ぼんつ、と音を立ててロックマンのぬいぐるみへと変じ、変わりのようにスバルの身体に深々と手裏剣の刃が、背中まで貫いて腹部に突き立った。

『しまっ……!!』

「スバル!!」

熱斗とロックマンの予定では、手裏剣を扱えないようにと肩に攻撃する予定だった。

けれど今、目の前でシュリケンがスバルの身体に突き刺さった場所は腹部。

スバルは手裏剣の刺さった部分を抑えて、がくり、と膝をついた。

「スバル!!」

『スバルくん!!』

熱斗とロックマンが名前を呼び、慌てて駆け寄ろうとした瞬間、ぼんつ、と音を立ててスバルの姿が消える。

まるで熱斗とロックマンが、カワリミを使うことを知っていたかのように、スバルが消えたのは……。

「っ……!!」

『まさか……』

その可能性に思い至り、辺りを見回す。

「フウマ、シップウジン……」

真上から聞こえてきた感情のない声。

ばっ、と真上を振り仰いで、太陽を背に技の構えをとるスバルを見て、熱斗とロックマンが揃って『相手に誘われるままに隙を作ってしまった』のだと、理解した瞬間に降り注ぐ手裏剣の嵐を、受けることとなった。

<> <> <> <>

「……………っ!!」

「熱斗くん!! ロックマン!!」

青ざめて目を見開くミソラと、慌てたように熱斗とロックマンの名を呼ぶツカサ。

「どうしたんだよ!?!」

「光くん何かあったの!?!」

デカオとやいとが慌てて二人の側に駆け寄り、問いかける。

「熱斗くんたちが、シノビ状態での最強の必殺技……キズナビッグバン……フウマシップウジンをまともに受けた……」

青ざめた表情のまま、ぼつり、と呟くようにミソラは、状況を、告げた。

<> <> <> <>

それはまさに、絶え間なき嵐のような攻撃。

「うわあああああっ!!」

『うわあああああつー!!』

その勢いにその場に踏みとどまれずに、熱斗とロックマンは悲鳴を上げながら、跳ね飛ばされる。

全身を手裏剣で切り刻まれるような攻撃を受けたため、熱斗はベルセルクの剣から、手を放す。

瞬間、ベルセルクの鎧へひびが入り、音を立てて砕け散った。

『熱斗くん、ベルセルクが!!』

ロックマンが叫んだ瞬間、スバルの傍らへすう、とベルセルクは移動し、自然にその身体へと溶け込み、スバルはいい、と唇をつり上げる。

ようやく止まれた熱斗は、顔を上げて、スバルを見る。

「くそつ……とにかく、なんとかして……とめ……っ……うああああああああ……っ!?!」

立ち上がるうとした瞬間に駆け抜けたのは、凄まじいまでの激痛。

『身体が……熱斗くんとの、クロスフュージョンが……たもてな…』

痛みをこらえ、言葉を紡ごうとしたロックマンを遮るように、熱斗の胸にあるロックマンのナビマークがパァン、と砕け散った。

瞬間、現実世界で戦う術を失い、熱斗とロックマンの身体はそれぞれ、本来あるべき空間へ戻った。

けれどそれは、人である熱斗にとっても、脆いPETの中に存在するロックマンにとっても、非情な状況での力の喪失。

それが意味するのは、高さ数百メートルを優に超えた場所に立つ術を失ったということ。

「熱斗！！」  
突如現実世界に、ロックマンとクロスフュージョンした姿ではない状態で見えた熱斗に、メイルが血相を変えて叫ぶ。

けれど幸いにも、立っていた場所の直ぐ下に…1m下にあったのは、ビルの屋上。

そこに熱斗は何とか着地し、空中から落ちてくるロックマンのデータが入っているPETをつかんだ。

ほっ、とメイルも一同も、息をついて頬を緩める。

しかし、突如凄まじい風が熱斗の身体を叩いて過ぎ去った。

「っ……な、なんだ……？」  
顔を上げれば、現実世界に戻ってきたスバルの身体を、風が包みこみ、唐突にスバルの姿が本来のものに……シューティングスター・ロックマン戻った。

全員が怪訝な顔をした瞬間。

ザザッ、とスバルの身体を木の葉の竜巻が包み込んだかと思えば、火炎が勢いよく足元から吹き上がり、最後に雷が真っ直ぐに、ただ一直線にスバルに落ちた。

ドオン、と強い衝撃が辺りの空気を震わせ、現実であろうと、電波世界であろうと、全てを巻き込み、破壊する。

「……まずい！！」

ツカサが熱斗が吹き飛ばされた事と、スバルの変化、その両方にある。

「うわああああああああ　　っ!!」  
衝撃に堪えきれずにビルの上から吹き飛ばされ、落下してくる熱斗。

「熱斗!!」

「熱斗くん!!」

「光くん!!」

メイとやいととデカオ、ツカサとミソラが引き攣った声を上げ、名前を叫ぶ。

真つ逆さまに地上へと落ちてくる熱斗を、それをすぐさまチャージャーがなんとか受け止めて、地面に降ろした。

直ぐに熱斗の傍にデカオとやいとが駆け寄ってくる。メイはまだ完全に炎山の傷をふさぎ切っていないため、離れられないでいる。

「無事なの、光くん!？」

「熱斗、大丈夫か!？」

「ぶ……無事……。ロックは……。あ、強制スリープになってる……」

熱斗は何かベルセルクを使った反動だろうと思いつつ、凄まじい疲労を感じながら腕を上げ、同じようにロックマンも相当に反動を受けたようで、この状況にも関わらずスリープモードに移行していた。

何の因果かそれと同時に、ミソラの持つ『未来』の携帯端末に通信が入った。

「え?」

ミソラが驚愕した表情でホルダーを見ると同時、ザザッ、という砂嵐の後、この時代の通信端末ではない、未来の通信端末……ハンタ

I V Gの映し出すエアディスプレイに、一同の視線が集まり、そこに映ったのは。

信頼できて、けど余計な事を言っではいつも恋人からお盆か何かで叩かれているものの、何よりも仲間を大事にし、スバル&amp;mp;ウォーロック相手では黒星ばかりが付いているが、かなりの実力者である若きサテラポリス遊撃隊長と、しっかり者の人工バトルウィザード。

そして。

きばきばした、とてもしっかり者で怒らせると怖いけれど、とても心優しい、コダマ中学校1年B組委員長の、少女が写った。

## 過去VS未来（後書き）

……本編をなかなか投稿できず、すみませんでした！

自動車学校の本免実技が落ち着くまで、投稿できずにいたので……。でも、あとは学科だけなので、ちよつと肩の荷が下りてます。……でも、そこが難関だよ……。 （泣）

あと、それが落ち着いた瞬間に気が緩んだのか、微熱が続いてきたかった……。

37.2という微妙なところで、食欲はないけど身体は大丈夫というしんどさ。

……身体、鍛えたほうがいいんでしょうかね……。



## 精神の内と外

ミソラのハンターV.Gから映し出された画面に、ツカサとヒカルだけでなく、やいととグライド、デカオとガッツマン、燃次とチャーリー、ジャスミンとメール、そして熱斗も、視線を合わせた。

そこに映っていたのは、背の高い青年と、一人の少女。

『無事だったか!?!』

『無事なの星河くん!?!』

青年と少女……シドウとルナが慌てて訊ねてくるが、すぐさま押しつけられた。

『無事ですかミソラちゃん!?!』

『ミソラちゃん無事……うわ!!』

代わりに小柄な少年と、大柄な少年……キザマロとゴン太が姿を見せが、ゴン太に至っては言葉の途中で、押しつけられた。

『ツカサ大丈夫か!?!』

『ヒカルは無事!?!』

そして目つきの悪い少年と、綺麗な女性……ジャックとクインティアが焦った表情で、こちらを見ていた。そして再び、ひよい、とシドウが顔を覗かせた。

『ミソラにツカサとヒカル……あとは知らないな? ……あれ?』

『スバルはどうした? とりあえず今はどうなんだ? お昼ごはんか?』

丁度未来の方もお昼時だったようで、後ろの机の上にお弁当箱がちらほら見える。というか、シドウに至ってはデザートなのか、にがりソーダ片手に、サクサク、とうまい棒を食べているので。

「暢気に飯くってる場合じゃねえ　っ！！」

「そして暁さん、にがりソーダ片手にチキン味のうまい棒食べないで　っ！！」

「それどころじゃないんですこっちは！！」

全力で、ヒカルとミソラがとにかく突っ込むべきところへ突っ込み、ツカサが叫ぶ。

（未来にうまい棒ってあるんだ……。ていうか、にがりソーダっておいしいのか……？）

そして熱斗は疲労困憊ながら、かなりずれたことを思っていた。

そんな切羽詰まったツカサとヒカルの叫びに、シドウの横から、頭突きをするような勢いで顔を覗かせた子供がいた。

「何かあつたの！？」

「うおっ！？」

顔を覗かせたのは、肩にひまわりのようなものに乗つけた、奇抜な格好という印象が強い、少年のような少女。

『邪魔だ』

『扱いひどいな！？』

そして、シドウの肩を引いて画面へと現れたのは、眼帯で左目を隠す、ほぼ黒一色といった服装をした、翼の生えた猫を肩に乗つける少年。

見る者によつては少年に見える少女……異界より未来へと来た銃士の少女、ジャンゴはヒカルとツカサの慌て具合に、急いで訊ねてくる。

そして実に容赦なくシドウを画面から後ろへとフェードアウトさせて、代わりに現れた異界の黒衣の剣士……サバタも、画面を覗き込む。

「スバルくんが暴走して……ツカサくん!!」  
ミソラが説明しようとして口を開いたその瞬間、ツカサのめがけて飛んで来た、赤い炎の斬撃を横っ飛びにツカサは避ける。  
しかしその余波は避けきれずに、右の頬に真っ直ぐ、赤い線が走った。

振り返った先に浮かんでいたのは、黒ずんだ鎧をまとった、三種類の王。

「あれは一体何ネ!？」

「ジャスミン、あれ何かに似てない……?」

ジャスミンとメイルは首を傾げてその姿を見ていたが、意味の分かる未来組は背筋に冷や汗が伝わる思いで、それを見上げていた。

「ジェミニ……。あの鎧の色は違うけれど、状況は……」

「……最悪、つてことか……!!」

ハープとジェミニの吹き通り、それは三種類の力を一人に集めた最強の王、トライブ・キングへと変わったシューティングスター・ロックマンだった。

そして、その姿は、デイスプレイを通じて未来にも映し出されていて、信じられないようにそれを見つめている一同を、硬直から解き放ったのは、ルナだった。

「……まさか……。スバルくんが暴走したの!？」

「うん……。ただ、今まで見た以上に……。凄く禍々しくて……」

切羽詰まったように問いかけてくるルナに、こくりと頷いて答えながら、構えるミソラだが、その手を押しとどめたのはツカサ。

「ツカサくん?」

「僕とヒカルで止める。だから、ミソラちゃんはみんなを避難させてくれる? みんなを逃がすためにスバルくんとやりあえる存在も、

必要だろうか。それに……」  
そう言って、ツカサは真っ直ぐに、スバルを見上げる。

「もし敵を相手にして、誰かを逃がさなきゃいけないとき、いつもどおりのスバルくんなら、『ここは僕が食い止めるから、みんなを逃がしてほしい』って言うだろうし、一応彼氏としてはほっとけないから」

「おい」

最後に軽口を挟んだツカサに、ヒカルが突っ込んだ。

「……分かったわ」

最後はともかく、内容は納得すべきものなのでミソラが頷いて、それぞれ意識の戻らないテスラと炎山を支えて立たせている、ジャスミンとメールのほうへ手伝いへと走り、同じようにやいととデカオもそちらへ向かう。

けれど、代わりに動かなかったのは、チャーリーと燃次。

「チャーリーさん、燃次さんも……」

ツカサがそう言おうとした瞬間、チャーリーが片手をあげてそれを止める。

「おっと、俺らも残るぜ？」

「今は電波状態じゃねえしな」

それにぎよつとしたのはツカサとヒカルだった。

「でも、危険です……！」

「そうだ！！ あっちは怪我人や戦えない奴らがいるんだぞ！？」

あっちの方を守りに……」

ぽんっ、とチャーリーがヒカルとツカサの肩を叩く。

「子供をほっとく大人ほど……。いや、仲間をほっとくことほど、最低なものはないだろ？」

「そーゆーこった。とゆーわけで、俺らも戦うぜ」  
にかり、と笑うチャーリーと燃次に、ツカサとヒカルは顔を見合  
せて頷く。

「無茶しないでくださいね」

「あいつ、俺らの中で最強だから」

ツカサとヒカル、チャーリーと燃次は、こちらへまっすぐに斬撃を  
飛ばしてきたスバルの攻撃に向け、攻撃を放った。

< > < > < >

ミソラがしんがりを務めながら、熱斗、メイル、ジャスミン、やい  
と、デカオの順番で、必死で走っていた。

「ジャスミン、早くシールドの淵に!!」

「走っても急ぐネ!!」

その声に重なるように、戦闘の音が響いた。

「……でも、このままじゃ、やいとちゃんとデカオも危なくなっ  
ちまう……」

小さく呟いた熱斗の声を聞きながら、戦闘の音を聞きながら、傷つ  
き意識が戻らない二人を見ながら、ミソラはハーブに叫ぶ。

「ハーブ!!」

『あ、その手があつたわね!!』

ミソラが高らかにフィーチャリングハーブギターを奏でた瞬間、音  
は具現化された。

「皆、これに乗って!!」

「これって……」

やいとが啞然とそれを見つめながら問いかけるが、ハーブが答えた。  
『ウェーブロードの道順をすっ飛ばして進むとき……そうね、道を  
走ってる時間さえ惜しいときの、私たちの移動手段よ。どこである  
うと、移動できる。さあ、早くのりなさい!!』

ハーブに促され、ミソラと熱斗、メイルと炎山、ジャスミンとテス

ラ、やいととデカオ、とそれぞれ二人ずつ、それに乗った。

「飛ばすから、しっかり捕まっつて!!」

それだけ告げたミソラを合図に、音符は動き始めた。

勿論エアディスプレイは具現化したままで。

画面に映るジャンゴとサバタを退けてから、シドウとルナが映り、ルナは肩を怒らせて叫ぶ。

『でもなんで暴走なんてしてるのよ!!』

「そんなこと、私に言われても……」

『今はムーメタルの紋様が浮かび上がる周期だ。残留電波が身体の中で力が暴れまわってるんだらう』

首を傾げたミソラの声を、少年の声が遮った。

そういつてひよっこり、かなり壮絶な違和感を感じたが、ひよっこり、と言う表現がぴったり当てはまる、本当に壮絶に違和感を感じるソロが画面に出てきた。

シドウの横から、こちらを覗きこんでいるのだ。

ミソラ表情が、不思議そうに歪められる。

ソロが出てきたことも不思議でしょうがないが、それ以上に気になる単語が聞こえた。

「…ムーメタル、が？」

『微量ながら体内にはパートナーから漏れた、オーパーツの残留電波がある。電波変換すれば更に、大量の残留電波がパートナーの体内から流れ込む。……種族の復興を願う、呪詛のような残留電波がな』

ソロは憎々しげに、最後の言葉を告げる。

『その残留電波がムーのものだからこそ、ムーメタルに触発されて、残留電波が増幅されて暴れている。何せ、絆の力がそちらではない』

に等しいのだから』

「…私とツカサくんだけじゃ、抑えきれないって事？」

ソロに告げられた、絆の力の不足を問いかけるミソラの怪訝そうな声に、言葉もなく、こくりとソロは頷く。

『絆の力が圧倒的に足りていない。今までならこの後ろにいる奴らの絆の力が合わさり、日常生活にも、戦闘しても不便がない程度にまでようやく押さえ込めていたのだろう』

『しかし、お前たちだけでは、残留電波を使うあいつらの身体の外に向かう、残留電波が合わさった力が100%……つまり完全には具現化しない程度だ』

ソロのその言葉に、思わずミソラはハンターV.Gを押さえ、戦闘の繰り広げられるその場を、振り返った。

< > < > < >

ツカサとヒカル、そしてチャーリーと燃次を相手にまるで人形のようながらも、容赦のない剣をふるい、雷を放ち、木の葉を舞わせ、焰を操り、三つの属性を伴った斬撃を繰り出す、トライブ・キングの姿。

チャーリーは空から、燃次は地上から、ツカサとヒカルは脆いウェーブロードから、スバルの攻撃を受け、躲し、あるいは軌道をそらせ、相殺させ、反撃するも、今のところ姿は目視できるが、かすり傷さえ負わせていない。

しかも運の悪いことに、スバルの斬撃の一つには、ツカサとヒカルと電波変換しているジェミニにとって、相性の悪い木属性の攻撃が混じっている。

しかし運よく燃次とクロスフュージョンしている、ナパーム満の攻

撃を当てられれば、その木属性の影響でダメージは倍増する。

だが、それも当たれば、であるし、当たらなければ、でもある。

一瞬にしてこちらに飛びかかってくるスバルが、剣を横に薙ぎ払う。

「くっ!!」

「ちっ!!」

それぞれ上下に飛びのいて、攻撃を避け肉薄するも、一瞬にしてスバルは移動する。

けれど。

「後ろがから空きだ!!」

「逃がすか!!」

その後ろに、チャーリーと燃次が迫る。

けれどスバルは、背に攻撃を受けた瞬間、ぼうんっ、と煙に化ける。

それと同時。

『ジェミニサンダー!!』

ツカサとヒカルの声が重なり、雷がチャーリーと燃次の後ろに出現した手裏剣を壊す。

そしてふわり、と一同から距離を置いたウェーブロードに、スバルが降り立った。

「くそっ、当たりゃあしねえ!!」

『当たれば大ダメージなのによ!!』

ぱんっ、と手のひらに拳を打ち付けて愚痴る燃次とナパームマン。



「全く、トロそうに見えてなんとも動き回るレディだ」  
『スピードでおいていかれるとはな』  
ため息をつきながら呟いたチャーリーと、スピードの自信をちよつとへし折られたジャイロマン。

そんなことを呟く大人組とは対照的に、ツカサとヒカルは違和感を覚えていた。

「……ヒカル、何かおかしくない？」

「……やっぱツカサも感じたか？」

なら、違和感じゃないんだな、と納得する二人。

「さつきから、攻撃がずれてる……ほんの僅かなんだけど、直撃コースをわずかに逸れてる」

「だから、あの斬撃も避けられたんだよな……」

「え、そうなのか？」

上からチャーリーが会話に加わる。

ヴン、と音を立ててジェミニがツカサとヒカルの後ろに現れた。

『中にいるスバルとウォーロックの仕業だ。あいつら、完全に支配されてはいないから、だろうな』

そう言つて、ジェミニは支配され、なおも抵抗している二人の意識に思いをはせた。

< > < > < >

たんつ、とスバルは軽やかに見えない床に着地する。

『スバル、その調子だ!!』

「ロックもね!!」

すくつ、と立ち上がったシューティングスター・ロックマン姿のスバルと、ウォーロックは、うすぼんやりとした光を纏っていた。

身体に絡みついて来ようとする黒い霧……霧は忍者の姿と、恐竜の姿をとっている……を相手に、それぞれ背中を合わせて、先ほど急に表れたベルセルクと、ウォーロックの爪で、遠慮なく追い払っていた。

けれどもそんな中感じるのは、動きを封じるかのようにのしかかる意識の重圧。

『オトナシクアケワタセバイモノヲ!!』

『ダガ、イツマデモテイコウデキルモノカ!!』

『サア、アケワタセ!!』

そして、意識が保たれているので実に煩いことない怨嗟の声。

『だーっ、うるせええええ!!』

『ロックの方がうるさい!!』

叫びながらウォーロックはビーストスイング、スバルはベルセルクを薙ぎ払いながら、霧を遠慮なくぶっ飛ばす。

「けど、なんでベルセルクだけ、こうやって力貸してくれるのかな？ ええいつ!!」

『あ、それはだな……その中から、なんつーか……うおりゃ!!』  
会話の最中に飛びかかってきた霧を薙ぎ払う為に、ウォーロックは言葉をいったん途切れさせた。

『優しい……。けど闇の力を感じるそんな力がある……。でえいつ!!』

「そういえば……。さっきまで熱斗くんたち持ってた、よね……?」

せいっ!」

『絆で抑え込めてたみたいだがな。でりゃ!』

靄が襲いかかってくるので、どうしても会話が途切れ途切れになってしまうスバル&ウォーロック。

「その後どうなったかは知らないけど……。僕らが持つてるってことは、何かあったのかな? はあっ!」

『さあな……。おらあ!』

うすぼんやりとだが、覚えていること。

自分たちの手を離れ、熱斗たちの手にあったそれ。

……。しかし、拮抗していたベルセルクとシノビの負荷の、ベルセルクの負荷だけが消え、シノビの負荷が増したわけなのだけれど。

ピクリ、とウォーロックは目を細め、爪をふるいながら、スバルに告げる。

『……。あいつに頼まれたから、闇を押さえる力を貸してやってるだけだ』って言ってるぞ?』

「はああっ!。……。って、誰が」

剣の腹で遠慮なく靄を殴り飛ばして、スバルは主語の抜けたウォーロックに聞き返す。

もはや追い払えれば、方法を問わない状況である。

『なんかロックマンに似た、黒いやつ?』  
「ロックマンに似た、黒いやつ?」

よく分からないその一言に、スバルは首を傾げる。

……。ただしすぐに靄を薙ぎ払うために、首を傾げていたのをやめた

が。

『……でもよお、一つだけ確かだよな？』

「こっやって、意識を保っていられるのは、ってことでしょ？」

そう言つて、二人は少しだけ視線を合わせ、頷いて視線を外し、それぞれの武器をふるった。

二人の胸の奥に感じる、暖かく、優しい確かな光。

剣の奥に感じる、闇の力でありながら優しく支えてくれる力。

「この光の先に、ミソラちゃんと、ヒカル、そしてツカサくんの絆を感じる。それだけじゃない、ハープとジェミニも」

『そして剣の中に、力を貸してくれてるやつの思いがある』

自分の意思を、こっやって繋ぎ止めてくれている、二つの絆。

そして、剣の奥にある、その残留思念。

『サア、オトナシクアキラメ、シノビニスベテヲアケワタセ！！』

『イイカゲン、ダイナソーニ、スベテヲアケタワセ！！』

靄の声に、スバルとウォーロックはそれぞれ叫ぶ。

「皆が信じてくれてるから、絶対帰ってやるんだ！！ 諦めてたまるか！！」

『こちとら宇宙から生きて帰ったんだ！！ 帰れないはずねえよ！』

そして、黒い靄を薙ぎ払うために、攻撃をつづけた。

< < < < <

『他人を傷つけ、世界を滅ぼそうと暴れる外に向かう力は、使用者の意思次第。だが、使用者の心を破壊し自らのものにしようとすると、中に向かう力を抑え込むだけの絆だけ最低限、ようやくある。だからこそ、あれだけの暴走しかしていない、といったところだろうな』

「あれで!?!」  
びっくりした声を上げる、やいと。それを肯定したのか無視したのか、全くの謎だったが、ソロは話を続ける。

『ムーの力はすさまじい。身体の中で暴れ狂う力を少しは押さえ込めても……。簡単にひとつの大陸を滅ぼし、その気になれば世界さえ滅ぼせる力。脆い人間の精神など、簡単にやられる』

「……それ、スバルくんだからこそもってるってこと?」  
『そして絆によっておしこめられた力が幾分かある。それによってもっているところもある』

ミソラの言葉に、こくりと頷くソロ。  
それを見て、さああああ、と目に見えて青ざめてゆく熱斗。

「……俺、そんな物騒なもの使ってたの?」

ひくり、とひきつったような声で、ミソラの隣に座る熱斗が問えば。  
「……みたい……だね……」

それを答えるミソラの声も、そこに行きついた瞬間、やはり同じように顔が青ざめ、頬もひきつっている。

熱斗も今更よく無事だったよなあ、と頬をひきつらせる。  
それは後ろにいた一同も、実は同じであった。

『お前、オーパーツを扱えたのか!?!』

「え? あ、うん。俺とパートナーのロックマンで何とか」

ソロが驚愕した声を上げ、熱斗が頷く。

『……ならば、お前を軸に何とかなるかもしれないな……』  
「へ？」

間の抜けた声を上げる熱斗を睨み付けるような瞳で見、ソロは口を開く。

『力を貸してやるといったんだが』

『お、やっと遊撃隊に……』

今度はシドウをぎろり、と睨みつけたソロは、勘違いするな、と告げる。

『俺はただ単に、絆の力を肯定する星河スバルと、決着をつけたい。それだけだ』

一瞬だけその場に居合わせた過去の時代の一同の脳裏に、人とネットナビの絆を肯定する、人間とネットナビの姿が浮かび、人とネットナビの絆を否定するネットナビの姿がよぎった。

ちなみに姿を脳裏に浮かべられた本人たちは、画面を食い入るように見ていた。

ヴン、と音を立て、ソロの上にラプラスが表れ、剣へと変化する。

『……あ。……おい、まさか……』  
不意にシドウがその剣をどう使うか、ということ想像し、ひとつの可能性に至る。

「大剣……？ あ……。まさか……」  
そしてミソラも同じタイミングで、ひとつの可能性に思い至り。

『「ソロ、ちょっとま……」』

しかし、静止をかけるが遅かった。

『はあっ！！』

その瞬間、派手な火花を散らし、WAXAのメインコンピュータのコントロールパネル部分に、大剣が突き刺さった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2917/>

---

太陽の姫

2011年7月19日17時40分発行